

SD

Space Design

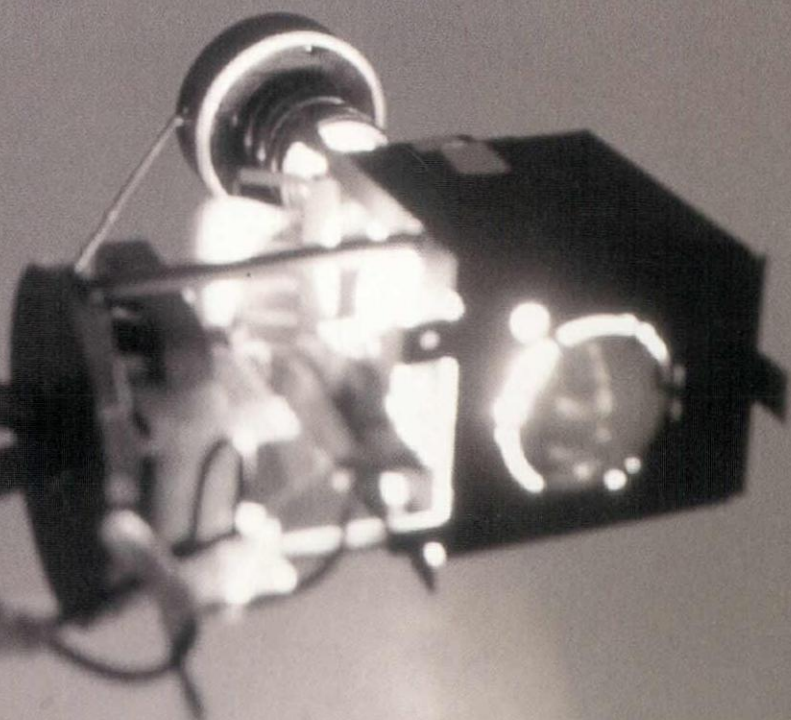
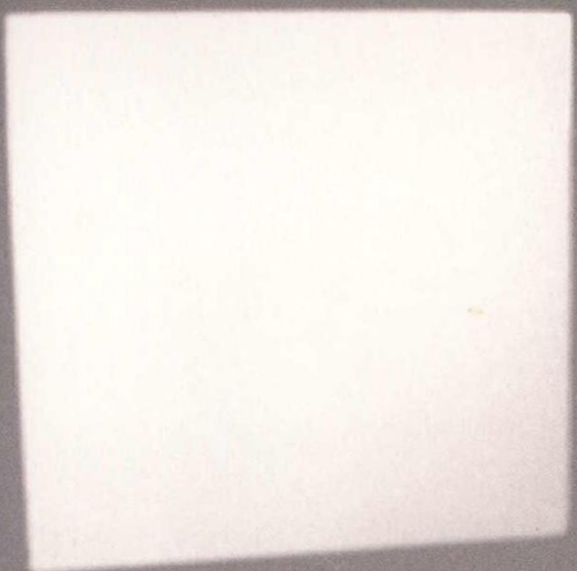
9906

Monthly Journal of Art and Architecture

特集

小川 賢 | Transbody / Super traffic

Shinichi Ogawa Transbody / Super traffic



スペースデザイン ISSN 0563-0991
第417号 1999年6月1日発行 (毎月1回1日発行)
昭和40年2月5日第三種郵便物認可

ビル空調機リニューアル 合理化委員会の評決です。



YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエースは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

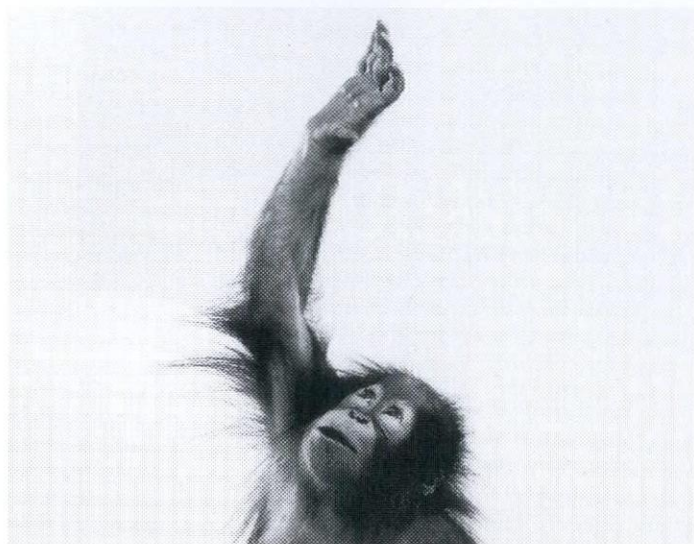
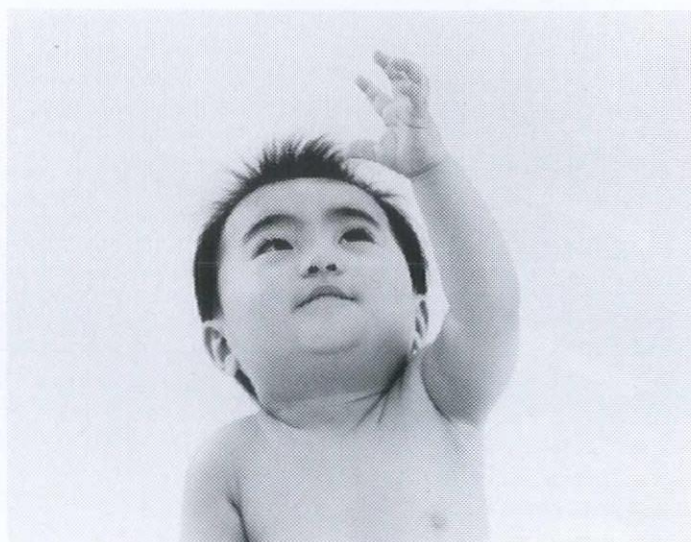
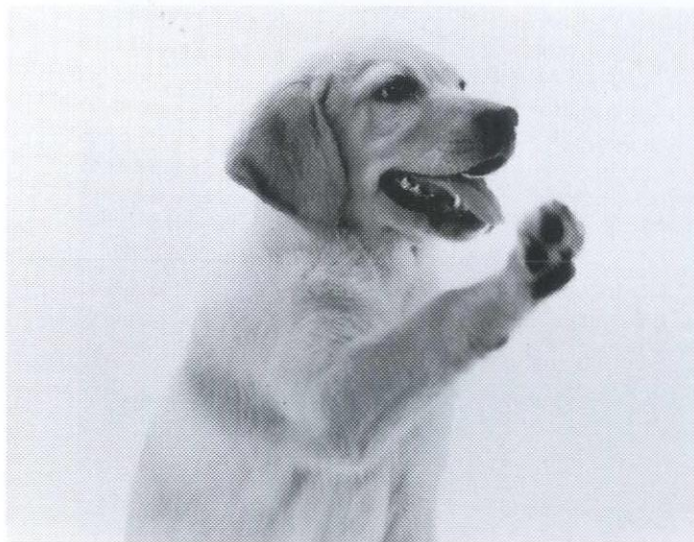
ユニット形冷温水機のパイオニア

ロッカー設置に最適な スーパーアロエース

矢崎総業株式会社

Y-CITYワールドヘッドクォーターズ：〒410-1194 静岡県裾野市御宿1500 TEL0559(65)3002
空調機器事業部：〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112

札幌支社 011 (852) 2914	仙台支社 022 (284) 9115	東京支社 03 (3298) 3140
名古屋支社 052 (833) 8415	北陸支社 0764 (41) 6516	大阪支社 06 (6458) 4825
中国支社 082 (923) 2115	四国支社 087 (833) 3336	九州支社 092 (411) 4835



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT03(5476)2111 TNet03(4431)2111

National/Panasonic

AV&C FTAP S

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピュータシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE &
SYSTEM
ソフトウェア・システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5460-2931
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-6949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

雨は完封しますが、風はシャットアウトしません。



ドームと呼ぶべきか、傘と呼ぶべきか、はたまたパラソルか・・・。

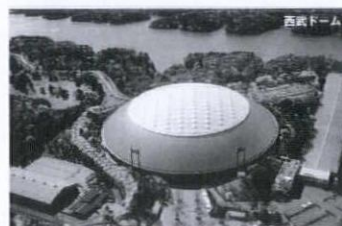
野球ファンにはお馴染みの西武ドーム(旧西武球場)に2年がかりで「屋根」を架ける工事が、予定通り終了しました。1年目にドーナツ状の外構。2年目にドーム型の膜屋根。シーズンオフだけを使って無事完成に至り、一同ホッと胸をなで下ろしています。

名前こそ東京や福岡と同じく「ドーム」と付いていますが、西武ドームはこれまでのドームとは全く違うつくりです。まず屋根全体が浮いています。まわりに壁がありません。外構をV字柱で持ち上げたその姿は、ドームというより「球場が傘をさしている」といったおもむきです。

そこには狭山丘陵の爽やかな風がそのまま吹き抜けます。だからそこには空調設備がありません。よく光を通す膜材を使っているので、昼間は照明も要りません。ドームの中が世界で初めて「屋外」になったのです。

また、既存の球場を生かしたことで、本当の意味で周りの環境との共生が実現できたとも感じています。なぜですって？そりゃあ何てったって資源もエネルギーも、建設コストまでも「セーブ」できたんですから・・・。

知恵を絞ってつくった晴れの舞台。選手の皆様、ここで一日も早く、一日も長く活躍してください。そして観客の皆様、ここで一日でも多く、いい時間を過ごしてください。・・・以上、わたしたち鹿島の仕事の一部を、ここにご報告いたします。



屋根をV字柱で支え自然風を取り入れる「自然環境共生ドーム」
膜材の透光性を最大限に生かし昼間は照明不要の明るい空間を実現

100年をつくる会社

鹿島

東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388
<http://www.kajima.co.jp/>

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢

ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約お問い合わせ:

ホテル鹿島/森予約係

☎03(3478)6220

現地☎0267(42)3535(代)

FAX:0267(42)5335

夢×技=無限大

YUME TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

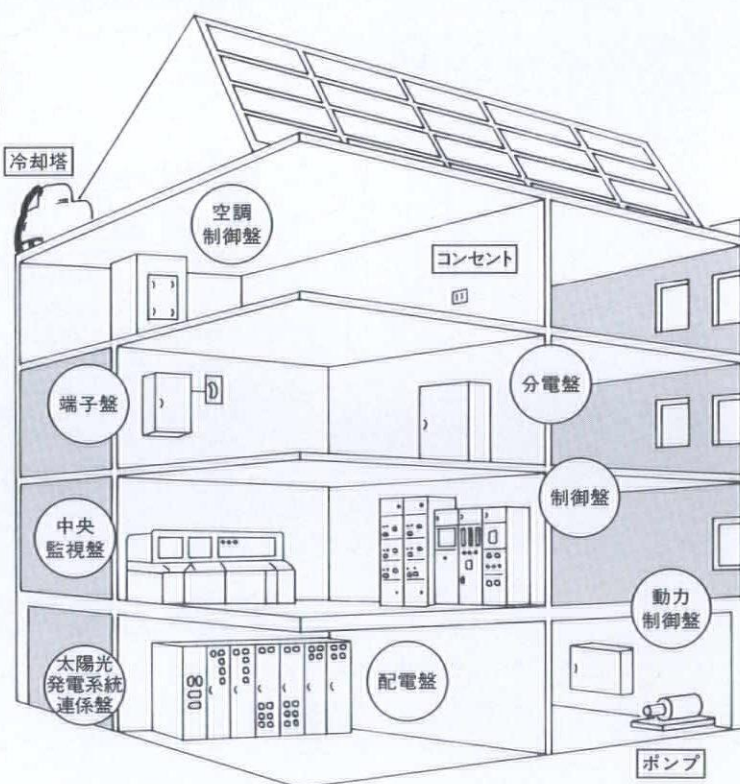
何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



創業1919 あなたの街でお会いしています
栗原工業株式会社

本社／〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(6313)1101
東京本店／〒105-0012 東京都港区芝大門 1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

見えない電気を交通整理 それは 盤

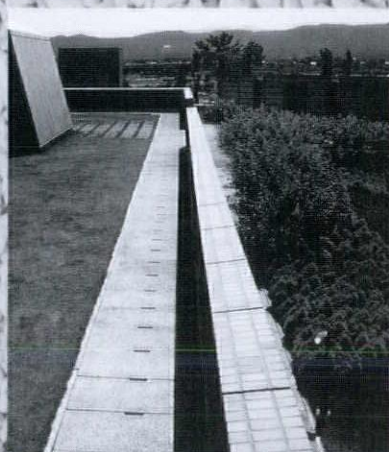


川崎電気株式会社

- 本社／山形県南陽市小岩沢225
- 東京本社／東京都港区芝浦3-7-4



スタンダードへ



緑化を中心に、
潤いある都市空間づくりを。

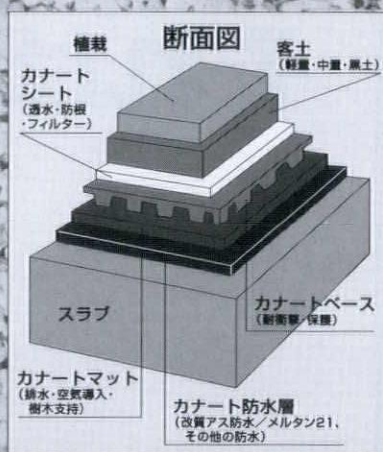
快適な都市空間に、
自然の持つ潤いをプラスすることで、
私たちの空間はさらに豊かになります。
だから、緑化防水工法「カナート」。
インテリジェントと緑化を
高次元で融合させ、新しいスタイルの
空間演出を可能にしています。
そして、働く、暮らす全ての人々に、
生き生きとしたコミュニケーションを
提供していきます。
高度な建築技術でさらに広がる空間に、
緑を。未来の快適な都市空間づくりの
指針を「カナート」は示していきます。



カナート

緑化防水工法

- 信頼性を高めた防根・排水性。
- 快適性を向上した断熱・遮音効果。
- 従来の保護コンクリート施工は不要。
- あらゆる施工現場に対応する優れた防水力。
- 計画に合わせて選べる3種類の客土設定。
- 荷重の低減、工期の短縮、低予算等、
優れたコストパフォーマンスを実現。



日新工業株式会社



営業本部 TEL 103-0005 / 東京都中央区日本橋久松町9-2 TEL 03 (5644) 7211 (大代) <http://www.nisshinkogyo.co.jp>

横浜 TEL 045 (316) 7885 (代表)
千葉 TEL 043 (227) 9971 (代表)
春日部 TEL 048 (761) 1201 (代表)

大阪 TEL 06 (6533) 3191 (代表)
名古屋 TEL 052 (933) 4761 (代表)
福岡 TEL 092 (451) 1095 (代表)

札幌 TEL 011 (281) 6328 (代表)
仙台 TEL 022 (263) 0315 (代表)
広島 TEL 082 (294) 6006 (代表)

高松 TEL 087 (834) 0336 (代表)
金沢 TEL 076 (222) 3321 (代表)
本社 TEL 03 (3882) 2424 (大代)

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円(特別定価号+消費税、送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学理
工学部 関東学院大学

9706 柳澤孝彦: 劇場の空間構成 2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。
文=長友宗重、本杉省三 対談=川向正人×柳澤孝彦 [装飾を排したフォルムデザイン——スウェーデンのグッドデザイン展より]

9707 加速都市・香港1997 2000円
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家=アラン・チャン、タイクワングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他 監修=村松伸、小嶋一浩、木下光 文=松田直則

9708 R.ヴェンチュリ+D.スコット・ブラウン 2400円
日本での処女作(メルパルク日光露降)を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文=香山壽夫、安山宜之、他 [岐阜県営北方住宅プロジェクト] 監=磯崎新

9709 駅空間の新曲面 2000円
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文=宮林敬幸、齋藤孝男、他。対談=横尾忠則×原広司 写真=大野繁

9710 ガラス建築 3000円
光学的、構造的な特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会=伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他

9711 隈研吾 2800円
ポストモダン以降の建築における言説を続ける隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネチアクラス賞を受賞した近作を紹介する。野雲公園、他。文=飯島洋一、グレッグ・リン、対談=横文彦×隈研吾

9712 SDレビュー1997 2000円
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重+事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤雅、他。[光と色が彩る空間——チェコのガラスアーティストたち] 写真=鈴木豊

9801 SDレビューの15年 2800円
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出版作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文=横文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会=元倉眞琴+鈴木了二+栗生明+小嶋一浩

9802 都市へ向かう透明性: スイス・ドイツ語圏の建築 2200円
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文=貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡=篠原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン

9803 表層革命再考: チェコ・キュビズム建築 2000円
現存するプラハのキュビズム建築を掘り下し写真により紹介する。撮影=鈴木豊。[香山壽夫のドローイングと空間] 文=香山壽夫、八木幸二、鈴木海、青木淳

9804 次世代のマルチ・アーキテクトたち 2000円
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンシオナリーズ、みかんぐみ、他。[デスクトップ・コミュニティ]

9805 空間演出の最前線 2000円
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綿平、新宮晋、他。[カーロとリベラの家] ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン



9806 風景創出の現在: ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、プレイスメディア、三谷徹、登坂誠、他。
3000円



9807 シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品=吉備高原小学校、大阪市水上消防署、(仮称)外ヶ岡交流拠点施設、他。論文=原広司、土居義岳、インタビュー=山本理顕
2600円



9808 光のデザイン・ヴォキャブラリー: LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。
文=磯崎新、面出薫
2500円



9809 ディテールが創る風景: 細部に宿る美と技巧
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩/Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。
2300円



9810 オフィス環境の近未来
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品=電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文=仲隆介、他。
[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]
2000円



9811 「白」と「透明」の詩: モダンデザインの秀作135
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルド・ヴェースガルト、柳宗理、他。
3000円



9812 SDレビュー1998
第17回SDレビュー誌上発表
小特集4題: [シャルロット・ベリアン] [「ハブニング」展] [アアルトの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによる遠藤秀平の近作]
2000円



9901 環境共生の現在
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。
エムシャーパーク、東京ガス(アースポート)、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。
2700円



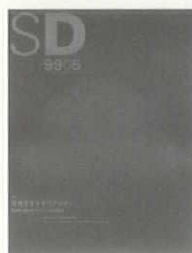
9902 ダッチ・モデル: 建築・都市・ランドスケープ
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。
OMA、MVRDV、West8、クーレン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンズ、他。
2000円



9903 木の空間
木素材による快適建築
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンシオナリーズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。
2000円



9904 ガウディの愛弟子ジュジョールの夢
ジュジョールの遺した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影=鈴木久雄、文=丹下敏明、他。[ドナルド・ジャッド——空間と認識のコンシステンシー]
2000円



9905 挑発するマテリアリティ: 素材の進化とデザインの可能性
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」を「技術」を分析する。
素材史年表、素材地図1999、他。
2500円

SD編集部アルバイト募集

建築・都市・芸術の
新鮮な情報を送り続ける、
月刊誌SDの
アルバイトを募集いたします。
編集業務に情熱を持ってる方歓迎。

SD
Space Design

[職種]

SD誌に関わる業務

(年齢、男女を問いませんが、経験者なお可)

[待遇]

経験、年齢などを考慮の上、面談にて決定

[応募方法]

履歴書(写真貼付)に必要な事項を明記の上、下記へ郵送ください。
追って面接日をご連絡いたします。

なお、応募書類は一切返却いたしません。

[送付先]

〒107-8345 東京都港区赤坂6-5-13

鹿島出版会SD編集部宛

tel: 03-5561-2555

株式会社 鹿島出版会

SD

Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉
編集スタッフ：
寺田真理子 大野由美
飯塚りえ 松口 龍
川崎 勝
制作協力：久世健
株式会社シンクス
発行人：平田幹那
編集人：長谷川愛子
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：
03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：
03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：
http://www.
kajima-publishing.co.jp

005

特集

小川晋一

Transbody / Super traffic

006

変容する身体／超交通
第19回ミラノ・トリエンナーレ出展ビデオ作品

008

ザ・キューブ／グラスゴーププロジェクト

010

Transbody / Super traffic 変容する身体／超交通
8つのコード 小川晋一

014

豊饒なる寡黙
鶴沢 隆

018

グラスキューブ アフター モダニズム
岡河 貢

020

小川晋一の空間とその空虚性に関する考察
アラン・ジョンストン

022

インビジブルランゲージ展／
ニューヨーク・ロンドン・ミラノ・香港

024

変容する身体／超交通
第19回ミラノ・トリエンナーレ日本館展示

025

ヒロシマモナムール

026

モダンアブストラクトの家／キューブ

028

モダンアブストラクトの家／チューブ

030

モダンアブストラクトの家／ガラス

032

横浜港国際客船ターミナル国際建築設計競技案

034

スコットランド建築デザインセンター
国際公開コンペ案

036

国立国会図書館関西館建築設計競技案

038

平田町タウンセンター施設整備公開設計競技案

040

水俣メモリアル デザインコンペ案

042

S社本社屋

044

O市水道局庁舎

046

ホワイテレジデンス

048

ガラスをテーマにした集合住宅の可能性

050

キュビストの家

054

ミニマリストの家

056

イソペスタジオ&レジデンス

060

キッドミュージアム／玖珂町こどもの館

064

リストアーステーション

066

ハツタ山口

068

グラスハウス

072

ホワイテキューブ

081

エアーチェアー

082

アラバスク

084

徳山歯科医師会館

086

ながやレディースクリニック

088

A町総合センター

097

連載：エントロピーの森 都市のインフラストラクチャー6
写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

102

SDレビュー 1999 募集要項

105

展覧会レポート：自然の威力がプラスする造形と色彩の「真」「写」
羽原庸郎

106

連載 カルチャー・カフェ：
今月の舞踊「NDT1 ワン・オブ・ア・カインド」 尼ヶ崎 彬

108

連載 カルチャー・カフェ：
今月の映画「トゥエンティフォー・セブン」 鶴沢 隆

110

展覧会レポート：エンペティ・ガーデン展
藤崎圭一郎

113

新刊紹介

114

書評

118

お知らせ

121

海外レポート：Almere
アルメル——15年目のニュータウン 吉良森子

122

海外レポート：Barcelona
メタポリストの勤め 福田 誠

123

海外レポート：Milano
家具の祭典「ミラノ・サローネ」 三井直彦

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・太洋社・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円 [本体1,905円]
年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：インビジブルランゲージ展／ニューヨーク
表紙写真：小川晋一
デザイン：山口デザイン事務所／山口信博+高梨裕子

005

Special Feature:

Shinichi Ogawa**Transbody / Super traffic**006
transbody / super traffic
Triennale di Milano XIX International Exhibition008
The Cube / Glasgow Project012
Transbody / Super traffic 8 Codes
Shinichi Ogawa016
A Fecund Taciturnity
Takashi Uzawa019
The Glass Cube After Modernism
Mitsugu Okagawa020
1 Some notes on The Space of Shinichi Ogawa
and its Voidness: East and West Alan Johnston022
Invisible Language /
New York, London, Milano, Hong Kong024
transbody / super traffic
Triennale di Milano XIX International Exhibition025
Hiroshima Mon Amour026
Modern Abstract House / The Cube028
Modern Abstract House / The Tube030
Modern Abstract House / The Glass032
Yokohama International Port Terminal
International Design Competition034
International Competition for
Scottish Architecture and Design Center036
Kansai National Diet Library
Design Competition038
Hirata-machi Town Center Design Competition040
Minamata Memorial Design Competition042
X3044
O City Water Bureau046
White Residence048
Glass Housing050
Cubist House054
Minimalist House056
Isobe Studio & Residence060
Kid Museum064
Restore Station066
Hatsuta Yamaguchi Corporation068
Glass House072
White Cube081
AIR CHAIR082
Arabesque084
Tokuyama Dentist Association Hall086
Nagaya Ladies Clinic088
Sound Egg

097

The Entropic Forest: Urban Infrastructure 6
Photo: Heiner Schilling Text: Hiroo Yamagata

102

Guidelines for Entrants: SD Review 1999

105

From the Exhibition: "Image" and "Picture": Forms and Colors
Supplied by the Forces of Nature Shukuro Habara

106

Culture Cafe: This Month: Dance, NDT I "One of a Kind"
Akira Amagasaki

108

Culture Cafe: This Month: Film, "Twenty four Seven"
Takashi Uzawa

110

From the Exhibition: "Empty Garden"
Keiichi Fujisaki

113

Book Information

114

Book Review

118

Announcement

121

Topics Abroad: [Almere] Almere, A Fifteen-Year-Old New Town
Moriko Kira

122

Topics Abroad: [Barcelona] In Praise of the Metropolitans
Makoto Fukuda

123

Topics Abroad: [Milano] Festival of Furniture, Milano Salone
Naohiko MitsuiPublished by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL: 03-5561-2551 [Management], 03-5561-2555 [Editing]
FAX: 03-5561-2561 [Management], 03-5561-2565 [Editing]
TELEX: 02422467 KAJIMA J
URL: <http://www.kajima-publishing.co.jp>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

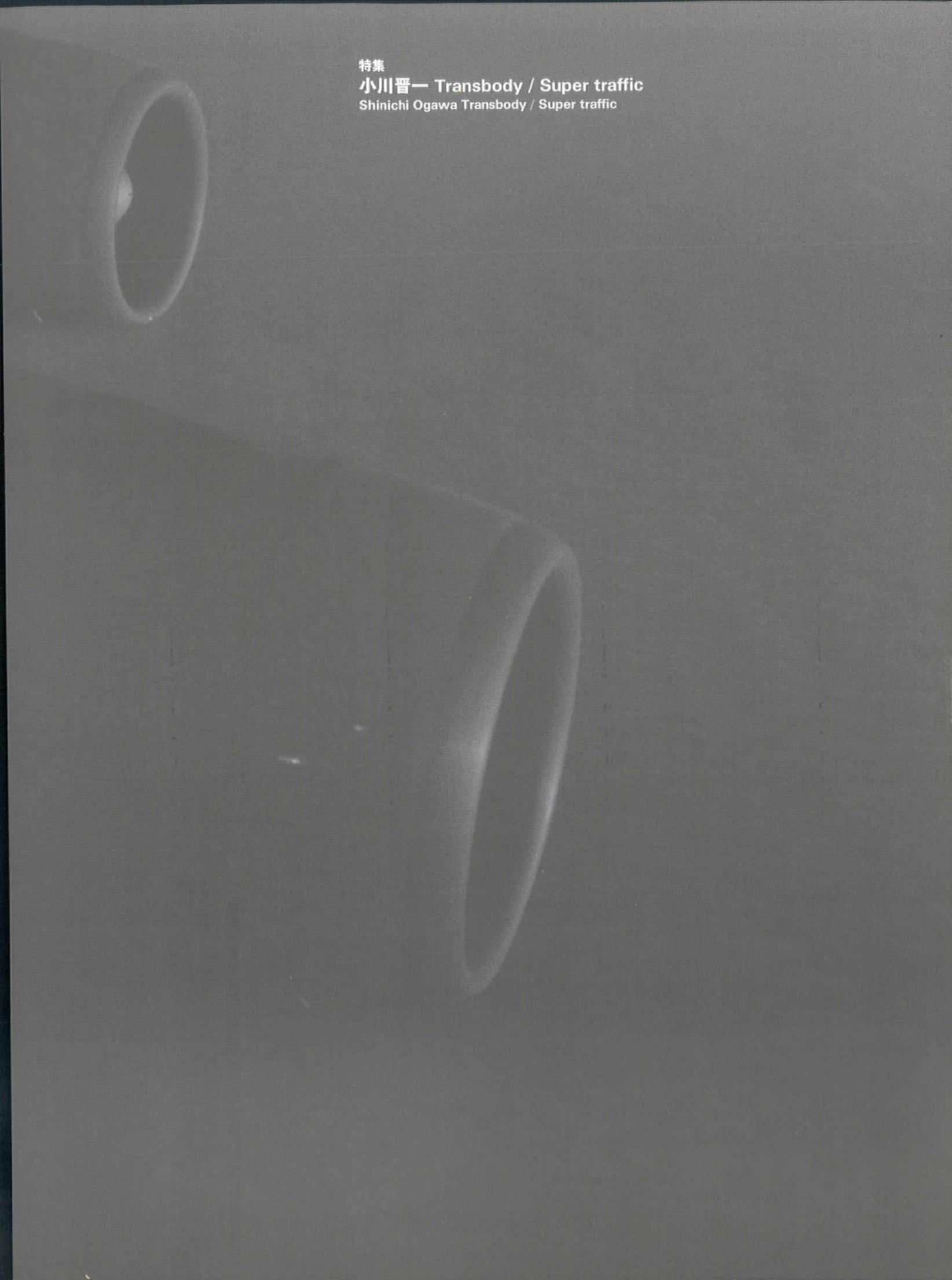
Order Form: Page 132

Cover: Invisible Language / New York
Photo: Shinichi Ogawa
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

特集

小川晋一 Transbody / Super traffic

Shinichi Ogawa Transbody / Super traffic

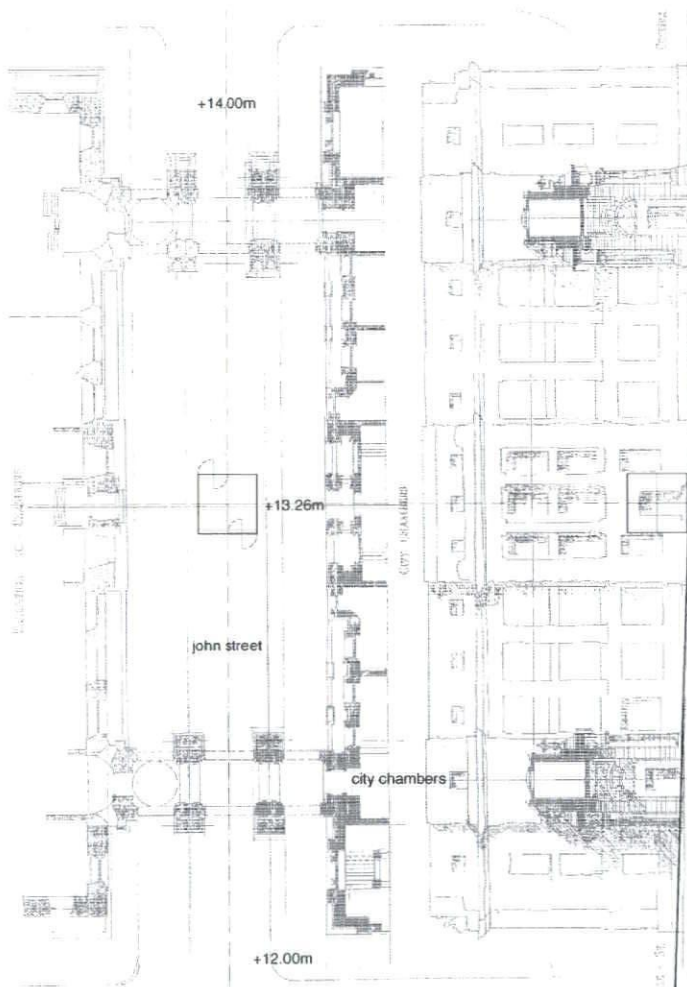


[illegible]



ザ・キューブ／グラスゴープロジェクト
The Cube / Glasgow Project 1999





英国グラスゴー市の歴史的な建築物に挟まれた街路に計画された、地元の現代美術作家アラン・ジョンストン氏とのガラスのキューブのコラボレーション。

The Cube / Glasgow Project in Scotland. Glass Cube 5 × 5 × 5 / in Collaboration with Alan Johnston

Transbody / Super traffic

変容する身体／超交通

8つのコード

小川晋一

01 transbody／変容する身体

現代の人間の身体は様々なものや情報の流れの中にさらされ、それに順応しながら、あるいはそのようなものを呼吸するように内部に循環させながら、変容していく。あらゆるものやことは動的な関係、相互作用の中に存在している。人やもの、情報といった関係しあう当事者同士が激しい運動の中にさらされ、また、それら自身も移動や運動を続けながら、その中で、お互いに相手を変容させ、変容させられている。建築もこのような状況の中にある。建築は様々な人間やもの、情報、現象、感情などが各々通過し、循環し、変容していくメディアである。建築を身体あるいは身体的能力を拡張した概念として捉えることにより、異なる位相に変換する。コンピューターのデジタル記号、映像、音、現代のスピード、メディアの中で生活する現代人の身体はさまざまに変容している。建築は変容する身体を許容し、包み込み、身体の延長として変容している。変容する身体の中に変容する建築が存在する。

02 super traffic／超交通

一般的に語られる意味での情報やものの流れだけではなく人格、感情、思想、記憶、時間、言語、意思、血液、ウィルス、映像、光、音、マネー、など様々な概念を横断する交通が存在する。マルクスとエンゲルスが「ドイツ・イデオロギー」で用いた「交通／verkehr」という用語は文字どおりの人びとや物質の「交通」の意味だけでなく、「交換」、「交易」、「コミュニケーション」、「生産関係」といった様々な意味が込められていた。それは、物質的な交通のみならず、精神的な交通も含んでいる。さらにこの用語はソシュールによって「交通／intercourse」という用語に変換され、あらゆる社会・文化体系にも適用される一般記号学の概念として発展される。情報、文化、人格、経済、思想上の交通が都市、建築、身体、意識の空間に必要とされる。「超交通／super traffic」は、人格や感情、思想といったヒューマンなものから時間や記憶などの抽象的な概念などを含む、人間と社会に関わる様々なものの流れ、交換である。

03 intersection／出来事

建築をものとして捉える見方と、一方で出来事の束、あるいは、様々な交通の「交点／intersection」の集合として捉える見方がある。建築は両義的な対象として、ふたつの対立する概念のはざまにある。建築は客観的な実在性を持つと同時に、主観の認識によって現象するものとも言える。建築は実体であり観念である。空間は人間やもの、情報等の運動や状態の変化といった出来事から成立すると考えられ、また、逆に出来事が空間という枠の中で起きていたともいえる。建築を実体としてよりはむしろ、出来事の束として捉える時、現実にあるのは、人間やもの、情報等の流れであり、都市や建築はその交点として見いだされる二次的な派生物と考えられる。これらの交点は例えば様々なイベントや人びとのアクティビティである。人やもの、情報、感情、記憶、時間、エネルギー、光、音などの絶えまない移動とその複数の交差、変化し続ける出来事の束が都市であり建築空間である。

04 invisible structure／深層構造

表層的、装飾的に美しいことはそれほど重要ではない。むしろ、考え方や概念、計画の中身、認識や理念、精神が美しいことが重要である。ジョセフ・コーススにとって、芸術は不可視であり、作品は思考そのものであろうとする。重要なのは形態ではなく、あくまでも内容、観念であるとするその主張はコンセプチュアルアートを始めとする現代美術の重要な思想となった。建築は物理的な対象である以前に理念や思想、観念であり、不可視の創造行為である。現実には建築はものとして立ち現れ、その背景にある行為、思想、コンセプトは表出しない。しかし、不可視の深層構造は可視の表層構造以前に存在し、ものとしての建築をその骨格として支え、価値を決定する。時間と思考は見えない形態と見えない建築のために注がれる。思考の痕跡は、表層的に消されながら、フィジカルな建築として立ち上がる。「invisible structure／深層構造」は目に見えない建築であり、永遠の存在のための思想である。

05 neutral abstract／中立する空間

建築は様々な様式や概念から解放され、中立に存在することが必要である。建築空間を既成の様式や概念だけで成立させるには不十分である。建築的な概念やボキャブラリーから解放された抽象的なレベルから建築を組立て直すことで、空間がいつでもあり、いつでもないものともなり、より自由を獲得する。マレーヴィッチのシュプレマティズムは、抽象絵画をも超越した絶対的な非対象性を示した。徹底して何物も再現してはいないと同時に、無限の空間と宇宙を提示している。そこに空間が解放された状態が自由に生成する場所が存在する。ものとしての建築が主張するのではなく、空間自体はニュートラルであり、ものや情報等の流れ、様々な交通が自由に存在する。機能と形態が変換可能であることは、あらゆる事物の同時進行並列共存と高選択性を許容する。中立する空間は、人間の意思や感情、行為の交換を促す基盤となり、多様な解釈、視点、機能を生む地帯となる。

06 polyconstruction／多層構築

建築は可視の世界では扱いきれない多様な現象、分野をつなぎあわせる構築物である。それぞれの場所に生じる出来事や、空間を行き交う様々なメディアの流れを層のようにつなぎ合わせ、重ね合わせ、異なる断片が様々な現象している。ある要素は他のテキストを引用することによって構成され、建築はテキストの引用のモザイクと捉えることができる。建築が環境の中で自律し、モノローグ（単声言語）として存在するように感じられる場合にも、周辺の多様な要素との対話によってその存在が見い出される。この対話を構成するポリローグ（多声言語）の建築が求められる。空間は人間の感情や身体の変容を含めながら、違うものやことが同時に行われ、異質なもののぶつかり合いが同時に存在するファブリックである。「policonstruction/多層構築」は多様なイメージのオーバーラップ、重ね合わせ、異種混合の領域の概念である。

07 transscale／トランススケール

宇宙、都市、建築、身体、細胞、など、様々なスケールを横断し、全体と部分というヒエラルキーを超越して、あらゆる現象、物質を相対化する。A・ケストラーのホロン理論によれば、全体と見られるものは、より上位のレベルから見れば部分に他ならず、一方、部分もそれ自体、下位のレベルの諸部分からなる全体であり、下位の部分に分解、還元しえぬ性質をもつという。1個の建築という全体は一方で都市という不確定な全体の部分である。絶対的な意味での全体や部分は共に存在せず、現実には存在するのは全体でもあり部分でもある。絶対的な全体性を有する都市を構想することは現代では現実的ではない。一方で、それぞれの人間の内部には、断片的なイメージの集合としての都市のイメージが現象している。すべての建築の部分はガラス、スチール等の物質として存在するのではなく、それらと身体、光、テキスト、環境等との関係の中で成立する。すべてがディテールであり、全体であり、思想である。

08 autmatic monologue／無意識

現代においては、機能と形態、目的と行為、原因と結果の一致する公式化された合理性よりも、むしろ無意識のうちに生じる断片的な感情や行為、偶発的な出来事を許容するような高選択性のある空間が求められる。フロイトやラカンのいう「inconscient／無意識」は、夢の不合理、失錯行為、度忘れ、言い間違いといった断片的なその作用の痕跡にひとつの解釈を与えるものであった。人間と建築の関係を無意識の位相で考えることは、理性や機能、合理性を越えたレベルで、相互のダイアログ、あるいは交感としてその関係性を捉え直すことである。無意識の痕跡として表出する、断片的で曖昧な人間の行為に対応する高選択性のある建築、あるいは身体が無意識の要求に自動的に適応する建築は、身体の拡張としての建築、第二の身体となる。さらに、人間の無意識だけでなく、自然現象、科学的な現象も大きい意味での人間の理性を越えた無意識と考えられる。それは、無意識と自動化による建築のモノローグである。

（おがわ・しんいち）

Transbody / Super traffic

8 Codes

Shinichi Ogawa

English Translation: Hiroshi Watanabe

01 transbody

The body of a contemporary human being is exposed to the flow of diverse things and information and undergoes transformation as it adapts to that flow or allows that flow to circulate within. All things exist in dynamic relationships and interactions. Elements that interrelate — human beings, things and bits of information — are exposed to violent motion, and they themselves move as they act on each other, transforming and being transformed. Architecture too is in such a condition. Architecture is a medium through which different people, things, bits of information, phenomena and feelings pass and circulate and in which they undergo change. Architecture can be altered in phase by seeing it as a concept for extending the body or bodily capacity. The body of a contemporary human being who lives in the midst of the digital signs, images and sounds of computers, contemporary speeds and the media undergoes diverse changes. Architecture permits the body to change and envelops that body. As the extension of the body, it itself undergoes transformations. A changing architecture exists inside the changing body.

02 super traffic

Besides the flow of information and things in the conventional sense, there are also flows of personalities, emotions, ideas, memories, time, languages, intentions, blood, viruses, images, lights, sounds and money. The word *verkehr*, which Marx and Engels used in *The German Ideology*, signifies not only the “traffic” of people and material, but also “exchange”, “commerce”, “communication” and “production relationship”. It means psychological as well as material traffic. Saussure used the word “intercourse” instead, and it has developed into a general semiotic concept applicable to virtually all social and cultural systems. The flows of information, cultures, personalities, economies and ideas are held to be necessary to the spaces of the city, architecture, the body and consciousness. Super traffic is the flow and exchange of diverse things related to human beings and society, ranging from personalities, emotions and ideas to abstract concepts such as time and memory.

03 intersection

Architecture can be seen as a thing or as a bundle of incidents — a collection of intersections of diverse flows. Architecture, with its double meaning, occupies an interstice between two opposing concepts. Architecture has an objective existence, but at the same time, it is a phenomenon in a subjective consciousness. Architecture is both substance and concept. Space can be considered the product of incidents such as movements or changes in the condition of human beings, things and information, but one can also take the opposite view, that incidents occur within the framework called space. When architecture is considered as, not substance, but a bundle of incidents, then reality lies in the flow of human beings, things and information. The city and architecture are their intersections and simply secondary derivatives. These intersections take the form of, for example, various events or human activities. The city and architectural spaces are an ever-changing bundle of incidents — the endless movement of human beings, things, information, emotions, memories, time, energy, lights and sounds and the multiple intersections of those movements.

04 invisible structure

Being beautiful in a superficial, decorative way is unimportant. What is important is to be beautiful in thought or concept, in content, in perception or idea, and in spirit. To Joseph Kosuth, art was invisible, and the work was in the thought itself. The assertion that what is important is content and idea, not form, is an important ideology of contemporary art, especially conceptual art. Architecture is an idea or thought, a concept, an imperceptible creative act, before it is a material object. In reality, architecture eventually emerges as a thing that does not reveal the act, idea or concept behind it. However, an invisible deep structure precedes the visible superficial structure, and providing the framework for the architecture as object, it determines the value of that architecture. Time and thought are given to a hidden form and an invisible architecture. The trace of thought is superficially erased but emerges as a physical architecture. The invisible structure is the imperceptible architecture and the thought conceived for eternal existence.

05 neutral abstract

Architecture must be freed from all styles or concepts and be neutral. Existing styles or concepts alone are not enough to produce architectural space. By reassembling architecture on an abstract level liberated from architectural concepts or vocabularies, space becomes all things yet nothing, thereby acquiring greater freedom. Malevich's Suprematism suggested an absolute nonrepresentationality that transcended even abstract painting. It did not recreate anything; at the same time, it presented an unlimited space and universe. It provided a place where space in a liberated condition was generated. Architecture did not assert itself as a thing. Space itself was neutral, and the diverse flows of things and information were unimpeded. The convertibility of functions and forms permits the simultaneous development and parallel coexistence of all things and a high degree of choice. A neutral space becomes the foundation promoting the exchange of human thoughts, emotions and actions and a horizon generating diverse interpretations, viewpoints and functions.

06 polyconstruction

Architecture is a construct that joins together diverse phenomena and domains which the visible world cannot deal with fully. The incidents occurring in different places and the flow of diverse media crisscrossing space are joined and layered, and different fragments appear. Some elements are composed through references to other texts, and architecture can be seen as a mosaic of such references. Even when architecture seems to exist independently in the environment as a form of monologue, its presence is detected through its dialogue with diverse elements around it. An architecture that is a form of polylogue, that is, a multiplicity of such dialogues, is sought. Space is a fabric that simultaneously accommodates, not only changes in the emotions and bodies of human beings, but other things as well as clashes between heterogeneous things. Polyconstruction is a concept having to do with a territory in which images overlap and are layered and difficult types of images are mixed.

07 transscale

Diverse scales — universe, city, architecture, body, cell, etc. — are crossed over, the hierarchy of the parts and the whole is transcended and every phenomenon and material are relativized. According to Arthur Koestler's theory of the holon, what seems to be a whole is only a part when seen from a higher level, while a part is a whole made up of parts from a lower level and will be impossible to break down or reduce by means of those parts. A work of architecture is in itself a whole, but it is also a part of the indeterminate whole that is the city. There is no such thing as a whole or a part in the absolute sense, and a thing in reality is both a part and a whole. It is not realistic today to try to conceive a city that is whole in an absolute sense. On the other hand, inside each human being, the image of the city is a collection of fragmentary images. The parts of architecture do not exist as materials such as glass and steel but exist only in relationship to such things as the body, light, the text and the environment. Everything is detail, whole and thought.

08 automatic monologue

Today, what is needed is a space that permits a high degree of choice, that allows fragmentary emotions or actions, accidental events that are generated unconsciously, instead of a formalized rationality in which function and form, objective and action, cause and effect are in agreement. To Freud and Lacan, the unconscious was an interpretation that could be put on fragmentary traces such as the irrationality of dreams, errors, lapses of memory and slips of the tongue. To consider the relationship of human beings to architecture on an unconscious level is to reconsider that relationship as a mutual dialogue or rapport that transcends reason, function or rationality. An architecture that permits a high degree of choice and is able to respond to fragmentary and ambiguous human actions, which are the traces of the unconscious, an architecture that automatically adopts to the unconscious demands of the body — such an architecture becomes an extension of the body, a second body. Natural phenomena, that is, scientific phenomena, can also be considered in a broad sense an unconscious that transcends human reason. It is an architectural monologue effected through the unconscious and automatization.

鵜沢 隆

ほとんど顧みられることはないようだが、小川晋一は〈PROJECT：生命 時間 重力〉と名付けられた平面作品をかつて発表したことがある。それは、1990年に開催された建築デザイン会議に併設されたドローイング展に出品されたものである。それをドローイングと呼ぶのが相応しいかどうかはさておくとして、小川晋一は与えられた正方形のパネルを、手の痕跡をわずかながらに残しながら、白のアクリルですべて塗り籠めた。建築的な線も面もいっさい無く、白だけがあり、微かな痕跡だけで、すべての表現を白が封印した作品であった。

100人以上におよぶ若い建築家たちが一堂に会して行なわれた会議が無謀な企画であっただけでなく、その参加者たちのドローイングを並べた展覧会も、まさにバブルの後遺症のごとき饒舌さであった。その中で小川の白の作品は、ひととき寡黙であるがゆえに、強いインパクトを放っていた。それだけではない。周囲に並ぶ、過剰なまでに建築的なドローイング群に囲まれたとき、小川のパネルは「白の正方形」という素朴な言葉をを超えて、極めて空間的なメッセージを帯びて見えてきた。表現の手段を極めて限定していることが、かえって空間的な感性を思索のなかで刺激するのだ。われわれの視線は、白のパネルを容易に突き抜けて、無垢な空間へと指向して漂っていく。〈キュビストの家〉を発表した直後の時期のことであるが、こうした小川のプレゼンテーションは、周到さとともに強かな戦略すら感じさせるものでもあった。

小川の平面作品〈PROJECT〉は、建築のドローイングの展示という文脈の中では空間的な意味として理解されることになるのだが、その表現手法じたいは他の平面作品、例えばイヴ・クラインやバーネット・ニューマン、あるいはドナルド・ジャッドの作品を彷彿とさせるものである。ただし、クライン・ブルーではなく白であり、ニューマンのようなストライプもいっさい無く、ジャッドの絵画のようにそこに何かが埋め込まれるといったこともない。平面を平面のままに、白を白のままにとどめた小川作品とそれらの作品に共通するのは、表現という行為についての「思索」である。作品という対象の上に視線はとどまらず、対象を飛び越えて思考を深く射抜き、そして覚醒するのである。極めて自制的かつ自省的な表現行為である。

ジャッドのボックス

先日、埼玉県立近代美術館で開催されていたドナルド・ジャッドの作品展を訪れた（現在、滋賀県立近代美術館を巡回）。一般に「スタック（積み重ね）」と呼ばれる作品で広く知られるジャッドは、その作品のシンプルで簡潔なボックス状の形態と、使われる素材に対する親近感からか、建築やデザインにかかわる人々からも強い関心が注がれている作家である。

しかし、わたしがジャッドの作品に強く刺激されるのは、その空間的な形状や素材から誘発されるものではない。形態を構成する原理がことごとく剥出しにされ、それ以上でも以下でもなくそのままに提示するという表現行為そのものである。どの作品にもタイトルは付けられていないが、「スタック」の作品ならば、「ステンレス・スチール、黄色のプレキシグラス／10ユニット、各15.5×68.5×61cm」といったデータが、作品をそのままに記述している。ジャッドの作品は、その構成を「言葉」ですべて精確に記述することも、さほど困難ではない。

例えば、両端が開放された中空な直方体の作品（1969年）であれば、「形状は83.8×121.9×173cm。その4面が8mm厚程度の平滑なアルミ板で2面は開放。アルミ板の内側すべてに3mm厚程度の茶色のプレキシグラス」といった具合である。しかし、それらの言葉は作品のそっけなさに近似しているにせよ、対象の表層に止まったままで、それ以上突き抜けることはできない。むしろ、対

象を突き抜けるのはわれわれの意識の方だ。アルミ板（あるいはステンレス）と半透明なプレキシグラスとの唐突な併置は、素材そのものを越えて「関係性」を生み出し、それが形態自体の意味をも揺さ振り始めるのだ。構成原理が剥出しで、ディテールも直截的かつ簡潔であるがゆえに、われわれの意識は作品という対象のこちら側とむこう側とを容易に行き交うのである。まさに、形而下と形而上との狭間で繰り返される意識の往復運動こそ、ジャッドの作品がわれわれを魅了する所以である。簡潔さゆえに振幅し得る意識である。

小川のボックス

小川晋一が作り出す空間は、ジャッドの作品と比べるなら、はるかに輻輳している。しかし、建築空間という現実的制約を考えれば、小川の空間もまた極限的なまでに直截かつ簡潔である。〈キュビストの家〉以来、極端なまでに透明なボックスで空間を仕切ってきた。空間を透明なままに封印しようとするかのようなのである。最近作の〈ザ・キューブ／グラスゴープロジェクト〉は、空気だけを封印する。洗練されたディテールは、すべて透明なボックスを実現するために奉仕する。

ただし小川の空間は、透明な空間のままではない。完全なる透明なボックスと同時に、閉じた箱が常に併置される。それは、建築空間としての機能から閉じた箱が不可欠であったと見做すよりは、透明なボックスが閉じた箱の存在を必要としたのである。閉じた箱の存在により、透明なボックスはその透明性を際立たせ、透明なボックスが閉じた箱の隠蔽性を強化する。

ジャッドの作品では、しばしば簡潔な形態のなかに異種の素材が併置されることで対象に対するわれわれの意識が覚醒され、振幅し続けたのと同様に、小川の空間では、われわれの視線は透明なボックスと閉じた箱との間を漂い続けるのである。しかも、形態はことごとく単純化され、ディテールは「建築」というよりも純粋な「幾何」へと還元されることで、われわれの意識は「建築」へと向かうよりは、「空間」へと磨ぎ澄まされるのである。透明な皮膜だけによる空間と完全に隠蔽された空間との対峙のなかで、われわれの視線は具体的な作品という対象や住宅といった機能を越えて、小川の空間意識へと向かうことになる。空間を創ることとは、囲うことであり、透明な皮膜と不透明な皮膜で囲うことがその対極であり、それをプリミティブなままに実行するといった意識と言ってもよい。それは、ひたすら寡黙なまでに空間をたたずませることになるのだが、微妙なディテールやプロポーションの差に機能の差が重なり合って、空間には多様な表情に満たされた豊饒さすら呼び醒まされるのだ。

〈キュビストの家〉以来、〈イソベスタジオ&レジデンス〉に至るまで、そうした異質なふたつの空間の併置には、入れ子状かスタック状かの差はあるにせよ、基本的に変化はなかった。まさに小川晋一スタイルがすでに獲得されていた。しかし近年の作品〈ホワイท์キューブ〉や〈ながやレディースクリニック〉に至って、小川の空間への意識は閉じた箱へと急速に向かっている。新たな空間意識が台頭しているのは確実だ。それは、空間をプリミティブなまま増幅させようとする試みなのかもしれない。しかし、それ以前の空間的な関心が〈キュビストの家〉ですでに全面開花して、そのプロトタイプを初期の段階から実現してしまったことを思い起せば、閉じた箱だけを自立させようとする小川の試みは、未だ全貌を見せてはいないように思われる。しかし、小川の空間感性からすれば、新たな空間のプロトタイプの出現までには、そう長い時間は必要ないのかも知れない。

（うざわ・たかし／筑波大学助教授）

A Fecund Taciturnity

Takashi Uzawa

English Translation: Hiroshi Watanabe

It seems forgotten now, but Shinichi Ogawa once made public a two-dimensional work entitled "Project: Life, Time, Gravity". It was entered in an exhibition of drawings that was held in conjunction with an architectural design conference in 1990. His work was not a drawing in the strict sense. What he did was to cover the given square panel with white acrylic paint, leaving only the faint trace of a hand. No lines or planes were drawn to indicate anything of an architectural nature. The white color was like a lid put on any form of expression.

Organizing a conference of over one hundred young architects was a reckless undertaking, inviting as it did a great deal of facile talk, an aftereffect, it seems, of the bubble era, but the exhibition of drawings by the conferees was also afflicted with glibness. Ogawa's white work made a strong impact on those who saw it precisely because of its reticence. That was not all. Surrounded by panels that were essentially architectural drawings, Ogawa's work transcended its simple form and conveyed a message that was spatial in character. Its extremely limited means of expression stimulated our spatial sensibility. Our gaze seemed to penetrate that white panel and to drift in the direction of pure space. The exhibition took place shortly after Ogawa published the "Cubist House", and his presentations, taken together, seemed not only circumspect but highly strategic in intent. "Project" took on a spatial significance in the context of the exhibition of architectural drawings, but in its method of expression it closely resembled other two-dimensional works, for example, the works of Yves Klein, Barnett Newman and Donald Judd. However, Ogawa's work was white instead of blue, the color Klein favors; unlike Newman, he introduced no stripes; and nothing was embedded in the panel as in Judd's paintings. Ogawa's work was two-dimensional and white, but like those other works it inspired speculation about the act of expression. Our gaze did not rest on the work; instead, it went beyond the subject, so that our intellectual interest was aroused. The act of expression demonstrated great self-control and a high degree of introspection.

Judd's Boxes

The other day, I visited an exhibition of works by Donald Judd being held at the Saitama Prefectural Museum of Modern Art. (It has since moved to the Shiga Prefectural Museum of Modern Art.) Judd, who is best known for his works called "Stack", is an artist in whom architects and designers take a great deal of interest, perhaps because of the simple, boxlike forms of his works or their familiarity with the materials he uses.

The spatial configurations or materials, however, are not why I find Judd's works stimulating. It is the way in which the principle of formal organization is laid bare; that is, the straightforward way in which the act of expression itself is presented. It is neither exaggerated nor downplayed. None of the works is titled, but in the "Stack" series, data on each work are given; e.g. "stainless steel, yellow plexiglass; 10 units, each 15.5 x 68.5 x 61 cm". Giving an accurate verbal description of a work by Judd is not very difficult.

For example, a hollow cylindrical work (1969), open at the ends, can be described in the following manner: a form measuring 83.8 x 121.9 x 173 cm, four sides of which are smooth aluminum panels approximately 8 mm thick and two sides of which are open; light brown plexiglass, approximately 3 mm thick, is on the inner side of each aluminum panel. The words are as brief and to the point as the work they describe, but they fail to get at its essential quality. It is instead our consciousness that penetrates the work. The abrupt

グラスキューブ アフター モダニズム

岡河 貢

1990年代に日本の地方都市に出現したガラスのキューブをモダニズムの建築の歴史のなかでどのように位置付けるかという試論への誘惑は〈キュビストの家〉と〈イソベスタジオ&レジデンス〉が現代においてふたたび新鮮な建築的出来事として私を魅了したことと端を発している。

それはガラスという素材がもつ20世紀的近代性が、モダニゼーションの過程でヴァナキュラー化し、いまやどの都市の大通りにもありふれているガラスのカーテンウォールの建物の退屈さに辟易した私たちの感覚をふたたびガラスという素材によって覚醒させることを示してくれた建物の意味を問うことである。

20世紀のガラスのモダニズム建築は、おそらくミースのガラスのスカイスクレイパー案に始まり、〈ファンズワース邸〉の完成にその絶対零度を提示されて以来、建築の表現における純粋性としてのガラスの建築を追及する試みはながらく放棄されていた。

それはミース本人のデザインさえも〈ファンズワース邸〉以後〈シーグラムビル〉において、近代性と古典性のアンビヴァレントなパラドックスとしてのH型鋼のマリオンの表現がポストモダニズム的な解釈を可能とさせるような近代の古典的記号性を孕む際どい道筋を進んだことにもしめされているだろう。

〈シーグラムビル〉の設計スタッフであったフィリップ・ジョンソンの自邸であるガラスの家が建築の古典性を暗示させるのは後にポストモダニストとして20世紀の後半を生き抜くことになる彼の道筋であると同時に、モダニズム建築の絶対零度が提示された以後に純粹形式としてのガラスのキューブを追求する時のひとつの必然でもあっただろう。

小川の建築への興味は、このガラスのモダニズムの表現のすきまに対する攻撃力を彼の設計する建物が現代の建築の問題として持ちえているところにある。

透明なキューブというのは形態としてのパラドックスを本質的に内包している。それは形態でありながら形態が消滅することへの欲望を孕んでいるからである。

小川の建築ではガラスという素材による境界の形式としてキューブという形態が選択されている。形式としてのキューブは建築的形式というより感覚的形式のように形態としての重量が消滅している。

それはまたリアリティとアンリアリティを同時に生きてゆくための形式として〈キュビストの家〉では白いキューブと相似形の入れ子の外周として、〈イソベスタジオ&レジデンス〉ではコンクリートのキューブの上に重ねられて、ここでのリアルな生活とアンリアルな生活を同時に成立させていることにも読み取れるであろう。

この透明で消失しようとする感覚の形式化は私達をとりまく情報化社会やメディア社会としての都市環境あるいはコンピューターのモニターの中の情報の存在感のような今日的存在感として私たちに共有されるものである。

それは美しさというものが、前提として虚構でなければその重さに耐えられないという現在の私たちの美に対する感覚にかかわるものである。

それは20世紀初頭のモダニストの美しい夢を、現在においてもうひとつのリアリティつまり情報的リアリティとして感じる時間の非線形的流れ、あるいは多時間の同時存在をゲーム化する虚構生産システムとしてのポスト近代性と呼びうる状況としての今日性に通じてゆくものである。

この感覚をリアルな物質によって成立させるためにカタログから選択された工業製品を素材としてプリミティヴさを徹底的にソフィスティケーションする納まりのディテールによって組みあげられた小川のガラスのキューブはモダニズムの到達点としてのガラスのキューブの終わりの後のガラスのキューブの始まりのための試行として読みとることができうるかもしれない。

このことはモダニズムの虚構を情報としてのリアリティとして生きると同時にモダニゼーションによってリアルな工業製品による環境にとりまかれた、遅れてきたモダニストとしての分裂した我々の先端性のアンビヴァレントの形式としてのガラスのキューブの今日性でもある。

(おかがわ・みつぐ／建築家、広島大学助教授)

The Glass Cube After Modernism

Mitsugu Okagawa

English Translation: Hiroshi Watanabe

The "Cubist House" and "Isobe Studio" strike me as being architectural events of great freshness and appeal and have led me to try to place these glass cubes built in the 1990s in Japanese provincial cities within the context of modernist architectural history.

This is also an attempt to understand why these buildings have revived our interest in glass, a material that was once emblematic of twentieth-century modernity but has become, in the process of modernization, so much a part of the vernacular that, today, the glass curtain-wall buildings lining the main streets of every city bore us to death.

Modernist glass architecture in the twentieth century began with the glass skyscraper project of Mies van der Rohe and achieved absolute zero, that is, its ultimate expression, in the Farnsworth House. Ever since, the exploration of the pure expressive potential of glass architecture has been abandoned.

That is apparent in the subsequent career of Mies himself. After the Farnsworth House, he designed the Seagram Building, where the use of wide-flange steel mullions produced an ambivalent, paradoxical work that has both modern and classical qualities and is open to a post-modernist interpretation.

Philip Johnson, who was on the design team for the Seagram Building, gave to the Glass House that he subsequently designed for himself something of a classical character. That anticipated his post-modernist work in the second half of the twentieth century and was perhaps an inevitable outcome of the pursuit of the glass cube as pure form, once modernist architecture had achieved its ultimate expression.

My interest in Ogawa's architecture lies in the fact that his buildings explore the expressive potential that was still untapped by this glass modernism and deals with it in a way that is relevant to contemporary architecture.

There is a formal paradox inherent in a transparent cube. It is a form, yet implicit in it is a desire to eliminate form.

In Ogawa's buildings, the cube is chosen as a form for the glass boundary. The cube is not so much an architectural form as it is a perceptual form in which weight has been eliminated.

His works can also be read as forms for living in reality and unreality at the same time. In the "Cubist House", a white cube is enclosed in a similar form that defines the outer boundary of the dwelling. In "Isobe Studio", the concrete cube is surmounted by a similar form.

In these works, form is given to that which is transparent and seemingly about to vanish. They have something in common with the information or media society that is our urban environment. They possess a very contemporary presence, similar to the presence of information on a computer monitor.

These works speak to our contemporary sensibility, which sees beauty as something that can only exist as fiction.

They have something in common with our contemporary condition and state of post-modernity, that fiction-producing system which makes a game of the nonlinear flow of time or the simultaneous existence of different times, so that the beautiful modernist dream of the early twentieth century is felt today as another reality, that is, informational reality.

Ogawa's glass cubes, in which industrial products selected from catalogs are assembled in a sophisticatedly primitive way, thus giving expression to this contemporary sensibility by means of real materials, can be read as trial attempts to begin anew with glass cubes, now that glass cubes as the culmination of modernism have already been achieved.

With their ambivalent forms, they are an expression of the fragmented state in which we, who have come late to modernism, find ourselves today, when the fiction of modernism has become informational reality, and the process of modernization has created a real environment of industrial products.

小川晋一の空間とその空虚性に関する考察——東洋と西洋

アラン・ジョンストン

訳=櫻井義夫

アドルノによれば、芸術の真の機能は表面上機能がないうところにこそある。もし何か社会的な機能が芸術にありうるとするならば、機能が無いということが機能なのである。ハンス・ベルテングが孤立して行動しないことを取り上げて、これを単なる形式主義であるかのように扱うのは公平ではない。要は芸術の無目的性ではなく、（それはいずれにしても決して無意味性とは同義でない）そこには超越的な能力もあるということである。妥協を許さない芸術の単純な理想主義者の価値は存在するが、そこには芸術の精神的な有用性があり、世界レベルでの無目的性自体が、最終的にそれを生み出すきっかけであり手法なのである。

[J.マシェック:ルイス・サリヴァンと肉体美の希薄化 Building Art 1993年]

私の個性はエジンバラの町の、高く正確に刻まれた石のもつ性格によって形成された。北のアテネ、ヨーロッパの北西の端とも言うべきこのまちは、建築体験において正確さ明快さという強烈な背景を与えてくれたのである。その私が小川晋一の明快な現代の宝石を発見し、その空間に入ることは、新しい空間のプリズムという自然をみる思いであった。

90年代初頭にギャラリー・シマダと展覧会を行なった際に、私は小川の山口にある「立方体」を発見したのである。それはある意味で発見だったのだが、ギャラリー・シマダの活動の延長線上にあるものでもあった。鶴田日出夫の友人が依頼した建物が私の注意を引いたからである。即座に作品に連関する発想を理解し、この新しい空間の明快な構築への感情移入のほとばしりを感じた。この「立方体」はまず共同作業という考えが連想され、そしてデイヴィッド・ヒュームの知覚の性格に関する考察についての記憶がひらめく（そこには日本的な思想のいくつかの面に奇しくも連動するものがあると私には感じられるのである。）

そこにはヴィトゲンシュタインが姉のためにウィーンに建てた家に関する考察も盛り込まれているが、その家は構造において透明度が低いにも関わらず、ガラスの使用や内部の反射の隠喩などは、小川の非物質的な空間と対比できるものなのである。ここには私の仕事に連動するものも発見できる。「白と黒の相似形を持つという型にはまった極性を持つというだけでなく、類似性と差異性の論理構造を共有しているのであり、同じ幾何形態の範疇にあてはまるということが、ヨーゼフ・マシェックのヒューム22の思想に連関するのである。」[アラン・ジョンストン、ヴィトゲンシュタインの家 1998年]

しかし小川晋一の作品を経験すると、「無形性」という発想を常に拡大する性質に、現代における空間形態の発展、探求を擁護するひとつの焦点が現れてくる。これはある意味において、モダニズムの再現、あるいは新しい次元のモダニズム、起源において世界的なある種のモダニズム、ある意味で非物質化しハイパースペースを形成したモダニズムである。ここに思い起こされるのは、ケネス・ホワイトが指摘しメルロ・ポンティエの記述するように、いつの時代にも、変化が現れそれが新しい宇宙論的な思想を生みだし、世界が夢想から思想へと意識を転換させる際に、その思想は理論の最も一般的な部分に基づくものののだということである。宇宙工学および相対性理論こそは、自然を知的に獲得しようとする欲求を引き戻し、宇宙熱想へのギリシャ的な情熱を生活の中に取り戻すものである。

これは驚くべきことにそしてとても興味深いことだが、G・バタイユが東洋の聖人のように単純な複合性を表現する言葉「現代の抽象」という類推にまで到達することが恐らくできるのである。

「主体にさらに重きを置くとすれば、意味によってでなく、意味を超えるものによってである。」

思索するだけでなく触覚的な方法で黙想することによって、こうした新しいモダニズムの概念（J・マシェックが上記している意味での完全なる非有用性）

に基づく小川とジョンストンのグラスゴー「立方体」計画は表現されているのであり、スミスの市民の責任という「啓蒙」思想がこの建物自体の表面に反映されているのである。周囲を映し出すことによって都市の広場となり、映し出す枠組みとしての建築を演じているのである。

「これは単なる鏡であって、そこにはある程度人の目で自分の振る舞いの礼儀作法を細かく確認できるのである。ここにはデリダとローティエによって無意味と宣告された光と鏡の隠喩をみることとなる。」[G・E・ダヴィー 発想への情熱]

表面には構築された建築の記憶という緊張感が反映されているが、外側のガラス立方体の内部には、シンメトリーを注意深くはずした線描と空間があって、規則的なシンメトリーを期待する中に折りたたまれた空間であることを両義的に言いなおしているのである。「古典的なもの」として東洋と西洋の双方にあるものをここに期待して発見しようとしても

「東洋と西洋が意味するものは何もないのである」オデッセイ

しかしそこに別の次元として球の性格を考えねばならない。「あの濃いワインの海に」生まれるオデッセイの記述する文脈に限定されていたから、ジョン・バースがそうであったように西洋を旅行することで東洋を発見するという皮肉にめぐり合うことになるのである。

「もし英雄が直感というものを持っているならば、それは自己啓蒙のなかで地球軸を獲得するということである。英雄は西方へ旅行し、到達するのは無我と神秘的超越の王国、東洋なのである。」

真の西方への動きとは少なくとも可能性として、家を遠く離れるように。

東洋から、自意識を呼び起こす国へと長旅をすることであり、それは結局ひとつの旅行なのであり、哲学的な半球間の衝突である。

小川の「立方体」作品の背後にある非物質的なモダニズムを導く原則は、半透明ガラスを置いて他にないだろう。しかしその発想の起源に私が感じてしまう成功と失敗は、完全さの自意識であり、本質的な面で究極の利便性のない面、それが結局最高の利便性であることなどである。建物が見るものに伝えるのは、無理強いすることなく公平な興味に基づけば、中立でありながら歴史的な含みのある自分自身の感覚、現代の鏡の隠喩、現代の反射である。ここで私が強調したいのは、作品の断固たる受動性を探索し、形態の間にあるであろう空間を観察し、実際に存在する空間に発生する両義性を考察し注目することなどを通じておきることがらである。それはからだの空間感覚の部分において、おそらくいわゆる「共通感覚」というものである。

それはまるでジョン・マクラフリン（雪舟研究家、建築的現代絵画作家）の作品を見るときのようなものである。まず空間的な躍動を感じ、見かけは規則的なシンメトリーの造形であるが、背後には非対称が隠れ、そこにある非物質性によって空間感覚を強調し表現している。

東洋における西洋。

立方体とそれに続く小川の作品には、こうした「空虚」を思わせるそれ以外の空間的な類推があるというのは大変興味深いことである。それは面白いことに、地誌的に古いある「空虚」に関連しているのである。わたしは当然、その作品自体が山口を代表する、雪舟の偉大なる庭園に触れているのだが、雪舟はジョン・マクラフリンによると、「驚くべき空虚」の創造者である。両者は互いに一致するものでありながら、注意深く適切なもの以外のなにものでもないのである。

(Alan Johnston/現代美術家)

According to Adorno, the real function of art lies precisely in its lack of ostensible function. If any social function can be ascribed to art at all, it is its functionof having no function. 'It is not fair to make this sound like mere formalism, as Hans Belting is today alone far from doing. The point is not art's purposelessness (which anyway, is by no means the same as pointlessness), but there is also its transcendental capabilities. There is the simple idealist value of an art engaged uncompromisingly; but there is also art's own spiritual utility, for which worldly purposelessness itself might only, in the end serve as occasion or means.

J. Masheck: Note on Louis Sullivan and Rarefaction of the Bodily Beauty. Building Art 1993.

My being shaped in the city of Edinburgh with stone cut of intended permanence, cut high and accurate, 'The Athens of The North, The European North Western Peripherique, provide a strong background of accuracy and clarity in architectural experience. In finding the clear modern gems of Shinichi Ogawa, and going into their space was like seeing the nature of a new spatial prism.

It was on the occasion of making an exhibition with the Shimada Gallery in the early nineties, I discovered the Ogawa 'Cube' in Yamaguchi. It was in a sense a discovery, but it was also very much an extension of the activities of the Shimada Gallery, that Hideo Shimada would draw my attention to a building that had been commissioned by a friend of his. At first and instantaneously I saw all sort of connective ideas and a flood of empathy with this clear construct of a new space. The 'Cube' also brought to mind immediate ideas of collaboration and then flashes of memory on David Hume's reflections on the nature of perception, (which I feel present a unique tangential contact with some aspects of Japanese thought). There was also a thought of the house created by Wittgenstein in Vienna for his sister, though more opaque in much of its structure there is also in its use of glass and the internal reflection metaphor a parallel with the dematerialised space of Ogawa. I also found this connecting to my own work, 'it is not merely the categorical polarity of having black and white versions of equally distinct forms but the sheer structural logic of similarity and difference, which allies its likewise categorically geometric images with such thoughts of Hume22 Joseph Masheck: Alan Johnston Haus Wittgenstein Inverleith House. 1998.' But also in experiencing the works of Shinichi Ogawa there will appear, in the nature of an ever widening idea of 'Formlessness' (Informe), a focus, which is provided as an extension, exploration and vindication of the modern spatial form. This is in a sense a reappraisal and also new dimension of modernism, a modernism, (a modernism global in its genesis), a modernism which in a sense dematerialised and formed to a hyper-space. This brings to mind how Kenneth White points how Merleau Ponty notes that in each time that in each time or epoch there appears the change that makes new cosmological thinking thought feasible, and that the universe is susceptible to thinking, not only dreaming, and that this thinking is grounded in that most general of theories. Astronomy and the Theory of Relativity, which have brought back the desire for an intellectual possession of nature and brought life again to the Greek passion for Cosmic Contemplation.

This can perhaps surprisingly and very interestingly be extended to take further a further analogy of 'The Modern Abstract' in the words of G.Bataille, when he states, with an almost Eastern sage like simple complexity,

'.....More heavily invested the subject, not with meaning, but with that which goes beyond meaning'.

The Musing in that reflective yet tactile mode describes the Ogawa-Johnston plan for a 'Cube' a work sharing conceptually this new modernism, (totally non utilitarian in the sense that J. Masheck describes above), for a site in Glasgow, where the 'Enlightenment' Smith idea of civic responsibility

is reflected in the skin of the building itself. The image reflected being the forum of the city. The building acting as a paradigm of reflection.

'This is the only looking -glass by which we can, in some measure, with eyes of other people, scrutinize the propriety of our own conduct. Here we find the metaphor of light and the looking glass which out by Derrida and Rorty as nonsense.

'G.E. Davie 'A Passion for Ideas'.

On the skin, a reflective tension of built architectural memory. Yet within the glass outer cube exists a carefully asymmetric formed drawing of line and void which ambivalently restates that bending of space within the symmetric expectation of regularity. An expectation of what is both in the East and the West as 'The Classical' and yet we find;

'East and West mean nothing' Odysseus

Yet we must consider the nature of the sphere, in this as in another dimension: it has been delimited and within the context of the observation from Odysseus cast 'on that wine dark sea' and the irony of the having found the East by traveling West, as John Barth has it,

'It is an insight which, which if the hero has it, he acquires exactly at the Axis Mundi, as a feature of his general enlightenment. The hero voyages westward, but it is the east he reaches; the realm of selflessness and mystical transcension.

The truly westward motion, at least potentially, is the long voyage home from

The east, to the country of the waking consciousnessit is one voyage after all, and its philosophical hemispheres impinge.

I can see no guiding principle other than the veiled glass a dematerialised modernism behind this work, the Ogawa 'Cube'. Yet I do perceive a right and a wrong in the origination of the idea, a sense of a self aware totality and that essential, aspect, the ultimate non utility, being in the end the highest utility. I think that the buildings can bring to the viewer, without force but with a detached curiosity, a neutral though stoically involved sense of themselves: a modern metaphor of mirroring, a modern reflection. This I may stress, may happen through exploring the work's resolute passivity, observing perhaps the space between the forms, reflecting on and noting the ensuing ambivalence about where this space actually occurs. In the spatial sense-part of body, perhaps, what we know as 'The Common Sense'. It is like looking at a work by John McLaughlin, (Sesshu scholar and arch high modernist painter). Finding a spatial dynamic at first, which appears has a regular symmetrical formulation, but behind runs an asymmetry which enlightens and refers the spatial sense through its immateriality. West in East.

It is very interesting that the Cube and some of Ogawa's subsequent works have also brought yet other spatial analogies redolent with that 'voidness'. They are amusingly and topographically related to that older 'voidness'. I refer of course to that work that itself defines Yamaguchi, the great garden of Sesshu. Sesshu described by John McLaughlin as the creator of 'The Marvellous Void'. This may be coincidental but it can hardly be anything other than observable and apposite.

1: Wall Drawing Yamaguchi 1989

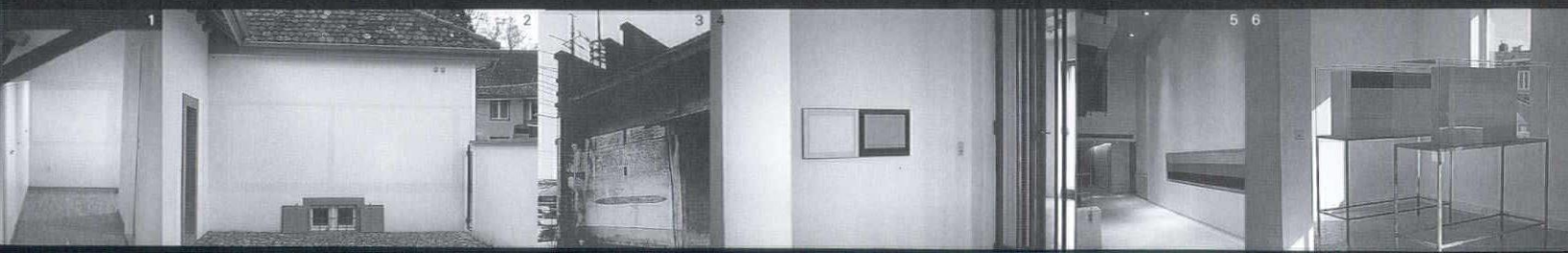
2: Haus Wittgenstein 1994

3: Lisson Gallery, London 1996

4: St. Vincent St. Glasgow 1998

5: Wall Drawing, Basel 1999

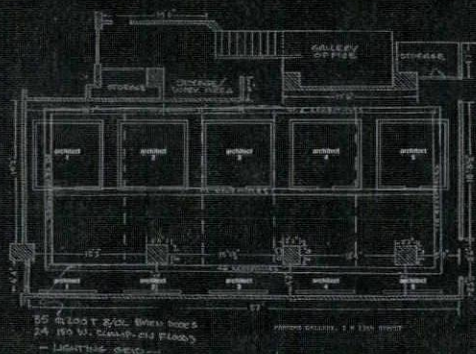
6: Wall Drawing, Basel 1999



インビジブルランゲージ展／ニューヨーク

Invisible Language

A Dialogue with Five Architects / New York 1991



インビジブルランゲージ展／ニューヨーク

会場＝パーソンズスクール、ニューヨーク 会期＝1991年12月4日－1992年1月10日 出展者＝芦原太郎、原尚、小川晋一、タオアーキテツ（木村丈夫、野田俊太郎）、ワークショップ（北山恒、木下道郎、谷内田彰夫）キュレーター＝野口昌夫

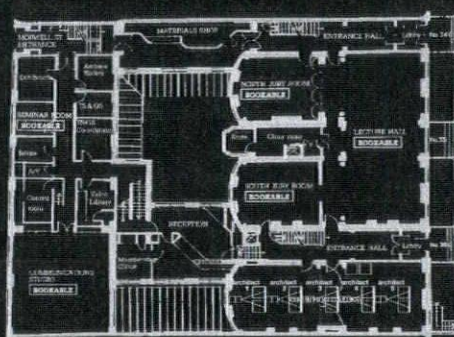
Invisible Language A Dialogue with Five Architects / New York

Place: Exhibition Center, Parsons School of Design, New York / Term: December 4, 1991 – January 10, 1992 / Architect: Taro Ashihara, Hisashi Hara, Shinichi Ogawa, Tao Architects (Takeo Kimura, Shuntaro Noda), Workshop (Koh Kitayama, Michio Kinoshita, Akio Yachida) / Curator: Masao Noguchi

インビジブルランゲージ展／ロンドン

Invisible Language

Tokyo 1990's A Dialogue with Five Japanese Architects / London 1992



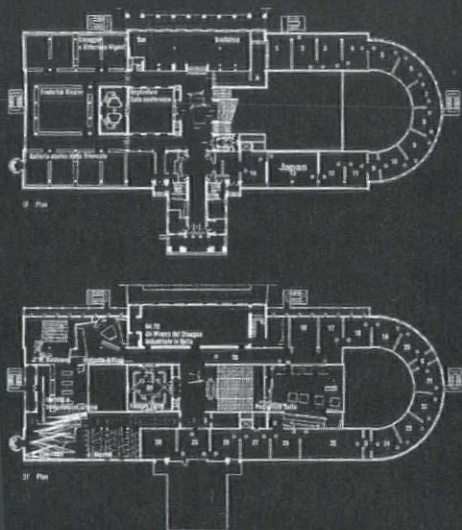
インビジブルランゲージ展／ロンドン

会場＝AAスクール、ロンドン 会期＝1992年10月3日－1992年11月6日 出展者＝芦原太郎、原尚、小川晋一、タオアーキテツ（木村丈夫、野田俊太郎）、ワークショップ（北山恒、木下道郎、谷内田彰夫）キュレーター＝野口昌夫

Invisible Language Tokyo 1990's A Dialogue with Five Japanese Architects / London

Place: The Architectural Association, London / Term: October 3, 1992 – November 6, 1992 / Architect: Taro Ashihara, Hisashi Hara, Shinichi Ogawa, Tao Architects (Takeo Kimura, Shuntaro Noda), Workshop (Koh Kitayama, Michio Kinoshita, Akio Yachida) / Curator: Masao Noguchi

第19回ミラノ・トリエンナーレ日本館展示
transbody / super traffic
Triennale di Milano XIX International Exhibition 1996



会場＝パラッツォ・デラルテ 会期＝1996年2月27日-1996年5月12日
全体テーマ＝「アイデンティティとディファレンス」今日の形態における統合
と多元性・カリそめと永遠のさなかの文化 日本館テーマ＝「パブリック・ボ
ディ・イン・クライシス」危機にある公共的身体 ステアリングコミッショナ
ー＝黒川紀章、中村敏男 出展作家＝隈研吾、竹山聖、阿部仁史、小川晋一、
十木篤、シーラカンス、妹島和世、團紀彦、トム・ヘネガン、松岡恭子+王大君

General Theme: IDENTITY AND DIFFERENCES Integration and Plurality in
Today's Shapes Cultures between the Ephemeral and the Lasting / Nation-
al Theme: PUBLIC BODY IN CRISIS

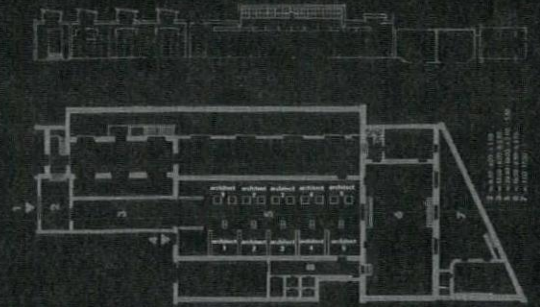
Place: The Palazzo dell'Arte / Term: February 27, 1996 - May 12, 1996
Steering Commissioner: Kisho Kurokawa, Toshio Nakamura / Artist: Kengo
Kuma, Sey Takeyama, Hitoshi Abe, Shinichi Ogawa, Atsushi Katagi, Coela-
canth, Kazuyo Sejima, Norihiko Dan, Tom Heneghan, Kyoko Matsuoka +
Steven Tachun Wang



インビジブルランゲージ展／ミラノ

Invisible Language

Tokyo 1990's A Dialogue with Five Japanese Architects / Milano 1993



インビジブルランゲージ展／ミラノ

会場＝イデアブックス、ミラノ 会期＝1993年4月29日－1993年5月30日 出展者＝芦原太郎、原尚、小川晋一、タオアーキテクツ（木村丈夫、野田俊太郎）、ワークショップ（北山恒、木下道郎、谷内田彰夫）キュレーター＝野口昌夫

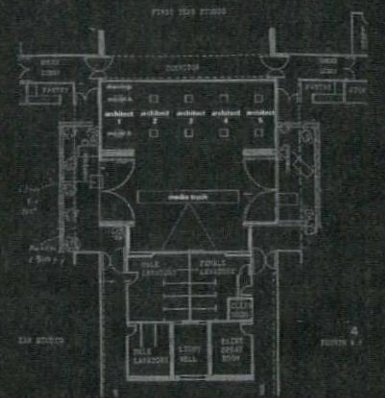
Invisible Language Tokyo 1990's A Dialogue with Five Japanese Architects / Milano

Place: Idea Books, Milano / Term: April 29, 1993 – May 30, 1993 / Architect: Taro Ashihara, Hisashi Hara, Shinichi Ogawa, Tao Architects (Takeo Kimura, Shuntaro Noda), Workshop (Koh Kitayama, Michio Kinoshita, Akio Yachida) / Curator: Masao Noguchi

インビジブルランゲージ展／香港

Invisible Language

Tokyo-Hongkong A Dialogue with Five Japanese Architects / Hongkong 1995



インビジブルランゲージ展／香港

会場＝香港大学、香港 会期＝1995年10月30日－1995年11月10日 出展者＝芦原太郎、原尚、小川晋一、タオアーキテクツ（木村丈夫、野田俊太郎）、ワークショップ（北山恒、木下道郎、谷内田彰夫）キュレーター＝野口昌夫

Invisible Language Tokyo-Hong Kong 1995 A Dialogue with Five Japanese Architects / Hong Kong

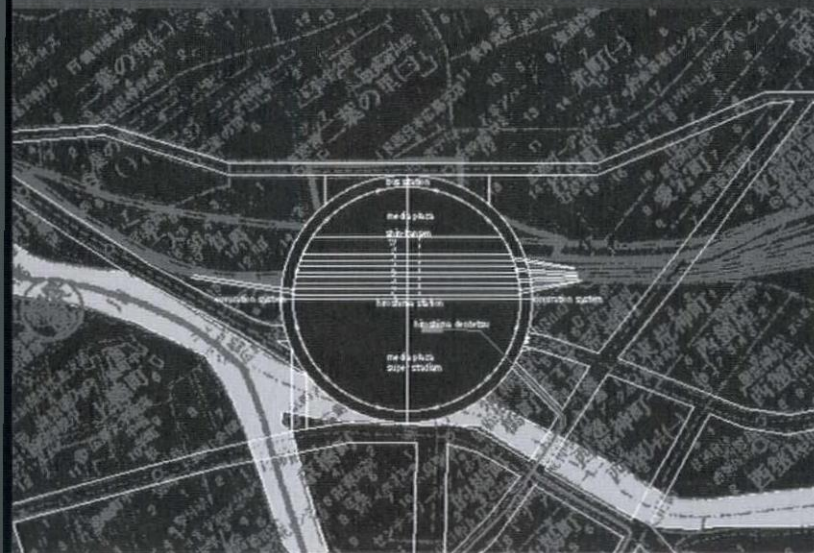
Place: The University of Hong Kong / Term: October 30, 1995 – November 10, 1995 / Architect: Taro Ashihara, Hisashi Hara, Shinichi Ogawa, Architects (Takeo Kimura, Shuntaro Noda), Workshop (Koh Kitayama, Michio Kinoshita, Akio Yachida) / Curator: Masao Noguchi

ヒロシマモナムール

Hiroshima Mon Amour 1996

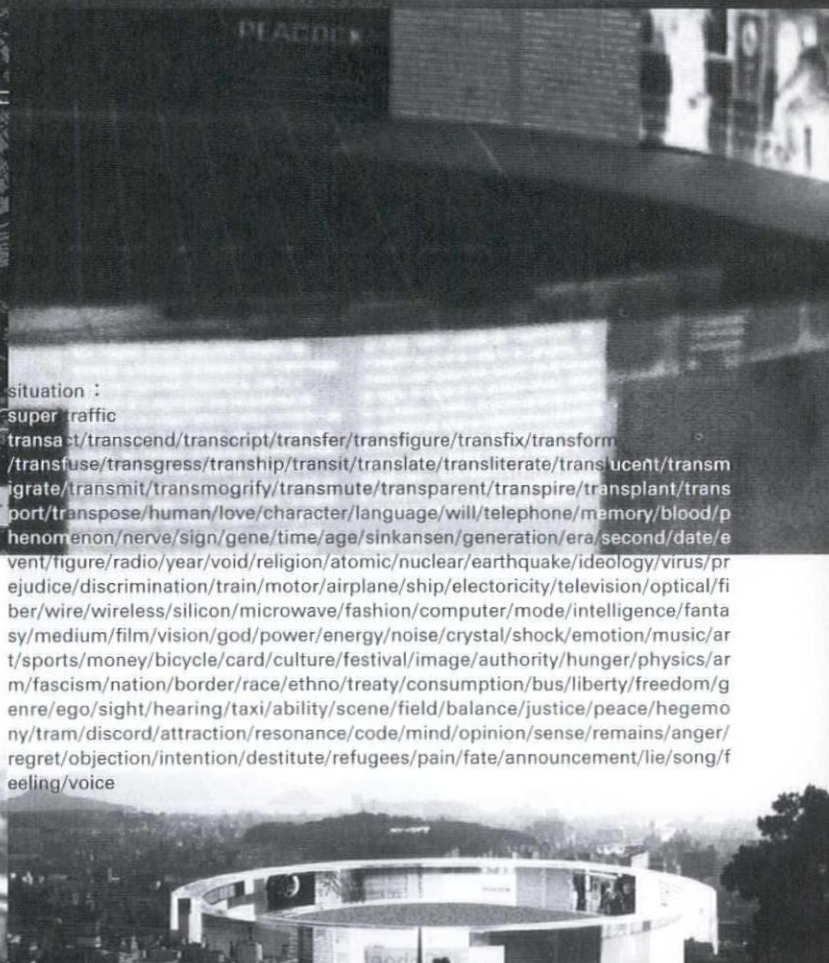
この計画は広島駅および周辺地域の再開発案である。100万の人口を抱える世界平和都市へのエントランスとして、直径500mのガラスのサークルを配置している。このサークルは、JRをはじめに路面電車、エアポートバス、市内・郊外バス、タクシー、一般車両、そして人というあらゆる交通手段の集積回路として成立している。これは同時に、情報、人格、感情、愛、細胞、血液、記号、意思などといった、いろいろな意味での交通、交換、交流の状況を示している。これは機能の正確な分析に基づいたニュートラルなメディアとしての建築であり、高度な選択性と、多くの分野を繋ぎあわせている。サークルは、マクロな視点では都市に宇宙の痕跡をしるし、内部のミクロな視点では様々なレベルでの横断や相互作用によって場所に主体性をもたせ出来事を誘発する。建築は現象となり、流動するエネルギーが主体となる。

それは〈超交通／変容する身体〉という概念の建築化である。



location : hiroshima, japan
dimension : 500meter in diameter
site area : 196250square meters
building area : 37287.5square meters
structure : glass/steel frame/steel frame and reinforced concrete
building type : highway/railway/station/bus terminal/parking/movie theater/library/museum/plaza/tv-radio satellite studio/information booth/media center/hotel/department store/office/housing

situation :
super traffic
transact/transcend/transcript/transfer/transfigure/transfix/transform
/transfuse/transgress/tranship/transit/translate/transliterate/translucent/transmigrate/transmit/transmogrify/transmute/transparent/transpire/transplant/transport/transpose/human/love/character/language/will/telephone/memory/blood/phenomenon/nerve/sign/gene/time/age/sinkansen/generation/era/second/date/event/figure/radio/year/void/religion/atomic/nuclear/earthquake/ideology/virus/prejudice/discrimination/train/motor/airplane/ship/electricity/television/optical/fiber/wire/wireless/silicon/microwave/fashion/computer/mode/intelligence/fantasy/medium/film/vision/god/power/energy/noise/crystal/shock/emotion/music/art/sports/money/bicycle/card/culture/festival/image/authority/hunger/physics/arm/fascism/nation/border/race/ethno/treaty/consumption/bus/liberty/freedom/gene/ego/sight/hearing/taxi/ability/scene/field/balance/justice/peace/hegemony/tram/discord/attraction/resonance/code/mind/opinion/sense/remains/anger/regret/objection/intention/destitute/refugees/pain/fate/announcement/lie/song/feeling/voice

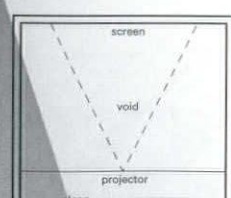
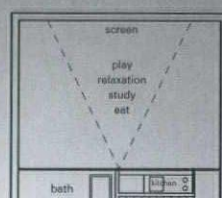
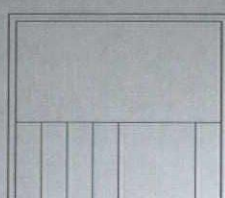
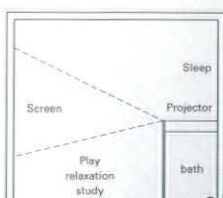
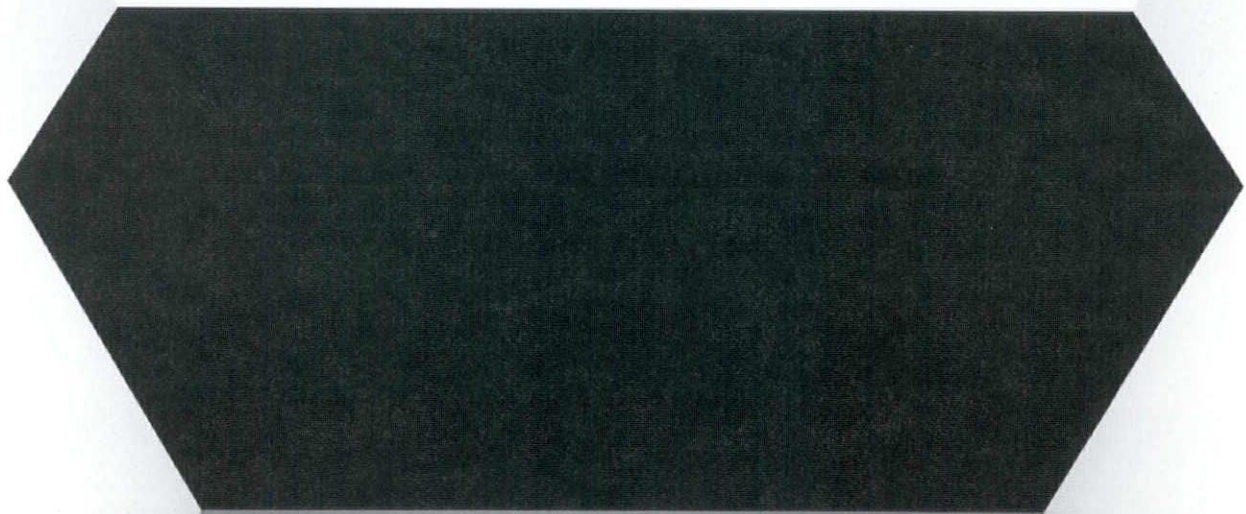




モダンアブストラクトの家／キューブ
 Modern Abstract House / The Cube 1999

6m×6m×6mのクローズドスペースである。映像は個の空間を再生する。

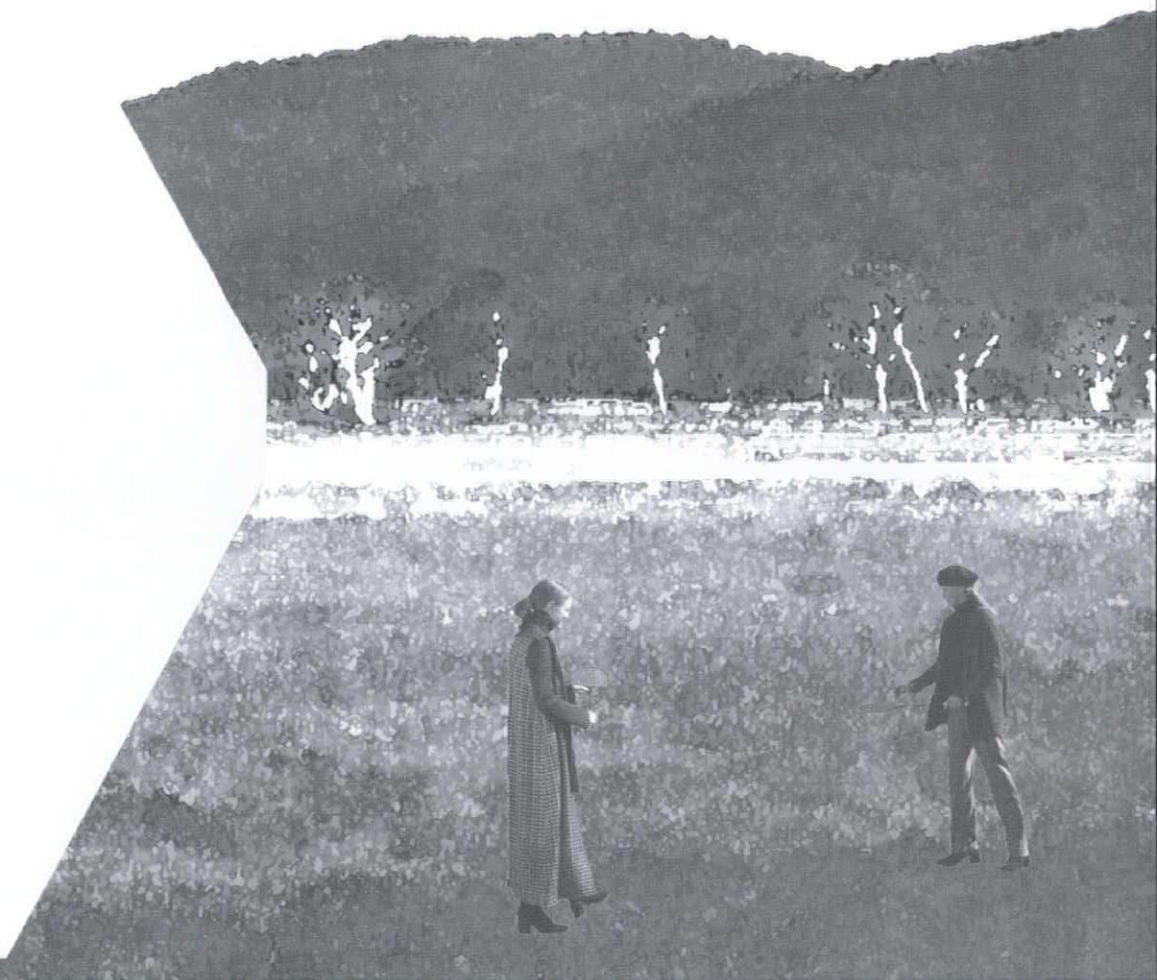
6m×6m×6m closed space. Image plays the private space.

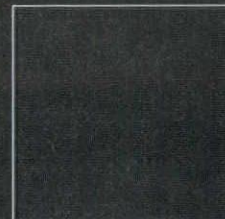
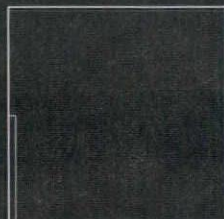
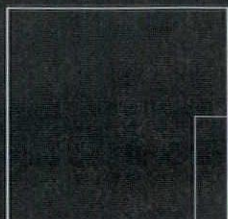
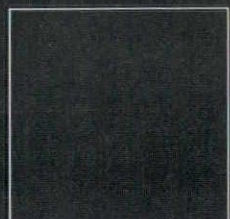


モダンアブストラクトの家／チューブ
Modern Abstract House / The Tube 1999



SD9906

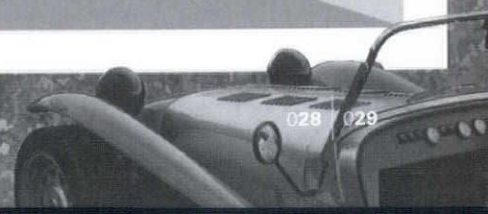
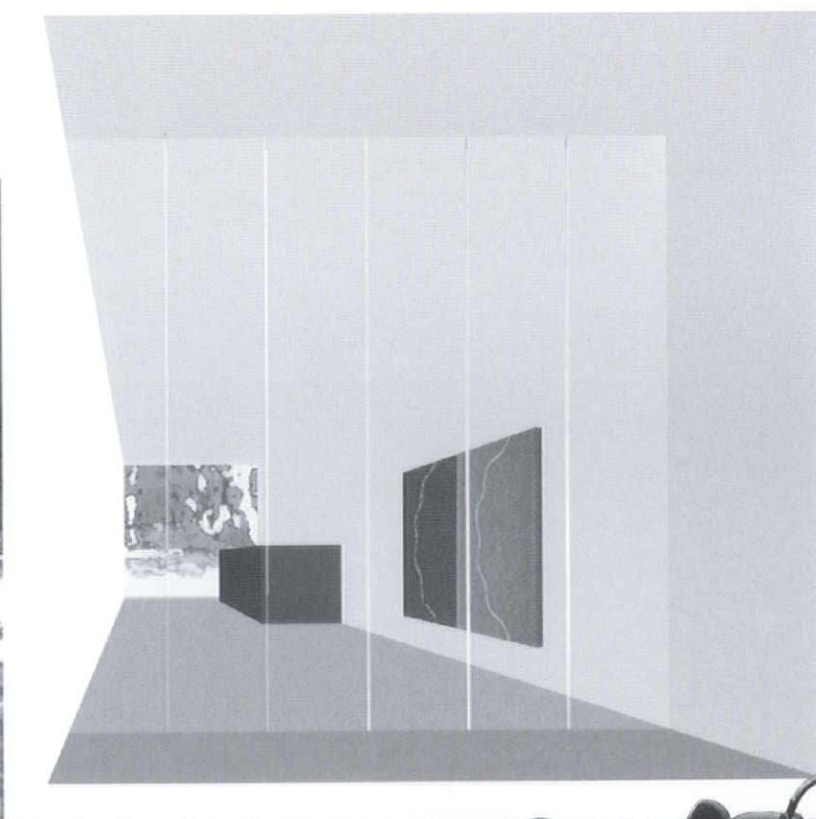
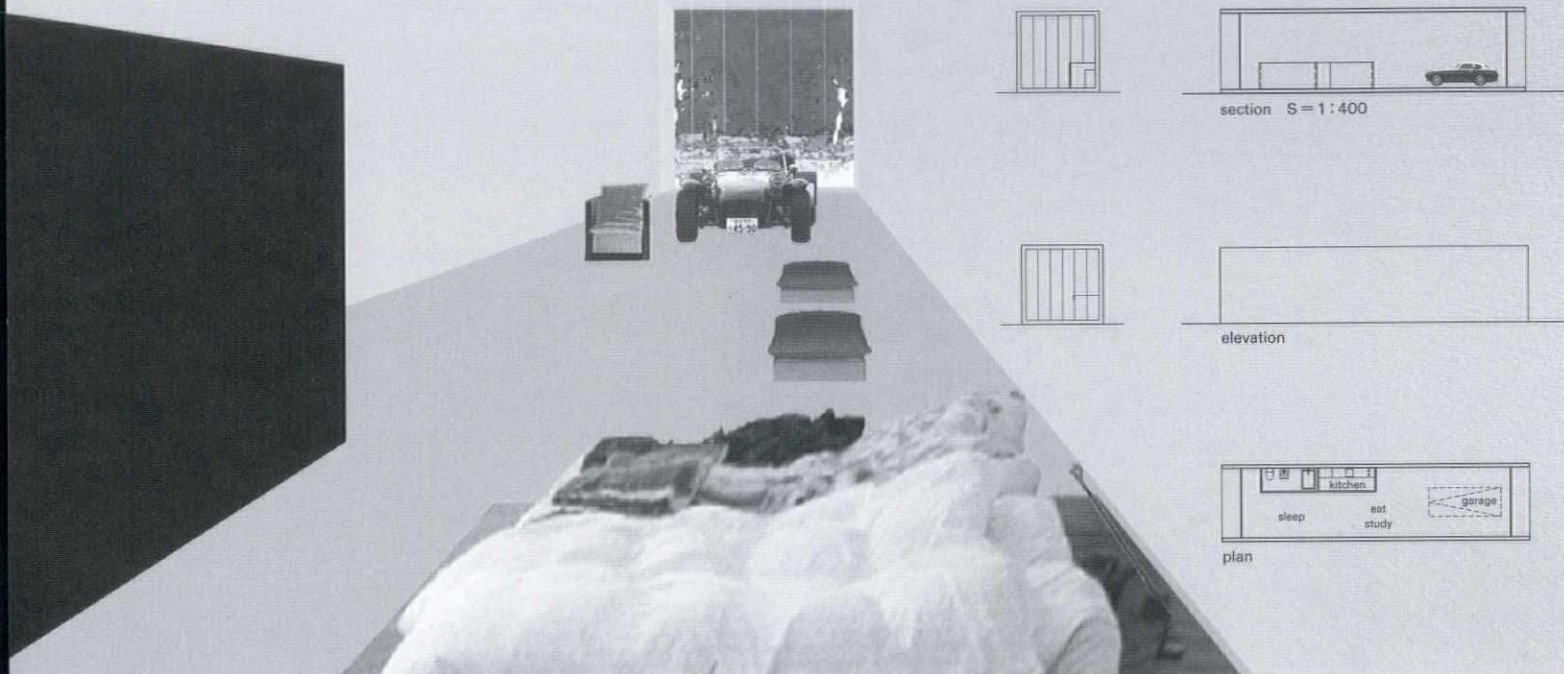


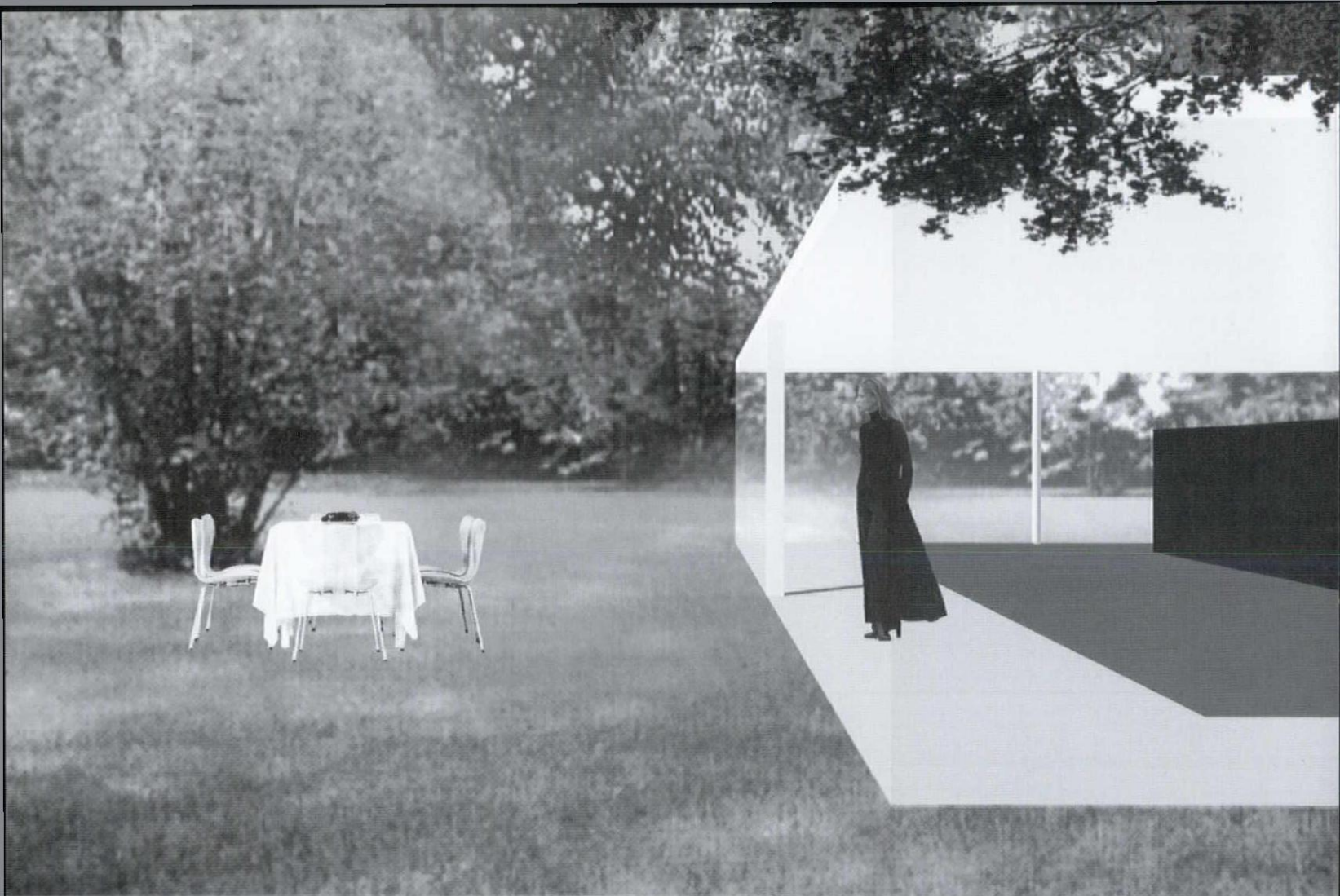


elevation S=1:200

4m×4m×16mのボックスカルバートである。物質が空間と時間を通過する。

4m×4m×16m box culvert. Materials pass through space and time.



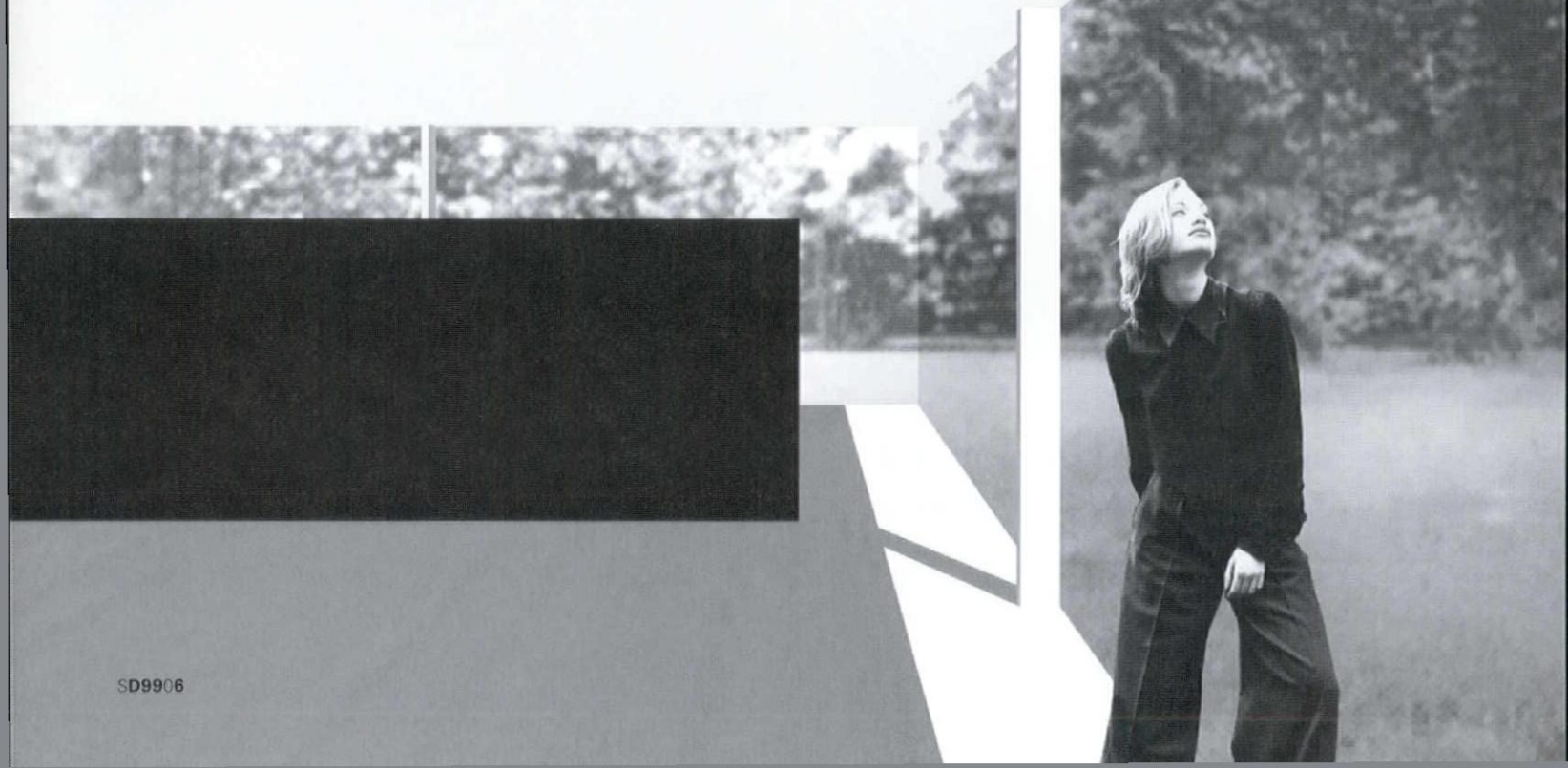


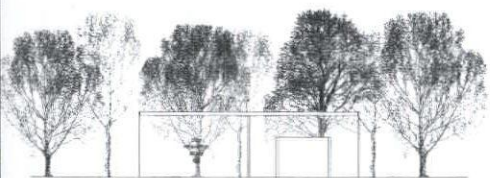
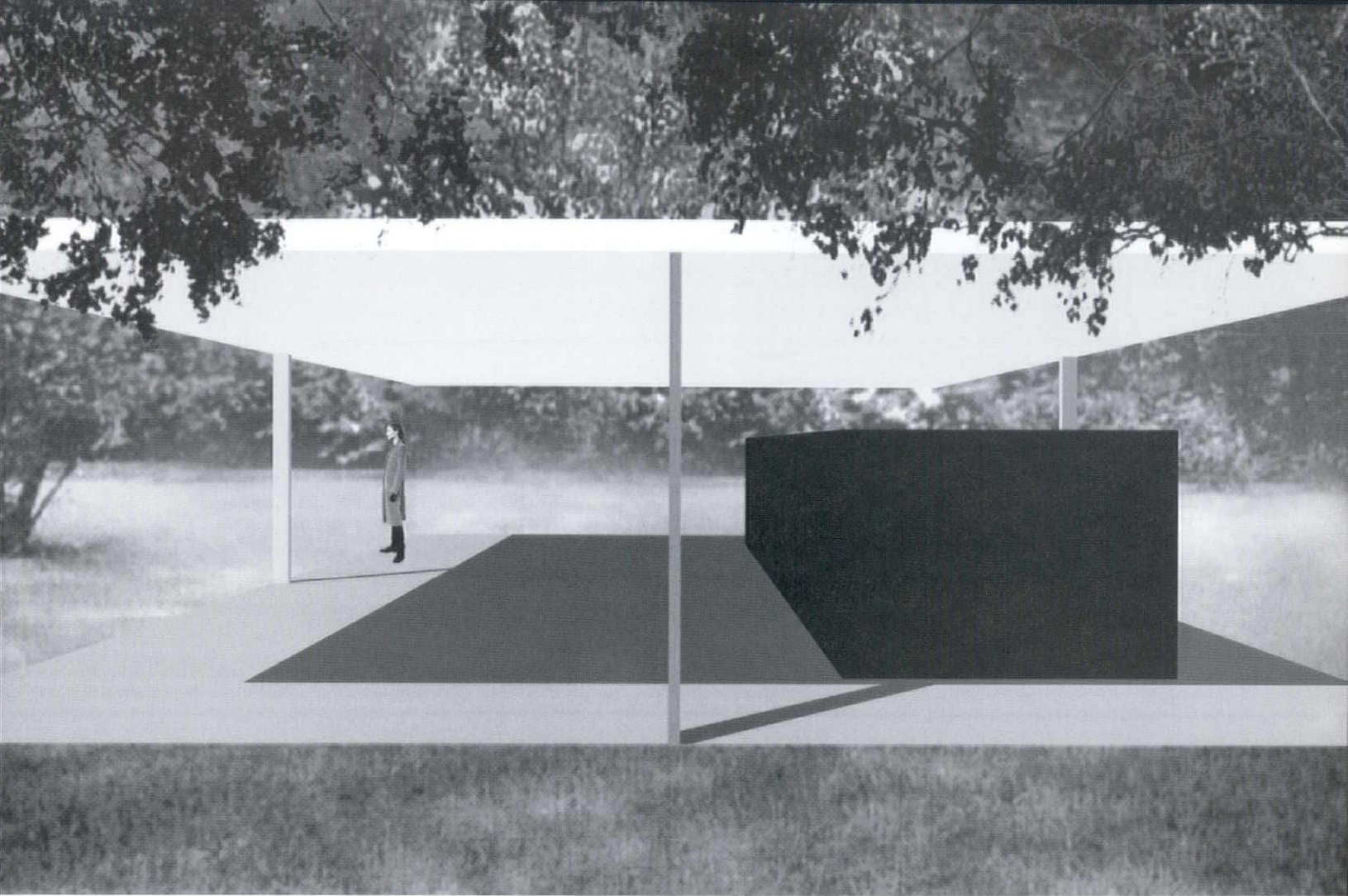
モダンアブストラクトの家／ガラス

Modern Abstract House / The Glass 1999

8m×8m×2.5mのガラスの空間である。ただ空気をプロテクトし、自然と人間を繋ぎ合わせる。

8m×8m×2.5m glass space. It just protects the air and connects nature and human.





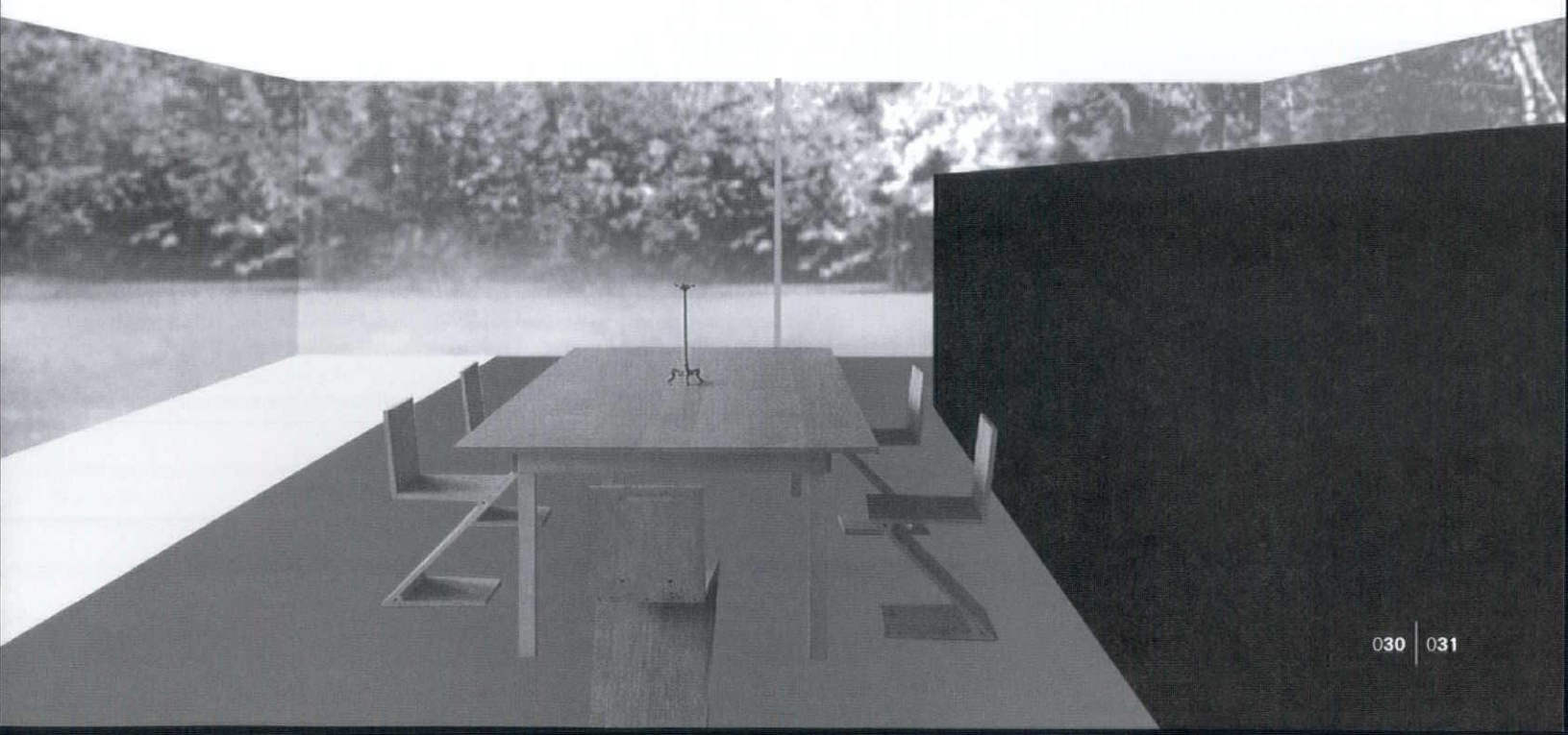
section S = 1:300



elevation

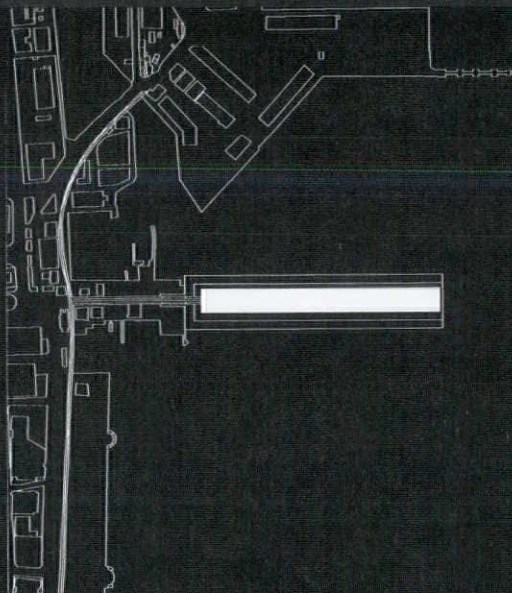


plan



横浜港国際客船ターミナル国際建築設計競技案

Yokohama International Port Terminal International Design Competition 1991



「庭港」「恒久性」「変容する景観」「交通」の4つのコンセプトを基に計画された。45m×450mの屋上庭園は送迎デッキを兼ねており、旅の風景の中で市民の新たな発見の場所となる。「恒久性」は幾何学と透明性を示しており、滞りなく流れる人やものやイベントを外部に提示し続ける中立な存在としてある。ガラスの持つ透明性と反射性が内部と外部の交錯した視線をまとめ、「変容する景観」をつくり出す。相互の関係のみがリアリティを持ち、人やもの、建築は関係性のなかに溶解する。物事の関係のひとつとして「交通」がある。様々な風景の間での交流・交換・交信、それらが都市を発生させてきたように、港という施設が存在を主張するのではなく、行き交う雑多な流れそのものの、ある



plan level +10.00

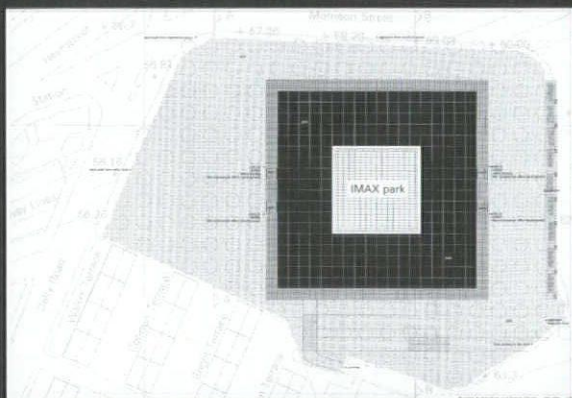
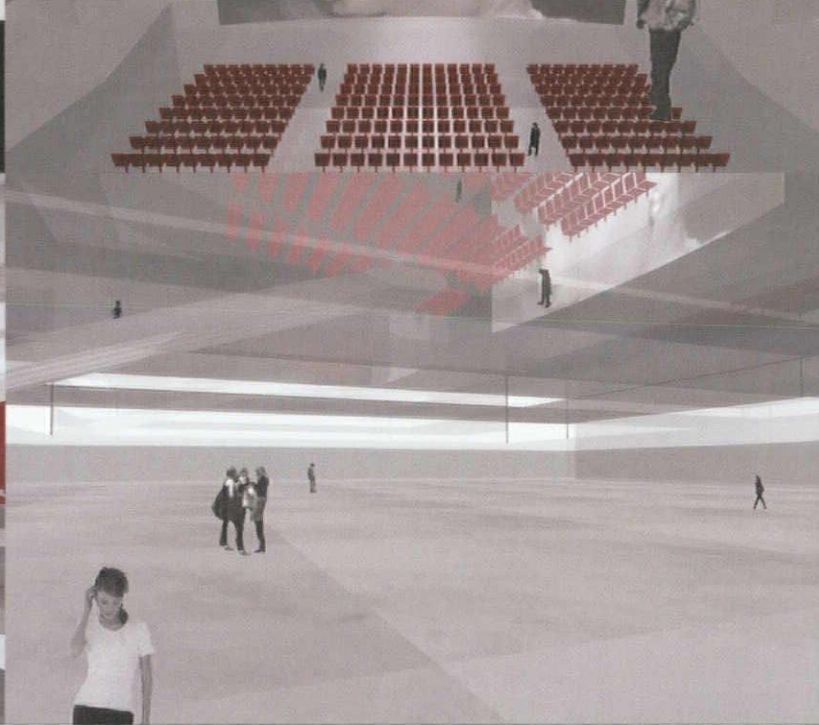


plan level -3.00



いは流れの結接点が「庭」として形成される。明快に整理された交通空間はそれ自体の存在を消失させてゆく。機能性、快適性、経済性そして創造性と様々な配慮を統合する契機として幾何学的に整理された形態を選択した。基本的な構成は、地下1階に駐車場、1階に交通広場として車両関係をまとめた。2階は、基部側に船客のための、海側に市民のための機能を中央の広場から振り分けている。クルーズデッキはこの2階からアクセスする設計となっている。屋上は庭園として開放され、海とつながる景観と、みなと横浜を望む風景を提供する。

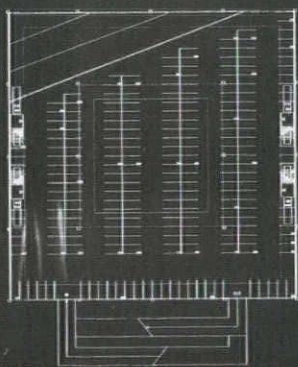




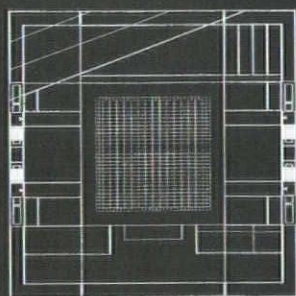
site plan S=1:3000

建築デザインセンターを中心としたオフィスとIMAXシアターからなる複合施設である。敷地は、エジンバラ市の保存地区である古い街並みと、金融・オフィス街との境界上に位置する。緑の公園と透明なプレート、地上を解放すること、光を現象させること、敷地を都市の広場として特徴づけることを提案している。敷地を樹々で埋め、 $80\text{m} \times 80\text{m} \times 32\text{m}$ の立方体の空間が地中に与えられ、建築の存在が消失する。中央の7層吹抜けの空間に、 $32\text{m} \times 32\text{m} \times 20\text{m}$ のガラスの箱がIMAXシアターとして浮いている。IMAXシアターとオフィスの光が、情報の交錯との反響を、また人の流れと出来事の連鎖を発信する。

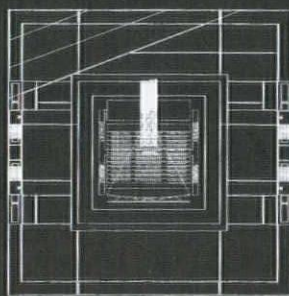
This building have architecture and design center, office and IMAX theater. It's not on the ground but part of the ground. Architecture does not exist. There is green forest, city park and transparent plate on the ground. Square and transparent plate is surrounded by the forest. It offers the field for some kind of events. $80\text{m} \times 80\text{m} \times 32\text{m}$ box under the ground is microcity with fully sunshine. Transparent theater floats in center of the box. Light of IMAX theater and office make the place for communication in the community. This is not an architecture, but a park.



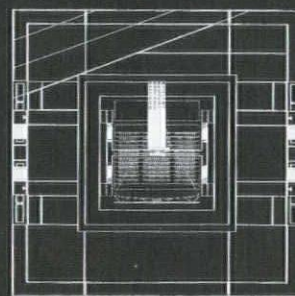
B8 parking floor plan -32.00m S=1:2000



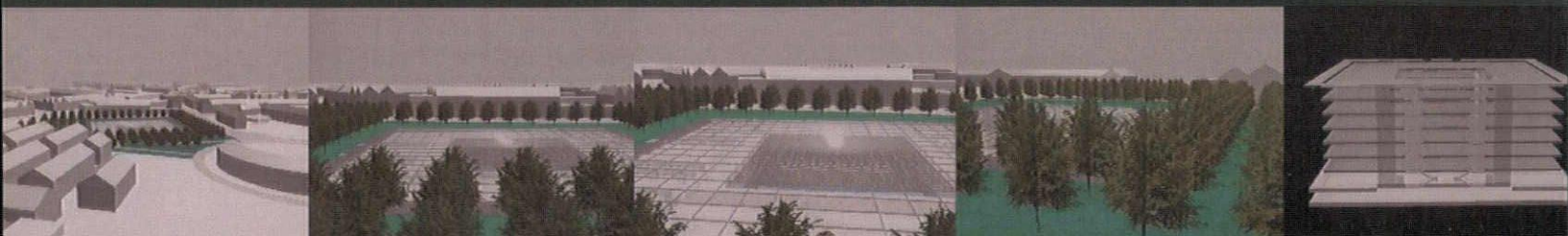
B7 floor plan level -28.00m

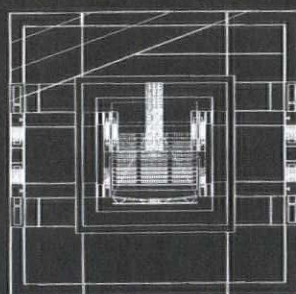
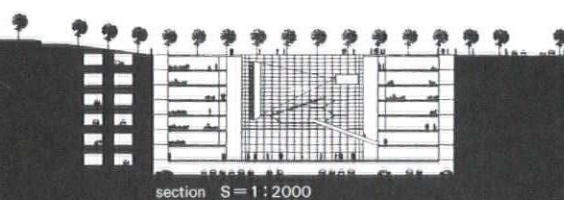
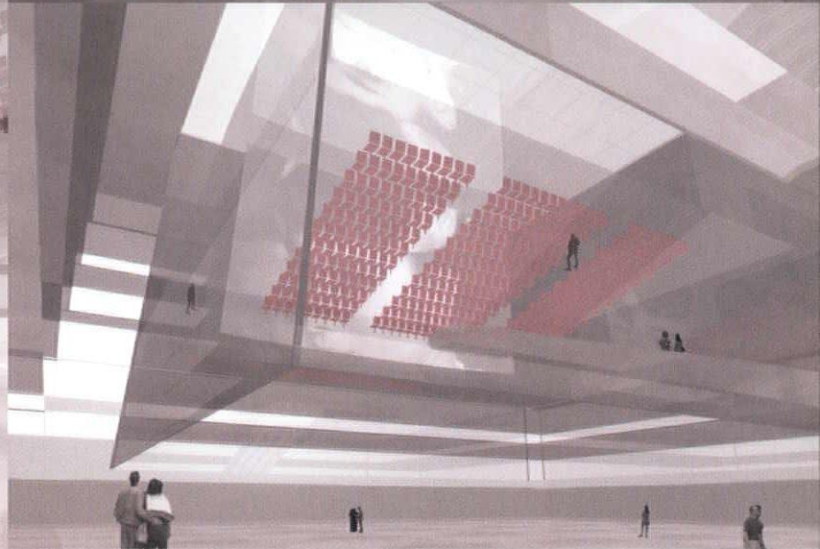
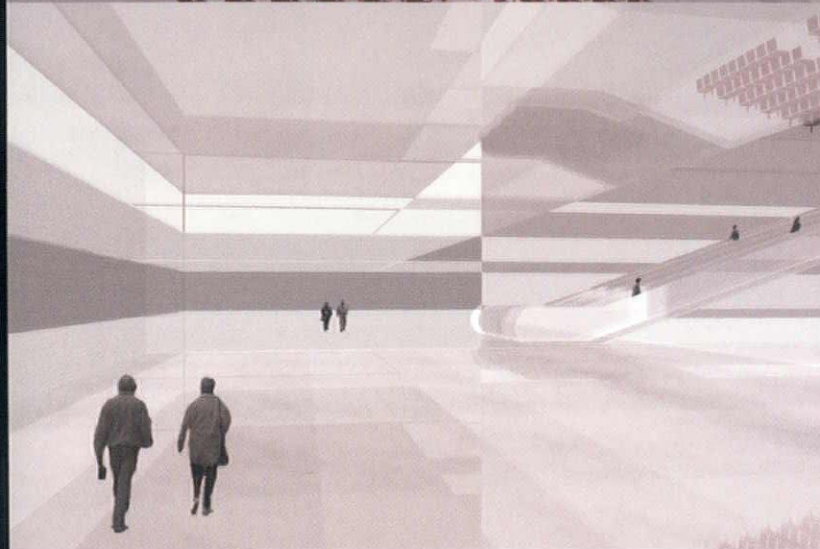
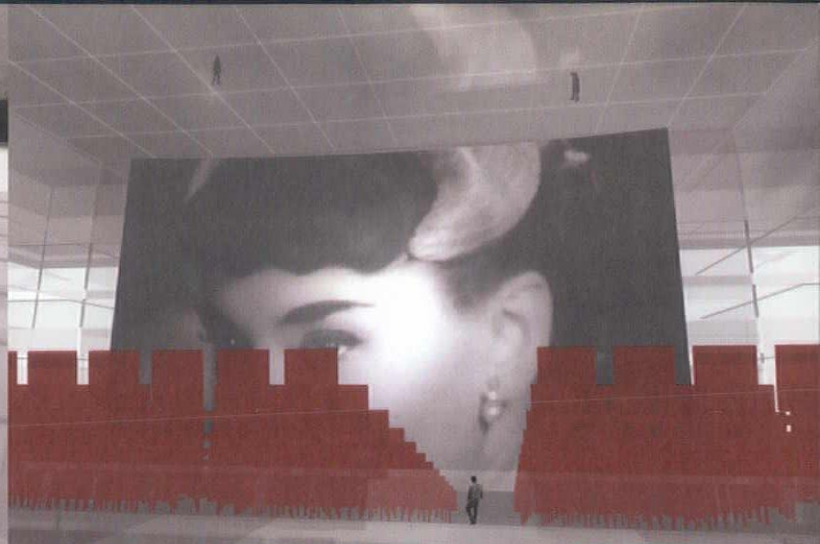
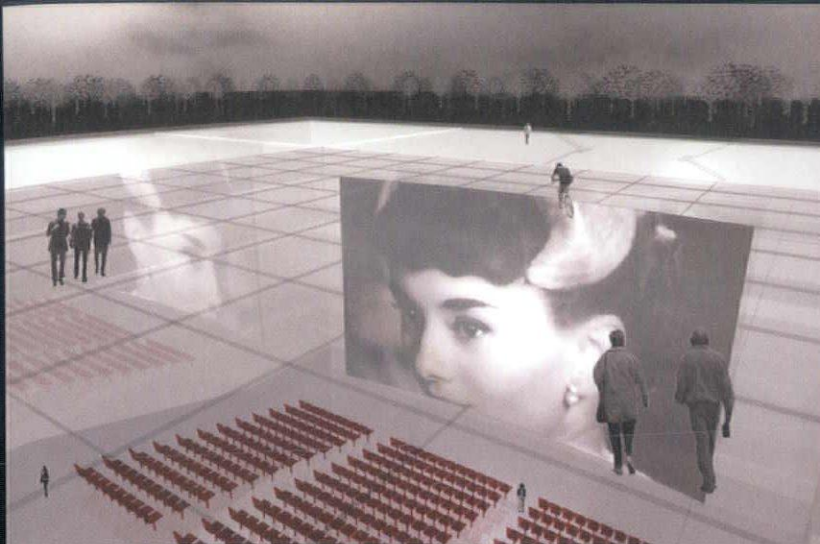


B6 floor plan level -24.00m

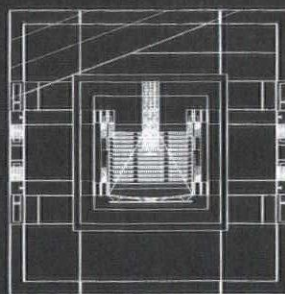


B5 floor plan level -20.00m

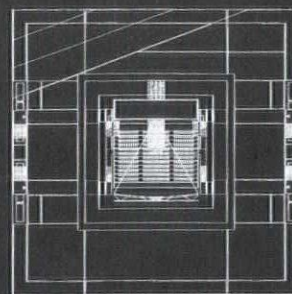




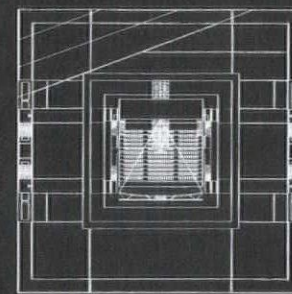
B4 floor plan level -16.00m



B3 floor plan level -12.00m

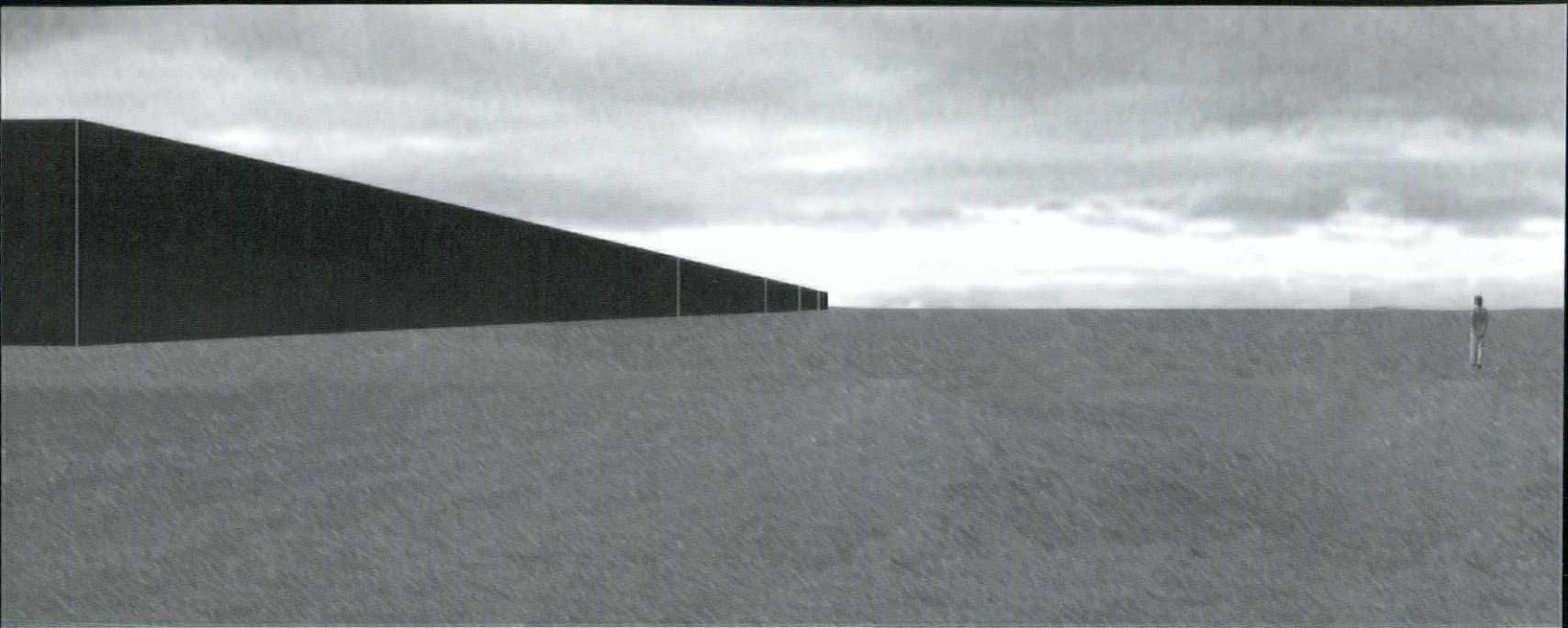


B2 floor plan level -08.00m



B1 floor plan level -04.00m

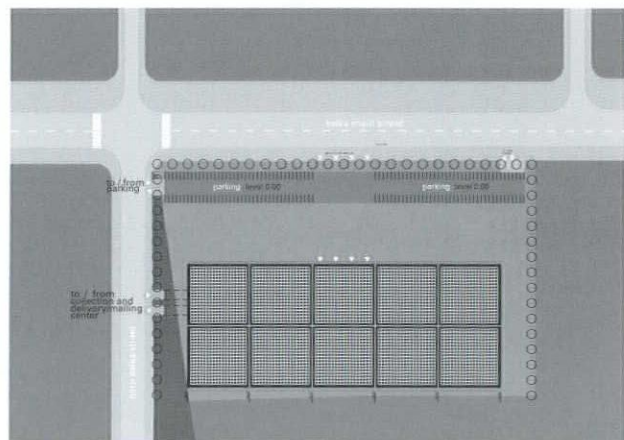




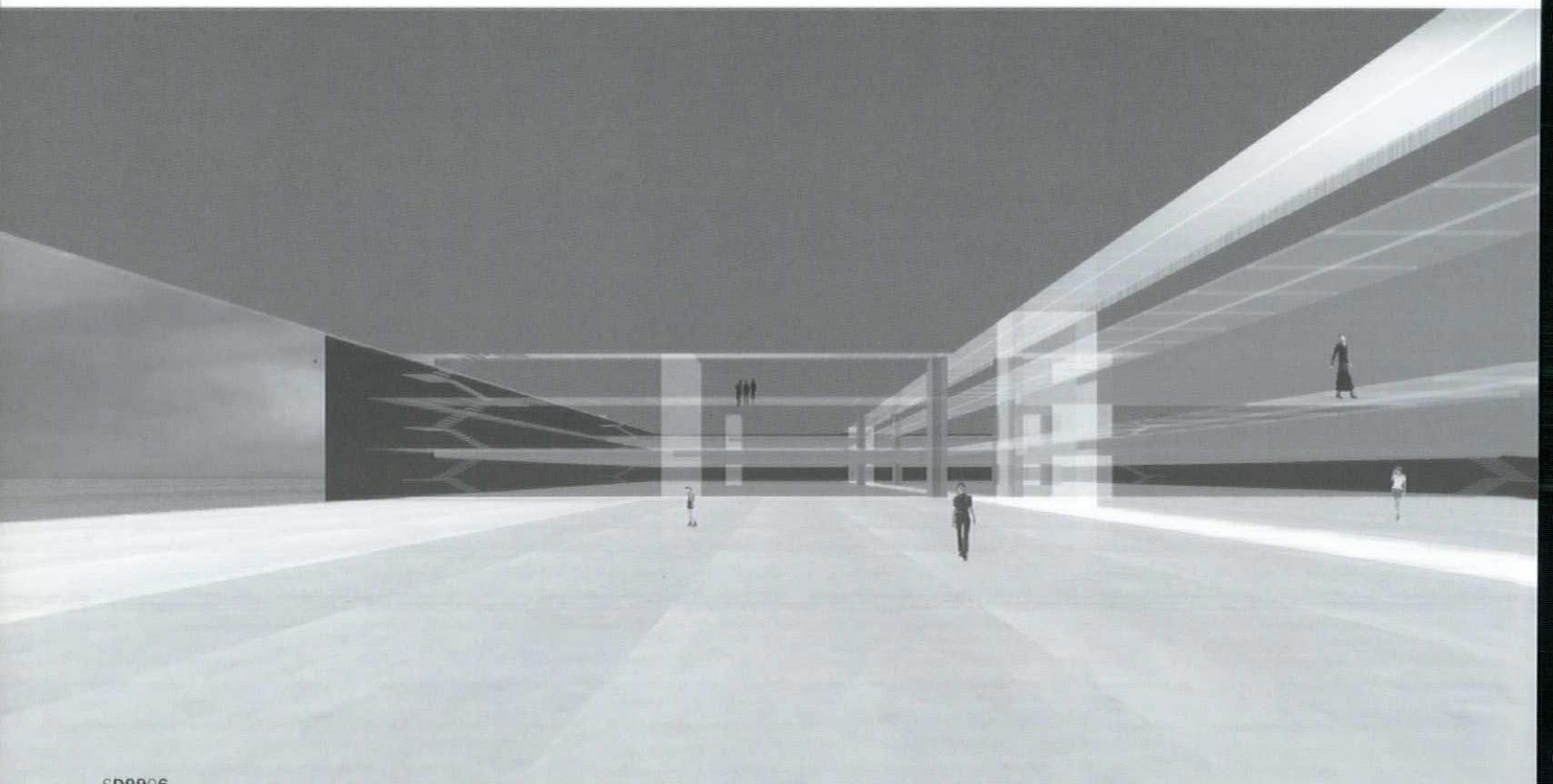
国立国会図書館関西館建築設計競技案

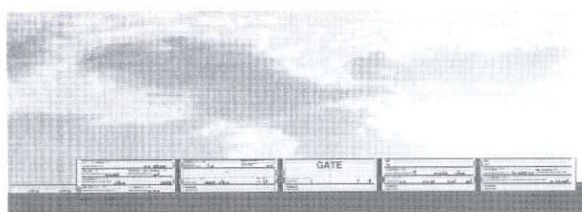
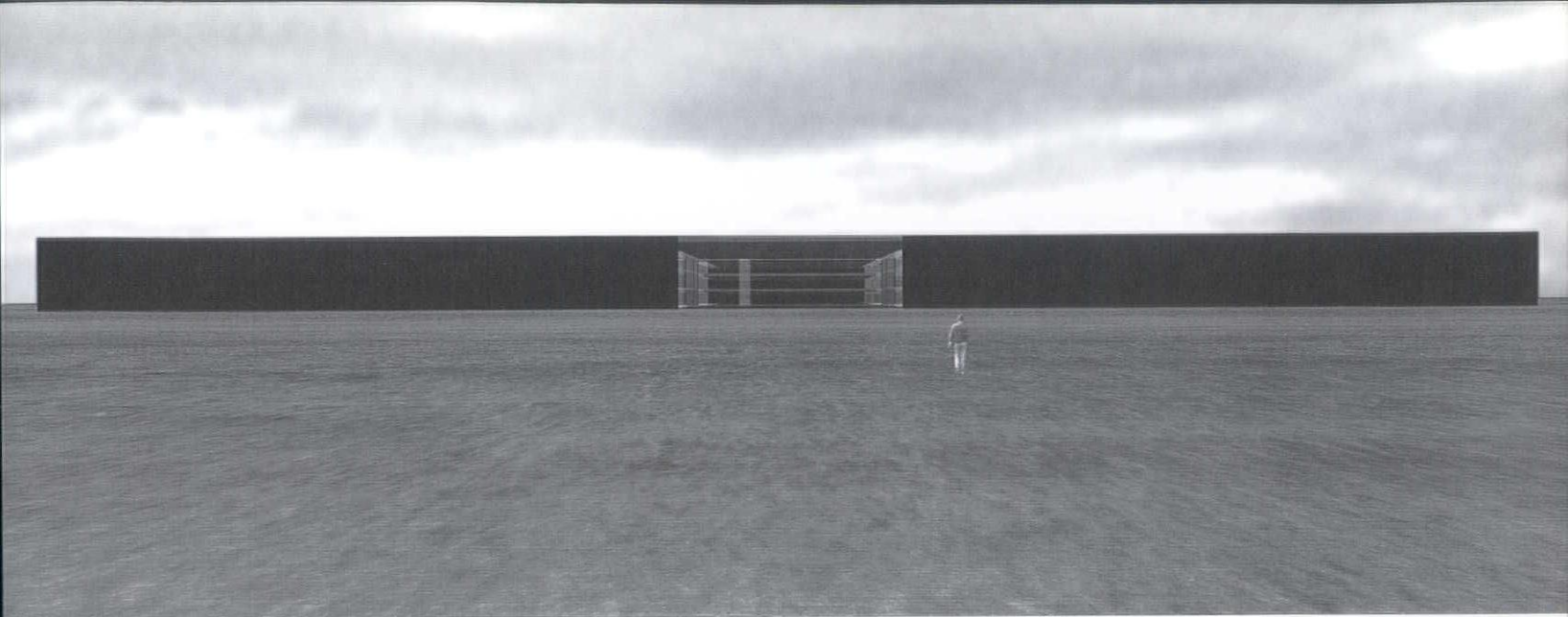
Kansai-kan of National Diet Library Design Competition 1996

この提案は、外周に動線、設備等のコアをフレキシブルに配置可能とした40m×40mの完結したユニットが互いに補完し合うことで機能を合理的に解決し、10個のユニットの集合体が蓄積される膨大な情報量を直接的に表わす。現代的な図書館は、ソリッドで密な集積装置、電子回路と同様の知のモニュメントであり、環境に刻む意志のプレートである。メインゲートを開くことでエントランスホールは環境と融合し、都市に開放される。

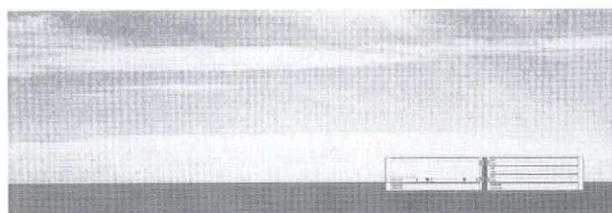


site plan S=1:5000

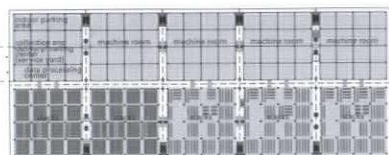




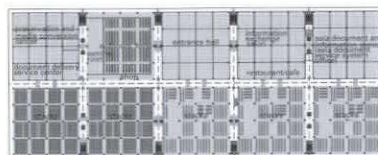
section S=1:3000



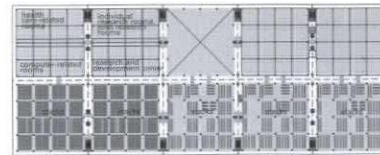
section



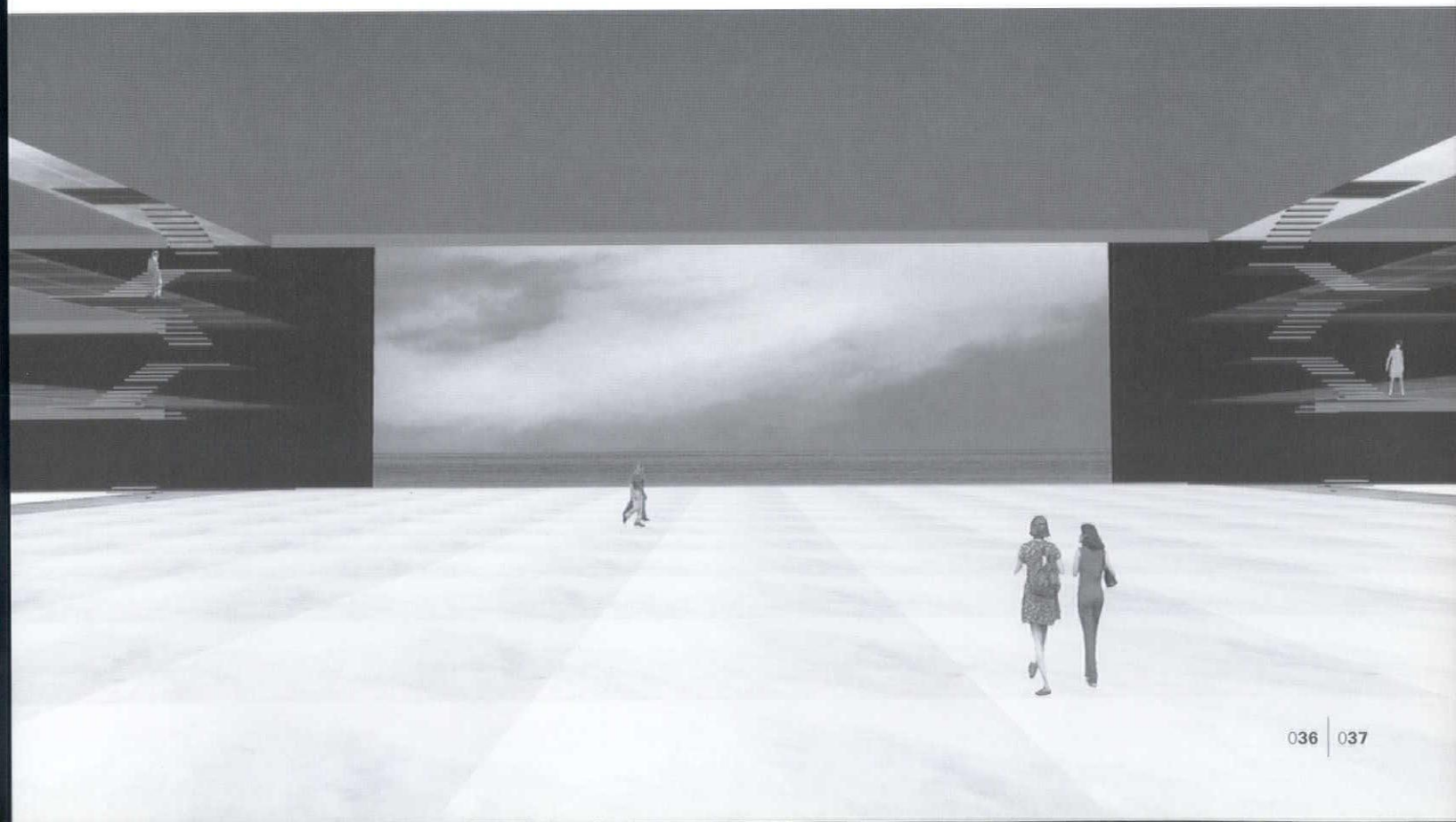
basement floor plan level -3.33m S=1:4000

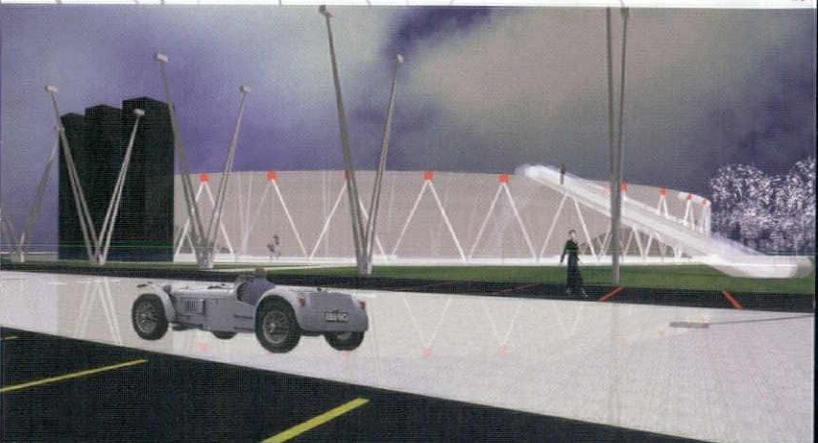
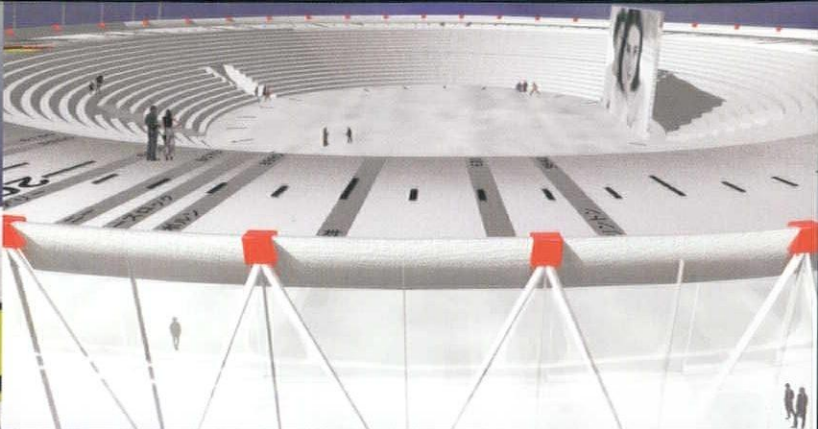


1st floor plan level +0.00m

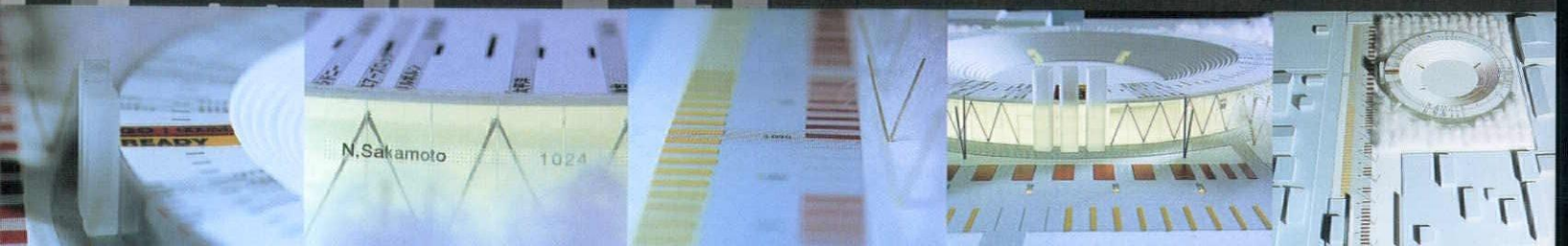
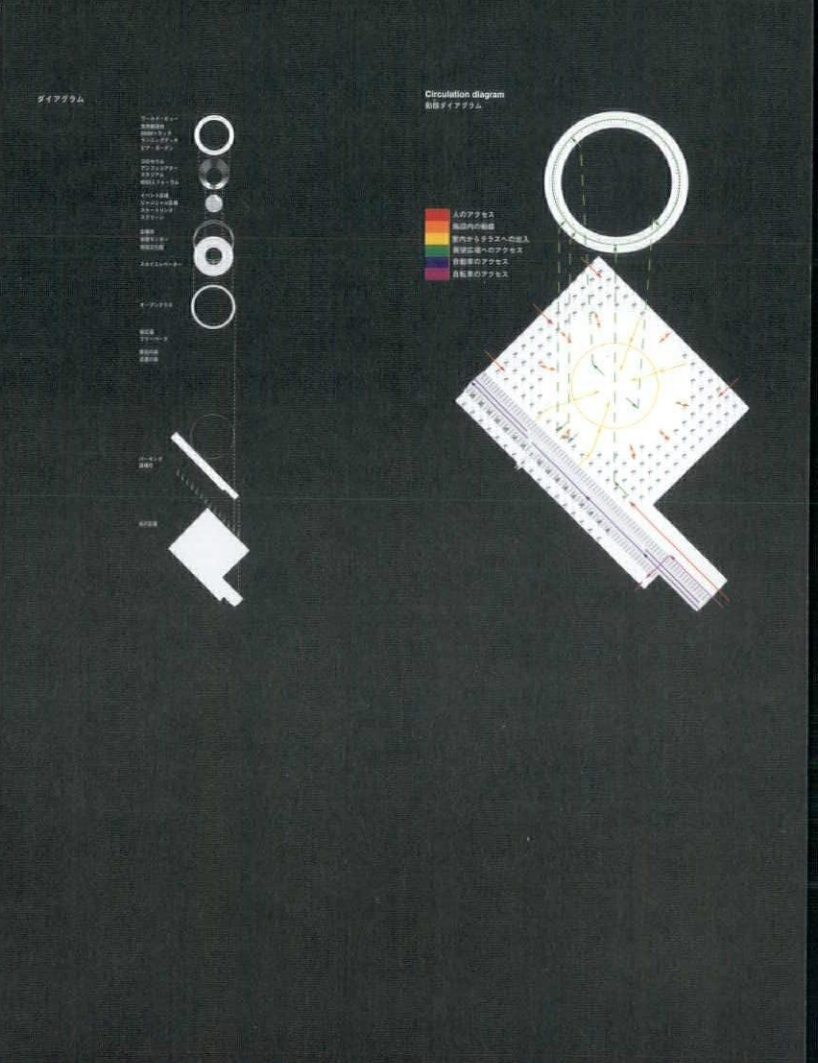
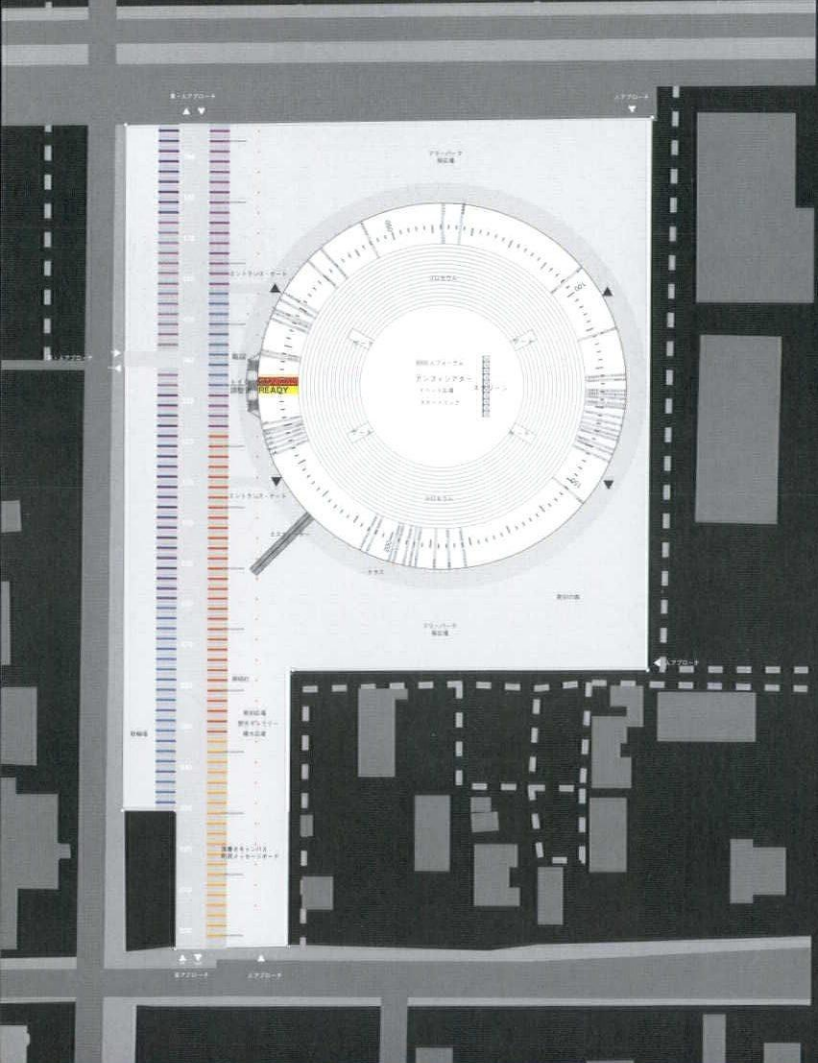


3rd floor plan level +6.66m





Yamaguchi Town Centre / BIG EYE / 平田町タウンセンター・ビッグ・アイ / 8000人フォーラム

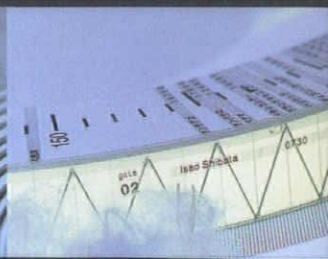
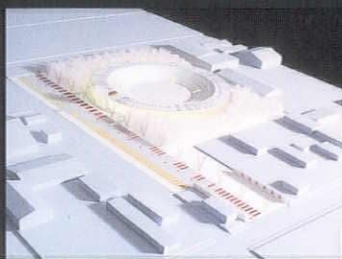
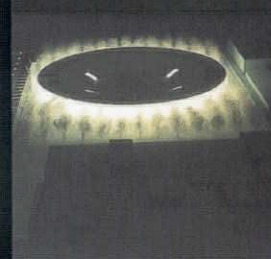
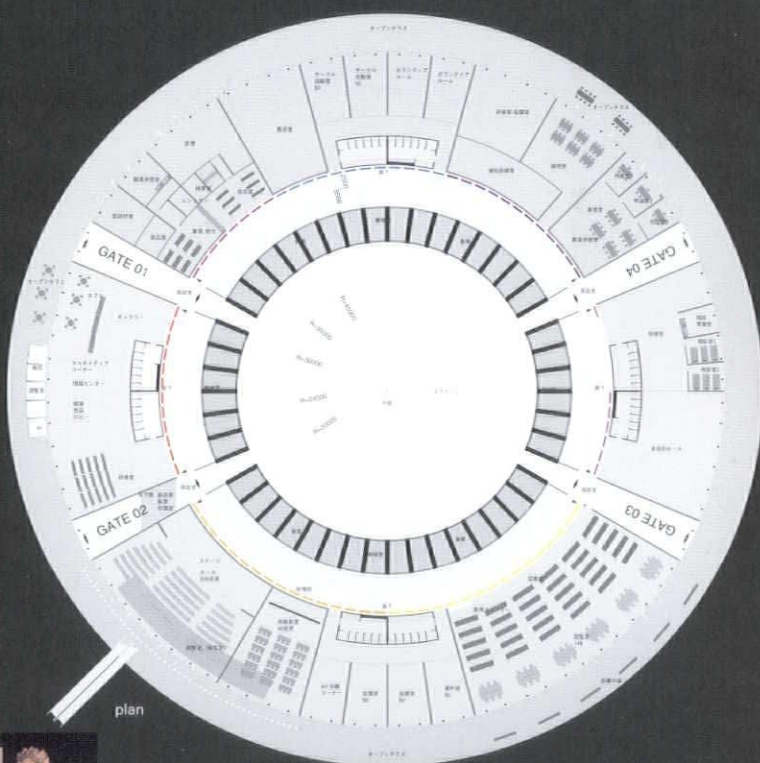




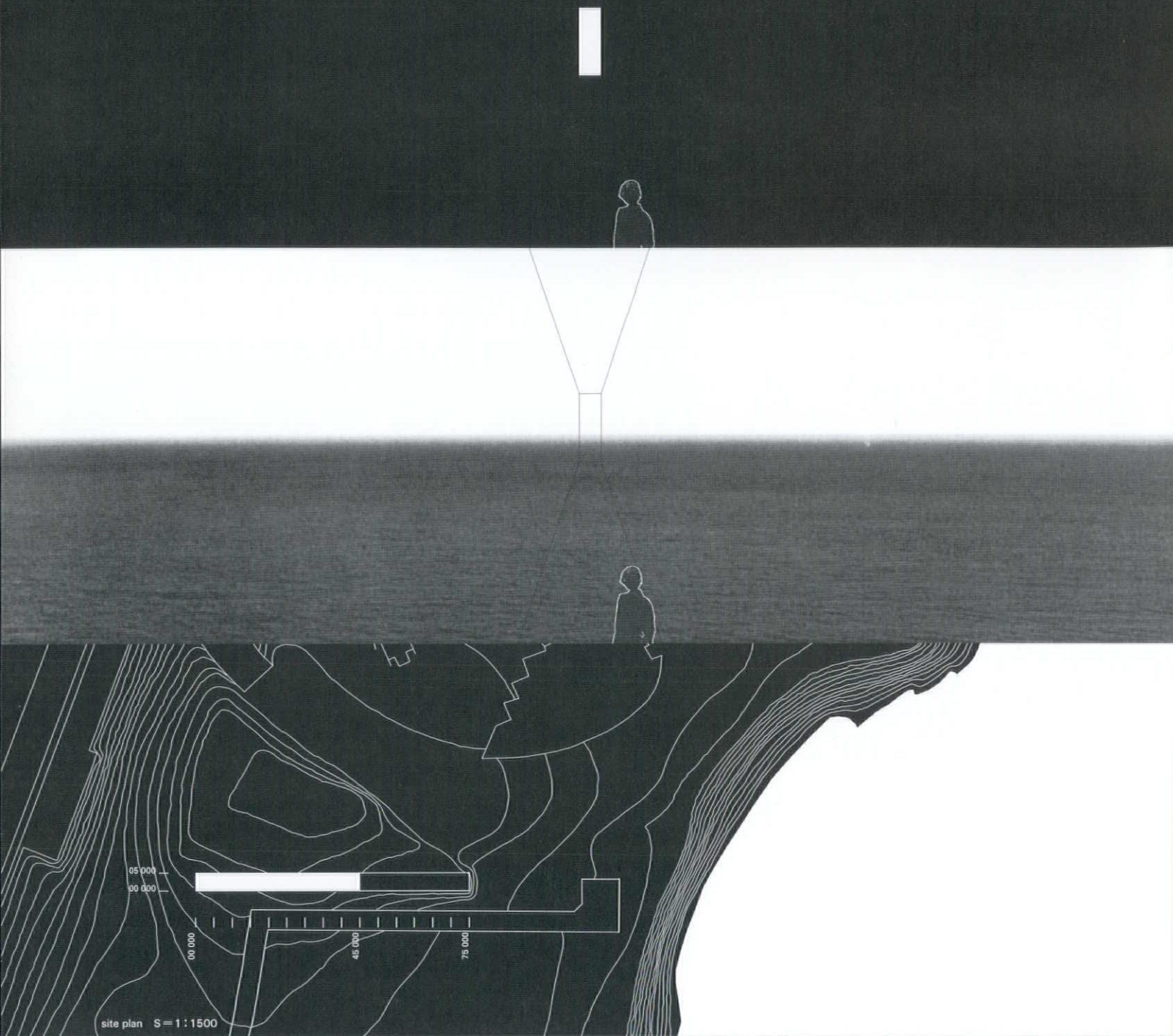
平田町タウンセンター施設整備 公開設計競技案

Hirata-machi Town Center Design Competition 1996

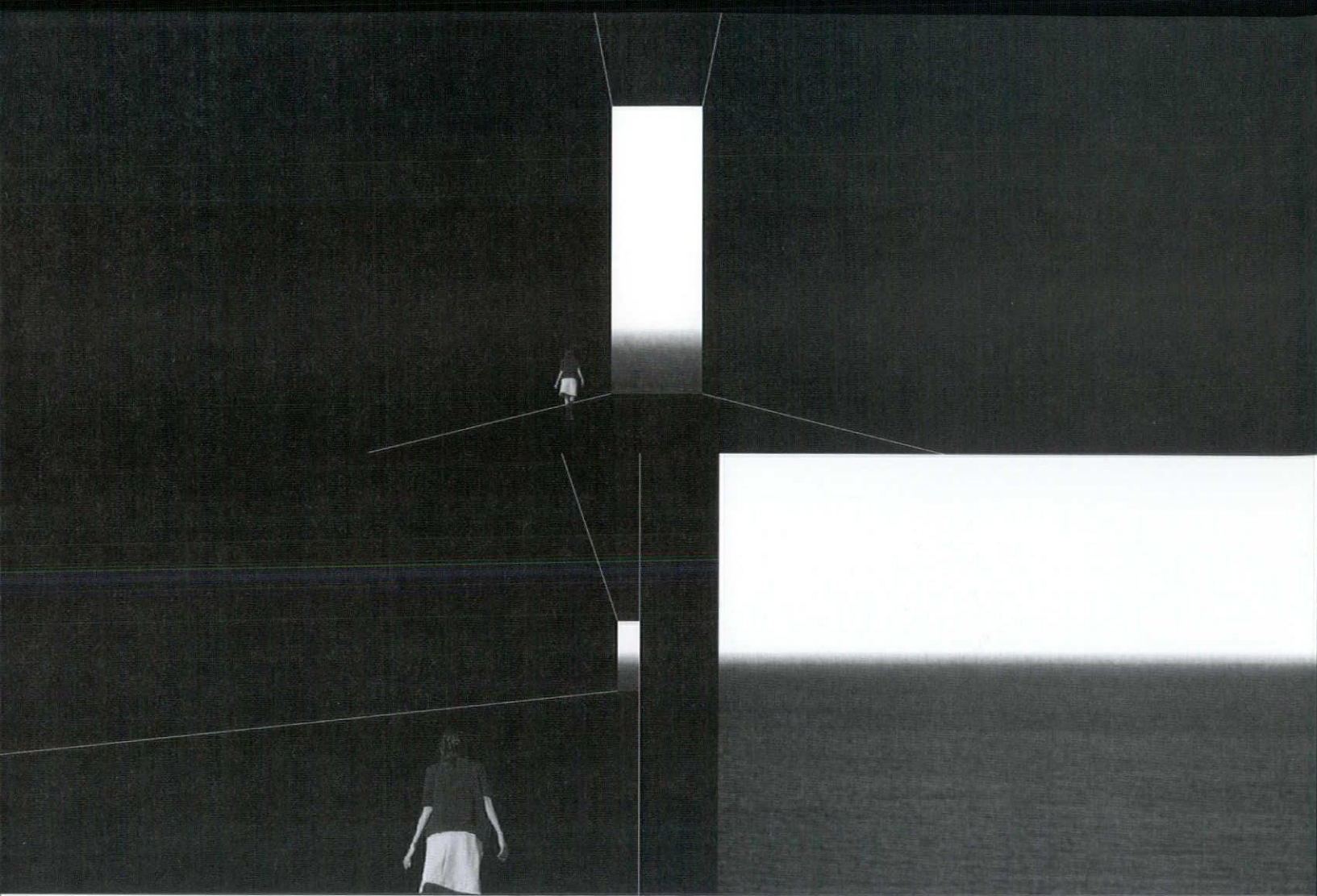
敷地全体は桜の木が均等に配列されるフリーパークとなり、その中央に円環状に諸機能が配置される。この施設の屋上部分と中庭部分はすり鉢状のフォーラムにより連続され、多目的な広場として一般に開放される。この広場は町を象徴し町民の交流の拠点となると同時に、周辺環境を見渡せる展望広場となりさらには世界に向けての視線を開放する。すり鉢状のフォーラムは町の人口にほぼ等しい8000人の収容を可能にし、季節の変化に対応した様々なイベントを行う場所として、町の文化活動の中心となる。敷地の周囲に壁などの境界をつくらなことで、特別なエントランス、または正面を持たないことにより、あらゆる方向から自由に入出りが可能であり、常時一般に開放された公園となる。各施設はすべて一層に収められ高齢者や福祉に対応した施設となる。全体を円環状に配置することにより、すべての施設が各々のテラスを持ち、桜広場と外気に接している。すべての外壁を開閉可能なガラスにすることにより、各室が各々のオープンテラスと連続した使用を可能にする。施設内の動線は桜広場と8000人フォーラムを結ぶエントランスゾーンと内部通路により、また、各室にテラスから自由に入出りすることも可能である。



水俣メモリアルデザインコンペ案
Minamata Memorial Design Competition 1995

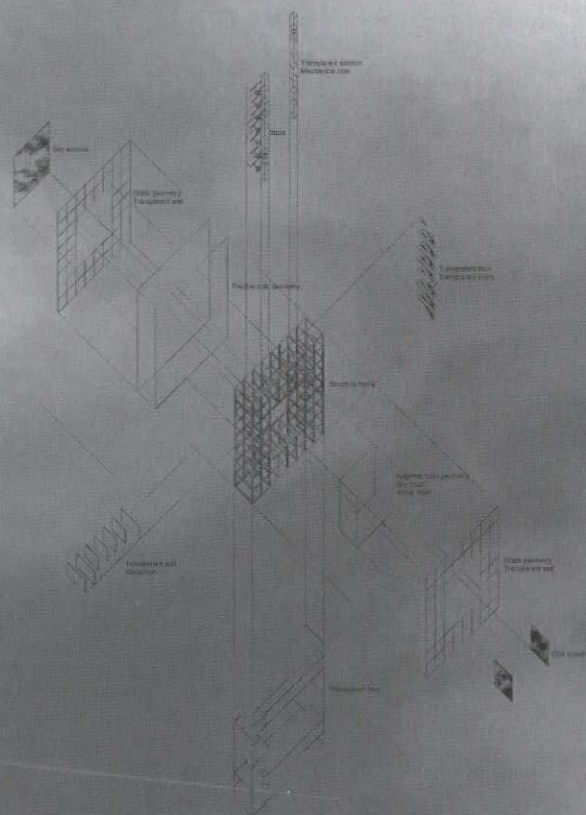
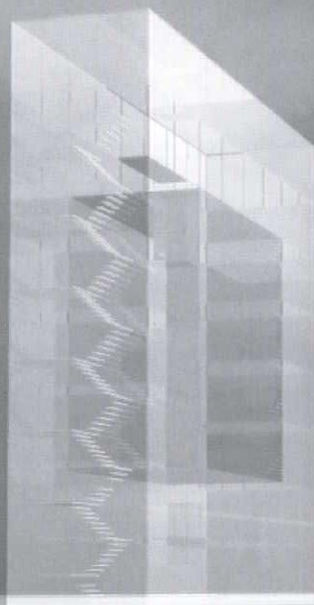
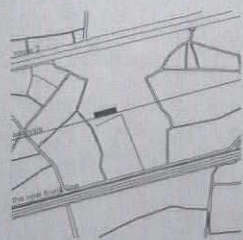
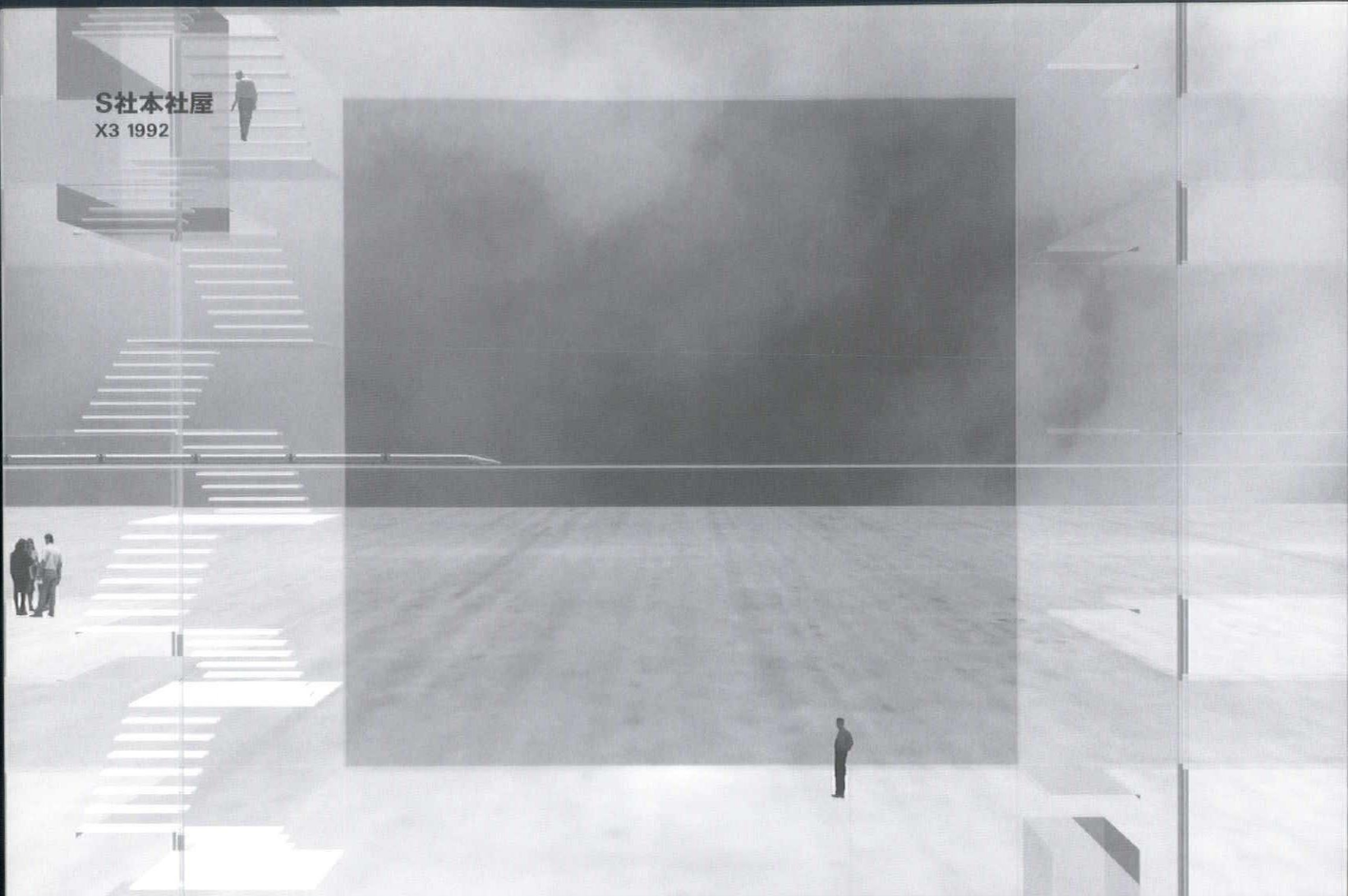


これは、物理的なモニュメントとしてのメモリアルではなく、永遠の存在としての静かな空間である。5m×15m×45m（1：3：9）のボックスカルバートが、水俣の海に向かって開かれる。内部には、木の段状の床面が入れ込まれ、海を望む空間を生む。5m×30mの水盤は、その先端に水俣病犠牲者名簿を収納する。それは清浄な水のうちに海へ捧げられるようにして配され、再生と創造の象徴となる。丘全体は、花のある草原とし、ささやかに変更された自然のうえに抽象化された空間は置かれる。原型としての空間は、各々の人々に引き継がれる水俣の記憶の場所として甦る。



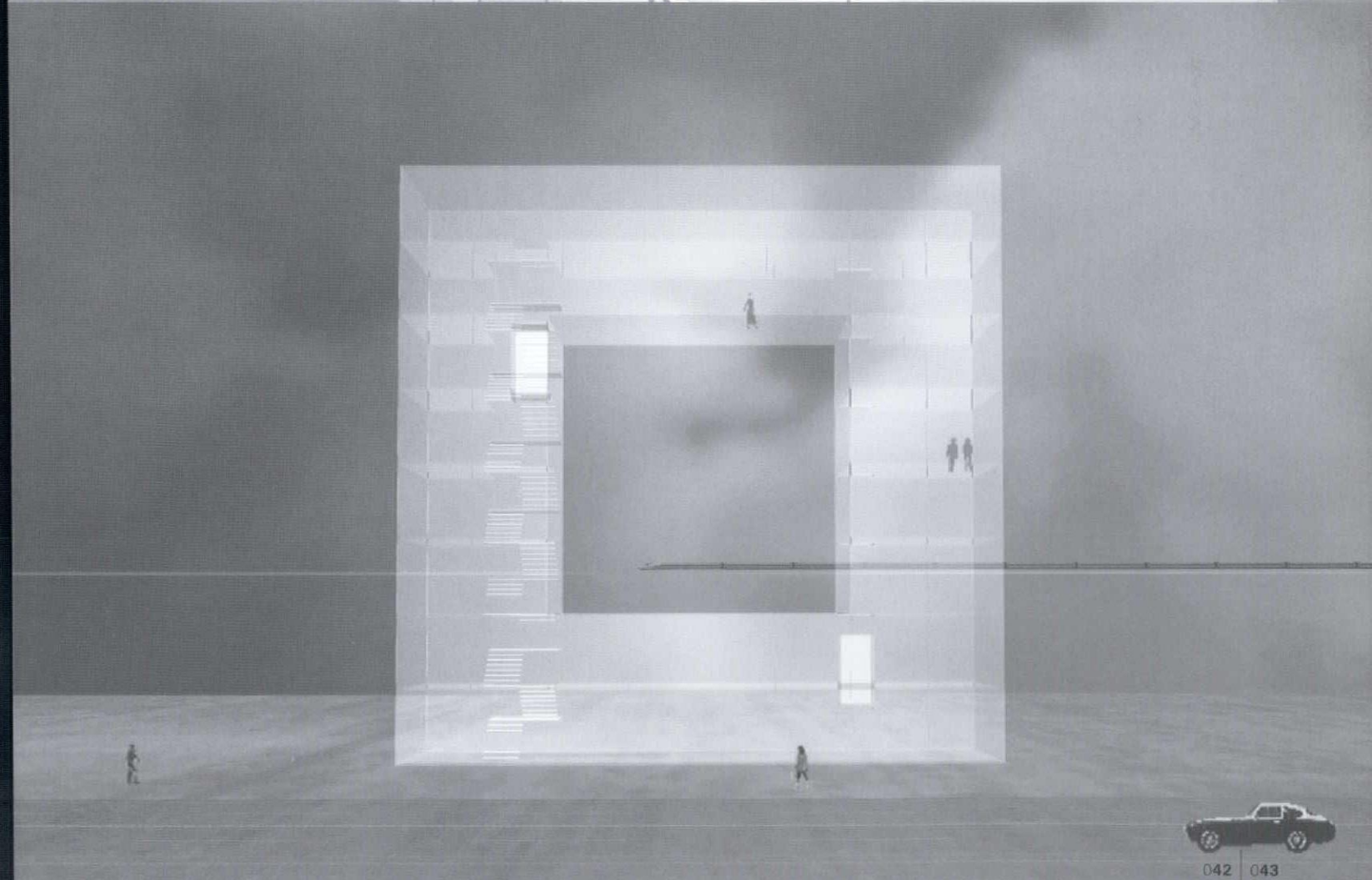
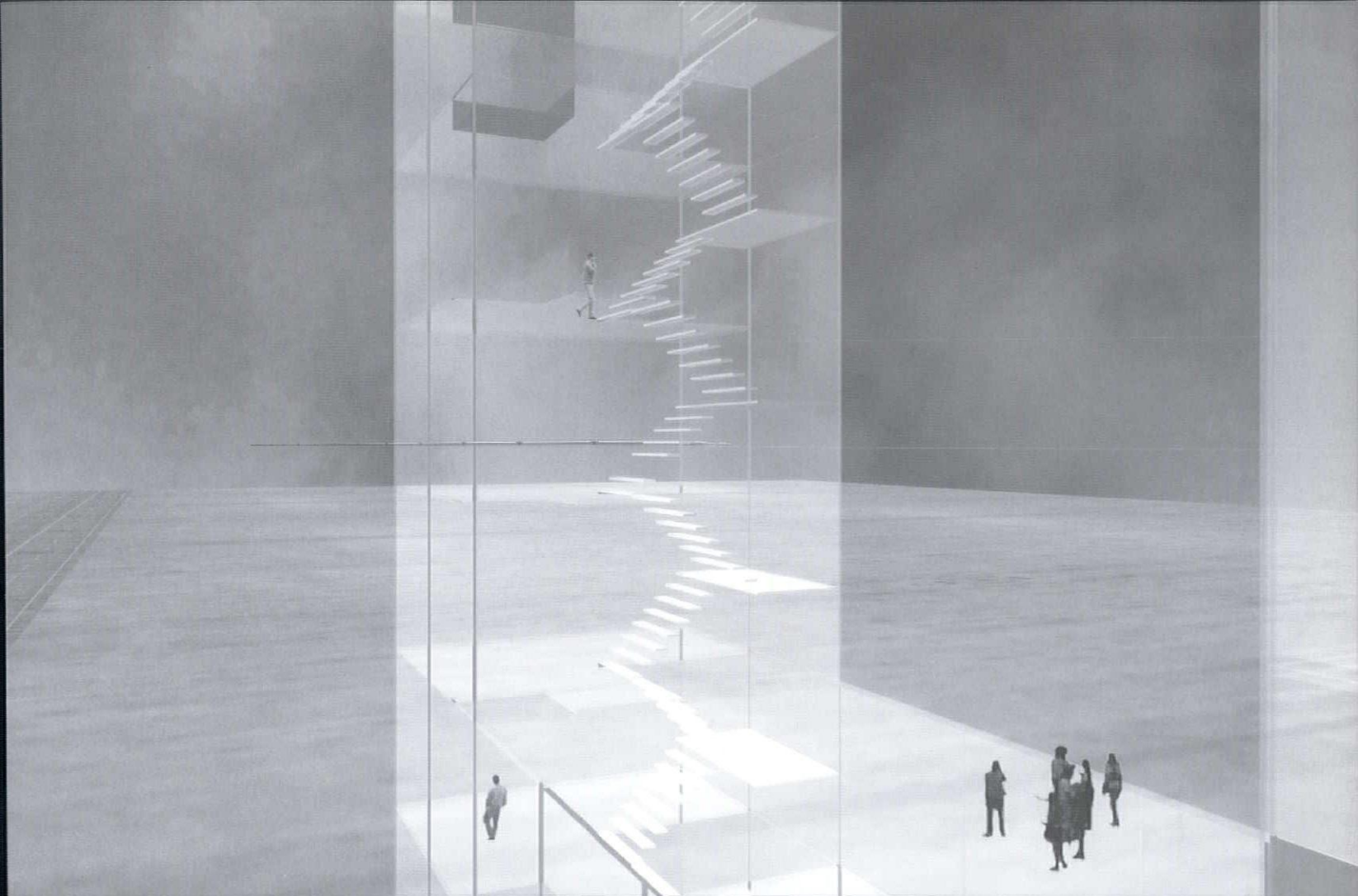
This is not physical monument, but silent space as permanent existence. There is $5\text{m} \times 15\text{m} \times 45\text{m}$ (1:3:9) box culvert looking to the sea. Wood floor having stair form is in the box, and makes space to see the sea. $5\text{m} \times 30\text{m}$ water plate includes the name list of Minamata disease victims. It's in clear water and devoted to the sea. The whole hill is green field with flowers. Abstract space is placed on natural site with little artificiality. This primitive space becomes the place of the memory about Minamata.

S社本社屋
X3 1992

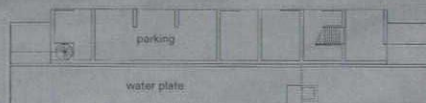
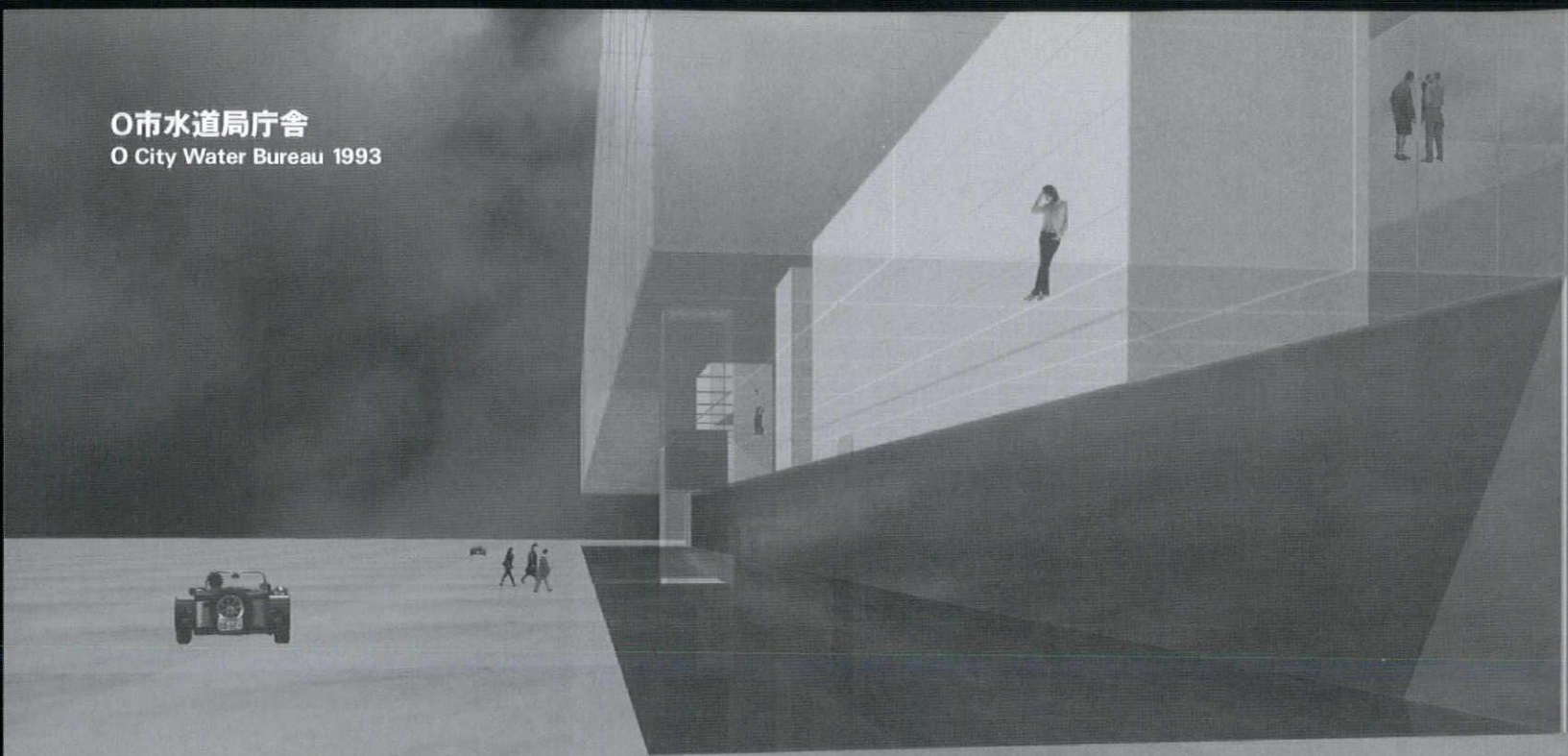


これは、北側に国道2号、南側に山陽新幹線が走る2平行線に挟まれた敷地に建つS社本社ビルの計画である。空間は3.6mの3次元グリッドで構成されている。28.8m×28.8mのソリッドな正方形の中に、14.4m×14.4mのヴォイドな正方形が存在し、空と水が断面として切り取られる。

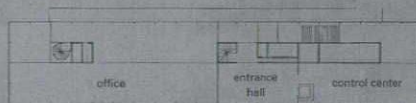




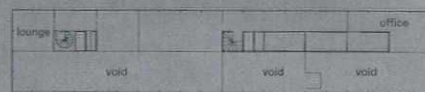
O市水道局庁舎
O City Water Bureau 1993



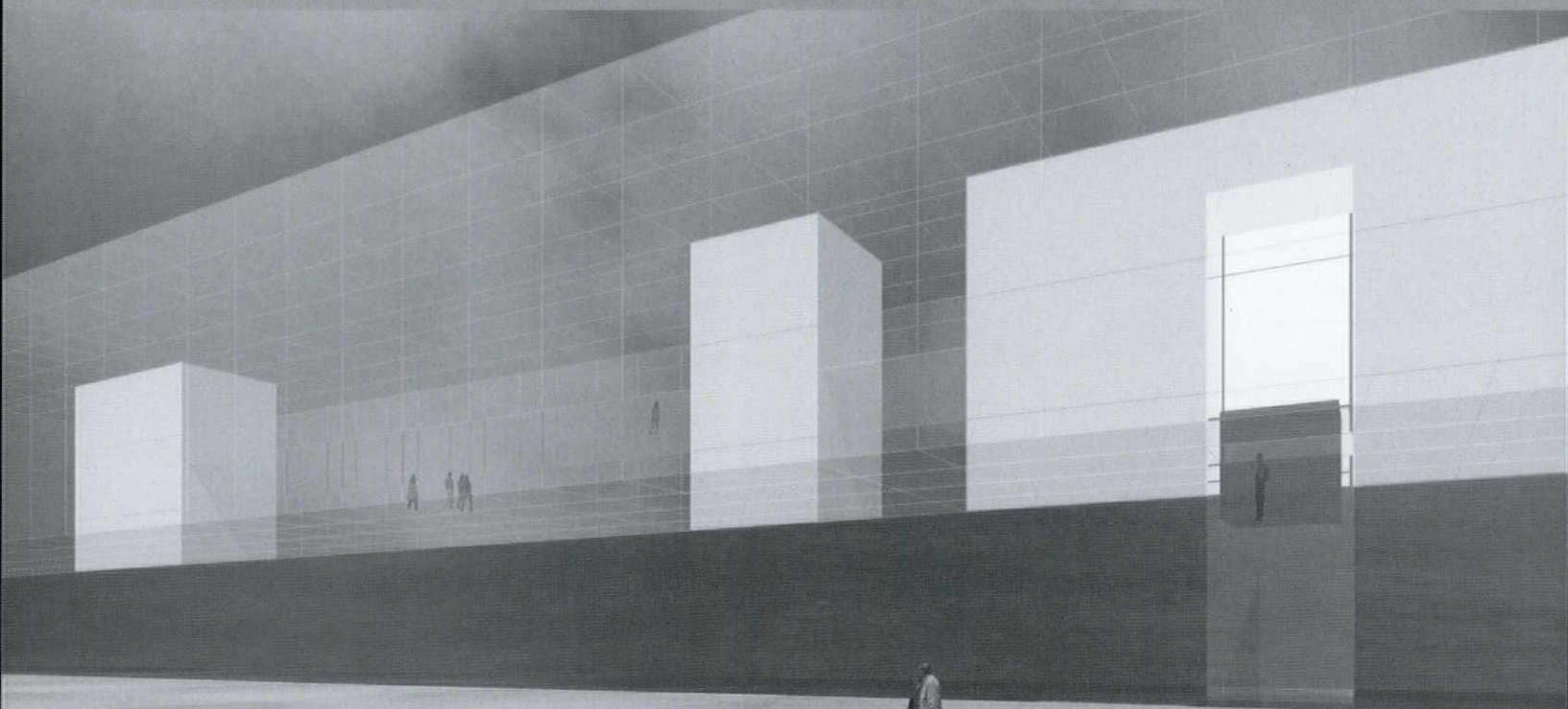
1st floor plan S = 1 : 1000



2nd floor plan



3rd floor plan



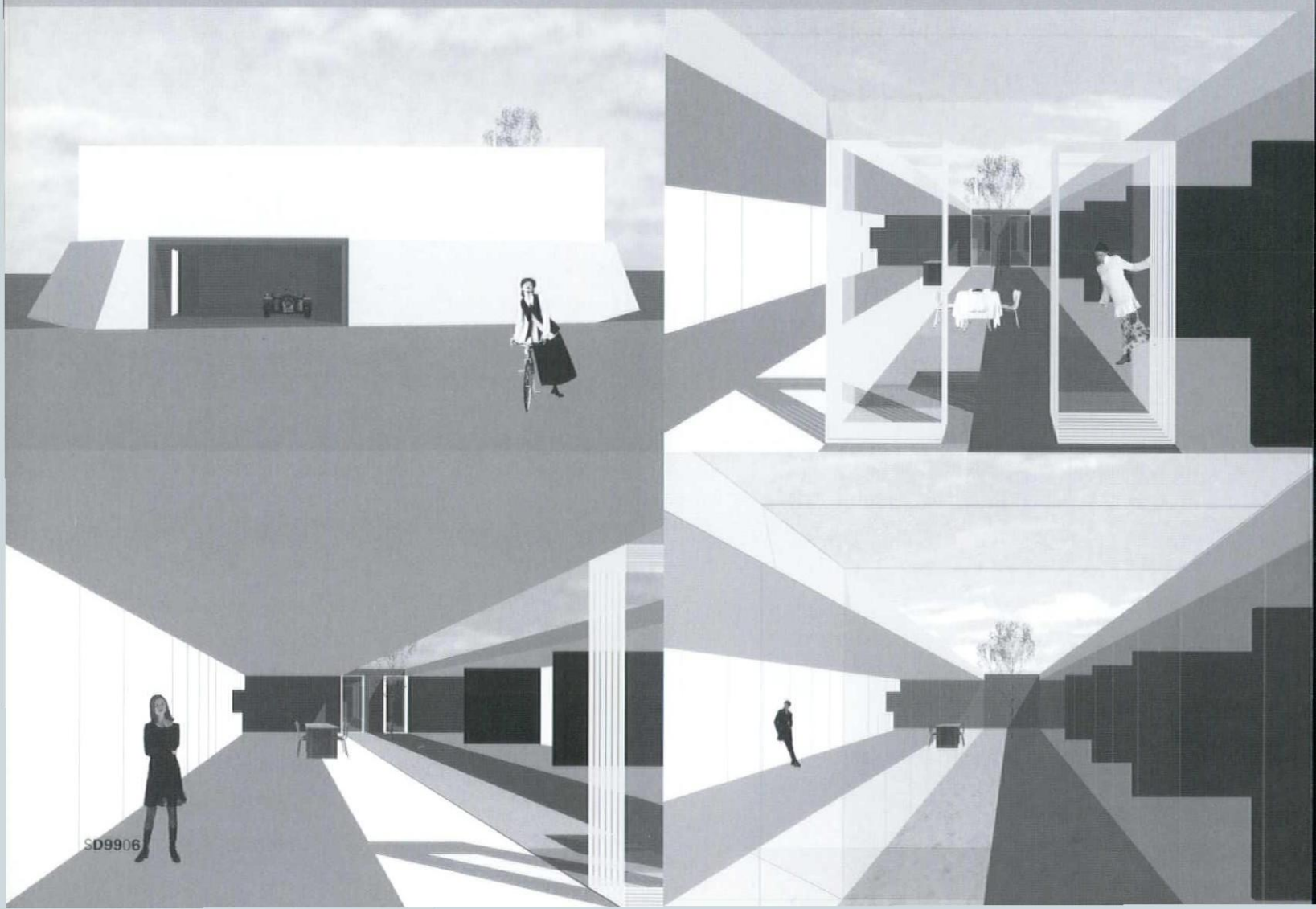
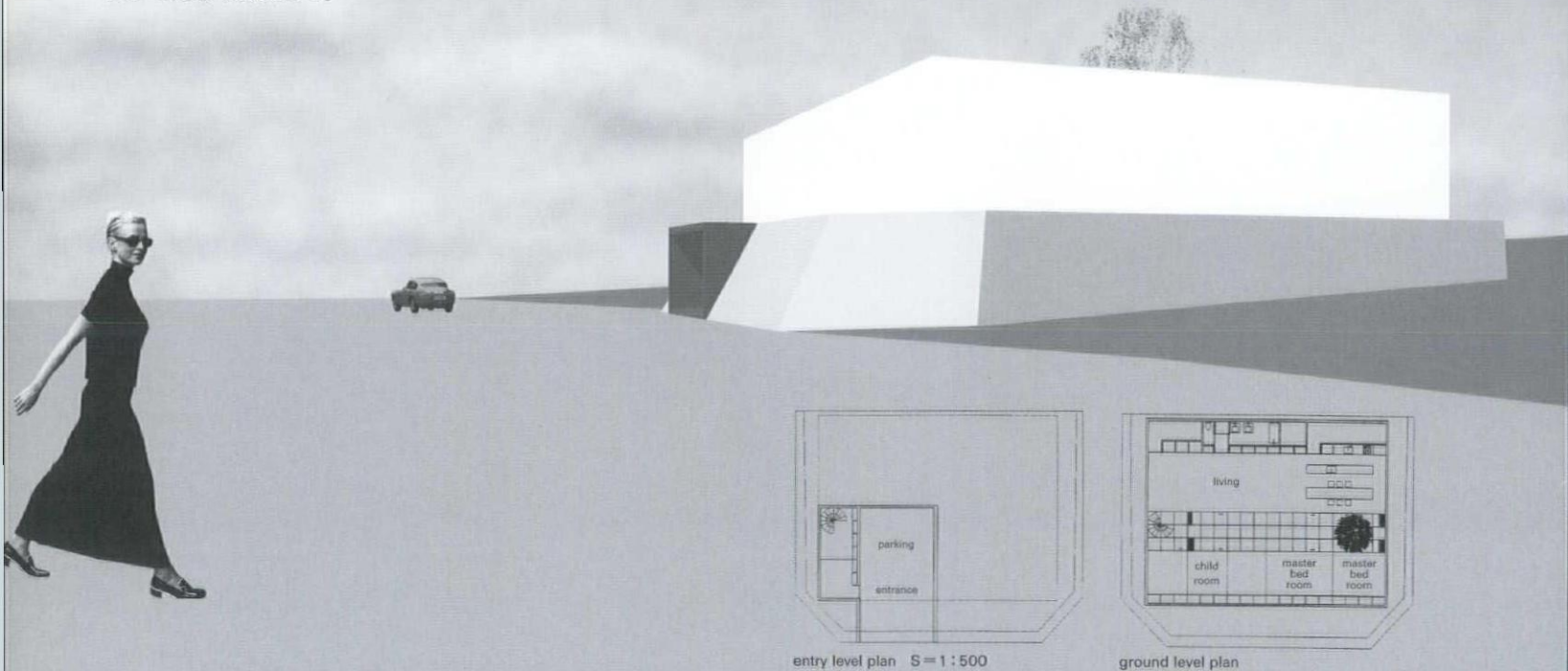
これは水道局庁舎の計画である。庁舎機能を内包した12m×60m×6mのガラスのボックスが水の壁によって空中に持ち上げられている。1階は水の壁、水盤のある広場として解放される。ガラスボックスの中にある6m×6m×12mのパブリックな空間はガラスの壁、床、天井に囲まれ、水盤の上に浮遊する空間である。

ホワイトレジデンス

White Residence 1998

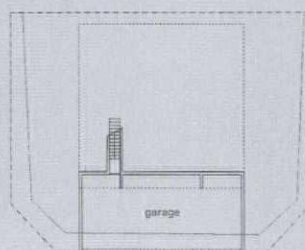
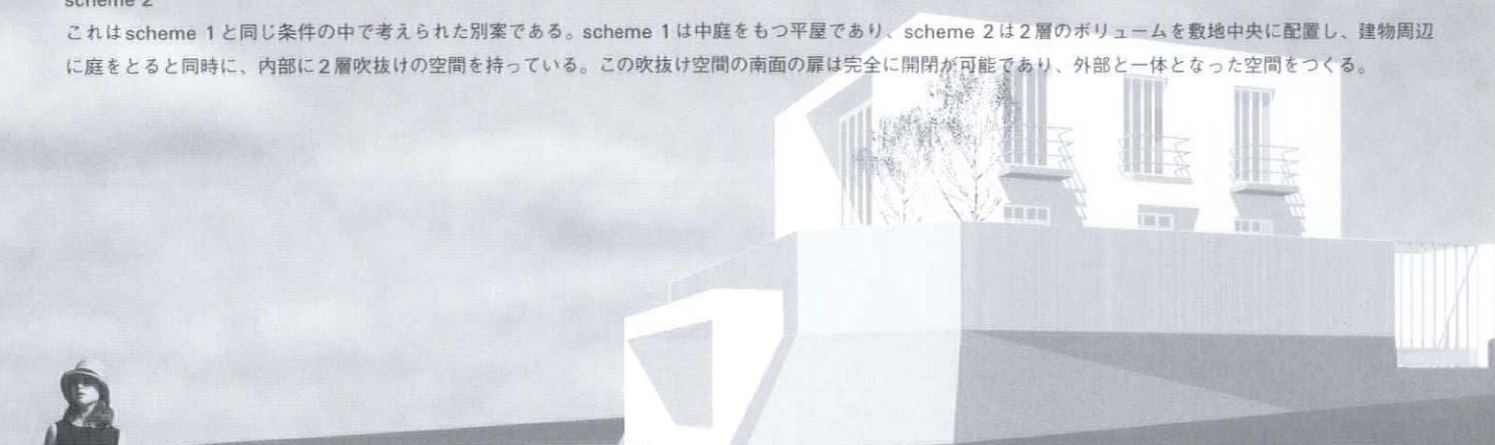
scheme 1

白い壁によって切り取られた16.2cm×12.6cmの平面には設備コア、リビングルーム、コート、各個室、収納が平行に配列される。リビングルームと個室群はコートにより分節され、あるいは接続されている。コートに面するガラスの扉は完全に開閉が可能であり、コートを内部空間の中庭、または、外部空間のリビングルームとして活用できる。

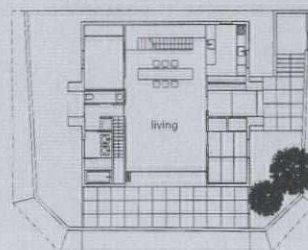


scheme 2

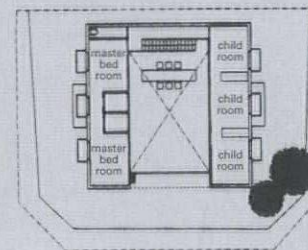
これは scheme 1 と同じ条件の中で考えられた別案である。scheme 1 は中庭をもつ平屋であり、scheme 2 は2層のボリュームを敷地中央に配置し、建物周辺に庭をとると同時に、内部に2層吹抜けの空間を持っている。この吹抜け空間の南面の扉は完全に開閉が可能であり、外部と一体となった空間をつくる。



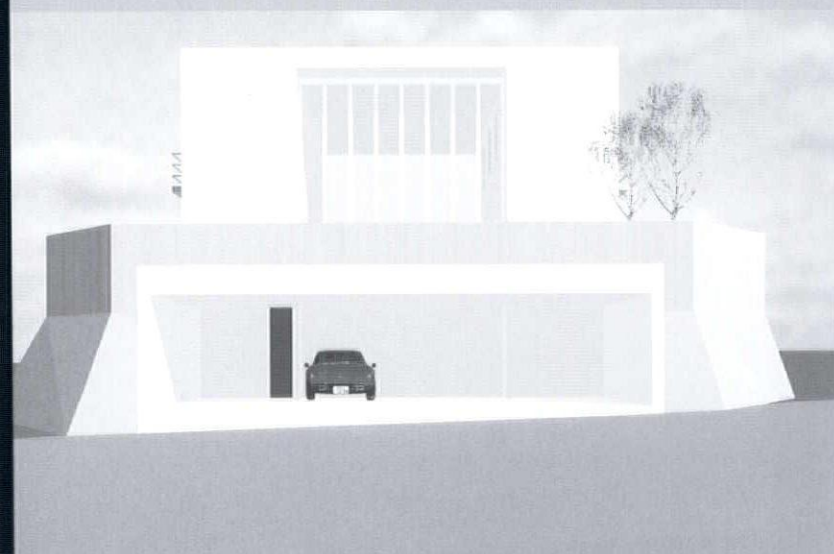
basement floor plan S = 1 : 500



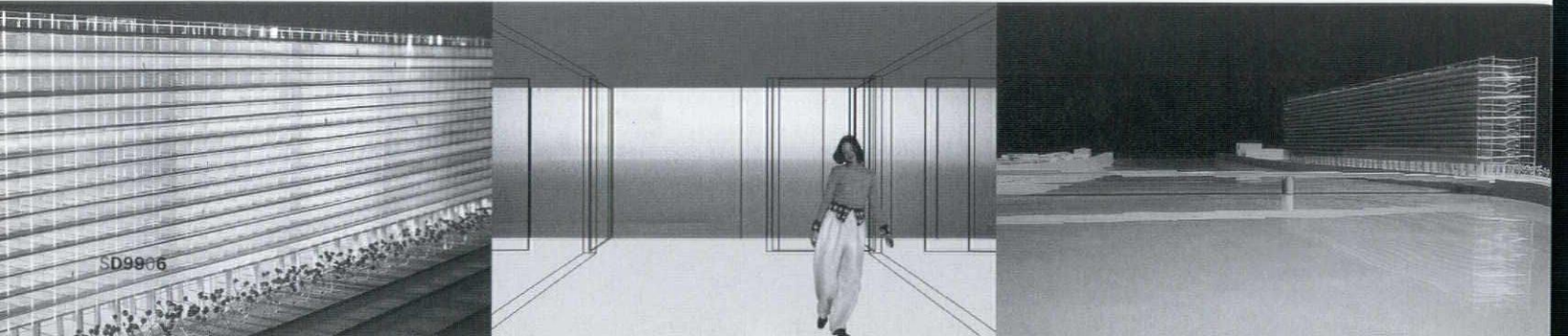
1st floor plan

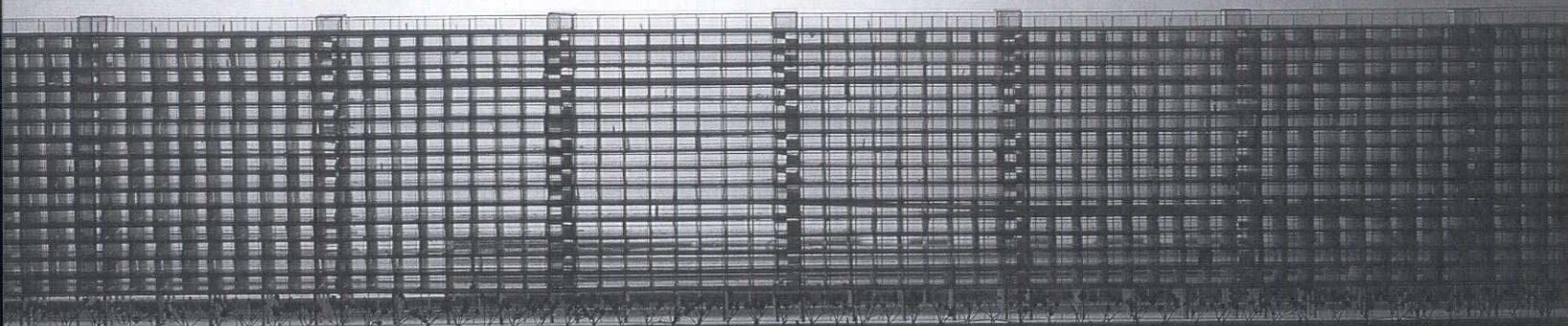


2nd floor plan

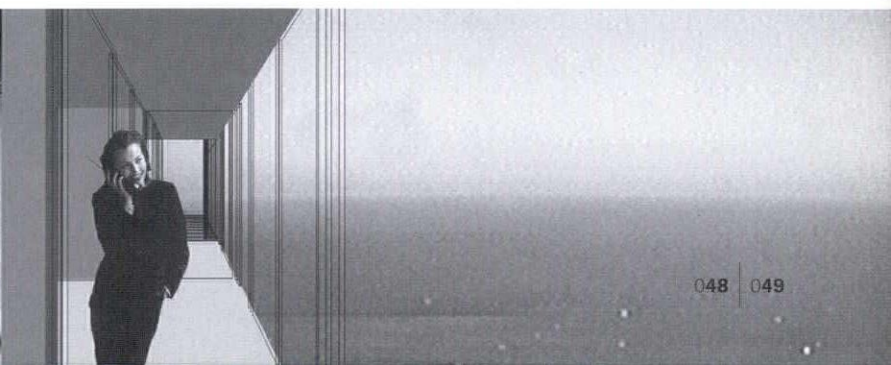
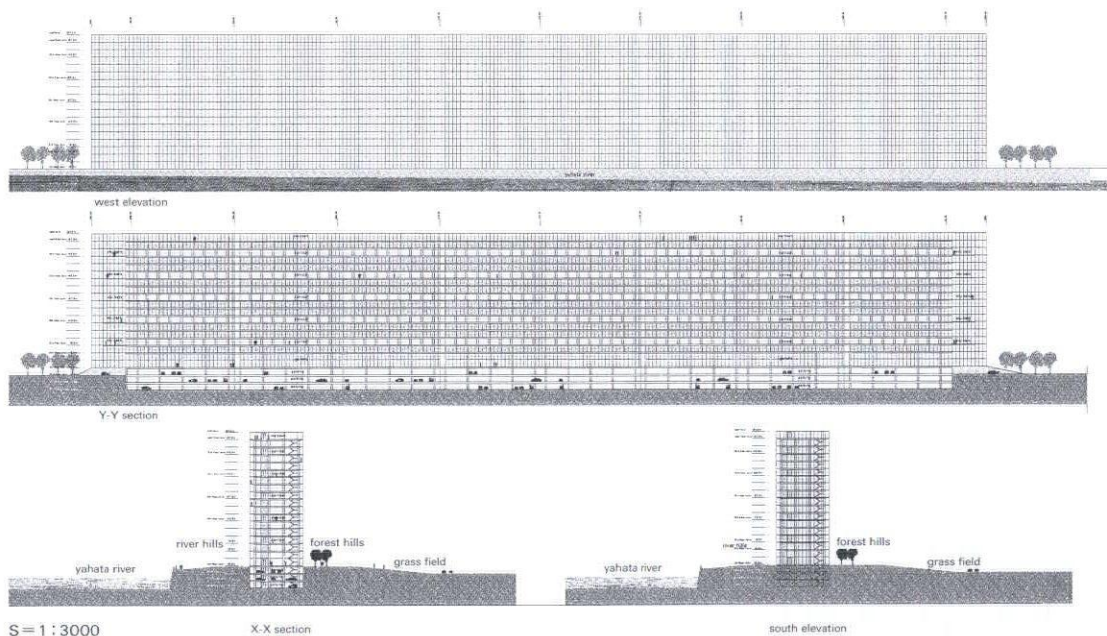


ガラスをテーマにした集合住宅の可能性
Glass Housing 1997

A black and white photograph of a long, multi-story building with a facade made of horizontal glass panels. The building is situated on a waterfront, and its reflection is visible in the water. The sky is dark, and the overall atmosphere is serene. The building's design is modern and minimalist, emphasizing the use of glass.

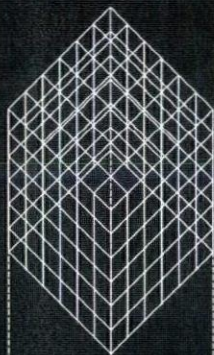


この集合住宅は、ガラスという素材がハウジングシステムにもたらす変化をシミュレーションした一連の研究に基づいている。建物は全ての住戸から川を見下ろせるよう、川に沿って平行に配置され、外壁にガラスを用いることで環境を遮断しないニュートラルな存在となる。住戸は両面採光が可能なメゾネットを中心としている。



キュビストの家
Cubist House 1989

6×6×6 glass cube



transparent slope (stainless)
transparent floor (glass)



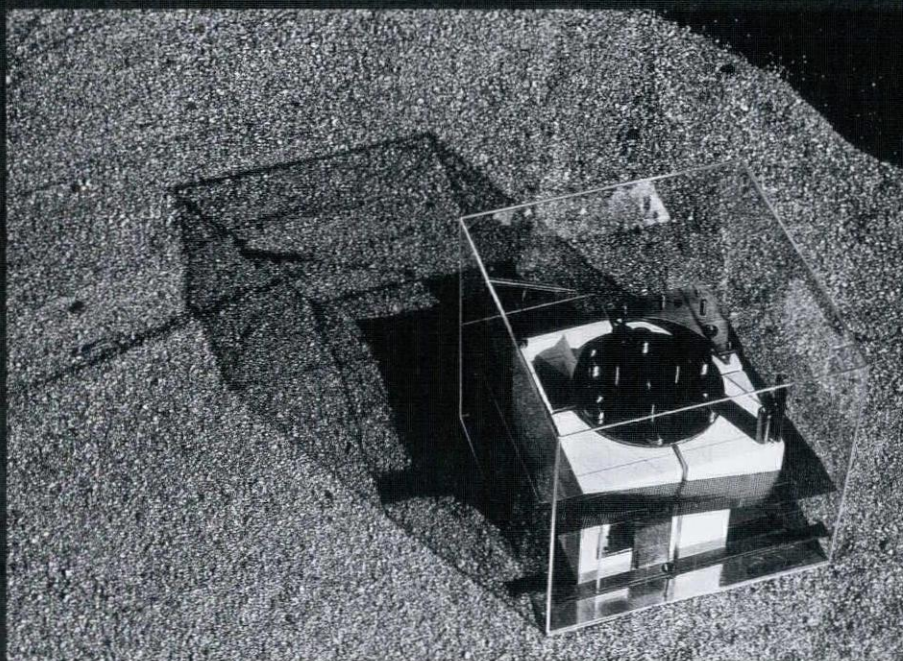
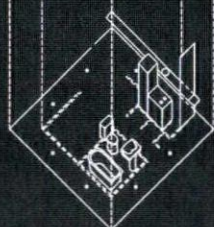
industrial furniture



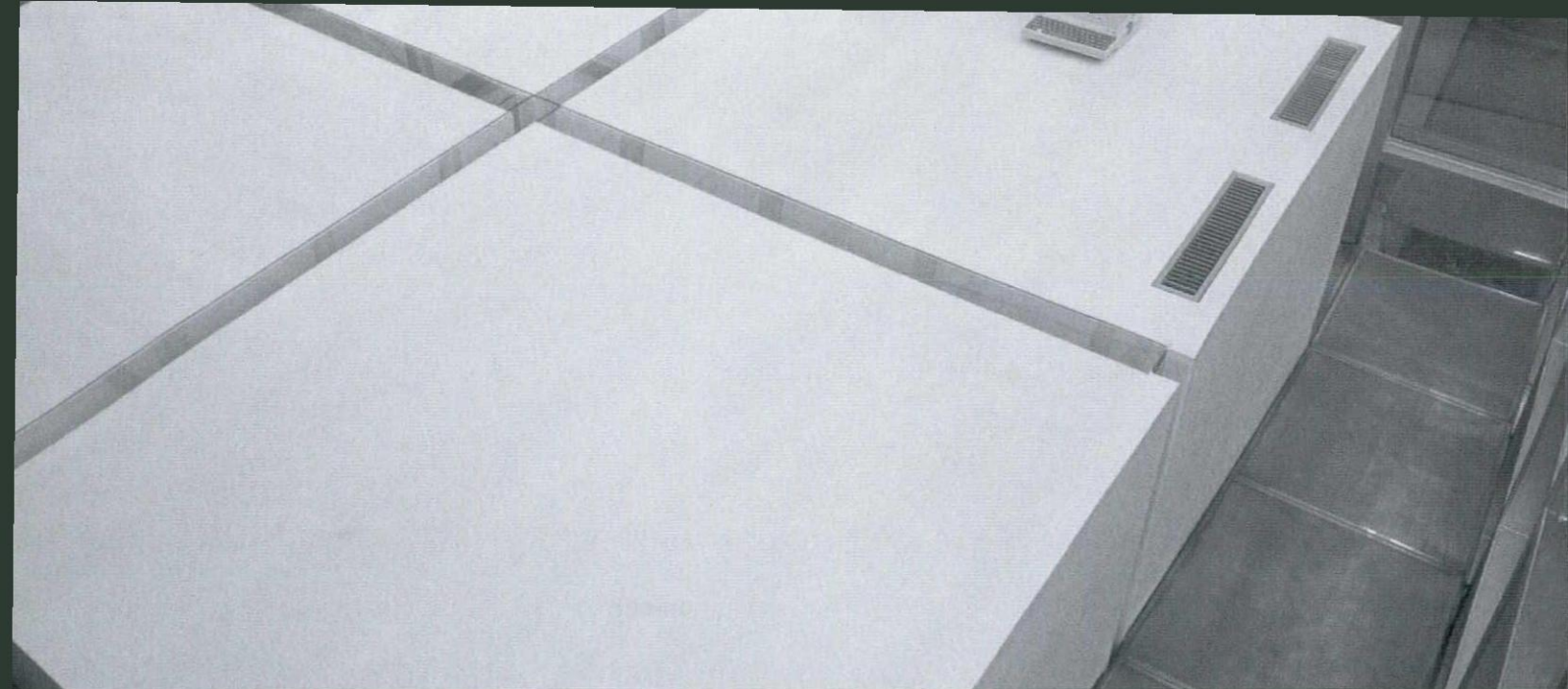
big furniture (4 boxes)



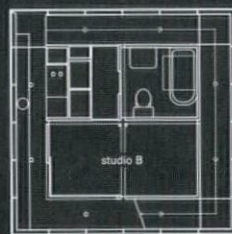
functional geometry



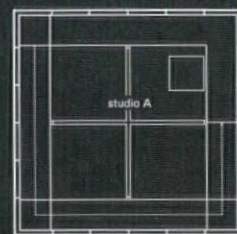




S=1:6000

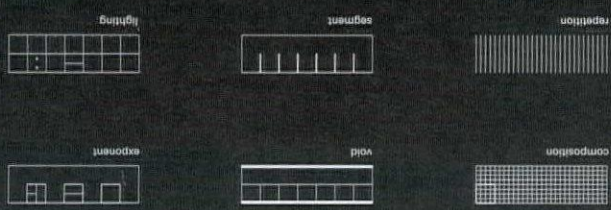
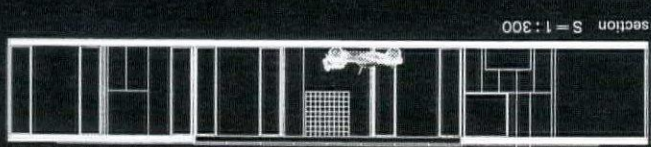
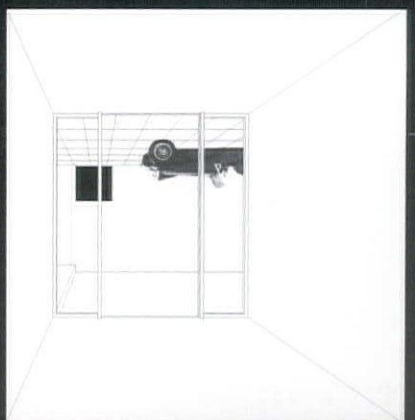
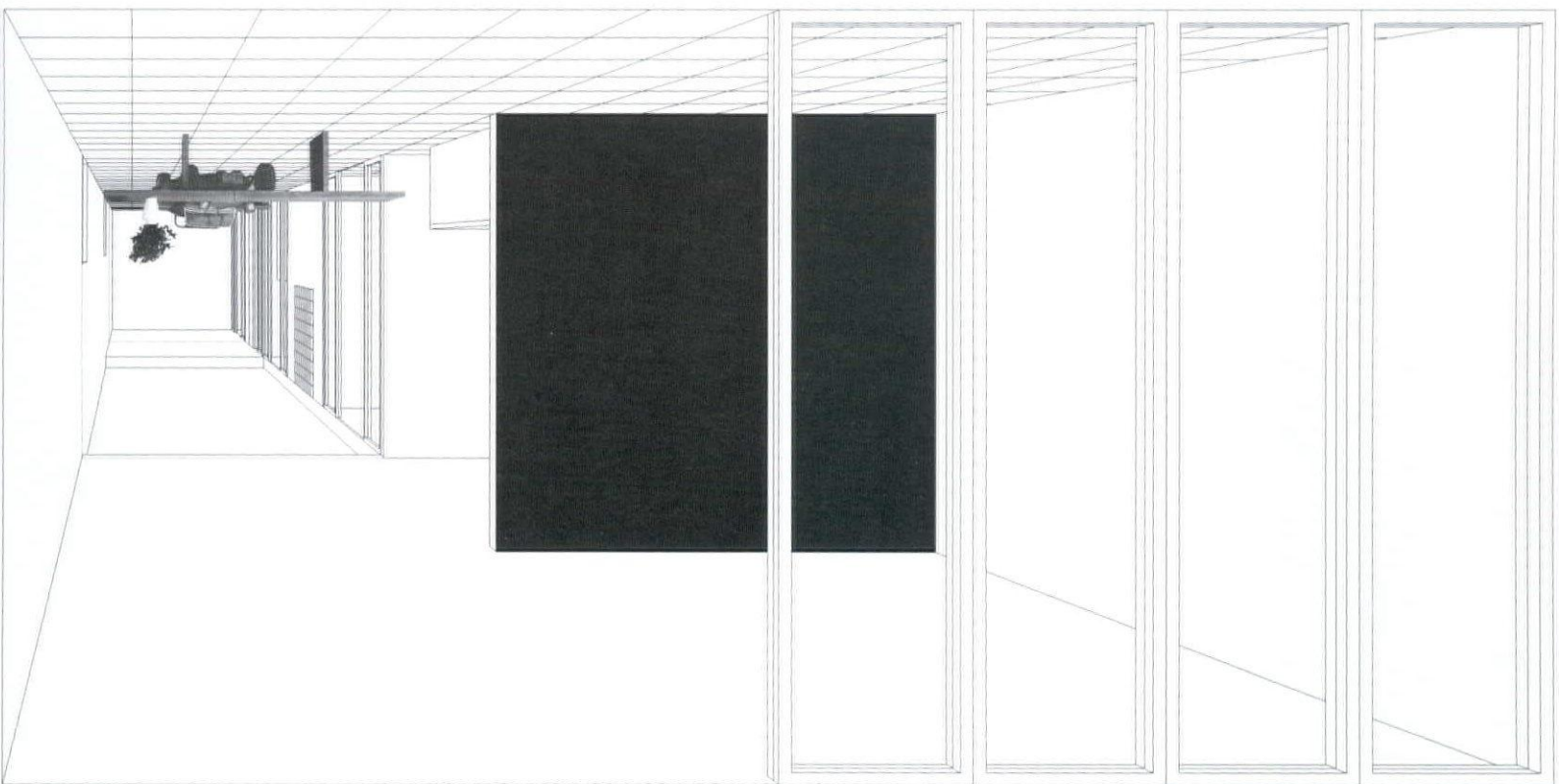


plan level +1750 S=1:200

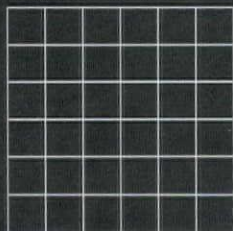


plan level +3500

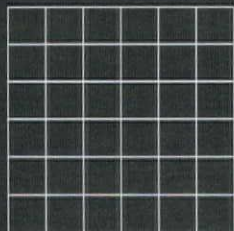
この建物は、立体芸術家のための住機能を含んだ仕事場である。建物の外観は6m×6m×6mのガラスのキューブである。内部には4つの立方体が存在し、透明なスロープと床が上階へと回転しながら立ち上がっている。H型鋼はガラスの受け材であり構造材としての柱、梁である。この立方体には、分節と連結により各空間機能が組み込まれている。光のスリットは、昼夜、光を取り入れ、放ち、自然現象と交感する。平面、立面、断面は全て同一の6mの正方形からなる。空間はXYZ方向1mの正方形グリッドで構成され、構造的、機能的、経済的意図が内包されている。この建築はガラスのCubeである。



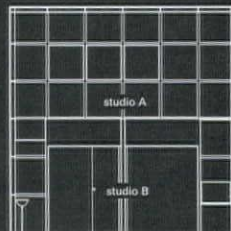
これは閑静な住宅地の一角、南北に細長い敷地に建つ専用住宅である。空間はXYZ方向ともに3.6mのグリッドで分割され、そこに生まれる正方形と立方体の反復と連続によって全体が構成されている。25.5mのウキ下なボックスカナルバーの中に正方形の垂直平面が連立し、その中に各個室機能が組み込まれている。ボジティブな正方形の壁の反復は立方体に空間を分割し、ネガティブな正方形の連立は空間をトネルとして連結していく。フラットが愛蔵してきた2台のクラシックカーのあるギャラリーは各個室から透明なガラス・スクリューで仕切られ、スカイルームは車のサニットのようになれる。



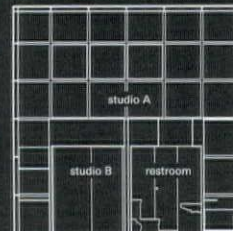
north elevation



east elevation

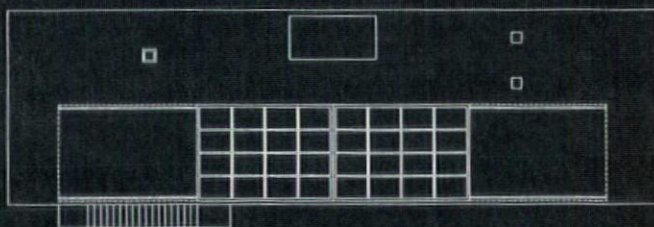
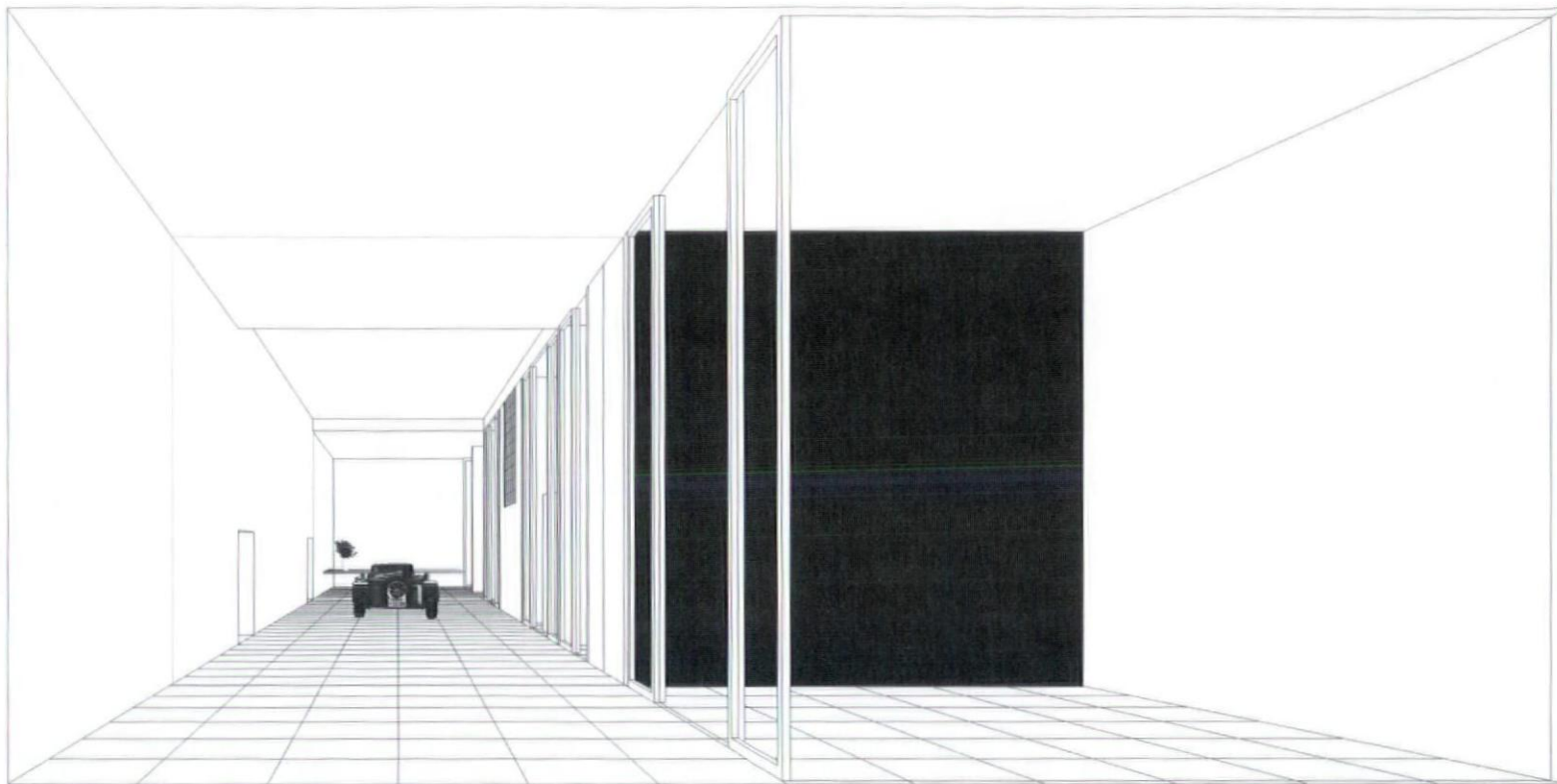


east-west section

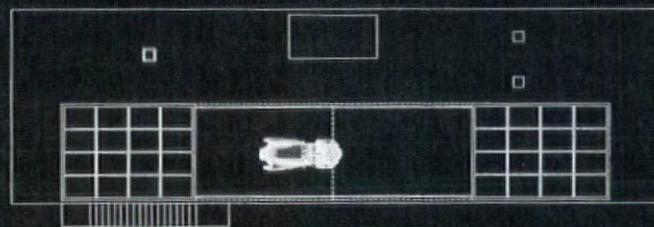


north-south section

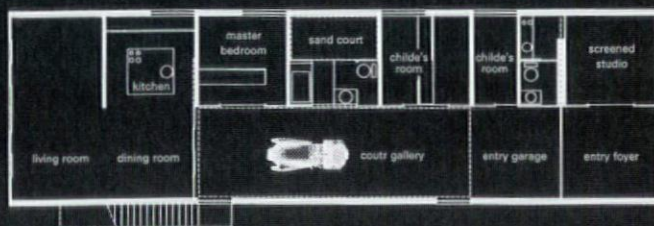
This building consists of a home and two studios for an artist working in three dimensions. The exterior is $6\text{m} \times 6\text{m} \times 6\text{m}$ glass cube. Four cubes secure a particular presence as large furniture and functional objects ; lights slits receive light (by day) and emit it (by night) , creating exchanges with the natural environment. The slope is transparent, and the floor enclosing the four cubes turns as it moves to the upper levels. The Cubist House is an experiment in designing space that supports creation in that domain intermediate to architecture and housing, furniture and industrial design.



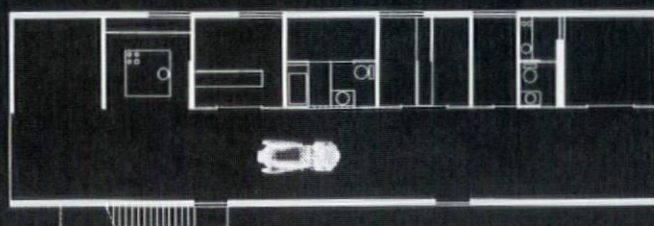
skyroof closed



skyroof open



window & door closed

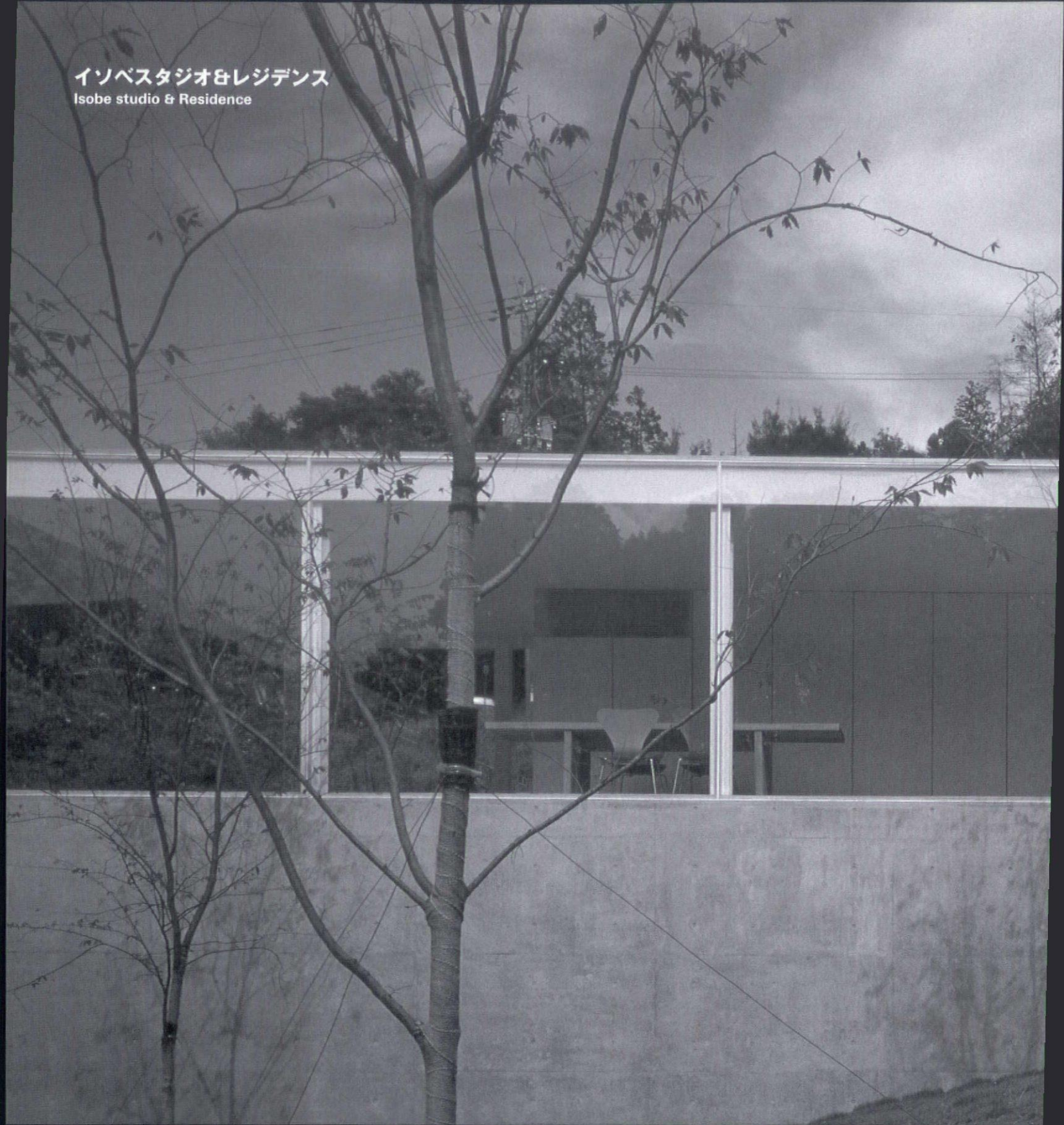


window & door open

Tucked away in quiet, residential area, this is an exclusive residence on a long, narrow site running north-south. A 3.6-meter three-dimensional grid is used to generate configurations with repetitions and continuities of square and cuboid forms defined by it. Square vertical surfaces are arranged continuously within a 25.2-meter hollow culvert box enclosing all the private room functions. Repetition of positive square walls articulate cuboid spaces, while continuous negative square walls form tunnels linking them. A gallery housing the client's two cherished classic cars is partitioned from the house by transparent glass screens, and the sky roof opens like the sunroof of a car.

イソベスタジオ&レジデンス

Isobe studio & Residence



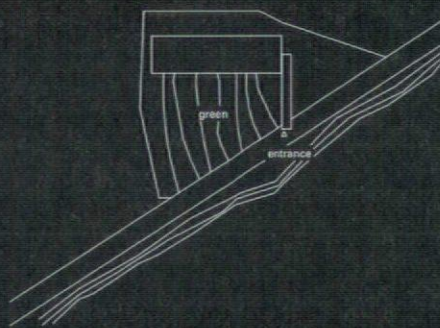
山あいの自然に囲まれた敷地に建つ、デザイナー夫婦と子供ふたりのための仕事場を含む住宅である。敷地は隣地と道路に三角形に挟まれた谷状の低湿地であった。建物は芝生で覆われた新しい自然と、道路と2階とを繋ぐブリッジによって機能している。空間は、XYZ方向2.5mのグリッドで分割され、そこから生まれる正方形と立方体を原形に全体が構成される。下層17.5×5mのヴォイドなボックスカルバートの中に、透明な垂直平面が連立し、その中に各個室機能が組み込まれている。上層17.5×5mのトランスペアレントな空間は住宅の機能と仕事場の機能を持っている。敷地全体がギャラリーとして環境に開かれる。



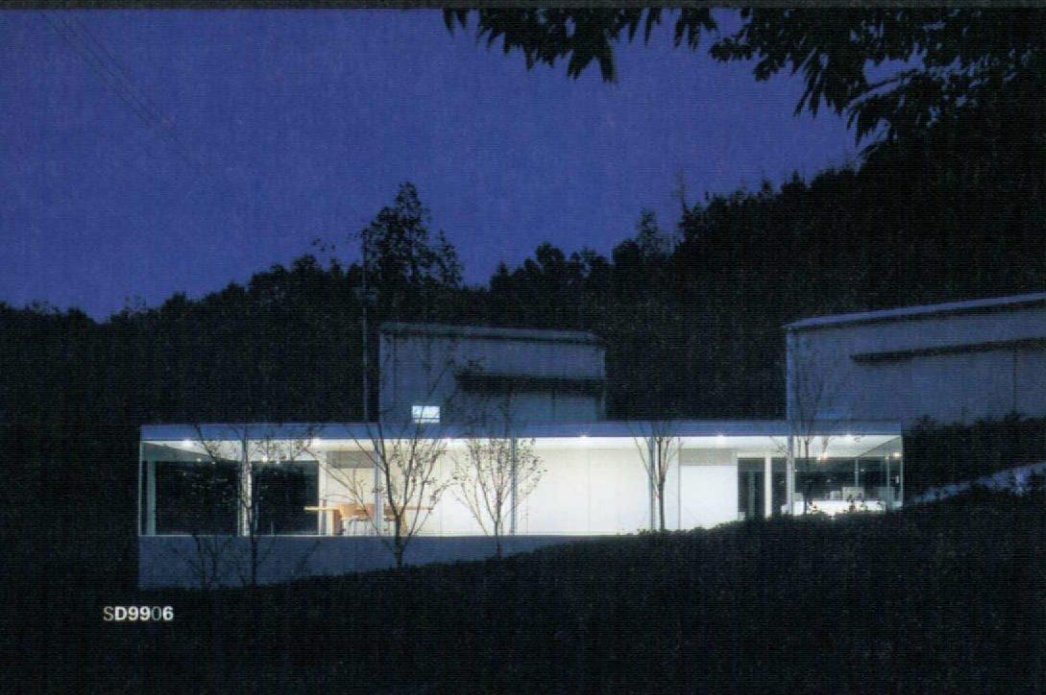
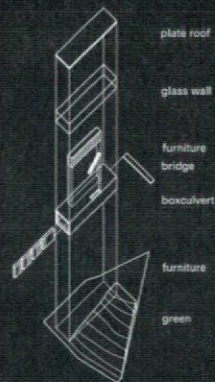
This building consists of studio and residence spaces for a designer and his family. It was built on the site situated amidst a natural environment in the mountains. The space is divided by a 2.5m-grid of an XYZ direction. The overall building is organized by transforming its square and cube derived from the grid. Various works of art of the client are placed in the exterior and the interior, with the overall site opening up to the surroundings as a gallery.



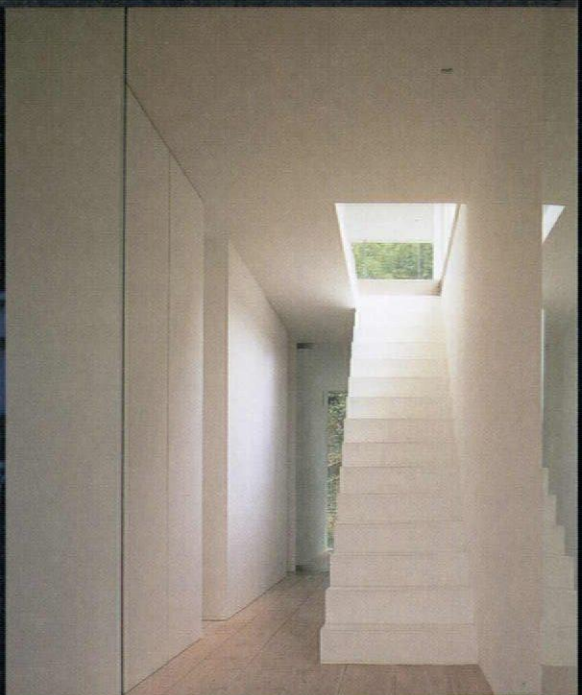
S = 1 : 15000

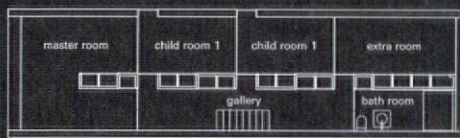


site plan S = 1 : 2000



SD9906





1st floor plan level +0.28m



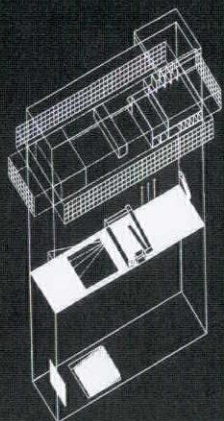
2nd floor plan level +3.26m



キッドミュージアム／玖珂町こどもの館
Kid Museum 1996



S=1:27000

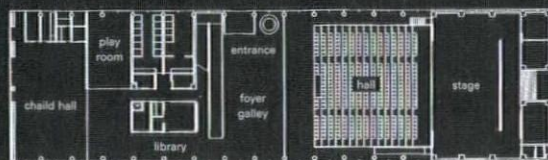


section S=1:1000

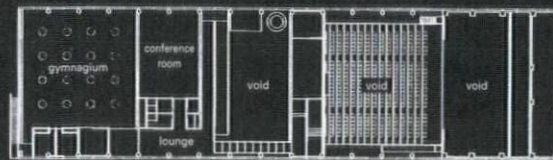




建っている。ここに16m×16mの正方形が観客席として切り込まれ、ステージと共に広場に囲まれた多目的空間をつくり出す。多目的ホールは20m×72m×8mのガラスで包まれ、観客席と外部の風景は切り離されることなく、互いの状況に呼応しながら町に開かれる。隠されないイベントと日常とが相互に交換され、一体化された空間として意識される。ホールと広場は完全なる透明性を有し、ここで行なわれる出来事はそのまま環境の中にインスタレーションされる。



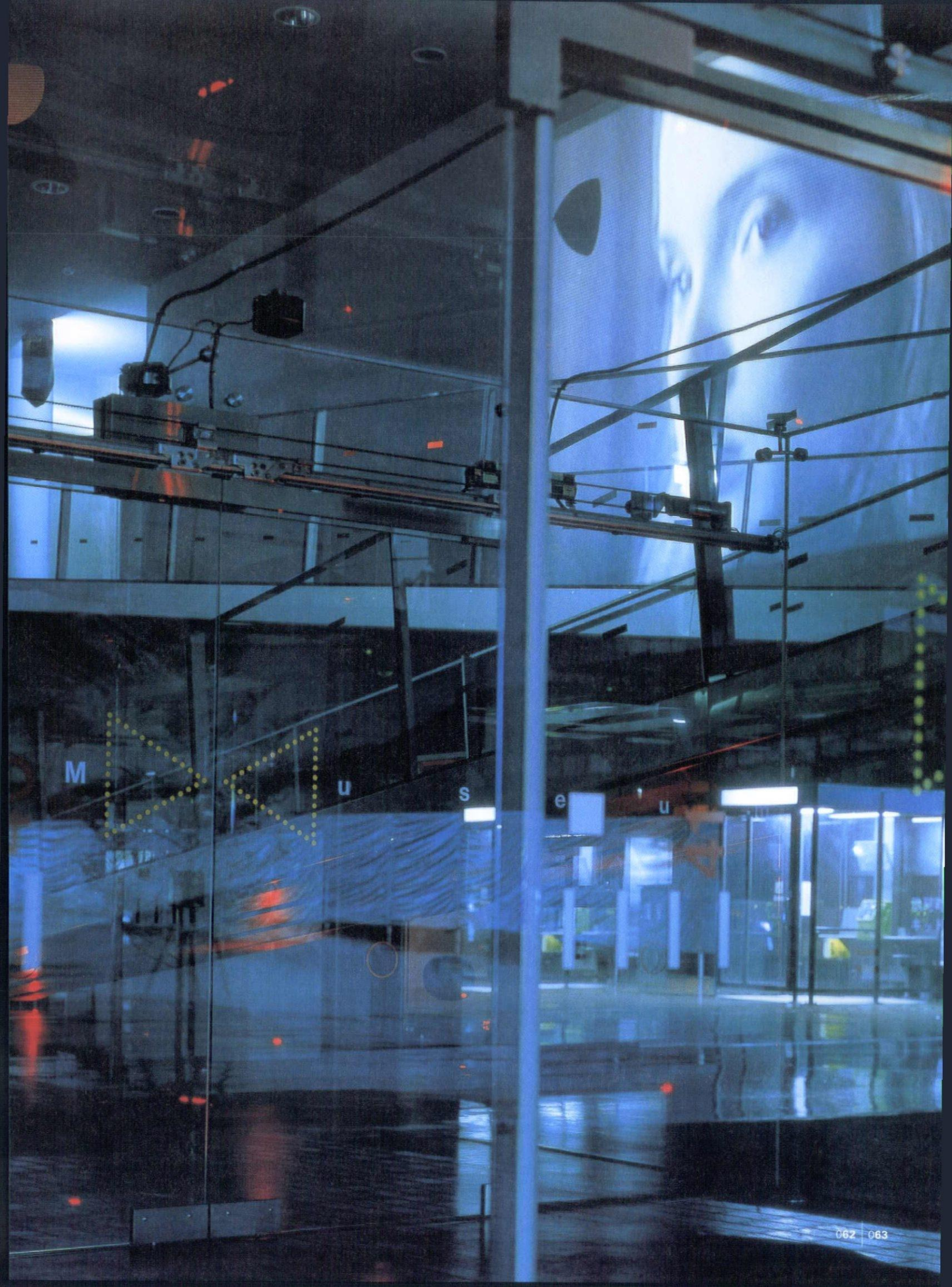
1st floor plan S=1:1000



2nd floor plan

square as multi-purpose hall in the site. 20m×72m×8m glass box wraps the hall. The hall and landscape around the building is connected directly. Hall and foyer is joined each other through the glass door, and make one space. Hall and green plaza have transparency, so event operated in this area open to town as installation.





M

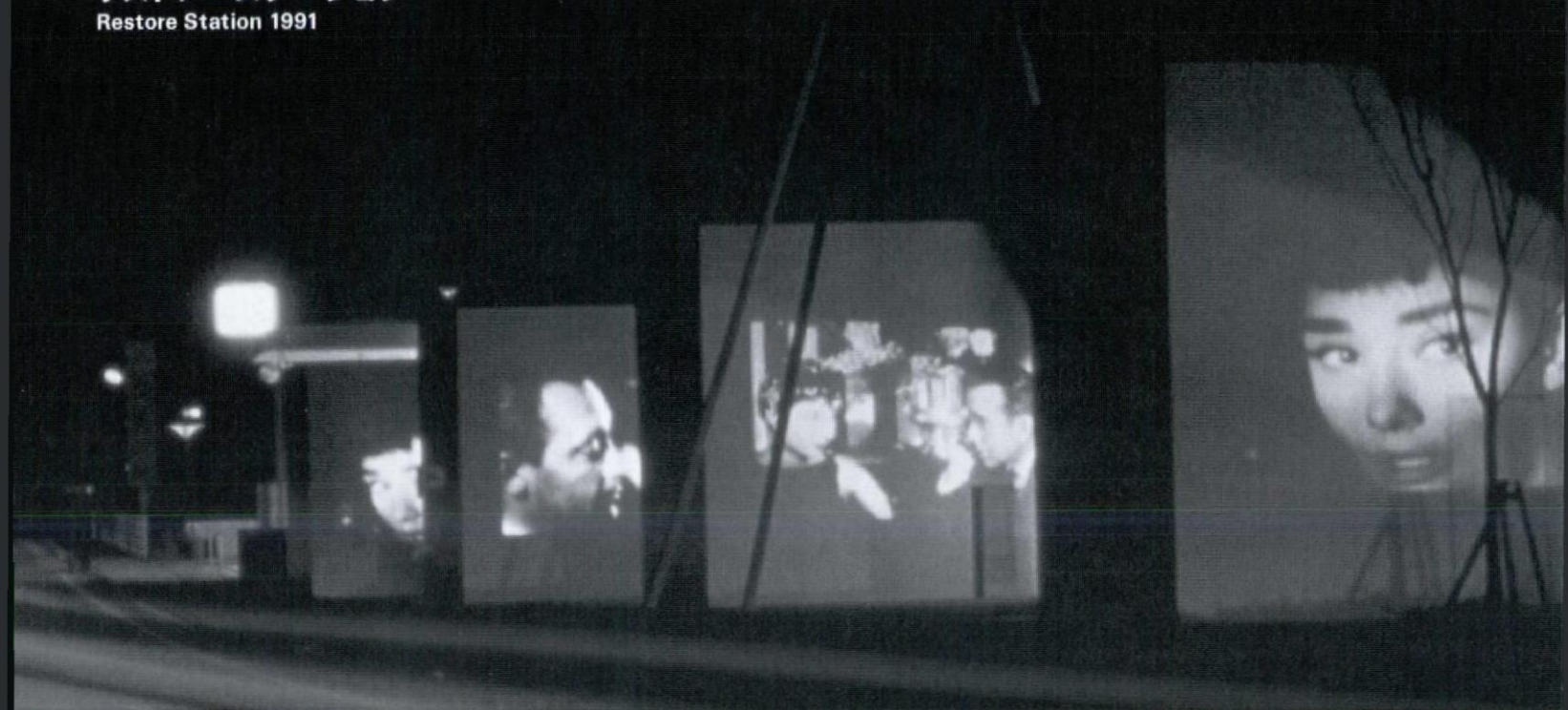
u

s

e

u

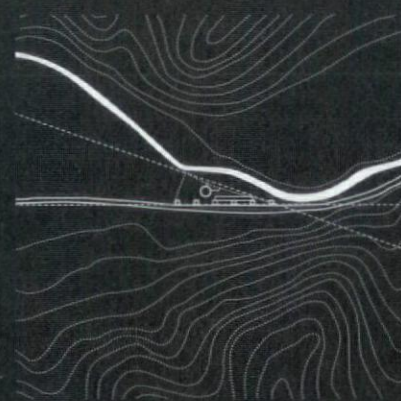
リストアーステーション Restore Station 1991



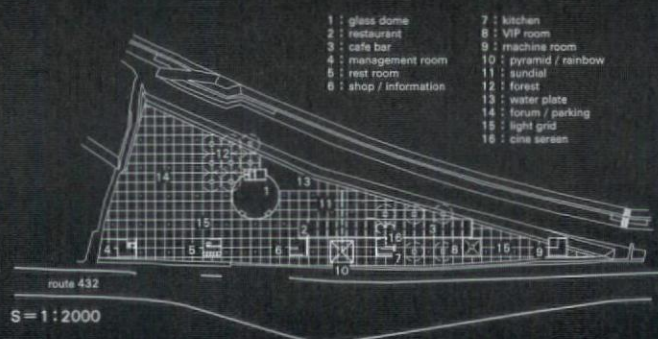
この施設は山あいの三角形の敷地に建つ複合施設である。この道の駅は地元と外部の人びとに開かれた新たな交流と出会いを生むための装置として「Restore Station/甦る駅」と名付けられた。敷地全体は2.5m×2.5mの幾何学で構成されている。2グリッド分の駐車区間線、5m×5m×5mキューブ、連続した映像の壁、□型構造フレームと床の蛍光灯の連続、ガラスのチューブ、水の板、ガラスのドーム、光ファイバーによる7.5m×7.5m間隔の床照明など、機能を組み込んだ各空間は自然に対するインсталレーションとして語らいの場を提供する。映像の連続は道路とレストランに同時間を共有させる。



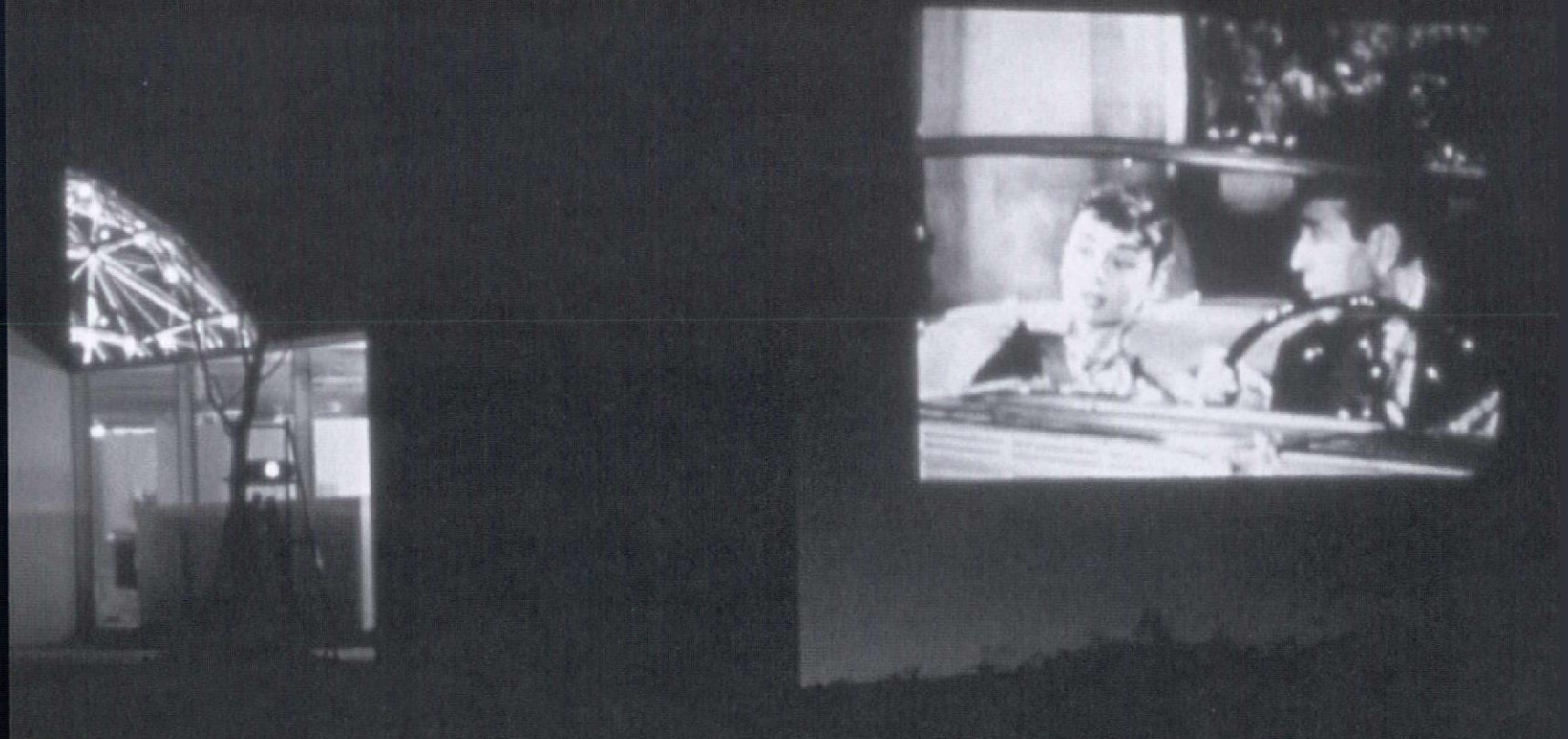
SD9906



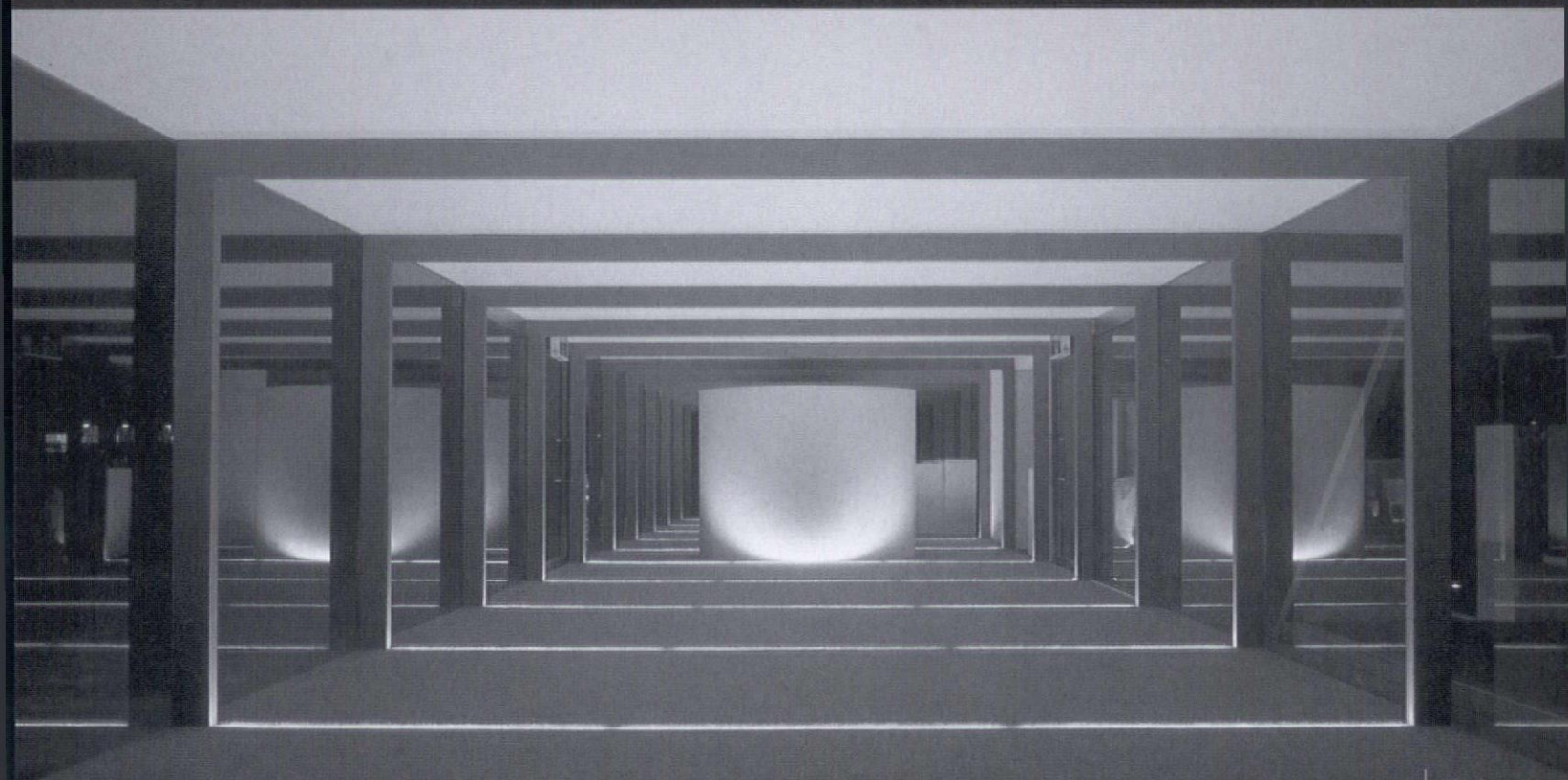
S = 1:10000



S = 1:2000



Restore Station is a multi-purpose facility on a triangular site approximately 140 meters long bordered by mountains, a river, and a national highway. A geometrical grid of 2.5 square meter sections is imposed on the site and used to generate a spatial composition of transparency, light, and time. The components include a parking lot on two grid sections, spatial functions in a 5-meter cube, a continuous image projection wall, a square structural frame, glass tubes, water plates, a glass dome, and optical fibers for a 7.5 square meter grid floor lighting area. Spaces provide locations for interactive communication with nature.





ハツタ山口

Hatsuta Yamaguchi Corporation 1995



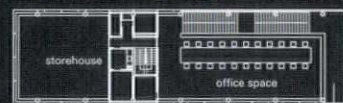
この建物は、消防設備機器関連の企業のための、倉庫を含む本社屋である。ガラスの10m×10mの正方形のファサードの中には商業メディアが埋め込まれ、3階の執務空間は、広く山々と市街を望んでいる。そして、事務スペースと倉庫、機能・設備コアは透明性の中に納められる。液晶プロジェクター、モニューメント、LEDは、断片的なメディアとして社会に交感する。薄暮より投影されるプロジェクターの無言の映像は、旧国道を行く運転者にモニターの存在を認識させる。透明な倉庫は商品をそのままディスプレイショールームに変換される。



1st floor plan S = 1:800



2nd floor plan

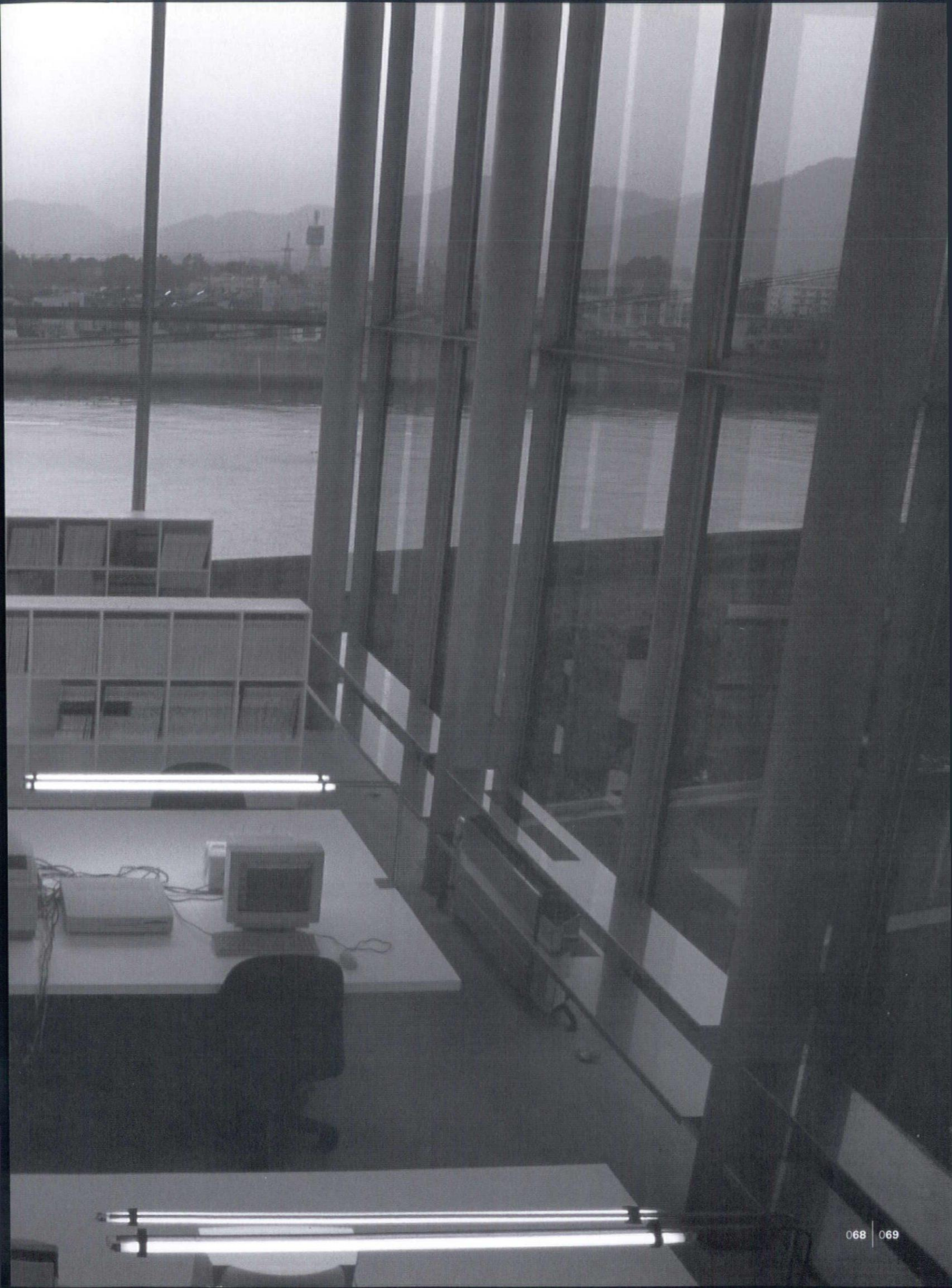


3rd floor plan

This is the headquarters and warehouse of the company for fire fighting equipment. The office, warehouse, functional and equipment core are all contained within a 10×10×35 meter glass box. From the third-floor offices, there is a view of the surrounding mountains and townscape through the clear glass. The warehouse space is visible through a glass wall and so does not merely function as an equipment receiving area, but becomes a display space for the

グラスハウス
Glass House 1996







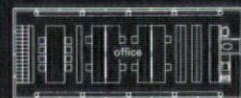
S = 1:50000



1st floor plan level +0.10m S = 1:500



2nd floor plan level +3.10m

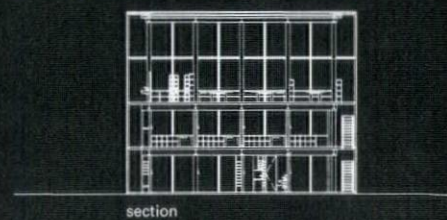
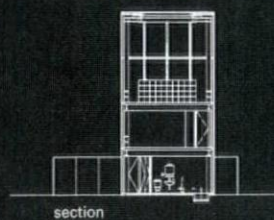
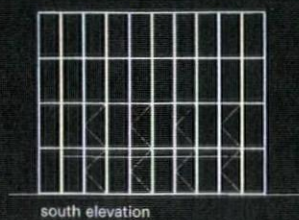
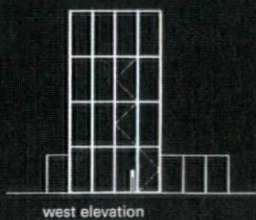


3rd floor plan level +6.10m

この建物は、1、2階に住空間、3階に仕事空間をもつガラスハウスである。敷地は広島市の西部、瀬戸内海にそそぐ川の河口附近に位置している。建物は全体をXYZ方向3mのグリッドで構成し6m×15m×12mの空間として空気をプロテクトしている。3階の仕事空間は、海、川、空に開かれている。住空間は家具と間仕切り壁によって機能が分節され、各室はできるだけ機能の交換が可能であるよう、ニュートラルで合理的な空間としてつくられている。平面、立面、断面は各々1.5m×3mの幾何の中で、機能、構造、経済性が整合されている。

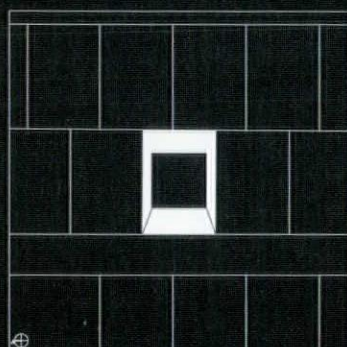
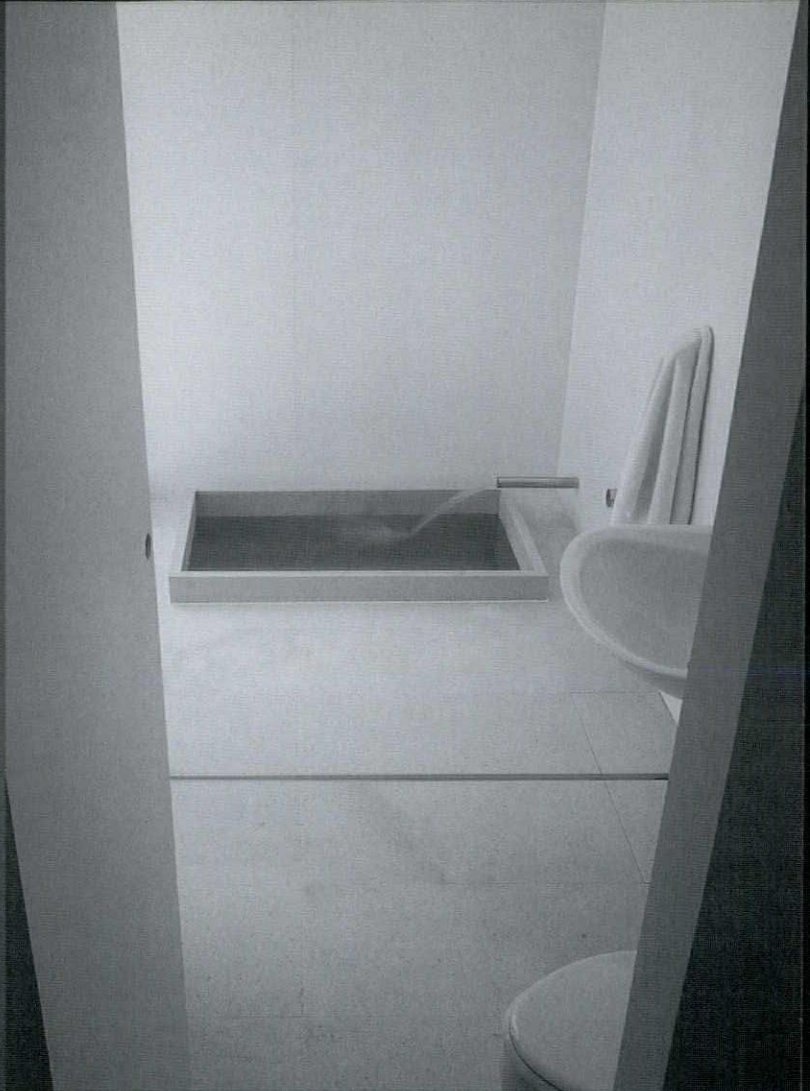
ホワイトキューブ
White Cube 1998



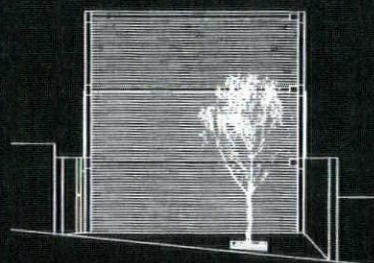


The site is in the western part of the city of Hiroshima, and lies on the estuary of the River where it discharges into the Seto Inland Sea. The first and second floors contain living areas and office is located on the third floor. The house is based on a 3m three-dimensional grid, and takes the form of a 6m × 15m × 12m box. The living areas are divided by furniture and partitions, and the spaces have a neutral quality, allowing flexibility with respect to changing functional requirements. The building is wrapped in transparent glass on all four facades.

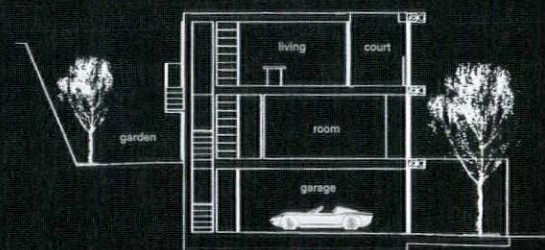




site plan S = 1:1000



west elevation S = 1:300

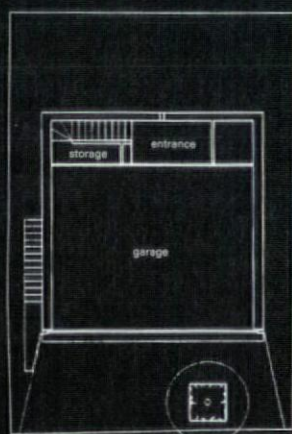
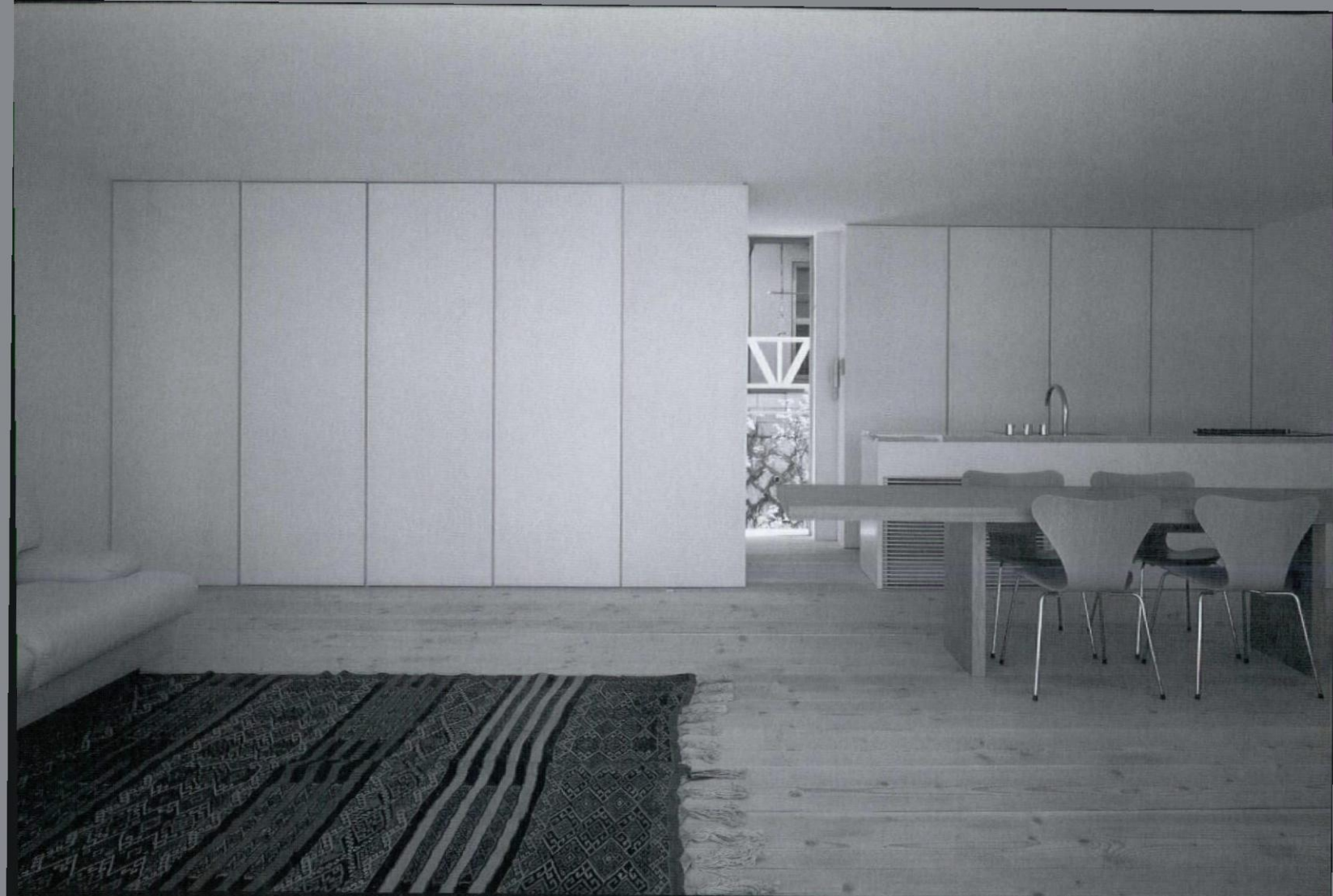


east-west section S = 1:300

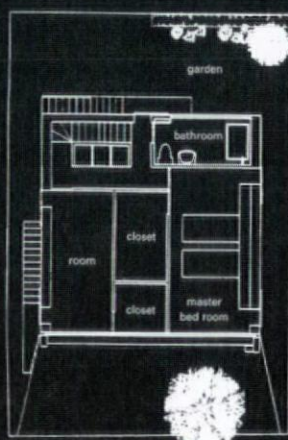
この建物は、広島市市街を望む高台に建つ住宅である。敷地は山を切り開いてつくられた段状の住宅地にあり、前面道路と約2.5mの高低差をもっている。8.1m×8.1m×8.1mのヴォイドな立方体が敷地中央に埋め込まれ、その内部が階高2.7mのボックスカルバートの空間に3分割されている。単純な構造の開放的な空間の中に、1階ガレージ、2階個室、3階リビングルームが置かれ、それらが、各設備機能、収納、階段などの組み込まれたコアによって垂直に連結されている。西側立面の全面シャッターは、内部空間の機能と生活行為にあわせて、外部空間との接続方法を選択する装置である。1階では公道からの車・人のダイレクトなアクセスと住居のセキュリティ、2階では各個室の採光とプライバシー、3階では、眺望の開かれたプライベート・コート。これらの相反する機能をシャ



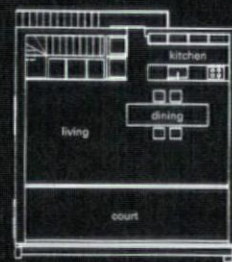
SD9906



1st floor plan S = 1:300



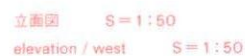
2nd floor plan



3rd floor plan

ッターの開閉により実現している。理性的なヴォリュームの選択と合理的な機能の分析によって、「立方体／Cube」は生活行為、敷地条件などの複雑な要求を満たす空間となり、雑然とした住宅地の中から「余白／White」を抽出する。

Detail / White Cube

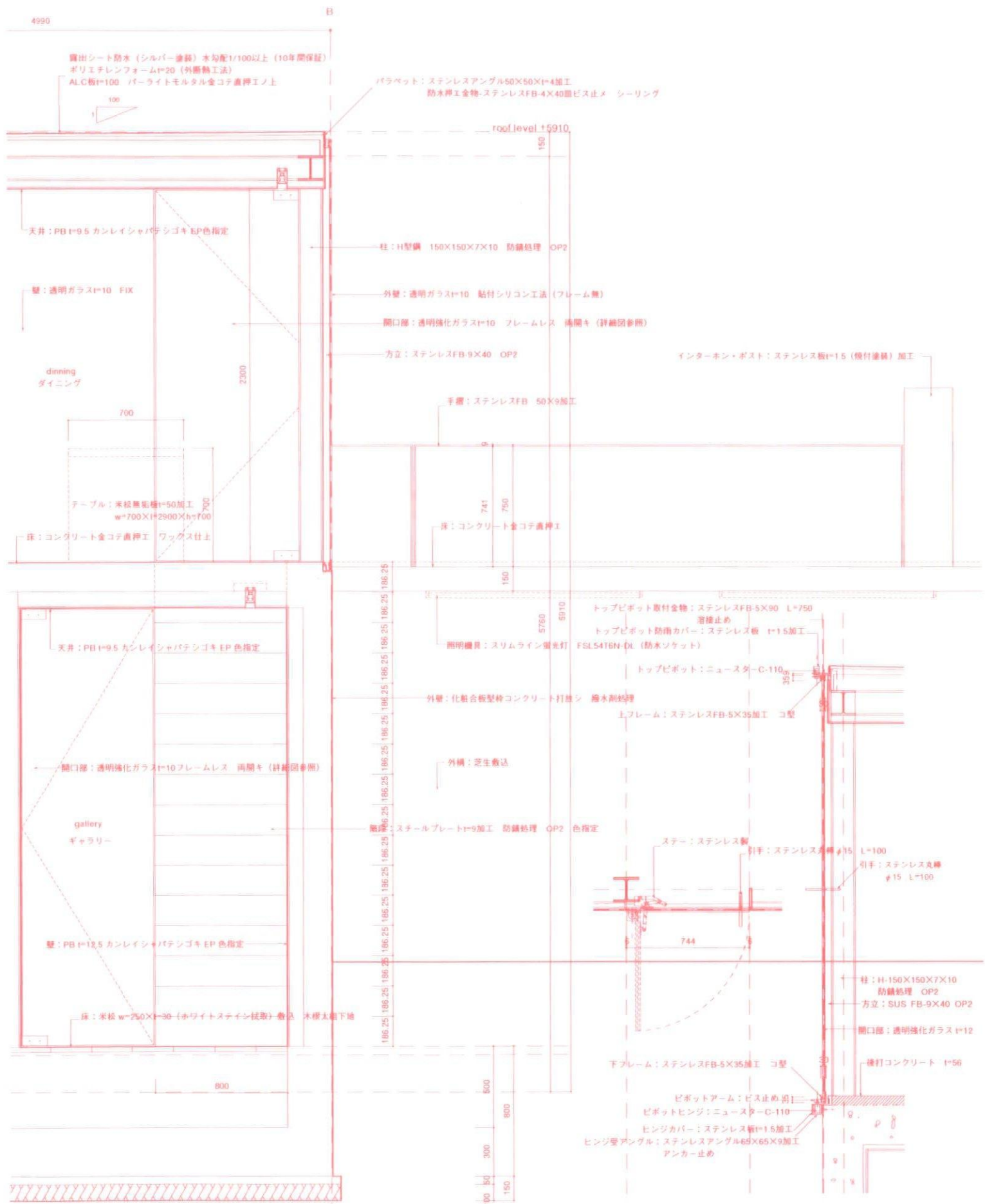


Detail / Glass House



ディテール / イソベスタジオ&レジデンス

Detail / Isobe studio & Residence

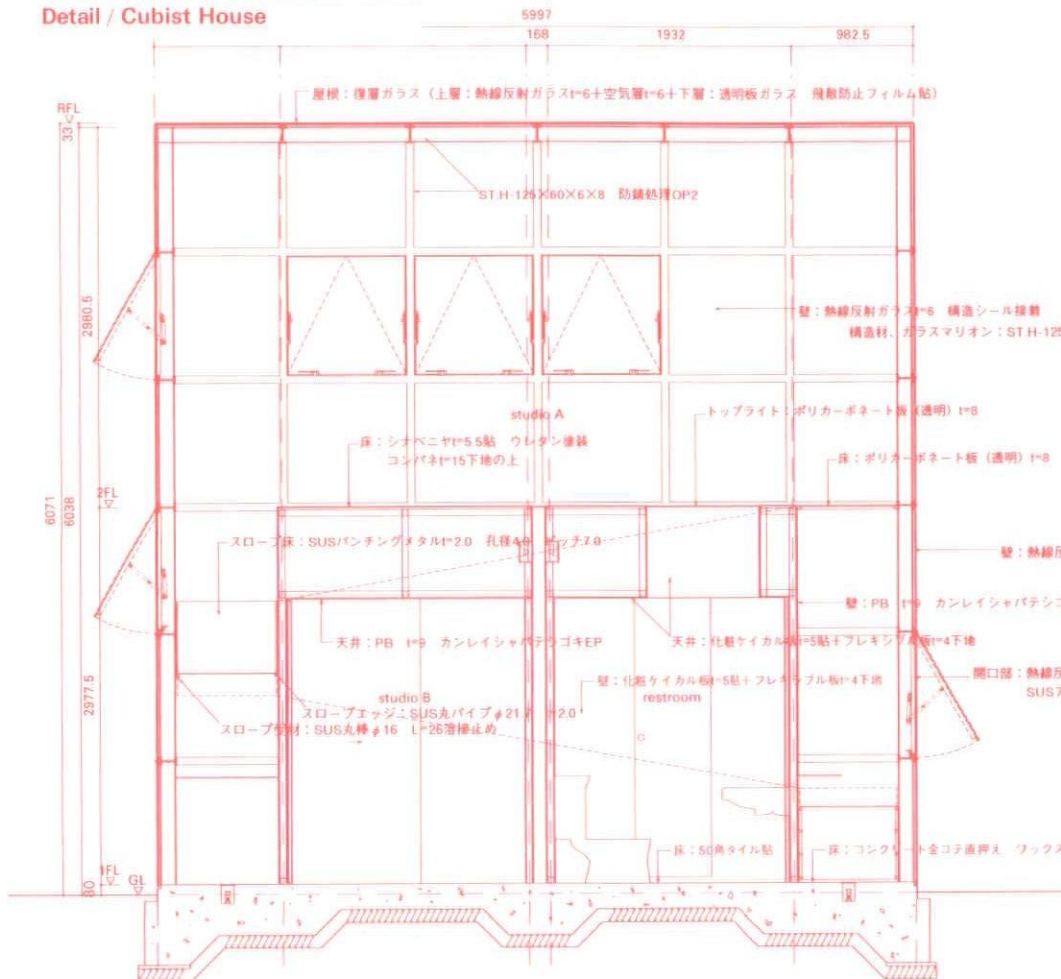


断面詳細図 S=1:30
section / y-y' S=1:30

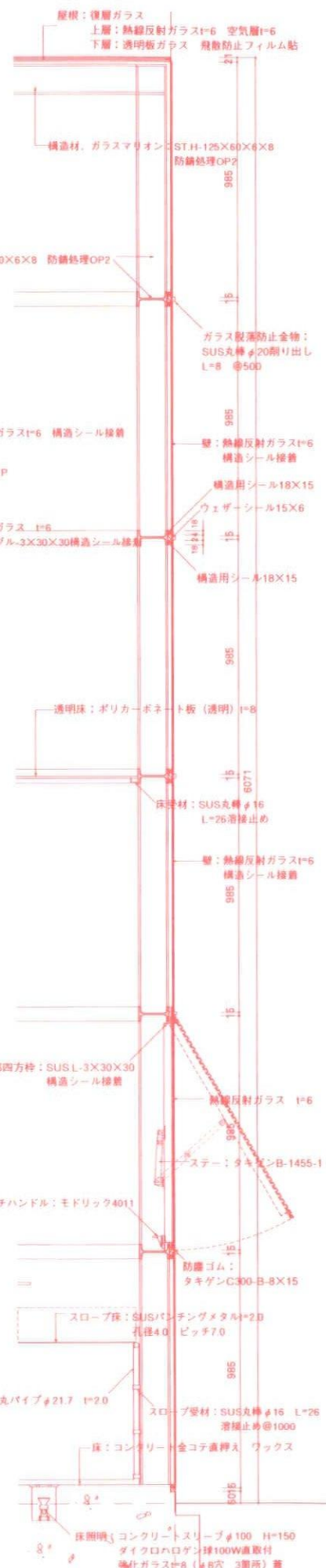
ガラス開口部平面詳細図 S=1:30

ディテール／キュビストの家

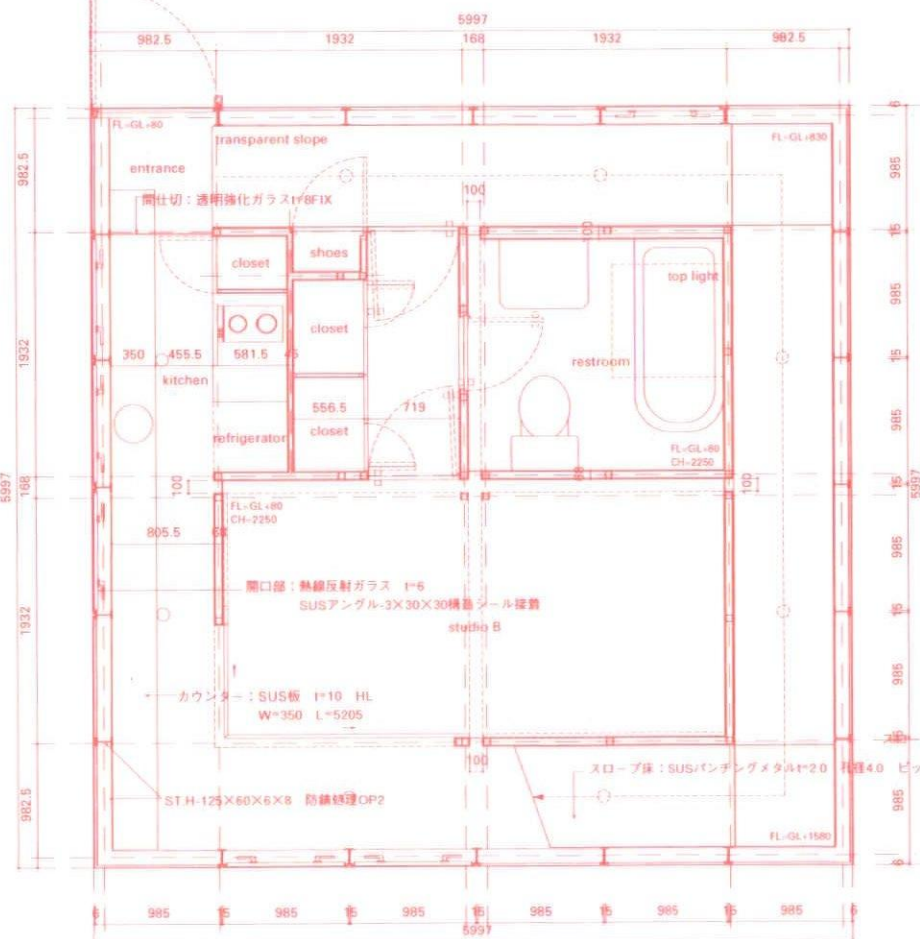
Detail / Cubist House



cubist house north-south section S=1:60



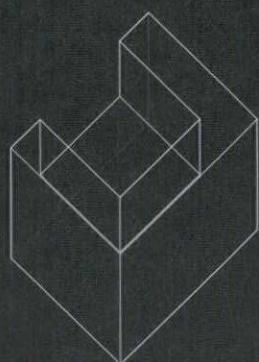
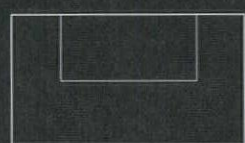
cubist house section detail S=1:25



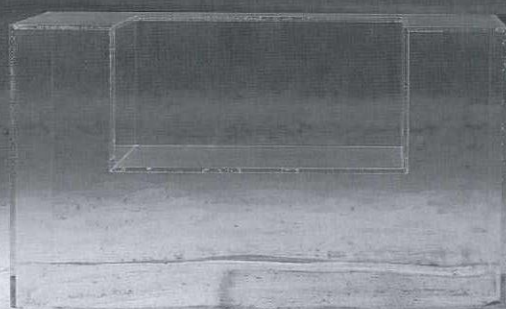
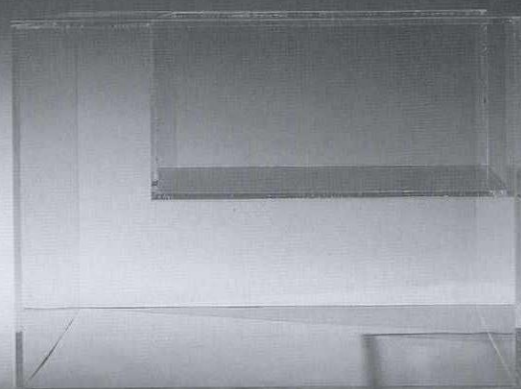
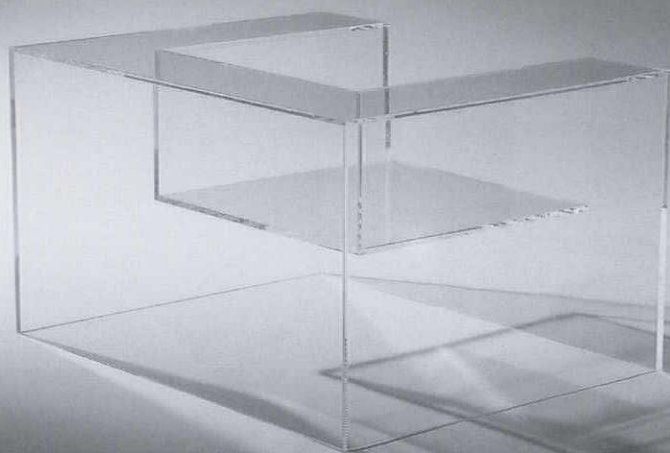
cubist house plan: level +1750mm S=1:60

SD9906

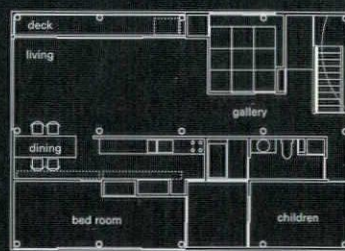
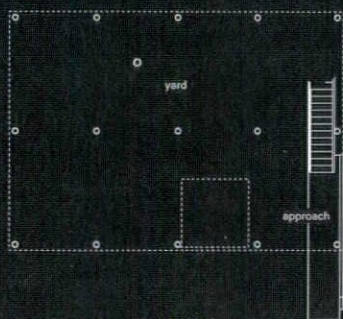
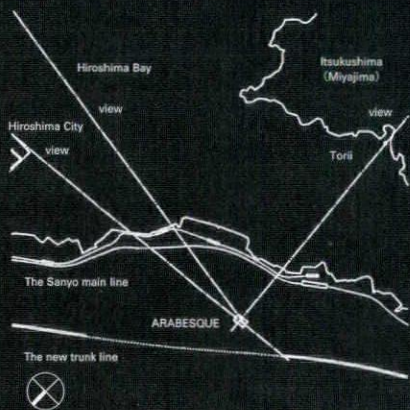
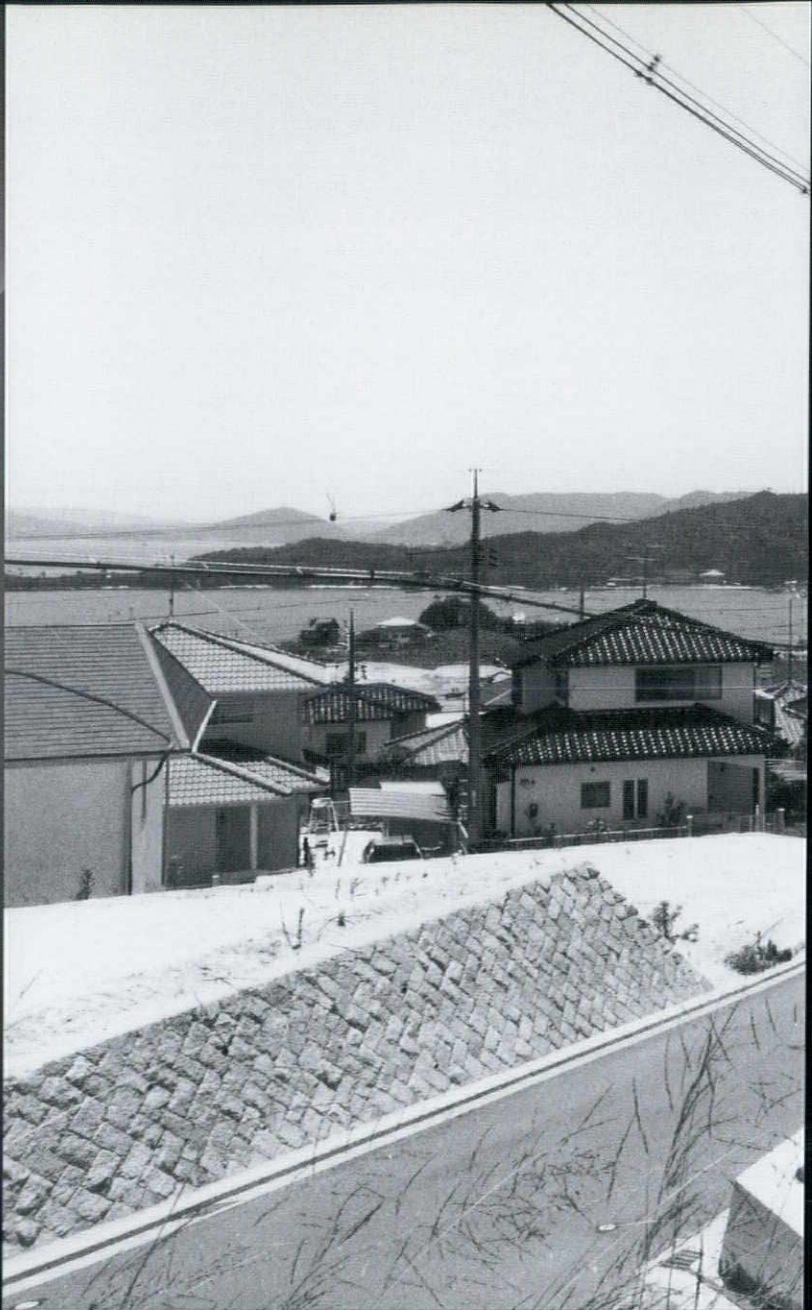
エアチェア
AIRCHAIR 1998



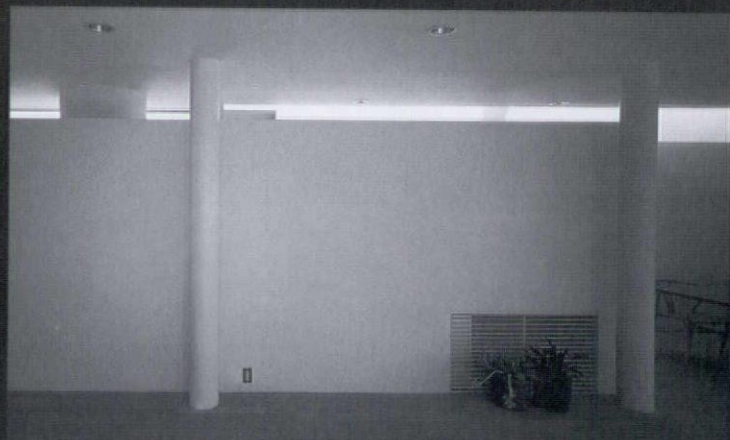
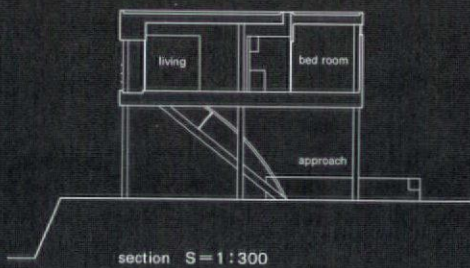
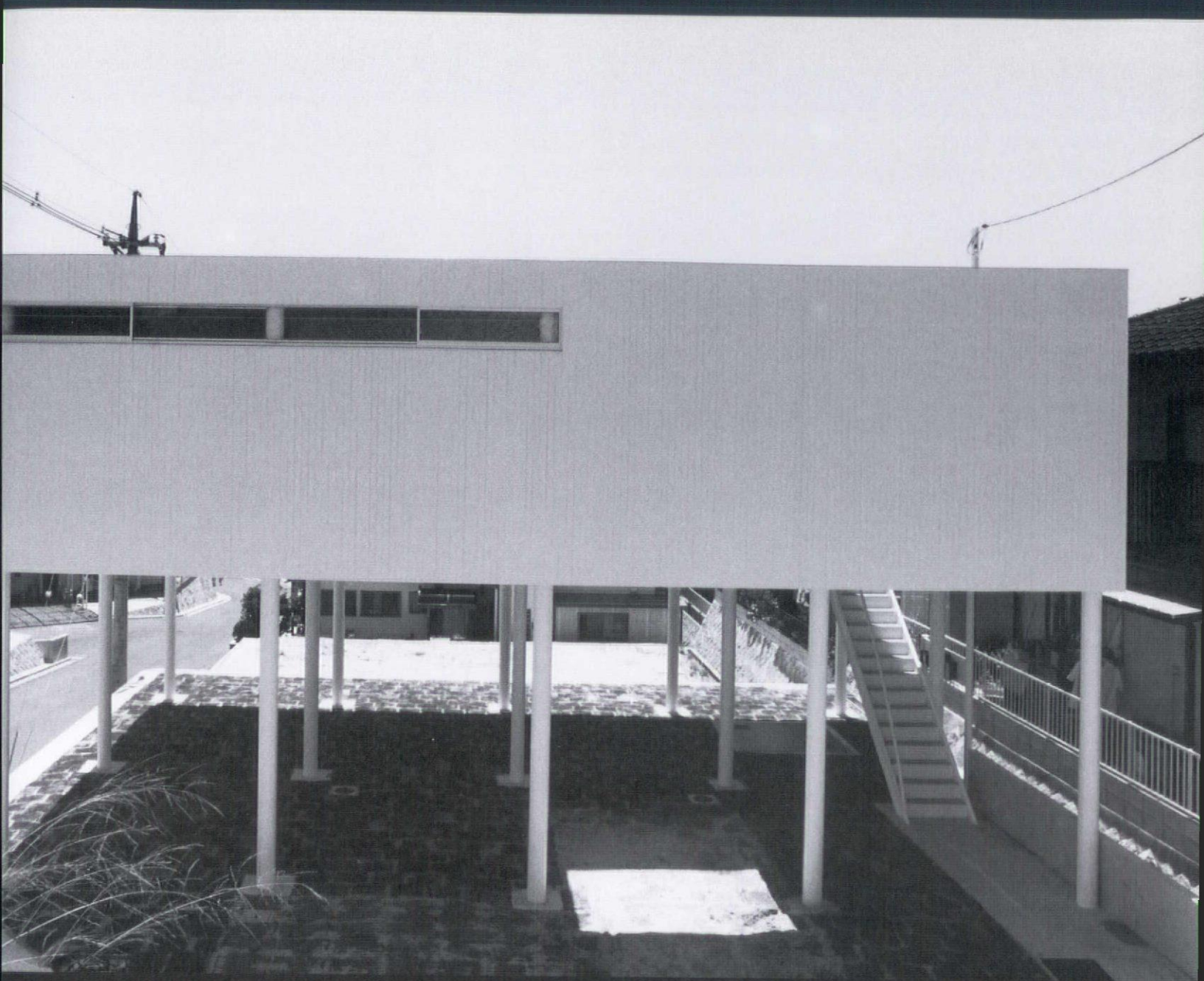
W=950 D=750 H=550

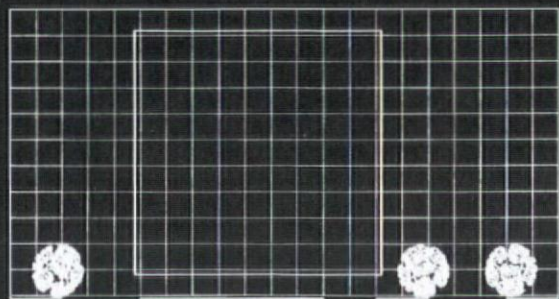


アラベスク
Arabesque 1987



日本三景のひとつ宮島を見下ろす高台につくられた新しい住宅団地の一角に、この敷地は位置している。将来隣地に建つであろう住宅群と瀬戸内海への眺望を考慮して、3人家族のための生活空間は丸柱によって地面から4.3m持ち上げられている。1階ピロティには芝生が植えられ、何にも使われない。全体は点（柱）と線（垂直平面）によって構成される。平面計画上のゾーニングでは全体の2分の1を居間等のパブリックゾーンとし、3分の1をプライベートゾーンとして北面に配し、それらを分断するかたちで厨房や浴室等のファンクショナルゾーンを組み込んだ。

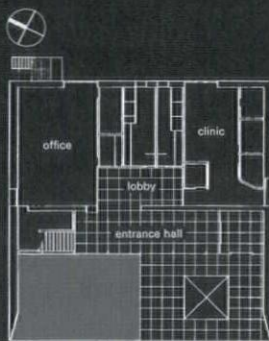
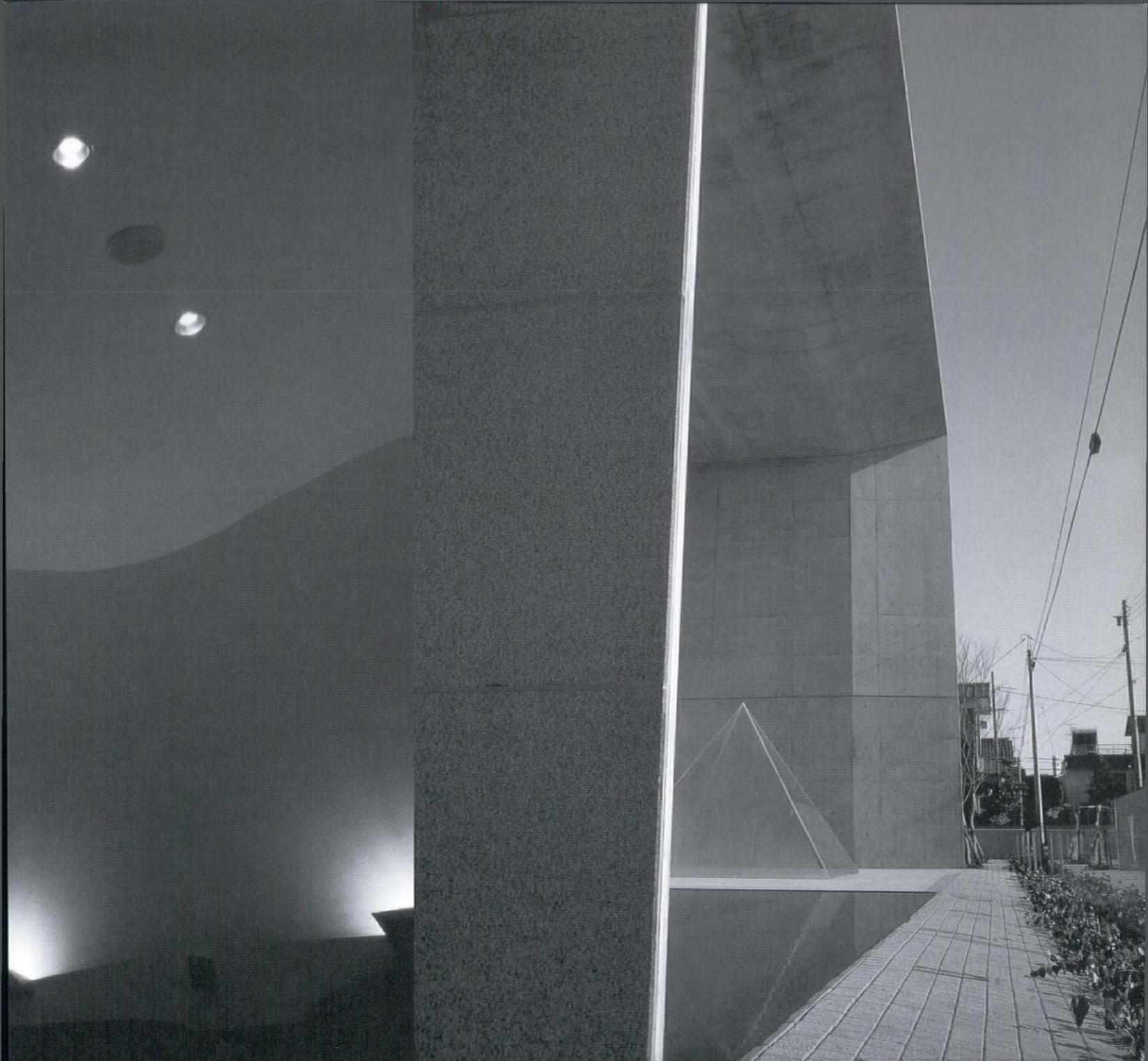




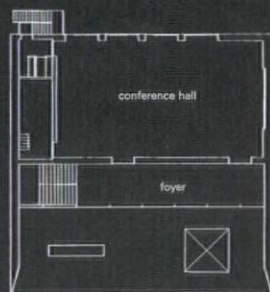
site plan S = 1:600



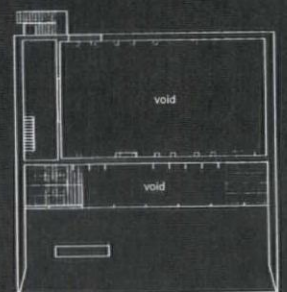
west elevation



first floor plan



2nd floor plan



3rd floor plan

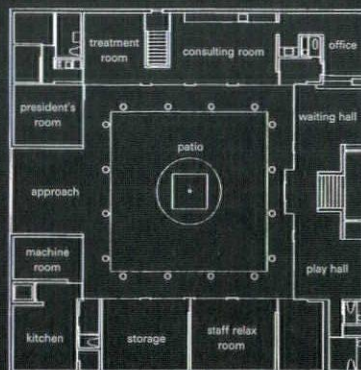
これは社団法人徳山歯科医師会のための、口腔保健センター、休日歯科診療所を含んだ会館である。約50m×25mの敷地の中に、20m×20m×10mの建物が配置されている。20m×20mの正方形を2分割したソリッドな空間とヴォイドな空間は、それぞれ会館としての機能空間と、都市に開いた公共空間として存在する。エントランスコート、水盤のある囲われた外部空間と、エントランスホール、階段、ホワイエを内包する透明な空間は、会館機能と都市をつなぐ緩衝空間

ながやレディースクリニック

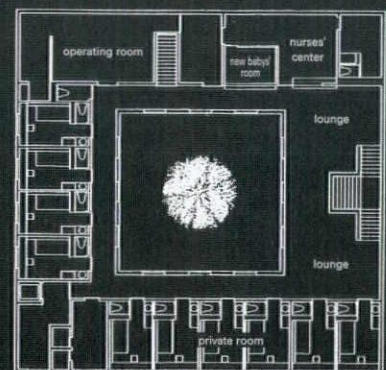
Nagaya Ladies Clinic 1997



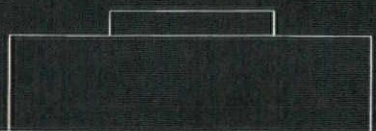
S = 1:10000



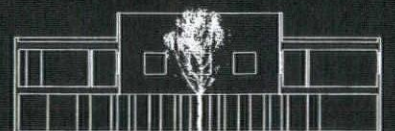
first floor plan S = 1:500



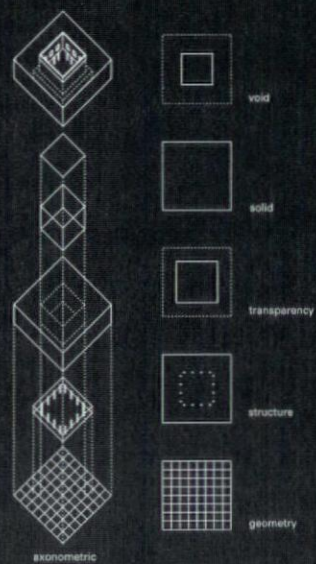
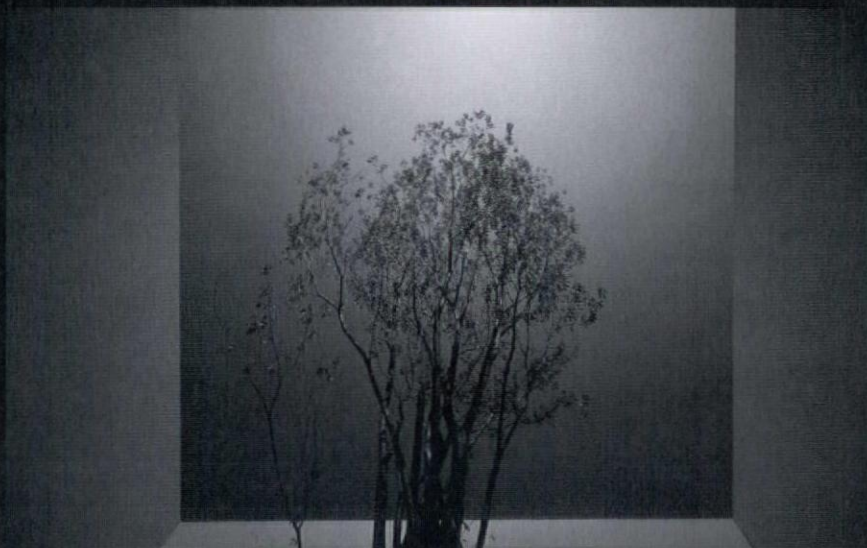
2nd floor plan



west elevation

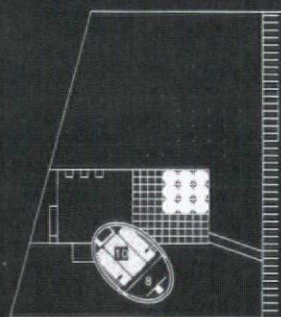
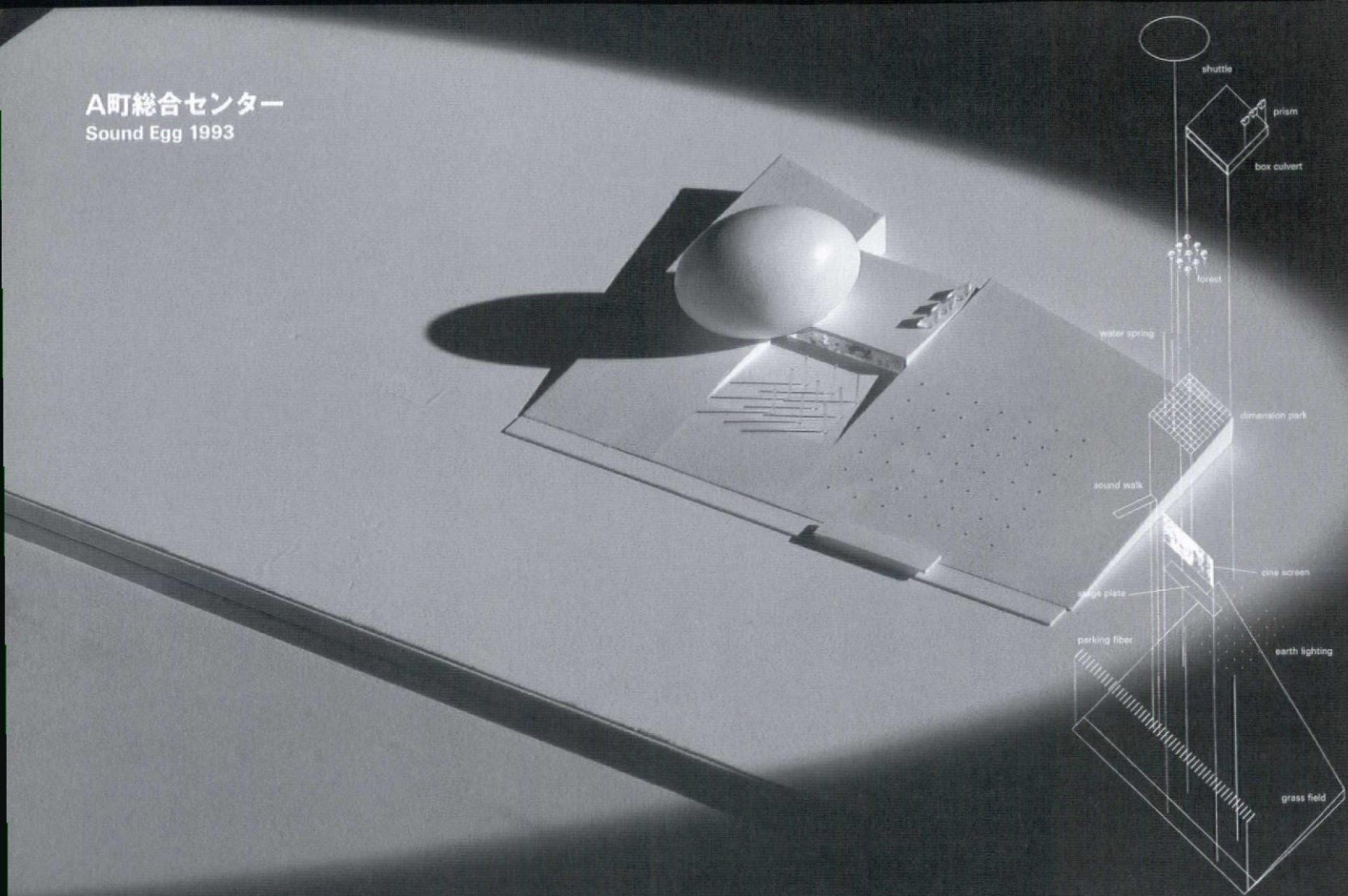


section

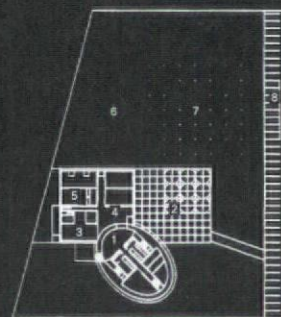


この建物は、内側に中庭を持つ産婦人科医院である。建物全体はXYZ方向にそれぞれ3mのグリッドで構成され、 $24\text{m} \times 24\text{m} \times 6\text{m}$ のソリッドな立方体の中心に、 $10\text{m} \times 10\text{m} \times 8\text{m}$ のボイドな空間が内在している。平面計画は一辺24mの正方形のフロアが2層に重ねられ、その中心に空に開かれた1辺10mの正方形の2層吹抜けの中庭がとられている。中庭は空を幾何学的に切り取り、中央に植えられた樹木と共に、光と風を建物内部に導き入れ、静かに空へ開かれている。この建物は光と風、自然が主題であり、内部を光に満たされた白い立方体である。

A町総合センター Sound Egg 1993

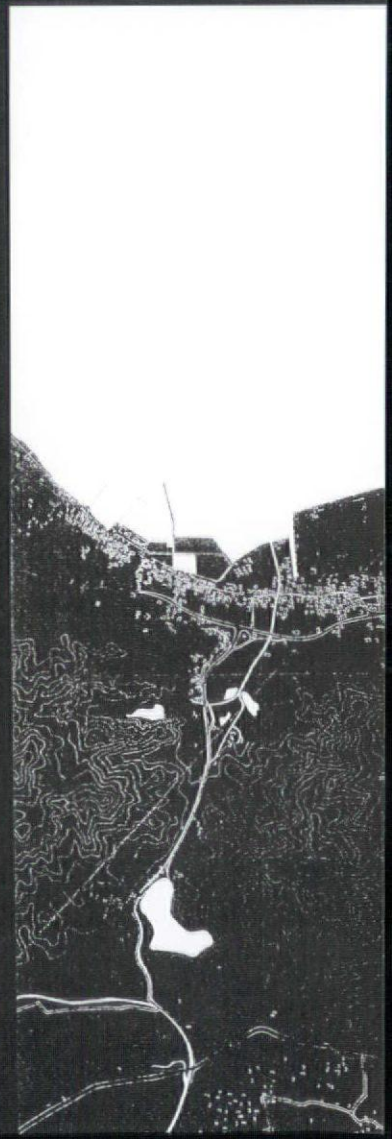


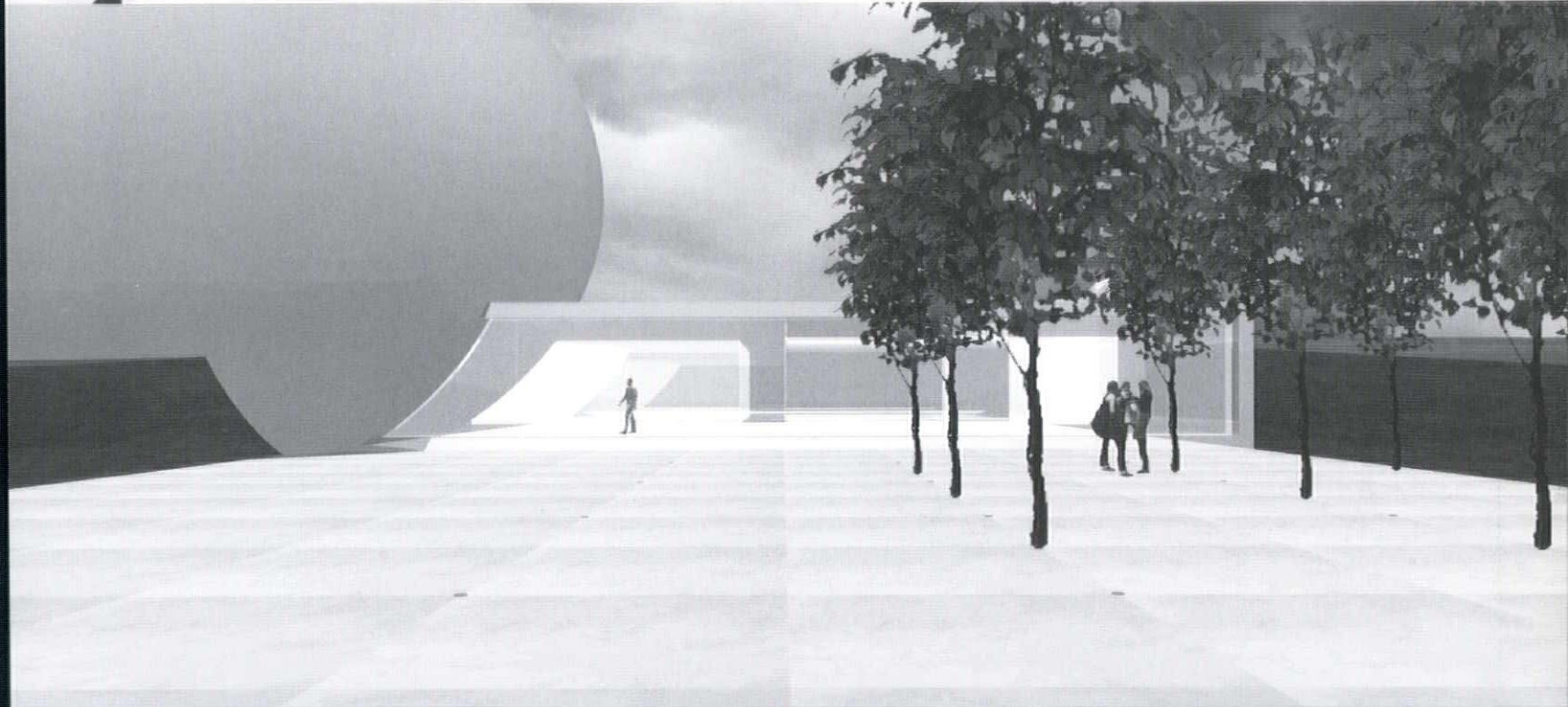
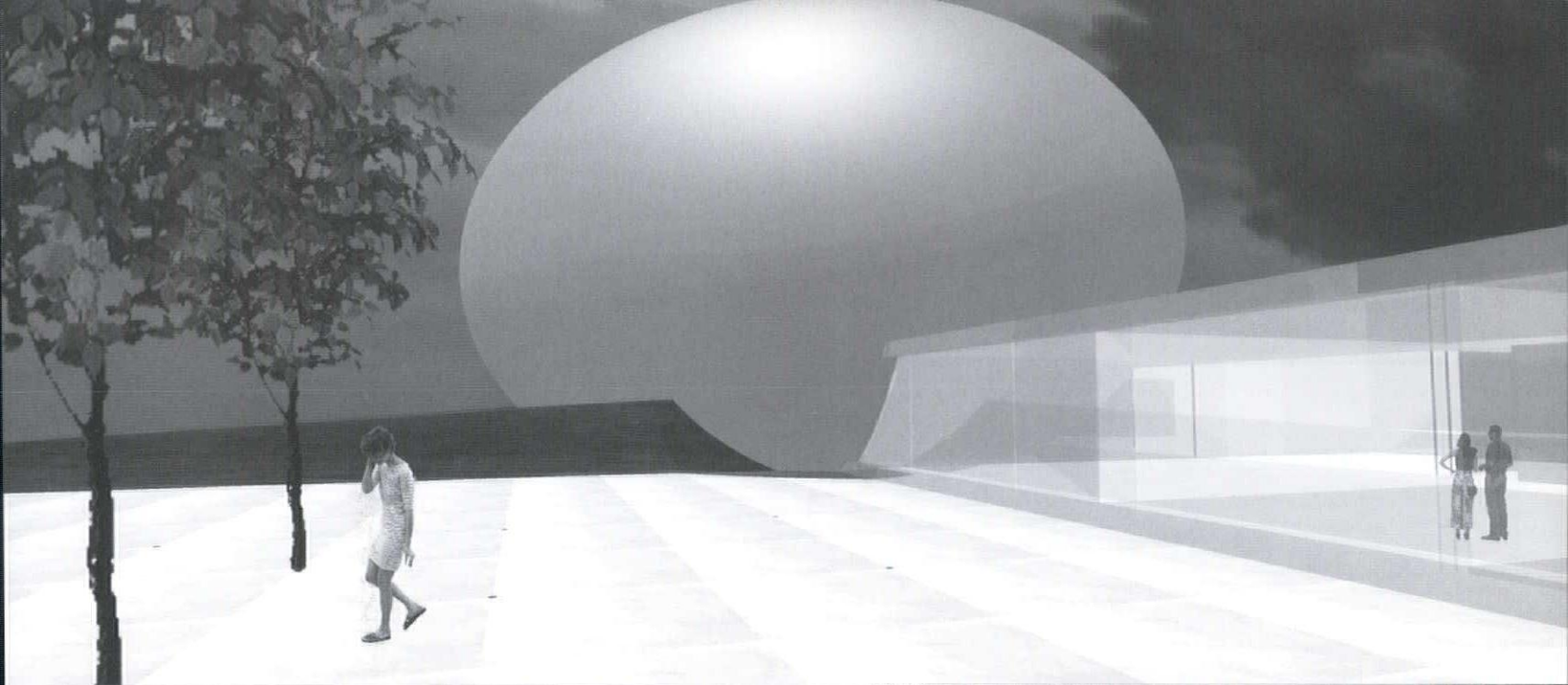
2nd floor plan



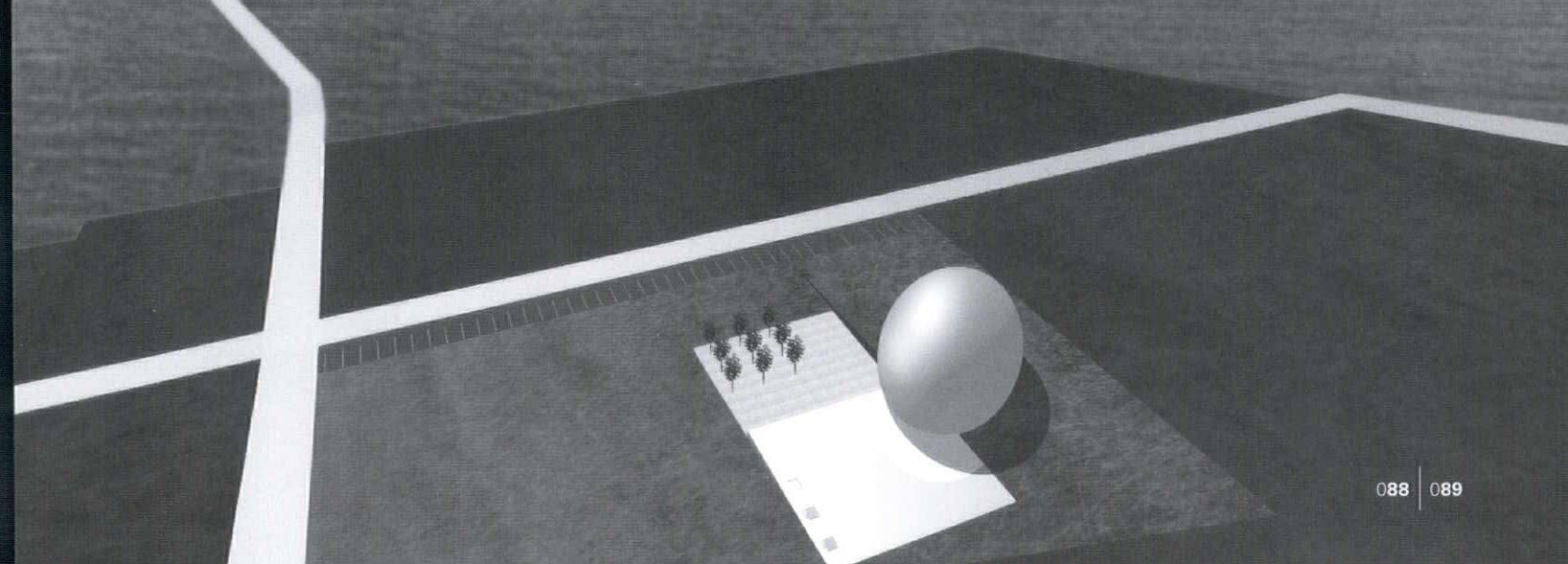
first floor plan S = 1 : 2500

- | | |
|------------------|------------------------|
| 1: foyer | 6: hill seeing the sea |
| 2: plaza | 7: outdoor hall |
| 3: office | 8: stage |
| 4: entrance hall | 9: parking |
| 5: tatami room | 10: hall |





この施設は瀬戸内海沿いの町、埋立地の一角に計画された公民館と多目的ホールを内包する複合施設である。敷地は4度の傾斜を持たせ、海との境界に新しい関係を生む。30m×20mの卵型カプセルは、内外部共、楕円幾何学の空間を有し、370人ホールとして機能する。海を望む一辺50mのグラスフィールドはアンフィシアター、3000人フォーラムを可能にする。



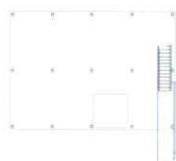
主要作品リスト

1987 Arabesque

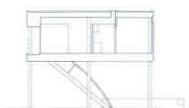
location: Hiroshima
program: residence
structural system:
steel frame, 2 stories
site area: 220.41m²
building area: 109.98m²
total floor area: 109.99m²



2nd floor plan
scale: 1/600



1st floor plan
scale: 1/600



section
scale: 1/600



section
scale: 1/600

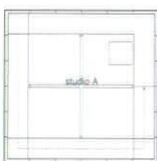


1989 Cubist House

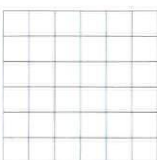
location: Yamaguchi
program: residence,
studio
structural system:
steel frame, 2 stories
site area: 102.07m²
building area: 35.96m²
total floor area: 71.92



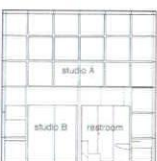
1st floor plan
scale: 1/300



2nd floor plan
scale: 1/300



elevation
scale: 1/300



section
scale: 1/300



1990 Minimalist House

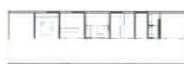
location: Yamaguchi
program: residence
structural system:
reinforced concret, 1 stories
site area: 249.57m²
building area: 174.96m²
total floor area: 174.96m²



roof plan - open
scale: 1/1000



roof plan - close
scale: 1/1000



1st floor plan - open
scale: 1/1000

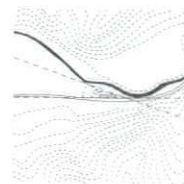


1st floor plan - close
scale: 1/1000



1991 Restore Station

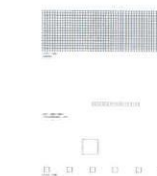
location: Hiroshima
program: multi-purpose
hall, restaurant, etc.
structural system:
steel frame, reinforced
concrete
site area: 3,094.28m²
building area: 485.91m²
total floor area: 405.90m²



map
scale: 1/20000



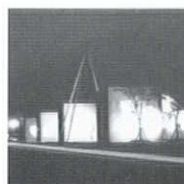
site plan
scale: 1/6000



diagram

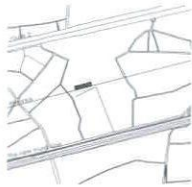


diagram



1992 X3

location: Yamaguchi
program: office
structural system:
steel frame, 6 stories
site area: 10,000m²
building area: 207.36m²
total floor area: 1,036.8m²



map
scale: 1/12500



1st floor plan
scale: 1/1500



3rd floor plan
scale: 1/1500

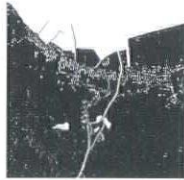


axonometric



1993 Sound Egg

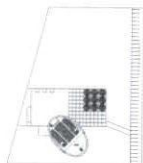
location: Yamaguchi
program: multi-purpose
hall, public hall, complex
structural system:
steel frame, reinforced
concrete, 2 stories
site area: 5,055.51m²
total floor area: 1,390.36



map
scale: 1/40000



1st floor plan
scale: 1/5000



2nd floor plan
scale: 1/5000



axonometric



1993 O City Water
Bureau

location: Hiroshima
program: water bureau
structural system:
steel frame, reinforced
concrete, 3 stories
building area: 816m²
total floor area: 1,468m²



site plan



1st floor plan
scale: 1/3000



2nd floor plan
scale: 1/3000



3rd floor plan
scale: 1/3000



1994 Tokuyama Dentist
Association Hall

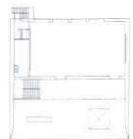
location: Yamaguchi
program: dentist
association hall
structural system:
reinforced concrete,
3 stories
total floor area: 627.36m²



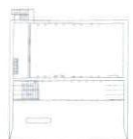
site plan
scale: 1/3000



1st floor plan
scale: 1/1500



2nd floor plan
scale: 1/1500



3rd floor plan
scale: 1/1500



1994 Yokohama
International Port Terminal
International Design
Competition

location: Kanagawa
program: port terminal
structural system:
steel frame, 3 stories
total floor area: 60,750m²



map
scale: 1/40000



roof plan
scale: 1/20000



elevation
scale: 1/20000



section
scale: 1/20000



1995 Hatsuta Yamaguchi
Corporation

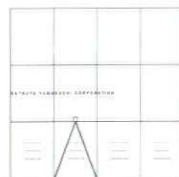
location: Yamaguchi
program:
office, storehouse
structural system:
steel frame, 3 stories
site area: 846.65m²
total floor area: 966.90m²



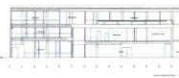
1st floor plan
scale: 1/1500



3rd floor plan
scale: 1/1500



elevation
scale: 1/1500



section
scale: 1/1500

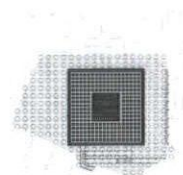


1995 International
Competition for Scottish
Architecture and Design
Center

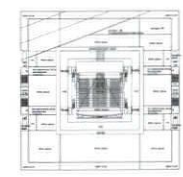
location: edinburgh UK
program: architectural
center, imax theater,
office, complex
total floor area: 31,425m²



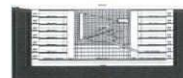
map
scale: 1/30000



site plan
scale: 1/8000



plan
scale: 1/4000

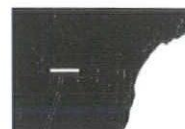


section
scale: 1/4000



1995 Minamata Memorial
Design Competition

location: Kumamoto
program: memorial
structural system:
reinforced concrete,
1 stories
site area: 3,000m²
total floor area: 216m²



plan
scale: 1/10000



section
scale: 1/40000



concept drawing



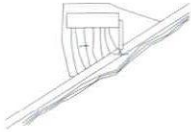
concept drawing



image

1996 Isobe Studio & Residence

location: Yamaguchi
program: studio, residence
structural system: reinforced concrete, steel frame, 2 stories
total floor area: 166.33m²



site plan
scale: 1/2500



2nd floor plan
scale: 1/1000



1st floor plan
scale: 1/1000



axonometric



1996 Kid Museum

location: Yamaguchi
program: multi-purpose hall, complex
structural system: steel frame, 2 stories
site area: 7,761.18m²
total floor area: 2,172.93m²



map
scale: 1/40000



1st floor plan
scale: 1/3000



section
scale: 1/3000



axonometric



1996 Glass House

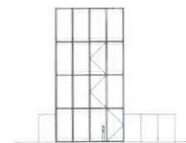
location: Hiroshima
program: studio, residence
structural system: steel frame, 3 stories
site area: 253.14m²
building area: 91.16m²
total floor area: 273.48m²



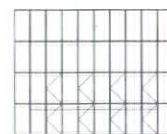
map
scale: 1/65000



3rd floor plan
scale: 1/700



elevation
scale: 1/700

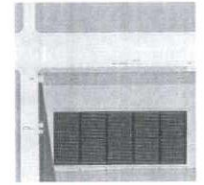


elevation
scale: 1/700



1996 Kansai National Diet Library Design Competition

location: Kyoto
program: library
structural system: reinforced concrete, 1 basements, 3 stories
total floor area: 59,200m²



site plan
scale: 1/12000



1st floor plan
scale: 1/8000



3rd floor plan
scale: 1/8000



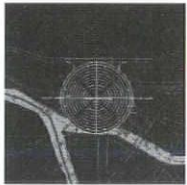
section
scale: 1/8000



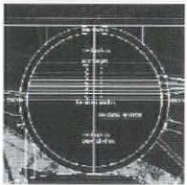
perspective

1996 Hiroshima Mon
Amour

location: Hiroshima
program: highway,
railway, station, bus
terminal, parking, movie
theater, library, museum,
plaza, ty - radio satellite
studio, office, etc.



map
scale: 1/50000



site plan
scale: 1/25000

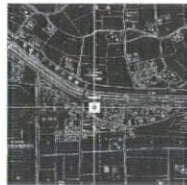


image

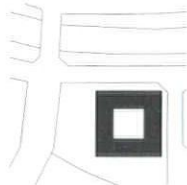
transbody/super traffic
transact/transcend/transcript/trar
transfigure/transform/transgress/
transit/translate/transmigrate/trar
transmute/transparent/transpose
language/telephone/memory/tim
virus/train/airplane/hip/telectric
television/fashion/fantasy/vision/
energy/noise/shock/emotion/mus
sports/money/festival/liberty/free
image/face/ego/taxi/balance/opir
code/mind/sense/pain/song/mod

1997 Nagaya Ladies Clinic

location: Yamaguchi
program: ladies clinic
structural system:
reinforced concrete,
2 stories
site area: 1,469.04m²
total floor area: 797.33m²



map
scale: 1/15000



site plan
scale: 1/3000



1st floor plan
scale: 1/1500



elevation
scale: 1/1500



1997 Glass Housing

location: Hiroshima
program: housing
structural system:
steel frame and
reinforced concrete,
3 basements, 16 stories
total floor area:
131,071.5m²



site plan
scale: 1/30000



plan
scale: 1/15000



elevation
scale: 1/15000

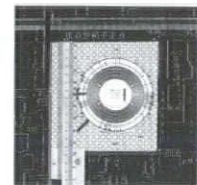


housing unit plan
scale: 1/1000



1996 Hirata-machi Town
Center Design
Competition

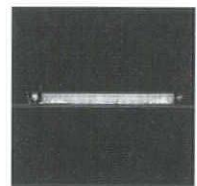
location: Yamagata
program: town center
structural system:
reinforced concrete,
1 stories
total floor area: 3,986m²



site plan
scale: 1/9000



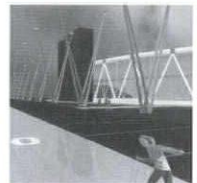
1st floor plan
scale: 1/3000



elevation
scale: 1/3000

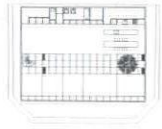


model



1998 White Residence

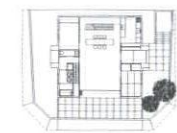
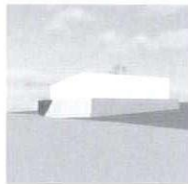
location: Hiroshima
program: residence
structural system:
reinforced concrete, 2 stories
site area: 307.98m²
building area: 167.67m²
total floor area: 184.68m²



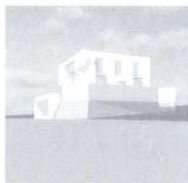
2nd floor plan - scheme 1
scale: 1/1000



diagram - scheme 1

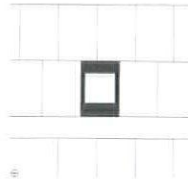


2nd floor plan - scheme 2
scale: 1/1000



1998 White Cube

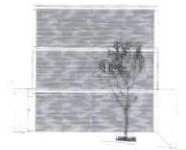
location: Hiroshima
program: residence
structural system:
reinforced concrete, 3 stories
site area: 161.75m²
building area: 60.60m²
total floor area: 132.37m²



site plan
scale: 1/2000



3rd floor plan
scale: 1/1500



elevation
scale: 1/500



section
scale: 1/500

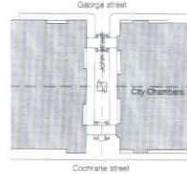


1999 The Cube / Glasgow Project

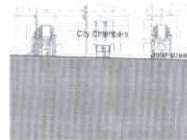
location: Glasgow UK
program: installation
structural system:
steel frame, 1 stories
site area: 25m²
building area: 25m²
total floor area: 25m²



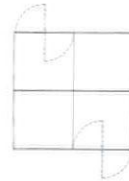
map
scale: 1/70000



site plan
scale: 1/3500



section
scale: 1/3500

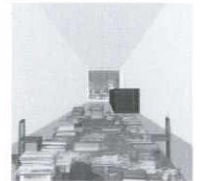


plan
scale: 1/300



1999 Modern Abstract House

program: residence
size:
The Cube 6m × 6m × 6m
The Tube 4m × 4m × 16m
The Grass 8m × 8m × 2.5m





略歴

1955年 山口県生まれ
 1978年 日本大学芸術学部卒業
 1977年 ワシントン州立大学建築学科交換留学
 1984年 文化庁派遣芸術家在外研修員／在ニューヨーク
 1984年 ボール・ルドルフ事務所（ニューヨーク）
 1985年 アルキテクトニカ（ニューヨーク）
 1986年 小川晋一アトリエ設立
 1995年 小川晋一都市建築設計事務所に改称
 1994年 近畿大学工学部助教授

受賞

1989年 第8回SDレビュー入選
 1990年 第9回SDレビュー入選・朝倉賞
 1991年 第10回SDレビュー入選
 1992年 第11回SDレビュー入選
 1992年 商環境デザイン賞'92優秀賞
 1995年 横浜港国際客船ターミナル
 国際建築設計競技選外佳作入賞
 1995年 水俣メモリアル国際設計競技 準佳作入賞
 1996年 CSデザイン賞 全賞
 1996年 スコットランド建築デザインセンター
 国際公開コンペ（イギリス）佳作入賞
 1996年 平田町タウンセンター施設整備公開設計競技入賞

Shinichi Ogawa

profile

1955 Born in Yamaguchi, Japan
 1978 Received B.F.A from Nihon University
 1977 Awarded Exchange Student Scholarship
 for Washington State University
 1984 Awarded Japanese Government Fellowship
 to study abroad / New York
 1986 Established Shinichi Ogawa & Associates
 1994 Associate Professor, Kinki University awards

Awards

1989-92 The 8th, 9th, 10th, 11th SD Review Award
 1995 Honorary mention, Yokohama International
 Port Terminal International Design Competition
 1995 The Fourth Prize,
 Minamata Memorial Design Competition
 1996 Honorable mention, International Competition
 for Scottish Architecture and Design Center
 1996 Special Prize, Hirata-machi Town Center
 design Competition

小川晋一都市建築設計事務所

Shinichi Ogawa & Associates/ urbanist architect

小川晋一／Shinichi Ogawa

塚田哲也／Tetsuya Tsukada
 土井一秀／Kazuhide Doi
 土井良介／Ryosuke Doi
 河江正雄／Masao Kawae

元所員／former staffs

山下貴浩／Takashi Yamashita

鳥羽知夫／Tomoo Toba
 三分一博志／Hiroshi Sambuichi
 西尾通哲／Michiaki Nishio
 小曾根隆夫／Takao Kosone

協力／collaborator

村中裕貴／Yuki Muranaka
 土井久顕／Hisaaki Doi

CG製作協力／Computer Graphics

前田建設工業／Maeda Corporation p.34-35 下

フォト・クレジット／photo credits

新建築写真部／Shinken-chiku-sha p.51-53、p.56-57、
 p.58左上、左下、右下、p.59上、右下、p.60-67、p.72-76、
 p.82左、p.83下、p.85-87、p.90左から2番目、右下
 堀内広治／Koji Horiuchi p.50、P.54
 高瀬良夫（GA photographers）／Yoshio Takase（GA
 photographers） p.88上
 古館克明／Katsuaki Furudate p.82-83上、p.90左下
 栗原 弘／Hiroshi Kurihara p.81
 上記以外、小川晋一都市建築設計事務所
 other picture, Shinichi Ogawa & Associates/urbanist
 architect

著者略歴

鶴沢 隆（Takashi Uzawa）

建築家。1974年東京工業大学建築学科卒業後、大学院博士
 課程を経て、1980-83年フィレンツェ大学建築学部で留学。
 主な著書には、『ジュゼッペ・テラーニ』（監修／INAX出
 版）、『球と迷宮』（M.タフーリ著／共訳）などがある。作品
 には〈ハウス117〉1995年、CD-ROM『NOWHERE』
 （Hart LAND刊）など。『未来都市の考古学』展、1996年
 （東京都現代美術館など）や『ジュゼッペ・テラーニ』展、
 1998年（水戸芸術館）を企画・監修。現在、筑波大学芸術
 学系助教授。

岡河 貢（Mitsugu Okagawa）

建築家・東京工業大学大学院博士課程修了。1995-1996年
 バリ〈ラ・ヴィレット公園〉にてバーナード・チュミ事務
 所に参加、〈フォリーL-6〉担当。現在、広島大学建築設計
 学助教授。

アラン・ジョンストン（Alan Johnston）

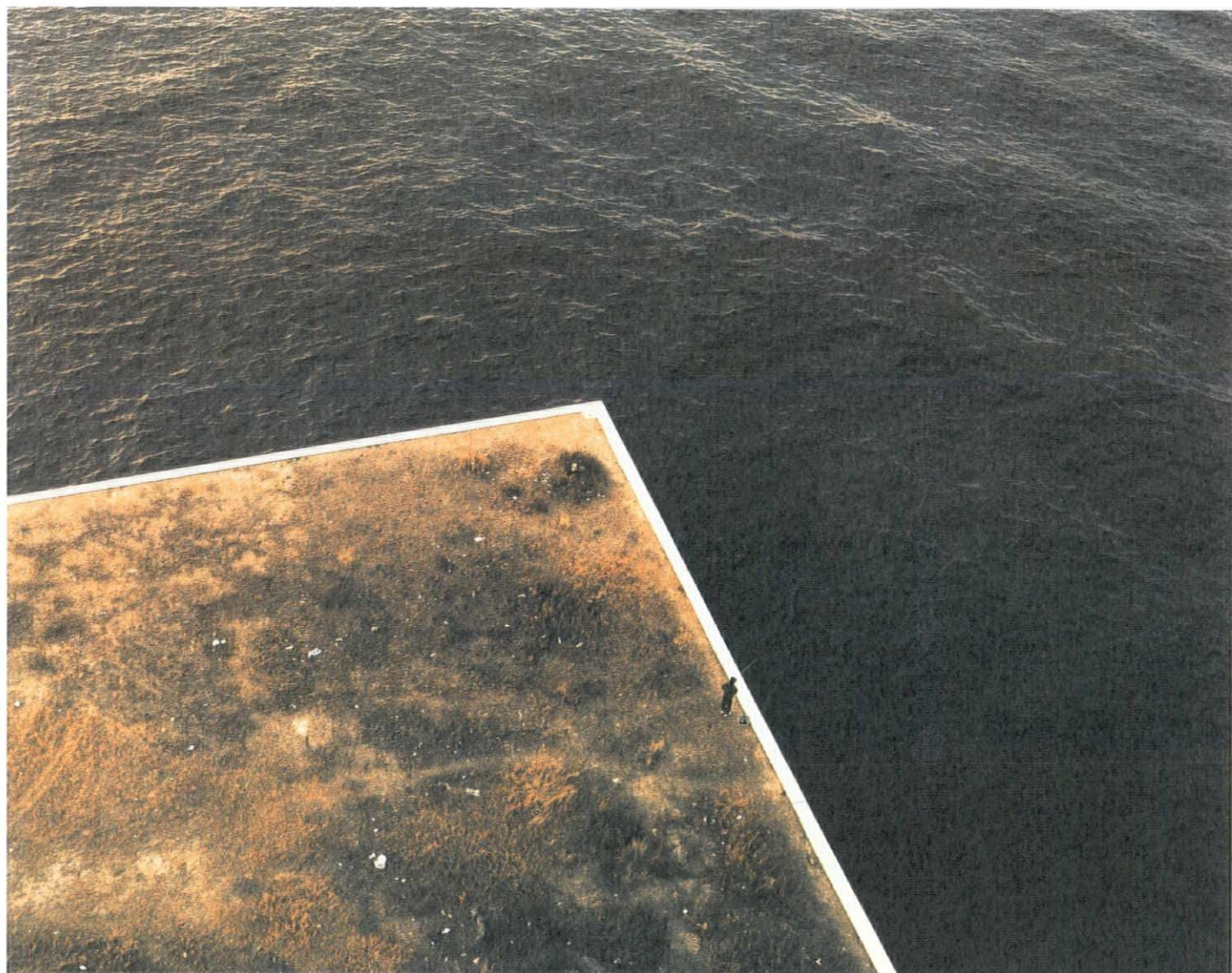
日本、アメリカ、ヨーロッパ各国で作品を発表しているア
 ーティスト。彼の作品には建築との極めて緊密な関係性が
 存在している。ヴィトゲンシュタイン邸で彼が行ったイン
 スタレーションはそのひとつである。

The Entropic Forest

Urban Infrastructure

photographs Heiner Schilling text Hiroo Yamagata



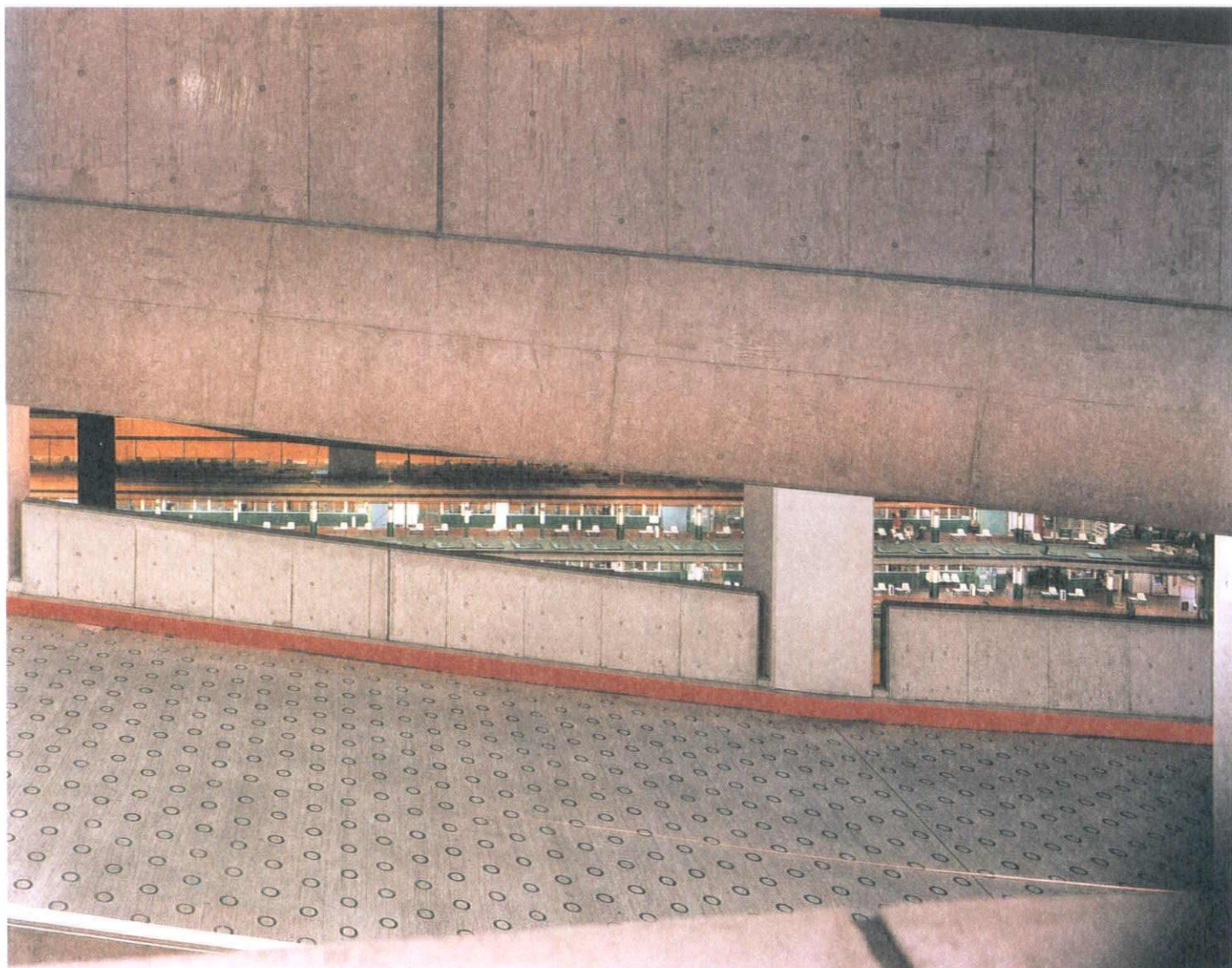


photograph 3

けると、そこはかつての旧中央防波堤外だ。ここにできたのが、難民用臨時シェルター群。埋め立て地の数多い公共施設群の中で、まともに使われているのはこれくらいのもんだろう。10年前の一件以降も、中央アジアの紛争にともなう難民数はさらに増え、現在は数万人にのぼるといわれる。一応は非公式な入国者なので、本土からは隔離された(ように見える)この場所に集めてあり、夜にはそこに通じる海底トンネルも封鎖される。でも明確な難民対策が打ち出されないまま、かといって追い出すこともできないまま数年がたつうちに、夜にまぎれて泳いで「本土」にわたる連中がますます増えてきている。本土側でも貴重な労働力となっているため、ほとんど黙認状態となっており、最近ではボートまで手に入れて公然と通勤する者さえ見られる。不法労働ゆえに低賃金のはずだったか、独自の組合組織のようなものまでつくりあげて交渉力を高めるようになり、所得課税がない分、平均的な日本人労働者より高い手取りを誇る者さえ多いとされる。い

っそう正式に労働ビザを出して課税しようという動きもあるが、国内の純血右派以上に当の難民たちの大反対にあつて、状況はこの5年間でまったく進展をみない。ここだけがこの茫漠とした埋め立て地の中で唯一活気らしきもののある部分かもしれない。夜になっても、人気とごわめきの絶えない都内でも数少ない場所の一つだ。対岸の「本土」には、半分うち捨てられた倉庫群と、半世紀以上も前に建った高層ビル(ビル群にならはずではあった)が、まばりに歯抜け状に立ち並んでいる。

競技場のまわりには、なにもない、たれもない平べったい土地が所在なげに広がっていて、やがてつぎあたる海岸線はフラクタルのかけらもなくどこまでもまっすぐで直角で、それに接する海までぐいぐいこもつくりものめいていて、たまにそこで釣り人を見られることもあるけれど、何かが釣れた場面にはついぞお目にうつたことがない。



photograph 2

『埋め立て地。』

たまたま天気がいまいちだったろうか。たかりが地方リーグ戦でこれほどの人出は久しぶりだ、という。といってもスタンドにはそれなりに人はいるけれど、ちょっと奥にいけばシートはほとんどが空席で、ただ上のガラスの向こうの特等席の人々ばかり、妙にお行儀よくおさまっている。

前回この程度にでも人が集まったのは、10年ほど前に近隣国の合併分離をめぐる紛争から起きた難民騒動のときくらいだった。そのときには、あちこちから上陸してきた5,000人以上の難民たちが集められてきた。そういう例外的な時をのぞけば、このあたりにボコボコ乱立した競技場や各種施設に、チラホラ以上の人影が見られることはあまりない。最終処分場が次々に満杯となって土地供給は増大する一方で、土地の業務需要は減るばかりとなっているし、住宅利用にしても埋め立て地はもともと住宅地としてはあまり人気のなかった地域だ。風は強いし、暴風対策をしたらしたで、かなり古い土地でも地盤から残留ガスが低いところになり、中

毒ざわざわ起きる。その対策として、まばらに家の建ち並ぶ土地を、メタン濃度測定ロボットだけがゆっくりと移動し、そのまわりをガラスと野良犬がうろついている——このあたりではそんな光景があちこちで見られる。

処分場の利用計画の見通しも立たぬまま、とりあえずスーパーブロックを切っただけのもの、ほとんどなにも建っていない。すでに前世紀末に、臨海副都心の一部で見られたような、広大な空き地がひたすら続く風景がいたるところで展開している。2010年頃から、なんとかそれを埋めようとしてほとんど思いっ付きのようにならざる理屈をそのたびごとにこじつけながら展示場、スタジアム2つ、各種大型厚生施設、新都庁を含む新行政区画(但しまだ計画半ば)がぽつぽつとつづられていった。その間を、広幅員の道路が縫うように走っているが、いま、そこから垣間見られる施設はほとんどが閑散としている。

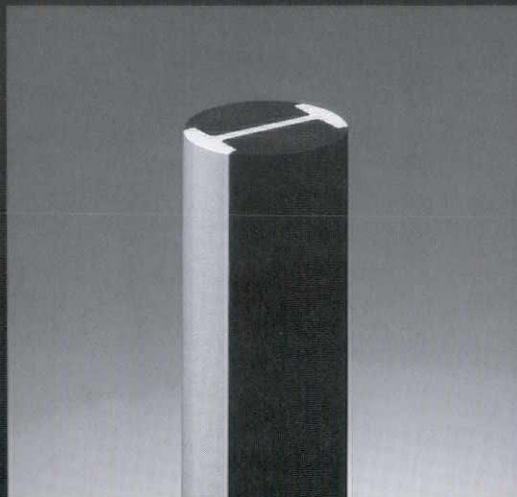
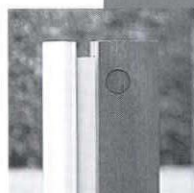
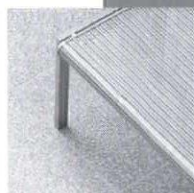
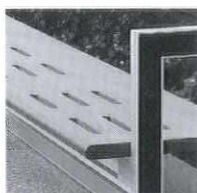
人影のない施設を垣間見つつ、コンクリートのかわたまり状の海底トンネルをぬ



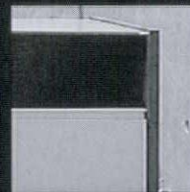
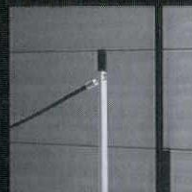
photograph 1

NECESS LANDSCAPE PRODUCTS

求められる働きに対して
必要最小で最大の働きをするようデザインされた
シンプルかつ機能的な都市景観材...
その新たな方向性



NECESS(ネセス) LANDSCAPE PRODUCTSは、都市における景観形成を行うアイテムを豊富に用意しています。場と場に境界を設けるボラードやガードフェンスをはじめ、街を行き交う人々が利用するベンチ、トラッシュボックス、アッシュトレイそして、光による明かり機能と演出性をもつ照明灯や案内、誘導サインシステムなどがあります。いずれも軽快感を持ち、部材構成と素材感、色彩、シャープなプロポーションとデザインフォルムに至る全体的な統一感をもって構成されています。そして、ことさら主張するのではなく、都市景観の中のひとつの道具として役割を演じつつ、単体として機能することを使命としています。構造においても、自重・水平荷重・垂直荷重の力に対し、マグネシウム、シリコン、銅などの含有量を変えた高強度アルミ形材を主材に用い、強度・耐久性・耐候性を高めることで、最適な「材」の使用を求めました。また、緩衝材にゴムや再生木を採り入れることにより、人に触れられる道具として安全性・触感・視覚的やさしさをもたせています。YKK APは、NECESS LANDSCAPE PRODUCTSの提案において、景観材としての機能の達成の先には、道具としての存在を感じさせないコンテキストと共生する本当の姿があると考えます。



YKK
AP

YKKア-キテクチュラルプロダクツ株式会社

東京都千代田区神田和泉町1

YKK APホームページ <http://www.ykkap.co.jp/>

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。
但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みが全く無いもの、
コンペの応募作品（公開、指名、入選、落選を問わず）は対象外とする。
応募作品点数は原則として1人1点に限る（グループの場合もメンバーが同じであれば1点のみ）。

[応募者の資格]
特になし。

SDレビュー1999

第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

Space Design

SD Review 1999

[主催]

鹿島出版会 SD 編集部

【審査員】

林 昌二 (建築家)

播 繁 (構造家)

芦原太郎 (建築家)

小川晋一 (建築家、近畿大学工学部助教授)

【鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞】

入選展に展示された作品の中から、鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞を選び記念品を贈呈します。

発表はSD1999年12月号誌上にて行う予定。

The 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

募集要項

【提出物】

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。

2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)

以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内にまとめたもの。パネル化は不可(クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します)。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号)、共同設計者名、設計者略歴(入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします)。

【応募の受付】

・開始 1999年6月22日(火)

・締切 6月30日(水)

郵送または持参のこと。(持参の場合は平日の午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)受付後、受領通知を発送いたします。7月6日までに通知が届かない時はSD編集部へお問い合わせ下さい。

【提出先】

〒107-8345 東京都港区赤坂6-5-13

鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係

TEL 03-5561-2555 FAX 03-5561-2565

(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分鹿島建設赤坂別館4F)

【結果通知】

前記の審査員により15点前後が選抜された後、入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

【提出物の返却】

提出物(図面、添付書類等)は、1999年8月17日(火)から9月24日(金)までの平日午前11時から正午まで、午後1時から午後5時までの間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに来られた場合に限り、返却します。

但し、梱包材、クリアファイルなどはお返しできません。

【SDレビュー1999入選展】

東京展

期間: 1999年9月15日—9月26日(予定)

会場: 東京都渋谷区猿楽町18-8

代官山ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム
大阪展

期間: 1999年9月30日—10月11日(予定)

会場: 大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター

【入選者の出展】

入選者は通知後、指定期間(約40日間)以内に、展覧会に出展するための図面、模型、その他のプレゼンテーションを製作し、後日指定の日時、場所に搬入する。この作品は、SD1999年12月号に掲載され、誌上発表される。入選者には製作費用として、一律5万円が支払われる。

【誌上発表】

SD1999年12月号(予定)

【お問い合わせ】

SDレビュー1999についての御質問は、SD編集部へハガキまたはFAXにてお問い合わせ下さい。宛先は提出覧参照のこと

PLUS

ヒトの動きに、ベストフィット。

これからのオフィスチェアに求められるもの、それは人の身体の動きに対応するしなやかさです。プラスの「オーバルチェア」は、身体の動きや構造を研究し、背と座が柔軟になるフレキシブルペンディング機構を採用。さらに、オフィスに美しい印象を与える、オーバル(楕円)形状を中心とした柔らかな曲線美…。従来のオフィスチェアには、見られない三次元フォルムが、オフィスシーンを一新し、よりアクティブなワークシーンを創造します。



オーバルチェア *Oval chair*

しなやかさは、ワーカールのパワーになる。



プラス株式会社 〒112東京都文京区音羽1-20-11 営業本部TEL03-3942-3200

インターネットホームページ ● <http://www.plus.co.jp>

Exhibition Report

展覧会レポート

村井修写真展「港まちグラフィックス」

会期:

1999年5月7日(金)~19日(木)

会場:

アユミギャラリー

自然の威力がプラスする
造形と色彩の「真」「写」

羽原肅郎

今回の展覧会の村井修氏自身の「趣意」は次のようなものである。

建築や彫刻を対象とする仕事のはざまで、折々に見つめていた、道草を食むような行為に、何故か一層の感応を覚えはじめています。それは世紀末というけじめに促されるというよりも、齢のなせる業かも知れません。

その一端を「港まちグラフィックス」として気負いなく発表することを思いました。

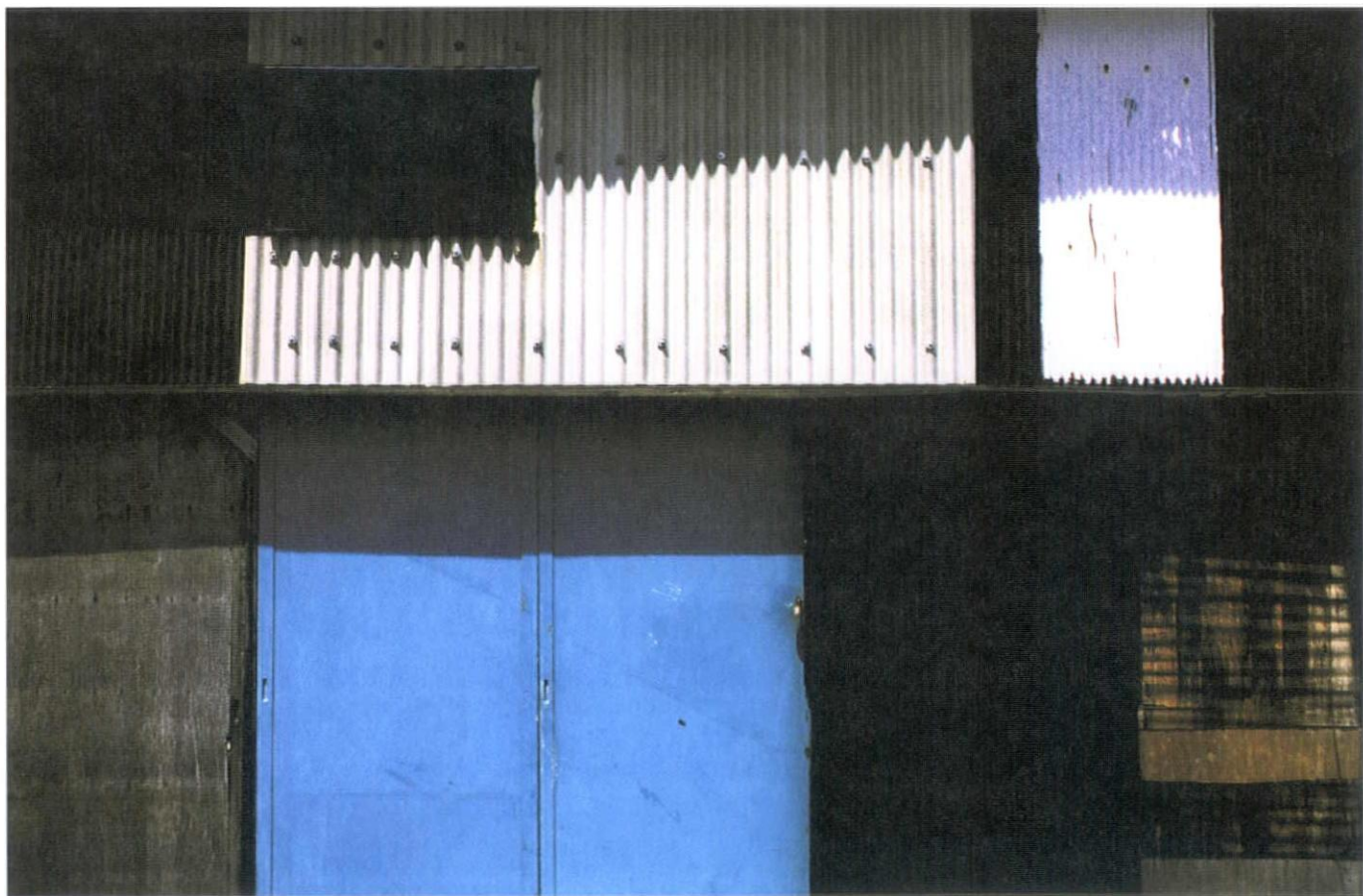
港まちで見つけた人間の無意識の営為をものが経た時間と空間に思いを馳せた記録ですが、うつろうそれらの図様は、錆び色の奥に琴線に触れる美しさが潜んでいるように思えました。絵画に近づく危惧を覚えながらも、冷徹なレンズを通して現実の断片は、これまで主に発表してきたモノクローム写真とは異なった、表現の拘束を解く予感さえあります。さらに、事象の内奥をみつめ、私なりの世界が写真で構築できればと思いますが…以下略

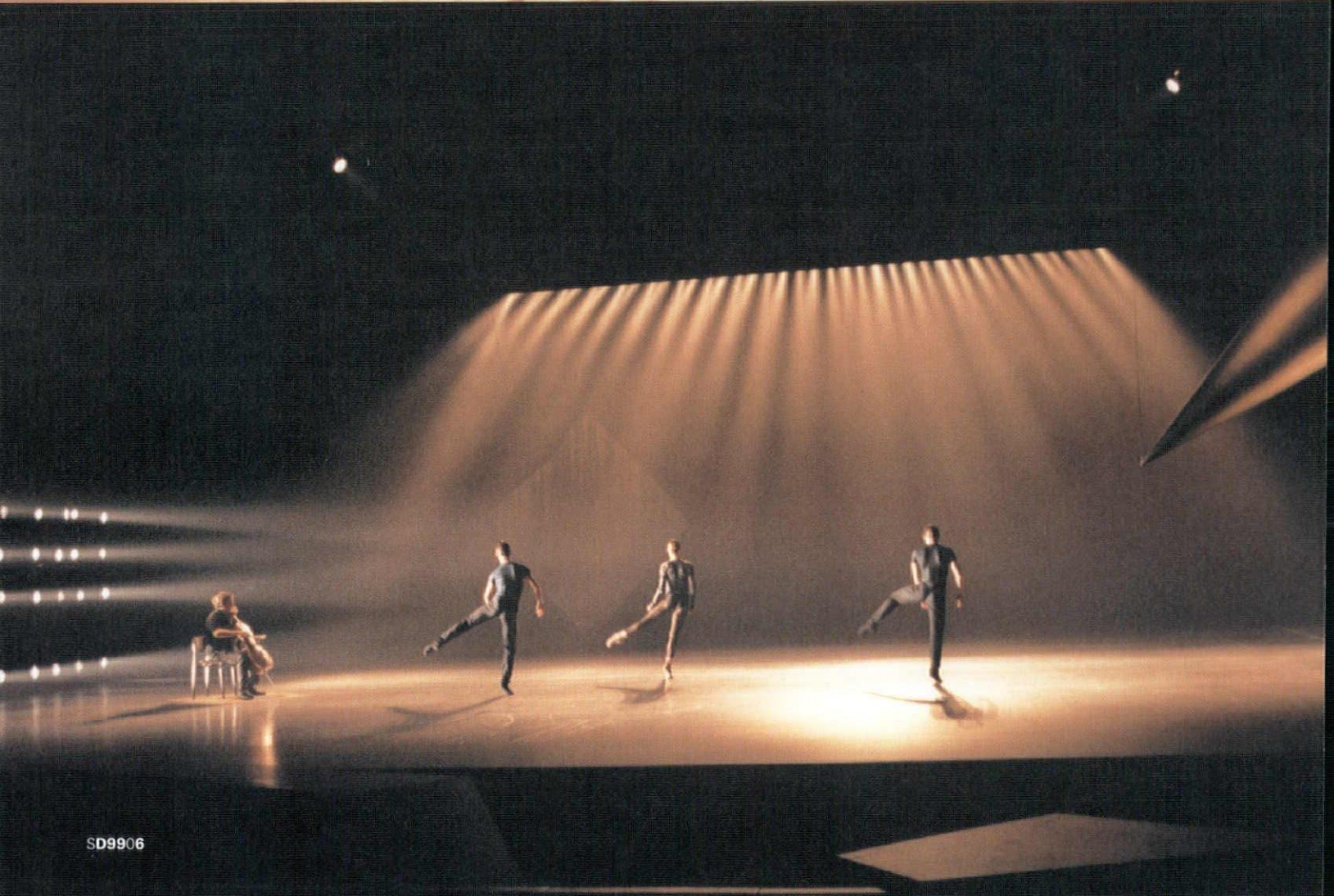
「冷徹なレンズによる写真での構築」とは何であろうか。自然の力が作り上げる造形の威力を絵のようにミメシスするのではなく、写真によって「真」を「写」して作品にしているのである。そこには石元泰博や宮本隆司とは一味違った健康な「太陽の光と陰影」がある。

ルイス・カーンがキンベル美術館の建築に用いたのは「Light is the THEME」

であった。村井修氏の写真を見る時、つねに筆者に意識させられるのは「太陽の光と陰影」である。写された対象物のある部分と部分が、意識して凝視しないと、その細部が見えないほど、暗くつぶれた影がある。その影と、明るく直射された太陽の光に輝き、明確に視覚する対象物のコントラストの調和に感動させられる。この度の展覧会では、それにさらに色彩が追加されて、より鮮明に、具体的に、冷徹なレンズによって「真」に「写」された色彩の具体的な対象物は抽象絵画のように構成的でもあるが、そうではなく実在するドラマティックな写真、写真としての写真である。筆者は、村井氏の建築や彫刻の写真よりも、この領域の作品に、より期待し、その作品集を待つ。

(はばら・しゅくろう/明星大学生生活芸術学科教授)





舞台空間のオデッセイ

身体というこの上なく具体的なものをメディアとするダンスは、観念のこね上げた作品にはうんざりした現代人にとって、ある種魔術的な魅力をもっている。その得意とするのは私たちの衝動や欲望を引きずり出すことだ。その代わり形而上学はもっとも不得意とする。だが埼玉芸術劇場でイリ・キリアンの「ワン・オブ・ア・カインド」を見た時、はじめてピラミッドを目の当たりにした時に似た驚きがあった。形而上的な意志が具体的な形をとって現れていたからだ。

キリアンはかつて東京の建築を見て回ったとき、好きなものがみな北川原温の設計であるのに気がついたという。オランダ政府から憲法記念事業の一環として大作を委嘱されると、彼はその舞台美術を北川原に依頼した。作品は三幕から成りそれぞれ空間が異なる。第一幕は白色と鋭角の世界である。暗闇に稲妻型の白い道が現れ、それをたどるダンサーの彼方に氷山のようなセットが現れる。始めかすかな光の図形にしか見えなかった氷山は、照明によって相貌をさまざまに変え、やがて傲然たる姿をとる。第二幕は左手後方に菱形の、右手前に円錐のいずれも巨大なオブジェが先端を下に向けて宙に浮いている。原始的な烈しい音楽とともにダンサーは疾走しつつ身体を躍らせる。モノリスの前で立ち騒ぐ猿人のように。やがて円錐がゆるやかに回転を始めると、たちまち安定した宇宙はゆらぎ、ダンサー

たちの卑小さが強調される。第三幕では舞台いっぱいに縄のれん状のスクリーンが降りて来る。ダンサーは紐を分けてスクリーンを出入りする。このスクリーンは紗幕のように背後に光を当てれば後ろの光景を透かし見ることができる。前から光を当てれば、反射率の高い材質なのだろう、舞台全面が輝く光の洪水となる。その効果は圧倒的だった。

この作品の中心は刻々と変わる舞台空間にある。シンプルなオブジェと空間とが光によってさまざまに表情を変える。北川原のほとんど崇高といってよいデザインにミハエル・シモン（フォーサイス作品でも照明を担当している）は息を呑むような照明を与えた。キリアンは、いつもの、音楽の解説のような振付も、これでもかとばかり凝ったな振りを繰り出すこともやめた。ただ北川原とシモンに存分に世界を作らせ、それを緊迫したダンサーの身体という糸で貫いた。セットに比べて小さな人体が、制約された宿命を生きねばならぬ人間を象徴するように見え、それが舞台を劇的な空間にしている。逆に、この身体が緊張感を失うと舞台は要を失った扇のようになり、形而上的空間は安っぽい紙細工に見えてしまう（昨年パリで見たときにはそれが起こっていた）。休憩時間さえ舞台に留まりつづけるソロダンサーの役割はきわめて重い。この作品は、美術・照明・振付・ダンスなどが高度なレベルで共振して初めて成功するという危うい作り方をしている。だが埼玉の公演は確かにこれが成功したし、それを目撃することができた私たちは幸運だったといえるだろう。

C u l t u r e C a f e

BUYO

今月の舞踊

ネザーランド・ダンス・シアター I

『ワン・オブ・ア・カインド』

会場：彩の国さいたま芸術劇場 大ホール 振付：イリ・キリアン
 日時：1999年3月5～7日 音楽：フレッド・ディーシ
 主催：(財)埼玉県芸術文化振興財団 チェロ独奏：ピーター・ウィスベルグウェイ
 後援：オランダ大使館 美術：北川原 温
 制作協力：カンパセーション 衣装：ジョーク・ヴィサー
 照明：ミハエル・シモン

尼ヶ崎 彬

あまがさき・あきら／学習院女子大学教授

1947年愛媛県生まれ。東京大学文学部美学芸術学科卒業。現在学習院女子大学教授。著書に「花鳥の使」「日本のレトリック」「ことばと身体」「緑の美学」、編書に「芸術としての身体」「メディアの現在」がある。





映像が音楽を呼び起こし、 音楽が映像を刺激する

この映画に出会ったのは、ほとんど偶然からであった。目当てにしていた映画の上映前に流された多数の予告編の中で、この映画の映像だけが際立って美しく、強い印象を残したのだ。それらの断片的なモノクロームの映像群は、光の髪を繊細にとらえて、瑞々しさに満ちあふれたショットの連続だった。その映画が25才のイギリス人による監督デビュー作だということも興味を惹いたが、多少の懸念を抱きつつ、その映像の全貌を確認したいという衝動から、すでに2日後にはその上映館に足を運んでいた。

その微かな不安は、オープニング・クレジットを観た時点ですでに消え始めていた。黒い画面の隅で二組の小さな数字がカウンターのように数を刻みだすと、左の数字が1から24まで巡るたびに、右の数字がひとつ進んで、数字はちょうど「24 7」で止まり、その下にタイトルの「Twenty Four Seven」が現われる。その間、時を細かく刻む時計とウッドベースの低い音が被さって、単純なまでに視覚と聴覚へ意識が集中させられるのだが、それは映像に音楽を巧みに被せて物語を進行する手法へのプレリュードでもあった。

物語は、イギリス中部の田舎町で冴えない日々を送ってきた中年男ダーシー（ボブ・ホスキンス）が、将来の目的もなくドラッグに手を染め、犯罪すら犯しかねない自暴自棄な若者たちに、ボクシングを通して、自分たちが見失いかけた尊厳（あるいは存在価値）の回復を試みようとするストーリーである。ダーシー

ーが語るように、「1日24時間、1週間7日、無気力で、何をす
るでもない暮らし。町の大人も若者も、一生それで終わる」、そ
んな現状に突破をはかろうとする試みだ。

時に群像をドキュメンタリー的に淡々と描き、時には人物た
ちの感情の発露をストレートに画面に定着させたモノクロの映
像詩としての新鮮さは、期待通りであった。しかしそれ以上に
新鮮だったのが、音楽とのコンビネーションである。近年のイ
ギリス映画『トレインスポッティング』や『ベルベット・ゴール
ドマイン』等にも共通する手法ではあるが、音楽は映像を回顧
させるためではなく、映像への「距離感」を生み出すために機
能する。アップ・テンポなヴァン・モリソンの「ワイルド・ナイ
ト」や、ベス・オートのボーカルだけが緩やかに流れ続けるシ
ーンでは、少年たちの戸惑いやひたむきさがそれらの音楽によ
ってかえって印象付けられる。ザ・シャーラタンズの「ノース・
カントリー・ボーイ」やヨハン・シュトラウスの「美しき青きド
ナウ」も巧みに使われるが、そうしたコンビネーションが最も
際立つのが、ダーシー自身が引き起こす壮絶なシーンに被るグ
レゴリオ聖歌を想わせるような、深みと余韻に満ちた清らかな
までの「イントロイトゥ」である。

ダーシーの挫折による結末についてはここでは語らぬが、物
悲しさが伴うとはいえ、中年男の気概と優しさが確実に若者た
ちに伝えられたことを淡々と映し出すそのエンディング・シー
ンは、イントロと対をなしてきわめて秀逸な優しさに溢れてい
る。そして、エンディング・クレジットのロールアップに合わ
せてもうひとつ重要な曲が流れるのだが、それはじっくりと聴
いて確認していただきたい。

C u l t u r e C a f e

CINEMA
今月の映画

映画『トゥエンティフォー・セブン』から

監督・脚本：シェーン・メドウズ

共同脚本：ポール・フレイザー

配給：シネカノン

シネ・ラ・セツにて上映中

1997年ヴェネチア映画祭批評家賞受賞

1997年トロント映画祭正式出品

1998年サンダンス映画祭正式出品

1998年ブリュッセル映画祭ベスト・ヨーロッパ・フィルム賞受賞

鶴沢 隆

うざわ・たかし／つくば大学助教授

建築家。1974年東京工業大学建築学科卒業後、大学院博士課程を経て、1980～83年フィレンツェ大学建築学部で留学。主な著書には、『ジュゼッペ・テラーニ』（監修／INAX出版）、『球と迷宮』（M.タフーリ著／共訳）などがある。作品には『ハウス117』（1995年）、CD-ROM『NOWHERE』（HartLAND刊）など。『未来都市の考古学』展（東京都現代美術館等1996年）や『ジュゼッペ・テラーニ』展（水戸芸術館1998年）を企画・監修。現在、筑波大学芸術学系助教授。



Exhibition Report

展覧会レポート

エンブティ・ガーデン展

会期:

1999年4月24日(土)~11月7日(日)

会場:

ワタリウム美術館

東京都渋谷区神宮前3-7-6

tel: 03-3402-3001

藤崎圭一郎

創造者のサンクチュアリ

この春、アルネ・ヤコブセンのかつての自宅兼アトリエを訪ねる機会があった。(スーホルム1)と呼ばれる5棟つづくテラスハウスの中の一画の灰黄色のレンガ造りの比較的地味な家。高級住宅街の海辺の家というロケーション以外は、デンマークを代表する建築家の自邸にして控えめな印象な家だった。5年前まで未亡人が住んでいたというのが、今は持ち主が代わっている。

この家の庭は有名だった。彼の複数の作品集でも、家とは別個に、ここの庭が紹介されている。ヤコブセンはそこで300種以上の植物を育てていた。「私は庭師として生涯を終えるだろう」と晩年語っていたくらいである。

だが、残念ながら往時の姿を留めていなかった。庭の中の垣根のレイアウトは昔の写真のままで、荒れ果てているわけでもない。なのに植物が生きているという感じがしない。ごくふつうの庭——、丹念に時間をかけて育てていた庭の「抜け殻」を見た思いがした。

庭は死ぬ。

デレック・ジャーマンのあの庭は一体どうなるのだろうか。

ジヴェルニーのクロード・モネの庭は、観光客の多さに辟易させられる。数年前に訪れた時は1時間待ちの行列。こんなに待たされたのは東京ディズニーランド以来だと思った経験がある。しかし、手入れが行き届いていた。1977年に大規模な修復が始まり、生前のモネが絵を描くために造園した往時の姿が再現された。この庭の花の色まで計算された植物の植え方をみればモネの絵画の色彩構成の理由が分かるし、有名な睡蓮の絵が、いかに写実的でリアルな表現がよく理解できる。

庭はきちんと手入れをする人がいれば、造り主の意志を何世代にも渡って受け継ぐことができる。庭とは二重の意味でメディアと言えるかもしれない。庭の主が植物や大地や生命と日々対話する場として。そして、われわれがその対話の残響を聞く場として。

ワタリウム美術館の「エンブティ・ガーデン展」で、ヨーゼフ・ボイスの庭が紹介されていると聞いて、興味津々で出かけていった。ボイスが20代後半、デュッセルドルフ芸術アカデミーで学んでいた頃、珍しい植物や薬草を植えていたという庭が、彼の出生地であるクレフェルトに、ボイスの師事したエーヴァルト・マタレーの娘の手によって、当時のまま

残しているというのだ。ボイスは若い頃から植物学に関して人並みはずれた知識をもっていたと言われる。その証左のように、この展覧会にはボイスが保管していた植物の種子が出品されていた。植物の名前を書き込んだ油紙の袋に入れられ、ていねいに整理されてある。

展示では庭の現況を知る写真などが少なく、少々残念であったが(たぶん写真で見ただけだと雑草の生い茂ったような見栄えのしない庭なのだろう)、代わりにその庭を育てていた頃のボイスの初期の作品に出会えることができた。鉛筆によるドローイングや彫刻の小作品で、1950年代に制作されたものが中心だ。

出品されたボイスの十字架や聖母子像からは、組織化され管理された教会の「神秘」から離れ、独自の「神秘」への道を探ろうとしていたボイスの創作活動のはじまりを見てとれる。この頃から、ボイスはルドルフ・シュタイナーの思想などの影響を受け、生命エネルギーとの交感する力を育むことで、のちに、シンボリックで非言語的なパフォーマンスである「アクション」という独自の表現を切り開いていくことになる。エネルギーの流れを表現したようなドローイングは、晩年になっても変わらず描かれた。

展示としては、初期の作品と庭というテーマがどうつながるのか、わかりづらい面があったが、植物との交感の場である庭を彼の創作活動の原点として暗示する試みは興味深い。

ボイスは1975年にオランダのヴェールトの近くに土地と荒れ果てた家を買ひ、65年に急逝する前、銀杏や熱帯性植物を植え、そこを植物園のようにしようとしていたという(『評伝ヨーゼフ・ボイス』美術出版社より)。庭とボイス。今後の研究を期待したいテーマである。

「エンブティ・ガーデン展」のその他の参加アーティストは、すべてワタリウム美術館で作品制作を行った。

オーストリアのアーティスト、ロイス・ワインバーガーは、すでにこの展覧会が始まる1年前、1998年4月に来日し、美術館の建物の屋上に小さな庭を造った。それは「手入れをしない庭」である。

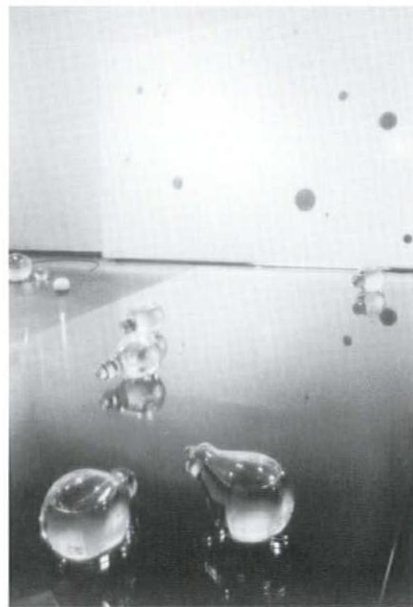
放置しても耐えられるように、ワインバーガーは、生命力が強く適応性のある植物を約40種厳選し、ヨーロッパから持ってきてここに植えた。1年間、台風や夏の強い陽射しや雪にさらされ、約15種は死滅したというが、多くは生き残った。



上野公園/テント、1999、
ヨラフ・ニコライ



戦の聖母、1950、ヨーゼフ・ボイス



ケルネ(原子)、1998、カールステン・ニコライ

さらにそこに日本の雑草が混じった。風なのか、カラスが運んで来たのか、桜の苗までであるという。

都市ではあらゆる空間を人間が管理している。庭というものは、本来は人間が手を入れて管理する自然であるが、ワインバーガーは、青山という密集空間のど真ん中だからこそ、人の手が入らないサンクチュアリーをつくることで、逆説的な庭を成立させた。この逆説は示唆的で魅力的である。

旧東ドイツ出身のカールステン・ニコライもユニークな作品を出品していた。彼は noto という名のテクノ・ミュージシャンとしても知られている。「インサイドアウト」という作品は、体験する人は、音を体感できるショルダースピーカーを肩に掛け、キリキリとハリのある電子音が鳴り響くなか、ワタリウム美術館から徒歩で数分の彼のオブジェが置かれた建築家会館まで散歩をする、という参加型の作品である。ヘッドホンでなく小型スピーカーなので、周囲の音と音楽を混ざる。こうして青山のランドスケープに、テクノの音のレイヤーを貼り付けられ、何の変哲のない商店街がサウンドガーデンに変容させられてしまう。カールステン・ニコライは、館内に「ケルネ」と題されたインスタレーション作品を出品していた。ここでは逆に電子音が空間の透明感を際立たせるために使われていた。

他に、カールステンの兄であるオラフ・ニコライは、ホームレスがテント生活を送る上野や若者のたむろする渋谷から発想を得た作品を制作。栗野ユミトは空調用ダクトの中で自分の声を聞くという作品と、数千本のストローで景観を切り取る作品で参加。鳥袋道浩の作品はまだ出品されていなかった。

ああ、それにしてもボイスの庭を訪れてみたい、という思いが一気に募った。ボイスの死後、筆者には、美術館や画廊に展示される彼の作品のほとんどが、「抜け殻」のようにしか見えてならなかった。ボイスのオーラのようなエネルギーが消え去ったのに高額取引引きされている物哀しい物体にしか見えない。でも、庭なら…、きちんと手を入れている庭なら、きっとあのボイスのエネルギーを再び感じられるのではないか。そんな期待が膨らんだ。

(ふじさき・けいいちろう／ライター、編集者)



ルーフ・ガーデン、1998-99、ロイス・ワインバーガー



インサイド・アウト、1999、カールステン・ニコライ



町の中でのドロ잉、1993、鳥袋道浩



temperament / Lucies in the sky with diamonds、1999、栗野ユミト



ヨーゼフ・ボイスによって作られた庭、1950-52、ヨーゼフ・ボイス

遮熱複層ガラス

ペアレックス ツインガードS/ツインガードE

夏涼しく、冬暖かい。特殊金属コーティング膜板ガラス使用の遮熱複層ガラス。

ペアレックスツインガードS/ペアレックスツインガードEは、夏のギラギラした太陽の日射熱を抑え、冬の室内暖房熱を逃がさないことを大きな特長とする夏冬兼用の複層ガラスです。

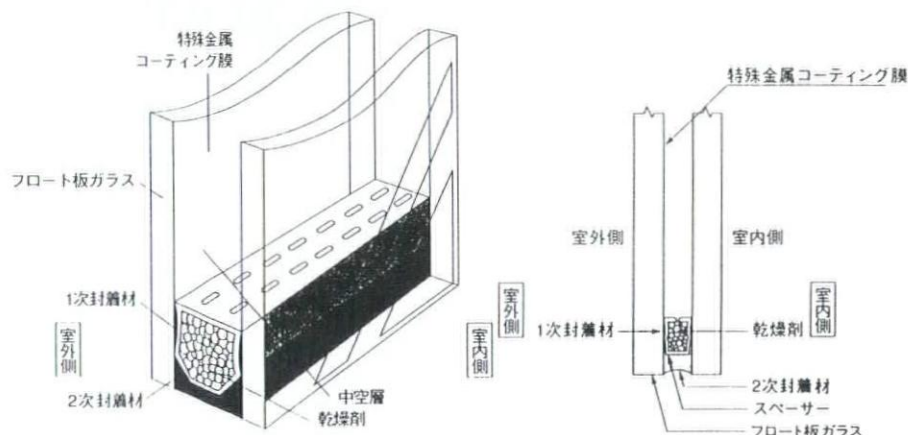
複層ガラスは、2枚の板ガラスを乾燥剤の入ったスペーサーで一定間隔に保ち、周囲を封着材で密封した構造になっており、フロート板ガラス(1枚ガラス)と比べ断熱性にすぐれています。

ツインガードS/ツインガードEは、その複層ガラスの室外側のガラスに特殊金属コーティング膜付きの板ガラスを使用しており、断熱性能と日射熱軽減性能を兼ね備えた複層ガラスです。

ツインガードS/ツインガードEを採用いただくことで、夏涼しく、冬暖かい快適な住まいの実現が可能となります。

また、ツインガードSは、日射熱軽減性をより高めた複層ガラスです。

ペアレックスツインガードS/ペアレックスツインガードEの断面図



■ セントラル硝子株式会社

建築用ガラス・サッシの事なら……

■ セントラル硝子株式会社 特約店

株式会社 タカダ

本社 広島市南区出島2丁目13-39 〒734-0013

TEL (082) 253-7241 FAX (082) 253-7245

福山営業所 福山市南手城町2丁目25-26 〒721-0963

TEL (0849) 24-1321 FAX (0849) 24-1882

Books

新刊紹介

『土木造形家 百年の仕事——近代土木遺産を訪ねて』

篠原 修＝著

A4判 180頁

新潮社 3900円

各地の土木遺産を建築写真家、三沢博昭によるカラー写真をふんだんに用いて紹介した本書。1章「水辺を歩く」では玉川上水、ケレップ水制、2章「人知れずひっそりと」では白水ダム、軍用水道・呉本庄水源地、3章「橋のエンジニア・アーキテクト」では東京の橋や構造的な冒険を試みた橋などを紹介している。また4章「まちを訪ねて」では、東京の表参道、札幌のまちづくりをとりあげる。どれも歴史がその価値を認め、美しい風景を創出している場である。

土木の仕事は、良くも悪くも環境に大きな影響を及ぼす。その行為の是非、あるいは評価はそれなりの時間を経ないと出るものではないのだが、本書の前書きでも触れているように、現在の日本の国土や都市は美しいとはいえない。さらに言えば、醜悪と言えものもある。

本書には、こうした土木の現状を踏まえ、著者の土木技術者は都市や国土の造形に参画するのだという自覚をもって、エンジニアでありかつ、造形家でもあれという思いが込められている。



『関西の建築——古き良き時代のサムライたち』

佐野正一・石田潤一郎＝著

A5判 220頁

日刊建設工業新聞社 2600円

石田による「一つの建築作品は、切れば血の出る人間の決断の結果として存在する」という言葉が印象的である。関西の建築界の軌跡が幅広く網羅され、歴史的な建築が鮮やかな色を帯びてくる。読み物としても十分に楽しめる対談集。



『文化施設が活きたNo.1 水戸芸術館』

磯崎 新＝監修・シリーズ総合企画

B5判 148頁

六耀社 1900円

磯崎新が監修するシリーズの第一弾は、自身の水戸芸術館。「ハコモノ」と揶揄される文化施設をいかに活用するか。一般解は容易に見つかるものではないが、その運営の参考となる各地の文化施設について建設から企画までを検証していく。



『マリオ・ボッタ——構想と建築』

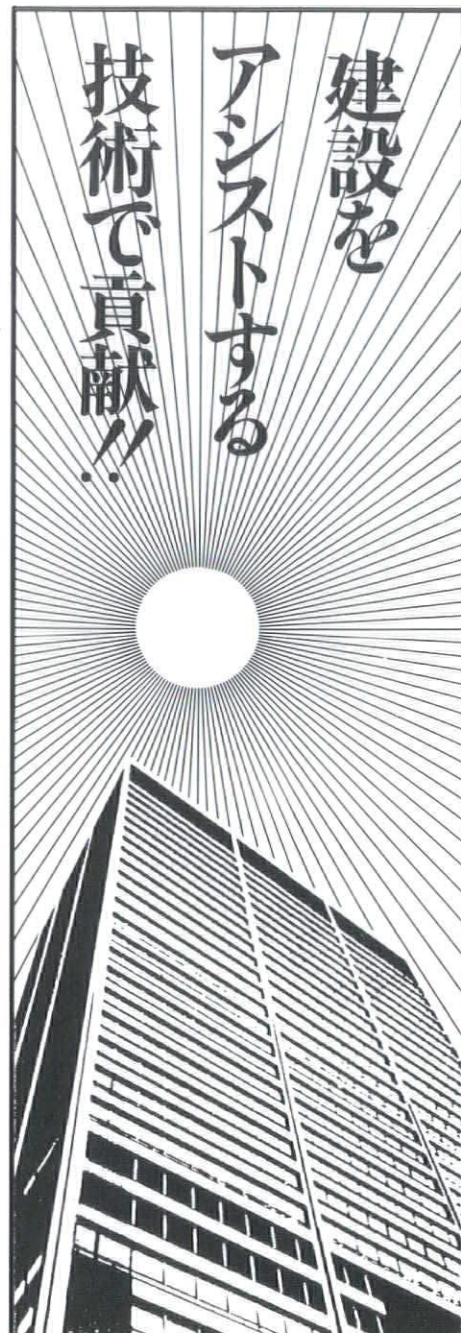
マリオ・ボッタ＝著

古谷誠章＝訳

A4変型 152頁

鹿島出版会 2700円

1994年11月ナポリでの講演会をまとめたもの。自身の建築論をまとめた形で著作にしていない著者の建築観を垣間みることができる。「建築を巡る思考」「オブジェ そのふさわしい形」など。



- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計装工事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用リール＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社

(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) 〒105-0021
- 支 社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

Book Review

書評

無意識の場所としての都市 アメリカの場所論

評者 小林康夫



『スカイライン——舞台としての都市』

ユベール・ダミッシュ＝著

松岡新一郎＝訳

A6判 296頁

青土社 2800円

おそらく「トピック (topique)」という言葉が、この本がどういう本であるか、を一言で言い表している。すなわち、この言葉は一方では「定まった話題」(そこから、この本の「エッセイ」としての性格が由来する)を示し、他方では、——最近、よく眼にとまるが多くなってきたが——「場所についての論」を意味している。しかも、後者は、プラトンの「コーラ」から建築空間や風景を取り扱う広範囲の芸術理論とともに、精神分析で言う、フロイトによるいわゆる「局所論」をも含み込んだ二重の意味で用いられている。

つまり、こういうことになる。ひとつには、これは、われわれ人間が住んでいる「場所」、つまりなによりも「都市」についての考察であり、しかも「都市」の一般論ではなく、あくまでも具体的な、特異的な「トピック＝場所」についての考察である。しかし、また、その考察において、この「都市」という「場所」は、「意識—前意識—無意識」(これがフロイトの第1局所論なのだが)という人間の欲望の「場所」とびつたりと重ね合わされているのである。ダミッシュは、——ひとつの実験という資格で——フロイトの精神分析を通して都市を読み、また逆に、都市を通して精神分析を、ということは、西欧的な「主体」の理論の運命を読み解こうとしているのである。

とすれば、その記述が、部屋の中から窓を通して通りを眺めている哲学者デカルトから始まり、幾つもの「迷宮」的な「場所」を通して、最後には、人間にとっての「最後の場所」である「砂漠」、しかもアメリカにおける「砂漠」で終わるといふこの書物の経路も少しも不思議はない。原書の副題であった「ナルシスという(としての)都市」は、言うまでもなく、もはやデカルト的な個人の水準に位置するのではなく、都市の拡がりとして、しかも「スカイライン」、つまりみずからの輪郭をもって存在する「場所としての主体」をはっきりと告げているのである。言わずもがなのことだが、ナルシスとは、「主体」のもっとも原初的な欲動に、無意識の最初の「舞台」(「原初の舞台＝光景」という用語を思い出しておこう)に与えられた名に他ならない。

大胆な、野心的な試みである。だが、ダミッシュの著作はすべてそうだが、大きな哲学的な問題設定を基にして、しかし本文の記述は次々と生き生きとした具体的なディテールを縫うようにして進ん

でいく。そのディテールはここでは、とりわけアメリカから採られている。実は、思い切って言ってしまうと、この本は、ダミッシュによる「アメリカ論」なのだ。「西欧」にとつての変換ることなき「未来生活の舞台」である「アメリカ」、さらに言えば、「西欧」にとつての「無意識」である「アメリカ」を論じたもののなのだ。「スカイライン」とは、なによりも摩天楼が作り出す都市という「主体」の輪郭線である。しかし、この本は「アメリカ以外には『真の』摩天楼はあり得ない」と断言するのである。碁盤目状の格子によって組織された「水平の都市」、マンハッタンは同時に、その格子をはみ出すことなく、その水平性を摩天楼の垂直性に転換する。この高度に組織された転換器としてのマンハッタンは、そのなかに穿たれた保護区であるセントラル・パークを経由して、目もくらむような広大な「自然保護区」、つまりイエロー・ストーン公園やヨセミテ公園と遠くから対比されている。

かつて、ヴァルター・ベンヤミンが「19世紀の首都」であったパリに対して行なったような考古学的な探査を、過去の都市ではなく、あくまでも(西欧にとつての)未来の都市である「アメリカ」に対して行なったらどうなるか——この書物はそうした試みを行おうとする。そして、そのために、ダミッシュは、——ベンヤミンにおいてそうであったように——自分自身にとつてのアメリカ経験のいくつもの断片をそこに忍び込ませるのに躊躇したりはしていないし、またヴィンセント・ミネリの『バンド・ワゴン』という映画に一章を捧げることもするのである。

つまりダミッシュは、古いヨーロッパ人にとつてのアメリカの魅惑について語っているのだ。「歴史のない」国の、つまり「無意識のない」国の、しかし西欧の尺度が崩れるような広大な、破局的な空間組織。アメリカについて「美しいカストロフィー」と語ったル・コルビュジエに続いて、西欧の絵画空間、とりわけ透視図法の起源、つまりルネサンスに生み出された西欧的な空間原理研究の第一人者であるダミッシュは、その魅惑をもっとも原初的な欲望の像に重ねて解き明かそうとしているのだ。この本のどの頁にも「アメリカ」という「未来の空間」と出会ったときの著者の驚きが、あえて言えば愛が、通奏低音として響きわたっている。(こばやし・やすお/東京大学教授)

ワクワク未来 創りたい



Mr. PENTA

僕は1990年に五洋建設のコミュニケーションキャラクターとして誕生して以来、数多くの建設現場で皆様にお会いすることができました。これからも自慢の大きな目で皆様の生活を見つめ、長い耳で多くのご意見をお聞きし、皆様の笑顔のお役にたちたいとおもいます。これからもよろしく、「ミスターペンタ」です。

豊かな環境を創造する——



本社 東京都文京区後楽2-2-8 千112-8576 ☎(03)3816-7111
支店 / 札幌 東北 北陸 東京 横浜 名古屋 大阪 中国 四国 九州 南九州

Book Review

書評

近くて遠い日本

評者 都築響一



「homeland」
小林紀晴＝著
B5判変型 176頁
NTT出版 2850円

「適正露出」というものについて、よく考えこまされる。これは藤原新也も近著で語っていたし、写真を生業とするものならば誰でも、一度は真剣に取り組まざるを得ない問題だろう。

カメラのファインダーを覗く。露出計やデジタル表示が教えてくれる「適正」の露出値。それはかならずしも真に「適正」ではない。たとえば朝、暗い部屋のカーテンをさっと引く。寝ぼけまなこに、奔

流となって襲いかかる太陽光。フィルムにすくいとりたいたいのはその眩しさであって、しばらくたって目が慣れたあとの、窓外の景色ではない。あるいは寝ぼけまなこで眺める室内の漠然とした暗さであって、家具調度やインテリア・デザインではない。でもカメラの露出計は、人間のそういう感覚をすべて無視して、「適正」という名の平均化された視覚世界をめざす。

プロフェッショナルな写真家は、だから誰もが自分なりの「適正值」を持っている。人から見ればそれは露出アンダーだったりオーバーだったりするのだが、その写真家にとってはそれが「適正」なのだ。そういうふうには、写真家の目には世界が映っているのだ。「アンダーに撮れば藤原新也ふう」とか、「オーバーめに撮ればホンマタカシふう」なのではなく、それは彼らのものの見方、知覚のスタンスの反映であるに過ぎない。

小林紀晴の作品集『homeland』を見た。彼の故郷である信州諏訪の、6年に一度の大祭として知られる『御柱祭』（おんばしらさい）を中心に据えながら、むしろ長い旅のあとでみずからの故郷に向かう彼の、帰郷へのプロセスを記録した写真集とも言える。東京をさまよい、アジアを巡った末に、「自分はどこから来て、そしてどこへ行くのか」を問いかけてつ、記憶の中にある故郷の地へと一步一步踏み込んでいく、その慎重な足どりが、1ページごとに足跡として記されている、そんな印象を受ける、きわめてパーソナルな写真と文のコレクションである。

小林の写真もまた、ひどく暗い。露出値にすれば1絞りか、2絞り近くアンダーかもしれない、それほど暗い画面である。本書の終わり近くで彼は、諏訪という土地について「死んだ風景だと、思うことがよくあった。四方を囲んだずんぐりとした山々は近くまで迫っている。西の山はすぐそこにあり、太陽はそこへ吸い込まれていく。当然、日照時間は短く、冬のあまりに弱々しく頼りない光は、消えてしまいそうな炬燵の中の豆炭の熾き見たいに思えた」と語っているが、そういう彼の感じかたがそのまま、ほの暗い画面にあらわれている気がする。

自分のことで恐縮だが、去年まで6年間あまりにわたって、諏訪の大祭というような伝統世界とは対極にある、日本各地のお笑い名所を巡る取材をしてきた。『珍日本紀行』と題したそのシリーズは週刊誌の連載だったので、必然的にかなり

のペースで日本全国を駆け回っていたわけだが、連載開始当初から「どんな奇祭であっても、祭りを取材するのだけはやめよう」と決めていた。それが名所ではなく時を限られたものであるという理由はもちろんあったが、それ以上に取材する僕の感覚の中に、「祭りとはその土地と人間にのみ属するもの」であり、外部からふらっと訪れても、とうてい理解することはできないだろうという、諦めがあったからだ。

小林の写真に定着された祭りの情景や、日常の町並み、田んぼや草原、そしてなによりも人間たち。そのすべてが、少なくとも僕にとってはひどく遠いものに見える。同じ日本の、同じ時代に暮らす日本人同士でありながら、絶望的なまでの距離をそこに感じてしまう。祭りの歓声と怒号、夏の太陽と冬の凍土、路傍の花の色、草いきれと土の匂い、半天を肩にかけた男や女たちの褐色の肌と濡れた眼。リアリティあふれる画面から迫ってくる大地と動物の感覚は、小林にとって自分の血肉の一部なのだろうし、僕にとっては永遠に踏み込むことのできない、近くて遠い領域なのだ。

何年間ものあいだ、地方から地方へ、町から村へとクルマを走らせながら、僕はこのようにリアルな生活の光景を目撃しなかったし、また見ようともしなかった。それは僕ごとき外部の人間が、気安く「お試し体験」できる世界ではなかったし、踏み込んでいこうという欲望もなかった。

「東京にはなにもない……それは一種の喪失感だ。山も、川も、そして土地や地形がないという思いだ」と小林は書いている。これほどのリアリティを自分の中に持つ彼にとって、東京はほんとうに空っぽに見えることだろう。そしてまた、僕のような東京に生まれ育った人間にとっては、地方を巡れば巡るほど、過疎・空洞化した国道沿いの希薄な日常ばかりが目につくという離れなくなる。だから僕が撮影し、選んだ写真にアンダーなのは、ほとんどなかった。

たぶん、これがほんとうの日本、なんてのはないのだろう。あるのは人それぞれの、無数の日本。そして無数の故郷。でも僕は、小林のように暖かく真摯な目を持って、みずからの内なる故郷を探す旅へと踏み出せるだろうか。踏み出す勇気が、あるいは熱意を持てるだろうか。（つづき・きょういち／編集者）



ただひとつの存在であるために。

今、私たちがしなければならないこと、私たちにしかできないこと。

前田建設は、一人ひとりの熱意と技術力を生かし、

いつでも最高の品質をお届けできる、

確かな存在感をもった企業をめざしています。



MAEDA

前田建設工業株式会社

〒102-8151 東京都千代田区富士見2丁目10番26号 <http://www.maeda.co.jp/>

1999年 日本建築学会賞(作品)、作品選奨決定

日本建築学会賞(作品)

潟博物館：青木淳、高知県立中芸高校格技場：山本長水、グラスハウス：横河健

日本建築学会作品選奨

長野市オリンピック記念アリーナ：小野威+尾崎勝+播磨、中野坂上サンブライトツインビル：大村美美雄+西田勝彦+山本圭介、源兵衛川・暮らしの水辺：岡村品義+加藤正之、門入の郷：多田善昭、東広島の家：竹原義二、和洋女子大学佐倉セミナーハウス：ナンシー・フィンレイ+千葉学、浪合フォーラム：中村勉、繁柱の家：深尾精一、F-HOUSE：古見演良、金沢市民芸術村：水野一郎、太田総合病院附属老人保健施設 桔梗：渡部和生+山田邦彦

問い合わせ：日本建築学会 Tel：03-3456-2051

第3回海外照明探偵団ツアー

アジアの闇を求めて—モンゴル高原へ

照明探偵団長、面出薫が同行し、アジアの闇とあかりの文化にふれるツアー。モンゴルの移動住居「ゲル」に体験宿泊する企画も用意されている。

期間：1999年7月14日(木)～7月21日(水)

費用：341,000円

募集人員：20名

最小催行人員：15名

問い合わせ：照明探偵団海外ツアー担当(葛西)

Tel：03-5469-1022、近畿日本ツーリスト(吉澤、神庭) Tel：03-5467-8330

内田繁 新作家具展 棚のある空間

ギャラリー「巷房」の空間の佇まいに魅了された内田繁が、7坪ほどのスペースに3種類の壁付けの棚を設計している。「巷房」のための家具デザインが展覧できる。

会期：1999年6月21日(月)～7月3日(土)

時間：12:00～19:00(最終日17:00まで)

会場：ギャラリー「巷房」

東京都中央区銀座1-9-8 奥野ビル302

Tel：03-3567-8727

問い合わせ：スタジオ80(守田、新関)

東京都港区南青山1-17-14

Tel：03-3479-5071 Fax：03-3475-4586

大地の芸術祭

越後妻有アートトリエンナーレ 2000 公募作品募集

2000年7月～9月開催の芸術祭の一環として設けられた公募作品展への作品募集。

応募内容：越後妻有の予め選定された6カ所の作品公募ポイントの中から1カ所を選び、その場所への設置を前提とした作品のプラン(コンセプト及びドローイング)を提出。審査により各ポイントにつき1作品を選び、芸術祭開催にあわせて作品を制作、公開し、開催期間中に大賞1点を選ぶ。申込締切：1999年7月1日(木) 必着

提出締切：1999年11月30日(火)

賞：大賞1点=賞状と賞金300万円。

問い合わせ：越後妻有大地の芸術祭実行委員会事務局 新潟県十日町市大字北新田1-10 十日町広域事務組合企画振興課内

Tel：0257-57-2637 Fax：0257-57-2285

日本建築学会主催

建築文化週間'99 21世紀建築会議 建築と私との距離

建築を学ぶ学生たちによって企画された、建築の現在/未来について議論するための会議。学生が建築との距離を考え、「空間」、「都市」といった建築用語を改めて問い直す良い機会と言える。講師：アストリッド・クライン+マーク・ダイサム、五十嵐太郎、井坂幸恵、岡田哲史、西沢立衛、塚本由晴+貝島桃代、馬場徹+河合敏明。

日程：1999年6月19日(土)～6月21日(月)

会場：建築会館 会議室、ホール

対象：建築を学ぶ学生・大学院生

定員：パネラー 70名(申込制、ただし締切済)

オーディエンス 300名程度(当日先着順)

費用：無料(ただし、資料等は実費)

問い合わせ：Tel：090-3539-1217(藤原) 090-7025-3871(吉村)

楨文彦 作品展+特別記念講演会

作品展 最近作から

会期：1999年6月23日(水)～7月18日(日)

時間：10:00～18:00

会場：東北芸術工科大学ギャラリー

特別記念講演会

日時：1999年6月22日(火) 18:00～19:30

会場：東北芸術工科大学

申込み、問い合わせ：東北芸術工科大学 企画広報課 Tel：023-627-2091 Fax：023-627-2154

第6回 KAJIMA彫刻コンクール 作品募集

「彫刻・建築・空間」をテーマに、彫刻と建築が互いに刺激し合う新しい空間の創造を追求する。彫刻が生み出す緊張感・生命感あふれる空間を、都市に、人々に、というコンセプトを踏まえた意欲的な作品を募集する。

主催：鹿島

運営：KAJIMA彫刻コンクール実行委員会

会期：2000年3月4日(土)～3月17日(金)

会場：鹿島KIビル・アトリウム

募集内容：「彫刻・建築・空間」をテーマにした彫刻作品。第1次審査では、制作意図を記載した応募票と模型作品(縮尺5分の1)を提出。第1次審査通過者は、第2次審査のための実物作品を制作(入選者には制作補助金80万円を支給)。作品のモチーフ、素材は問わないが、未発表の作品に限る。応募点数は1人1点。

応募資格：不問

応募締切：1999年8月20日(金) 必着

第1次審査作品搬入：1999年8月27日(金)～29日(日)

発表：2000年3月3日(金) までに入賞者に通知。

賞金：金賞1点=300万円、銀賞1点=150万円、銅賞1点=100万円、奨励賞5点以内=各20万円。

審査員：三木多聞、酒井忠康、清水九兵衛、保田春彦、谷口吉生、鹿島昭一。

問い合わせ：KAJIMA彫刻コンクール実行委員会事務局 東京都港区赤坂6-5-30

Tel：03-5561-2536(直通)

大阪府建築士会主催

平成11年度 建築士の日記念事業 ドミニク・ペロー+陶器二三雄 講演会

テーマ：「高度情報化社会の拠点施設を巡って」

日時：1999年7月1日(木) 17:30～21:00

会場：御堂会館 大ホール

大阪市中央区久太郎町4-1-11

費用：1000円(当日徴収)

申込、問い合わせ：大阪府建築士会 担当/北口

大阪市中央区農人橋2-1-10

Tel：06-6947-1961 Fax：06-6943-7103

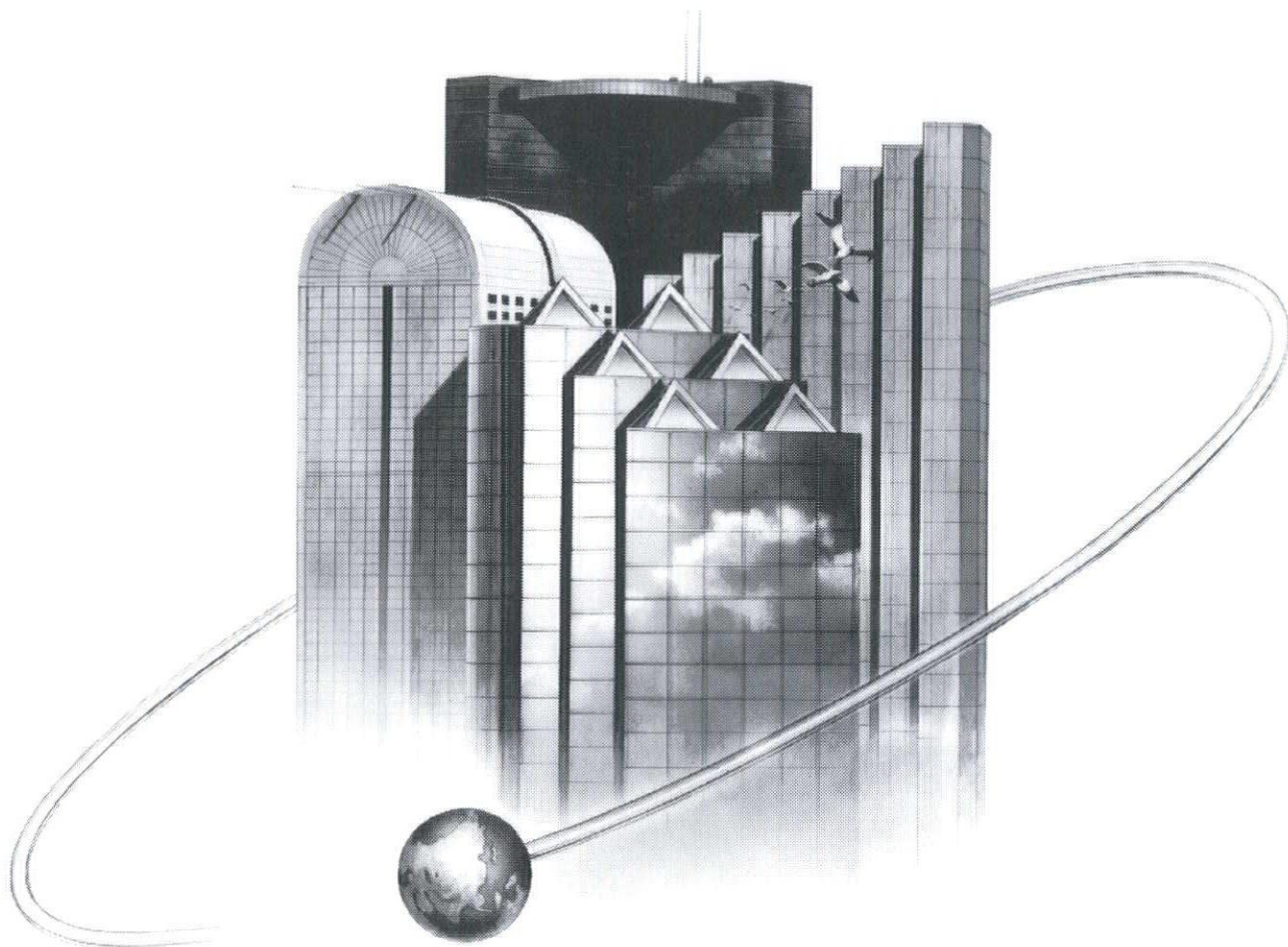
お詫びと訂正

SD9905号で誤りがありました。下記のように訂正し、お詫び申し上げます。

P.156 誤：TNブローブ主催

正：福門建築会主催

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンズ・オールスターは、シカゴブルズなどのNBA公式戦やアトランタオリンピックのメイン会場など、世界中で広く使われている本格的なフローリングによるポータブル・スポーツ・フロアシステムです。

- プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性に加え、永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。
- 独特のジョイント・ロッキング方式により、短時間での組立て・取外しが可能で、しかも優れた収納性。

コンベンション施設、インドアスタジアムを短時間でバスケットボールやバレーボール、バドミントンなどに最適なスポーツアリーナに変身させることができるフローリングシステムです。

ロビンズ FIBA・JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

本社 ■ 大阪支店 ■ 名古屋支店 ■ 福岡支店 ■ 札幌支店 ■ ヤナセ東北 ■ ヤナセ静岡
03(3452)4311 06(6488)9801 052(241)2531 092(522)1331 011(231)2313 022(221)4171 054(261)4105

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 千105-0023
TEL (03) 3452-4311

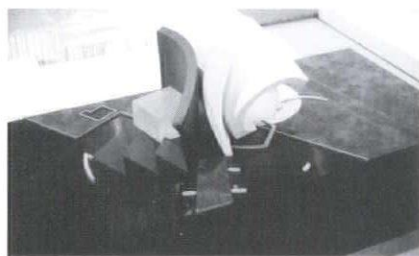
Topics Abroad

海外レポート

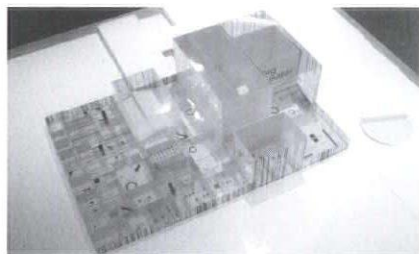
アル メル 15年目のニュータウン

吉良森子

from Almere



リベスキンド案



妹島案



OMA 都市計画模型

この半年あまり SANAA がリベスキンドか、とオランダの建築界のみならず、一般メディアをも騒がしていたアルメル市のシアター・コンプレックス国際コンペは SANAA の勝利で幕を閉じた。これは OMA が設計したアルメル市センターの拡張都市計画実現の第一歩となる、同市のこれからの発展の方向を象徴する、極めて重要な建築プロジェクトである。

アルメル市は干拓によって次々に町を作ってきたオランダの中でも極めて歴史の浅い町である。もともと北海に対峙する南海と呼ばれていた海が 1932 年に堤防の建設で湖に変わり、徐々に干拓されて 1968 年に乾いた土地となった。アルメル市中心部の建設が始まったのは 15 年前の 1984 年である。アムステルダム、ユトレヒトから 30 分弱という地の利によって 15 年間にアルメル市の人口は増え続け、2000 年には 20 万人になる。

干拓地のニュータウンの風景は独特なものだ。平らなのはオランダでは当たり前だが、列車も町並みも樹木も極めて直線に、そして均等の密度で並んでいる。長居をしたら感情の起伏もなくなってしまふんじゃないかと思うような恍惚とした、脱力感が充満している。アルメルにさえ行けば、リーズナブルな価格で庭付きの家が買えて、通勤にも困らない。だからこそアルメル市は人を集めることには成功したが、ベッドタウンがアルメルの最終目的ではない。成熟し、独立した町になることこそがアルメルの政治的アンビションだ。ペースとなる人口はある。果たしてそこに何をインプットすればベッドタウンからシティになり得るのか。その問題に込めているのが OMA の計画である。

彼らの回答は一言で言えば、都市の多層な側面のすべてを高密度化することである。OMA は現在のアルメルという町のスケールでは誇張としか考えられないほどのプログラム、人口、ランドスケープ、交通、経済活動、文化施設の密度をインプットしようとしている。駅から伸びる既存の町の軸は、駅の背後に計画された新しいビジネスセンターのスカイラインと湖というまったく異なるランドスケープを住宅、ショッピングセンター、バスセンターなどのプログラムを積み重ねた丘状のパブリックスペースによって繋いでいる。ウォーターフロントとアーバン・スカイラインのインテグレーションによってアルメル特有の町のアイデ

ンティティを生成しようというわけだ。他のオランダの町と比べて特に経済的、地理的要因のないアルメルが果たしてこれだけのアクティビティの吸引力を持ち得るのか疑問だが、ベッドタウンという寄生状態から独立するためにこれくらい強烈なインパクトは確かに必要だろう。

シアター・コンプレックスは、OMA のランドスケープ・ストラテジーの一端である水際に計画されている。F.ゲリーのビルバオ美術館を思わせるリベスキンドの造形的作品と SANAA の抽象的な箱の対照は、このような都市計画で建築の持ち得る力を考える上で極めて興味深い。

単純に考えればプロジェクトの象徴性、ロケーションを考えるとリベスキンドのようなショッキングなオブジェはロジカルなストラテジーのように思える。実際にアルメル市は第二のビルバオ効果を狙ってリベスキンドを支持しているとうわさされていたし、市民の人気投票ではシドニー・オペラハウスを参照して「シドニーにできるのならアルメルだって」(99 年 1 月 15 日パロール新聞)、とリベスキンドが一位になっていた。建築の良し悪しは別にして、中身が空っぽの箱建築でも形態的インパクトさえあれば数年間は話題と観光客を集めることができる、というビルバオの嫌な前例は自治体にとっては無視できない成功例となってしまう。これに反して SANAA は、彫刻的インパクトをできうる限り消去し、内部のアクティビティと人の動きの密度に対するストラテジーに終始した。駅からの軸を受けるエントランスは大劇場、小劇場、カルチャーセンター全てのエントランスである。OMA の都市計画と同様、ここでもプログラム、導線はこの軸線上に集約されている。大劇場、小劇場、カルチャーセンターの順序で配され、人の密度もプログラムの密度も湖へ向かってフェードアウトしていく。そしてこの変化は建物のヴォリュームにもそのまま現れている。アーバン・スカイラインと湖というランドスケープをインテグレートしようとする OMA のストラテジーのエッセンスは、SANAA のプロジェクトに建築的に昇華されていると言っていいだろう。そしてリベスキンドの箱に力を託す建築ではなく、内部の人々のアクティビティに託そうとするのが SANAA のアプローチなのである。

(きら・もりこ / Schroevers-Kira、アムステルダム在住)

Topics Abroad

海外レポート

福田 誠

メタポリストの勧め

from Barcelona

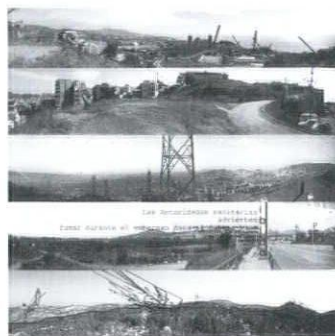
“METAPOLIS”展

会期：1998年12月4日～1999年2月5日

会場：バルセロナのギャラリー・RAS

企画監修：Manuel Gausa, Vicente Gualart, Willy Muller, Enric Ruiz, Xabier Costa

同時に SGAE (SOCITAT GENERAL D'AUTORS I EDITORS) でイベントが行われた。



上：「Theme Park Landscape」/ Ruiz Geli 設計、
下：「Sagrea-Sant Andreu, Vacio Funcional」/
Visente Sarrablo 設計

「メタポリス」という展覧会がバルセロナのギャラリー兼書店で昨年の12月4日から今年の2月5日まで開催された。この展覧会は、21のバルセロナの設計チームによるバルセロナへの25の提案で構成された。企画者および参加建築家の顔ぶれは、建築家でありバルセロナの建築雑誌『Quaderns』の編集長でもあるマヌエル・ガウサをはじめとして、本誌99年1月号で紹介したエンリック・ルイス・ジェリ、マルチメディアを多用し、スペイン建築家のCD-ROMを制作し、自らも設計を手掛けるヴィセンテ・グアジャルト、篠原一男の研究室にも滞在し、設計、批評活動にも力を入れているエンリック・マシップなど一癖ある建築家たちが集まって企画した。「未来のマルチシティのためのアイデアのフェスティバル」が展覧会の副題だが、各建築家はこのテーマに対して、いくつかの共通概念を共有しながら、バルセロナ大都市圏にそれぞれの計画を提示している。共通概念とは、彼らが設定した5つの共通の都市計画概念を指す。1：ストリップス、2：結節点、3：くさび、4：フィンガー、5：ホットポイント。また5種類の概念はアイコン化され、バルセロナ大都市圏の上に戦略的にマッピングされる。彼らは計画イメージをオーディエンスに伝える方法として戦争ゲームのオペレーションのように扱う。この企画自体が、バルセロナをマルチシティにするための再占領計画として、戦略的に表現されている。「ストリップ」の概念では、バルセロナ大都市圏のネイティブリザーブと宅地、商業地、など都市的領地の配分システムがマクロ視眼的なヴィジョンで戦略図上に投影されている。「ランドグリッド」と名付けられたシステムでは、疎としてのネイティブリザーブ、農地/密としての宅地と商業地が移動に伴いシークエンシャルな風景を発生させるよう縞状に組織されている。また、等身大の視線で切り取られた360度の風景の中にストリップを認知させる異化作用を誘発するオブジェを散りばめたプロジェクトも対照的に提示されている。「結節点」の概念では、主に高速道路のジャンクション、ロータリー的な空間が標的とされ、インフラストラクチュアは第二の自然という概念で扱われることによってノイズを伴ったレクリエーション空間に変換されている。「くさび」の概念では、主に駅（ターミナル）が扱われ、導入予定のTGV駅が巨大かつ、

機能的なヴォイドとして砂丘のように表現されている。「フィンガー」の概念では、特に港から海岸、人工島などが扱われ、水面を仮想的な床と捉えることによって水際を映像やエキスポなどの反射的現象的な場へと変換している。「ホットポイント」という概念では、一転、旧市街や新市街（セルダの）にすでに存在する局所的空間を対象に市街戦的アトラクション（立体的な庭であったり、シネマになったり）を張り巡らし、内と外からバルセロナを囲い込む。セルダのグリッド状の都市空間の中庭、屋上の活用法、旧市街独特の取り壊しによってできた垂直的な空き地への仮設的、祝祭的な働きかけ。彼らは既存の都市の中にいくつかのレイヤーを仮説的に設けることで、メタポリスを囲い込もうとしている。これは一種のイメージゲームだ。

このバルセロナの再占領計画に使用された武器（手法）の中に特に新しいものは開発されず、5つの戦略概念自体、古典的に受け取れる。読者にも感じられると思うが、用いられている手法には既知のものも多い。彼らの提示するイメージの中にオランダ的（mvrdrv, west8）な説得法やマイケル・ソーキン的ユートピア、イヴ・ブリュニエの発作のイメージを嗅ぎ取ることは容易だ。メタポリストたちはつまらない自我は気にしない。それらが次々と混ざり合い、競合しあい、バルセロナという、ひとつの皿の中にいくつものうま味を含んだパエリア状態の満足度を与えている。むしろバルセロナという局地的な風景、地勢、都市圏にグローバルな手法を集め、投影することによって、それらの効果を検証し、イメージを拡大、複合、変形させているのだろう。また都市についての議論よりも都市に対峙する建築家の態度（特に沈黙）について、彼らの企画は一石を投じていることは確かだ。何よりも彼らはメタポリスト的自我を共有することによって、バルセロナをプロジェクト的な都市として大胆に扱うことを可能にした。これっきりの企画に終わらず、できれば何年か続けて、その都度、議論やプレゼンテーションの方法をさらに開かれた意識のもとに深度を増すことを期待する。

（ふくだ・まこと／エンリック・ミラーレス+ベネデッタ・ダグリアブエ事務所）

Topics Abroad

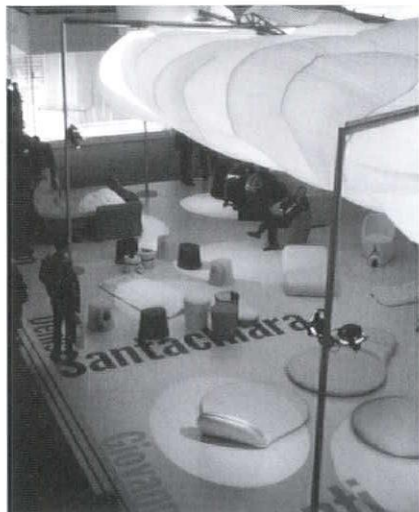
海外レポート

家具の祭典「ミラノ・サローネ」

三井直彦

from Milano

サローネ・インテルナツィオナーレ・デル・モービレ
(ミラノ国際家具見本市)
会場：ミラノ国際見本市会場他
会期：1999年4月13～18日



会場風景

一般に「デザイナー」と呼ばれる職能の範疇を定義するのは、難しいことではあるけれども、「デザインの都市」ミラノに居たところで、その疑問に収束的な答えが見つけれられるわけでもない。しかし、バスタのデザインに始まり、時には都市計画に至るかもしれない彼らの守備範囲の中でも、椅子に代表される家具の仕事の占める意味合いは特別に大きい。一方、専門家たちを離れ、普通のイタリア人の生活に目を向けると、彼らの住まいやオフィスが何ともさりげなく豊かな印象を持つことによく驚かされるが、それはそこに置かれた家具の力のおかげでもある。

サローネ、正式名称サローネ・インテルナツィオナーレ・デル・モービレは、延べ48万m²に至る展示面積、2千を越えるブース、約16万人の動員数を誇る世界最大の国際家具見本市である。40年弱の歴史をもつこの家具の祭典は、今年も4月13日から18日の6日間、ミラノ国際見本市会場であるフィエラを中心に開催された。今回のサローネでは、ここ近年に見られるミニマリストティックな表現の家具を中心にしながらも、各社から最新のコンピュータによる設計技術を大幅に生かした、彫塑的なプラスティック製の座面を持った比較的安価な椅子の新作が目立った。全体的に例年に比べコストダウンの傾向が見られ、市場価格にもそれが反映されることが期待される。こうしてこのサローネで生まれたトレンドは、その年以降の世界の家具界の動向を決定してゆく。そんな影響力を持ったミラノデザイン界きっての一大イベントの裏にはどのような背景があるのだろうか。

もともとミラノの位置する北イタリアは、家具の生産地域として有力で、国内に3万9千程あると言われる家具の生産業者の多くをそこに擁する。その業者の平均従業員数は6名に満たないというから、それらが極めて規模の小さい企業であることがわかる。その条件が逆に、小ささ故の柔軟性となり、設計上の細かな要求に対応し、魅力ある製品を作り上げるのである。質の高いバリエーションに富む製品群は国内に限らず海外にも大きな市場を持ち、また逆にイタリア製家具の中で競争力を勝ち取る海外の製品は、世界中に顧客を得、イタリアにも輸入される。このようなイタリアに先導された家具市場の力学がこのミラノの巨大見本市を成り立たせる原動力である。

サローネを訪れて驚くことは、際限な

くあるかのような参加業者の数であり、それを遙かに上回る商品の種類の多さであり、同時にそれを目当てに訪れる世界各国のバイヤーおよび消費者の数である。集合的には、これは巨大ビジネスなのだ。事実イタリアにとって家具産業は重要な位置を占め、昨年度には2兆円にものぼるイタリア製家具の取り引きが行われている。この無限にある家具は、しかしながら、生産性と経済性、機能性、そして流行の論理の淘汰の末か、互いに似通った印象を持ってくる。このような「若干の差」の集積であるような商品がまんべんなく流通し、ここに参加している業者の生計をすべて成立させているとすれば、市場というのは商品の微々たる違いに敏感である。弱小企業から少数しか生産されない商品に必ず最小限の支持者がいるはずである。だから微々たる違いしか作れなくとも、デザイナー達は相対的に個性を主張できるし、そこに彼らの存在価値も生まれる。従ってミラノにはデザイナーを名乗る人が集まる。そんな中で逆に、大きな顧客層を抱える著名なブランドメーカーも存在する。それらはこのデザインの洪水の中で毎年、水際立つ話題を提供するのであるから、ブランド性を裏打ちする著名デザイナーの力量、メーカーのプロモーションの技術、伝統の力は強い。

しかし、サローネはすでに活躍するデザイナー達だけのものではない。去年から始められたサローネ・サッテリテ展は、サローネの一部のブースを公募で集めたデザイナー達に賃貸するもので、市場参入をねらう若手デザイナーや、新たな企画を探しにサローネを訪れるメーカー側の人間から人気を博している。それから見本市会場外では通称フォーリ・サローネ（外サローネ）と呼ばれる、サローネ開催期間に便乗した自主的な展示会がミラノのあちこちで行われる。それらのオープニング・パーティをのぞくと、互いの展示に訪れては近況報告に興ずるデザイナー本人たちの姿を多く見受けられることができる。そこでいろいろな会場をはしごし、「こんな人だからこんな物を創るのか!」と彼らと彼らの作品とを見比べるのが、実はデザインという作業の本質を直感的に理解させてくれる贅沢な経験であり、個人的にはそれがこのお祭りの醍醐味のひとつであると思っている。(みつゐ・なおひこ/建築設計、マリオ・ベリーニ・アソシエイツ所員、ミラノ在住)

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ（快適さ）や、

建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。

弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174-0063 東京都板橋区前野町6丁目1番10号
☎東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町大字上富1163

明石工場 ▶ 〒674-0093 明石市二見町南二見21番3号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174-0063 東京都板橋区前野町6丁目1番10号

大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所



打瀬小学校／シーラカンス

9907

特集

学校建築

個性を育む環境創出へ向けて

学校建築が新たな局面を迎え変わりつつある。かつての片廊下型の学校建築は過去のものとなり、建築計画面ではもちろんのこと、教育面・社会面からも変革が要請されている。学習のための場というよりも、生活の場となることが重要視され、オープンスクール、インテリジェントスクール、地域開放型プランなど多くの試みが成されてきた。最近ではさらに進んで、地域コミュニティセンターや生涯学習センターとしての機能をも併せ持つことが求められている。

本特集では、学校建築設計の手引きとなるよう、今後の学校建築に求められる事項を解説しその実施事例を、使用されてからの現地レポートを交えて紹介する。

紹介作品＝

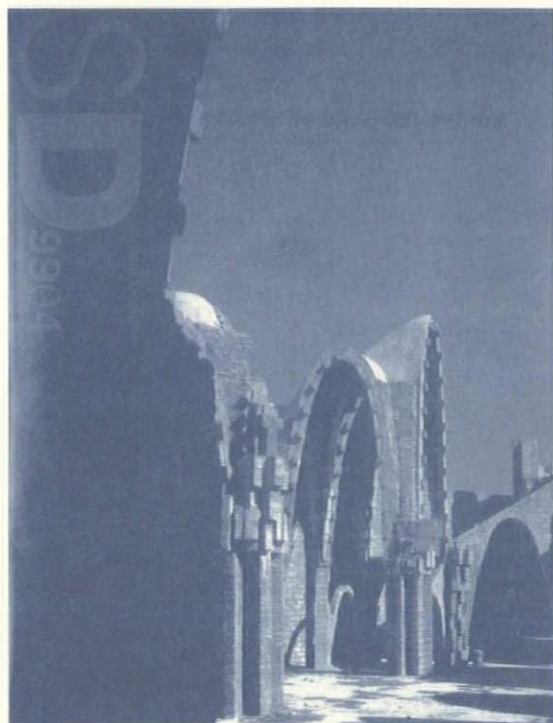
東京都立晴海総合高校／アルセッド建築研究所、宮城県岩出山町立中学校／山本理顕設計工場、福島県三春町立桜中学校／香山アトリエ十環境造形研究所、新宿区立落合中学校／船越徹十アルコム、岡山県吉備高原小学校／小泉雅生十小嶋一浩／(C+A)、茨城県つくば市立東小学校／現代計画研究所、長野県浪合村立小中学校／長沢悟十湯沢正信、台東区立上野小学校／内井昭蔵建築設計事務所、育英学院サレジオ小中学校／藤木隆男建築研究所

文＝上野淳、倉斗綾子、力安拓

座談会＝佐藤学十溜昭代十船越徹十小嶋一浩十上野淳

連載：

エントロピーの森——都市のインフラストラクチャー 7 写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生
カルチャー・カフェ——今月の舞踊・演劇 文＝多木浩二、原研哉



9904

特集

ガウディの愛弟子 ジュジョールの夢

アントニオ・ガウディの住宅カサ・バトリョの外壁モザイクタイルの配色デザインを手伝ったのを皮切りに、カサ・ミラ、グエル公園、サグラダ・ファミリアといったガウディの主要作品における良き共同者として活躍したジュゼップ・マリア・ジュジョール。ガウディ作品の色彩やディテールのデザインに力を発揮したジュジョールは、ガウディ亡き後カタルニア・モデルニスモとは一線を画した、独特のシュールなデザインを指向した。本特集は没後50年を機にジュジョールの遺した作品と近年修復された作品を、豊富な写真とオリジナル・ドローイングをもとに辿りながら、ジュジョールの描いていた夢—時代を超えたデザインを探ろうとするものである。

●作品＝グエル公園、カサ・ミラ、カサ・バトリョ、プファルイ邸、カサ・ネグラ、トーラ・ダ・ラ・クレウ、ビスタペーリャの教会、カサ・ブラネイス、モンセラットの礼拝堂

●文＝丹下敏明、ジュゼップ・マリア・カランディ、カルロス・フロレス、ダニエル・ジラル＝ミラクラ、ヨス・トムロー、ジュゼップ・ジナス

●撮影＝鈴木久雄

ドナルド・ジャッド 空間と認識のコンシステンシー

●作品＝マーファでのアートピース、空間、建築、そして風景、アイヒホルターレン、バーゼル東駅のオフィス複合施設

●文＝ドナルド・ジャッド、尾崎佐智子、丸山洋志、長田直之

連載：

海外レポート：シドニー、モントリオール、ロンドン
エントロピーの森—都市のインフラストラクチャー4
写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

定価＝2,000円／本体1,905円



9905

特集

挑発するマテリアリティ 素材の進化とデザインの可能性

本特集は、国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」「技術」を分析する。さらに素材に関わる人たちのそれぞれの意識、戦略を12の企業や、6人のデザイナーの言葉を交えながら明らかにしていく。

●文＝金森修、竹原あき子、北村行正、太田浩史、丸橋浩、今井公太郎、三好隆之、曾我部昌史、横溝真、西山浩平

●事例紹介＝「マテリアリー・プロダクト54」

NASA気象観測用無人飛行機、半径可変ドーム、アルミニウム押し出し加工イス、モノコック・バスケットシューズ、酸化被膜コートされたマグカップ、水抵抗を増加したトレーニング用スィムウェア、衣服用チーズパッケージ、マイクロマシン、透明蓄光ガラス、他

●ドキュメンタリー＝「ポリプロピレンの一生—素材生産の現場から」
撮影＝鈴木豊

●企業インタビュー12＝素材のアプリケーション・デザイン—デザイナーが素材を応用するためのABC

●デザイナー5人へのインタビュー：「マテリアリティの冒険」
吉岡徳仁、須藤玲子、黒川雅之、クライン ダイサム アーキテクト、津村耕佑

撮影＝鈴木豊

●素材史年表、素材地図1999、他

連載：

海外レポート：ベルリン、ニューヨーク
エントロピーの森—都市のインフラストラクチャー5
写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生
カルチャー・カフェ—今月の映画・音楽
文＝浜野保樹、服部のり子

特別定価＝2500円／本体2381円

1	アール・デコの摩天楼 小林 克弘著 272頁 本体3,400円	1920～30年代のニューヨークの摩天楼を分析し、アール・デコの摩天楼のデザインとはどんなものか、またアール・デコの時代とはどんな時代であったのかを興味深く紹介。	12	コラージュ・シティ C.ロウ、F.コッター共著 渡辺真理訳 288頁 本体3,800円	20世紀の都市デザインを支配してきた理想都市の2つの方向性—未来派のファンタジーと伝統的な都市へのノスタルジアの概念が調和した都市が著者の追求する都市の理想である。
2	屋外空間の生活とデザイン J.ゲール著 北原理雄訳 248頁 本体3,300円	本書は、住宅地域や市街地の公共空間—広場や街路などの屋外空間—のデザインを、そこで住む人々の生活やそこで繰りひろげられる行為や行動を分析し考察するもの。	13	ミース再考 その今日的意味 K.フランク・トンプソン他著 澤村 明、EAT訳 224頁 本体3,300円	K.フランク・トンプソン、P.アイゼンマンら、現在第一線で活躍中の建築家・史家によるヴァラエティに富んだ評論集。従来のモダニズム賛否という二元論的視点から解き放ち、親しみやすい。
3	近代建築の系譜(上) 1900年以後 W.J.R.カーティス著 五島朋子、澤村明、末廣香織共訳 400頁 本体4,600円	長い間待ち望まれていた本書は、近代建築史の全貌を通説に堪えるようバランスのとれたタッチで描き出している。著者は、実用面、美的面、そして社会性の諸次元を重ね合わせたアプローチを採っている。	14	ルイス・カーン 建築論集 L.カーン著 前田忠直編訳 258頁 本体3,600円	「沈黙と光」という言葉に象徴される近代建築の巨匠ルイス・カーンの美しいディテールと崇高な空間の織りなす建築。フィロソフィを伝える10編のオリジナル・アンソロジー
4	近代建築の系譜(下) 1900年以後 W.J.R.カーティス著 五島朋子、澤村明、末廣香織共訳 400頁 本体4,600円	目次 (上・下巻) 第一部 近代建築形成の岸辺 第二部 両大戦間における近代建築の結晶化 第三部 1940年以降の普及と変容。	15	メガロポリスを 超えて J.ゴットマン、R.A.ハーバー共編 宮川泰夫訳 352頁 本体5,700円	今日、高度情報化社会・テレコミュニケーションの発達に伴う巨大都市の再編成について論述し、未来都市の軌道修正を提言。都市の地球規模での相互作用に留意しながら分析。
5	アーキテクト 建築家とは何か R.ルイス著 六鹿正治訳 306頁 本体3,800円	本書は建築学科の学生および卒業したての人たちにむけて、建築家とはどういう職業か、何を期待すべきか等を説き指針を与えと共に、自己を見つめ直し再認識するテキスト。	16	18世紀の建築 バロックと新古典主義 J.サマーソン著 堀内正昭訳 208頁 本体3,400円	ヨーロッパの18世紀は、バロックとロココによって幕を開けた。諸都市では多くの教会堂や宮殿が建てられ、黄金期を迎える。後半になると新古典主義への転向がみられた。
6	デザインの思考過程 P.ロウ著 奥山健二訳 256頁 本体3,300円	デザインの過程での思索や思考の普遍化を試みている。いわば、建築や都市を創造するために、個人的な次元に直接関係する考察の構造や探究の焦点を明らかにすることが目的。	17	デザイン・ドリームス 映画に見る近代建築 D.アルブレヒト著 萩正勝訳 272頁 本体3,900円	美しい映画の演出は、20世紀初頭より近代建築の表現、セット・デザインの効果を重視。160余点のスクリーンで、ミース、コルビュジエ他のモダニズムを検証。
7	ガウディの七つの主張 鳥居徳敏著 224頁 本体2,900円	本書は、同著者による「アントニオ・ガウディ」「ガウディの建築」につづ3作目で、三部作を構成する。今回は豊富な語録を頼りにガウディ建築の不可解さを解明。	18	アダムの家 建築の原型とその展開 J.リクワート著 黒石いずみ訳 296頁 本体4,000円	建築の原型という理念が建築史のなかでどのように変化し実現化されていったかを、ギリシャ、ローマの時代から現代に至るまでの主要な建築理論と建築作品を考察した建築論。
8	イタリア・ルネッサンスの建築 P.マレー著 長尾重武訳 280頁 本体3,700円	15・16世紀を中心にルネッサンス建築を時代と都市、そして建築家という三つの視点から論じている。各章共、建築家の主要作品が見易い図版・写真で解説された良き案内書。	19	圏外からの建築 映画・写真・鏡・身体 D.アグレスト著 大島哲蔵訳 240頁 本体3,600円	著者アグレストは、本書の9つの章を通じて、映画・写真・鏡・身体を参照しながら、機能主義に代表される硬直化したモダニズム都市イデオロギーを批判する。
9	光と風と構造 R.マーク著 飯田喜四郎訳 192頁 本体2,900円	本書は、複雑な構造物の応用解析などに用いる現代の工学的方法を平易に紹介し、それを古代から近代までの石造天井を架けた大建造物に応用した研究をまとめたもの。	20	建築と非建築のはざままで R.ハービンソン著 浜田邦裕訳 208頁 本体3,100円	本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。イマジナリーな建築に言及する。
10	パタンランゲージによる 住宅の建設 C.アレグザンダー他著 中埜 博監訳 288頁 本体3,600円	著者は、現代の住宅生産システムの中でも、パタンランゲージの精神とその理論の枠の中で住宅建設が可能であることを証明。また手作り住宅が格安にできることを説いている。	21	空間を生きる R.ボフィール著 太田泰人訳 192頁 本体2,900円	バルセロナの現代建築家ボフィールが語る建築論。バルセロナ、パリ、ニューヨーク、モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な建築理念について語る。
11	デ・アーキテクチュア 脱建築としての建築 J.ワインズ著 大島哲蔵、三好庸隆共訳 322頁 本体4,200円	本書は、ミケランジェロからピカソまでの美術の成果を踏まえ、建築への新しい視点を探るものである。著者は本書によって、現代人の心を捉える建築表現を展望する。	22	古典主義建築 オーダーの詩学 A.ツォニス他著 藤井博巳、丸山洋志、藤山哲朗共訳 224頁 本体3,400円	古典主義建築を概観することにより、形の構造から古典的建築物を捉え直す方法を探るもの。建築のみならず音楽・絵画・演劇が共有する古典主義の生成規則を明らかにする。

新刊案内



建築のイコノグラフィーとエレクトロニクス

R. ヴェンチュリー著 安山宣之訳
A5判 296頁 定価(本体4,300円+税)

二冊の建築理論書で知られる著者が、80年代から90年代半ば、建築家として、その理念の検証と実現に向けてなされたあくなきたかひの全貌が綴られた書。真摯な姿勢、率直な筆致が、読者を深い感動に誘う。

[主要目次] 甘口と辛口—あまり穏やかでない宣言/他 育んでくれたもの—ヴィンセント・スカリーと著作『シングル・スタイル』へのオマージュ、その回想と成果/アルトから学ぶこと/他 ーから学ぶ—ナイーブな二人と日本/他 自作について—25年後のギルドハウス/現代的設計活動への私的な方法と姿勢/他 振り返って—ウィンドウズ/ビジョン：そんなもの糞食らえだ/他

21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案

清水裕之著
A5判 248頁 定価(本体3,700円+税)

本書は21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアターと位置づけ、そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。

[主要目次] 1. 劇場と空間 2. 劇場空間と劇場技術 3. 我が国の劇場・ホールの近代化と地域の舞台芸術を支える社会システム 4. 公立文化施設の機能と計画プロセスの変化 5. パブリックシアターと地域の舞台芸術環境の計画と設計



ル・コルビュジエと日本

高階秀爾・鈴木博之・三宅理一・太田泰人編
A5判 256頁 定価(本体2,800円+税)

本書は戦前から戦後にかけて日本の近代、現代の建築に大きな影響を与えたル・コルビュジエと日本の関係を様々な角度から述べたもの。20世紀の建築史に新たな視点を与えるものとなろう。

[主要目次] 序章—ル・コルビュジエ・シンドローム 第1部 デザインと美術—ル・コルビュジエのモダニズムとフランスにおける装飾芸術を巡る言説/他 第2部 近代建築史の文脈の中で—ル・コルビュジエと日本の建築家たち/他 第3部 日本の戦後建築とル・コルビュジエ—キュービストがつくった芸術容器：国立西洋美術館におけるル・コルビュジエと日本の弟子たち/他

マリオ・ボッタ | 構想と構築

M. ボッタ著 古谷誠章訳
B5変形 168頁 定価(本体2,700円+税)

自らの論理を語ることの少ない建築家ボッタがここでは単体の建築、都市的なプロジェクト、そして家具・照明器具などのデザインについて平明な語り口で述べており、魅力あふれるドローイングとともに彼の全貌を伝えている。

[主要目次] 序文—千年の建築を目指して/ベネデット・グラヴァニョーロ 建設を巡る思考 都市建築のプロジェクトを通して オブジェそのふさわしい形 会場との対話



巨匠 フランク・ロイド・ライト

D. ラーキン、B. ファイファー編 大木順子訳
B5変形 240頁 定価(本体3,200円+税)

コルビュジエ、ミースとならぶ近代建築の巨匠であり、アメリカン・スピリッツの象徴である建築家フランク・ロイド・ライトの全貌を美しいカラー写真と平易な解説で紹介。没後40年を経た今日でも新鮮な感動を呼び起こす。

[主要目次] ホーム&スタジオ/ウィリアム・H. ウィンズロー/スーザン・ローレンス・ダナ邸/アーサー・M. ハートレイ邸/ワード・W. ウィリッツ邸/エドワード・E. ボイントン邸/フレデリック・C. ロビー邸/F.C. ボッグ邸/アーリン・バーンズドール邸/ジョン・ストラー邸/エドガー・J. カウフマン邸/ハーバート・ジェイコブス邸/ハーバート・F. ジョンソン邸/他

ルドルフ・シンドラー
カリフォルニアのモダンリビングD. ゲバード著 末包伸吾訳
B5変形 184頁 定価(本体3,700円+税)

ウィーンでワグナー、ロースに、渡米してライトに師事した建築家シンドラーは、1900年代前半のカリフォルニアのモダンリビングを確立した。21世紀をむかえようとしている今アメリカでも再評価の気運が高まっている。

[主要目次] 1. 新旧の世界 2. アメリカでの終業 3. ライトへの師事 4. 機会：1920年代のカリフォルニア 5. 理論の実践 6. スタイルの創造 7. シンドラーの「デ・ステイル」 8. 恐怖 9. リビング・スペース 10. モダン対モデルヌ 11. ビジネス・コミッション 12. 木の使用 13. 最終期のシンドラー



エコテック | 21世紀の建築

C. スレッサー著 難波和彦監訳
B4変形 192頁 定価(本体7,300円+税)

ハイテクを駆使した建築デザインの、ヨーロッパを中心とした最新事例のドキュメント。単なるファッションではなく、サステナブルでエコロジカルな環境を追求する、21世紀を志向する新しい建築をヴィジュアルで紹介。

[主要目次] 構造表現—ウェスタン・モーニング・ニュース本社/他 光の造形—ケンブリッジ大学法学部/他 エネルギー問題—リヨン国際都市/他 都市への応答—チャンネル4本社ビル 新交通施設—関西国際空港/他 市民の象徴—マルセーユ地方行政センター

SD選書 235 間(ま)—日本建築の意匠

神代雄一郎著
四六判 208頁 定価(本体2,400円+税)

建築史家である著者が、日本建築の空間と意匠をテーマに著した、定評ある論文2本を再録。写真と図版を多数用いながら、空間と時間の関係性を示す間(ま)と呼ぶキーワードを軸に、新鮮な視点から日本建築を分析。

[主要目次] 第1部 日本建築の空間—1. 日本人の空間意識 2. 原初的な時間と空間 3. 建築基本空間の拡大 4. 空間の水平的な結合・展開 5. 垂直方向の空間意識 6. 長大な時間空間の交叉/他 第2部 九間論—農耕集落の核から現代の住居単位まで—1. 『利休の茶室』から 2. 帖と坪、間(けん)と間(ま) 3. 九間の全盛 4. 主座敷の典型 5. 能と蹴鞠 6. 天主と軍船/他

新刊案内



住宅建築のリノベーション

梶野紀元・三木哲・石本徳三郎・知久昭夫著

A5判 208頁 定価(本体3,300円+税)

住宅建築をリニューアルするために、建物の診断方法から計画・工法までを解説。さらに、住環境の健全性向上、室内の耐震安全性確保、植栽の維持、そしてSI住宅や高齢者のためのリニューアル方法を記述する。

[主要目次] 序章 住宅リノベーション 1. 既存建物の耐用性診断—劣化診断の要点/他 2. リノベーションによる住宅の長寿命化—劣化箇所の改修/健康性の向上・改善/他 3. リノベーションを考慮した住宅づくり—住宅のライフサイクル・マネジメント/他 4. 価値を高めるリノベーション—歴史的価値をもつ住宅/人にやさしい住まいづくり/他 5. 新住宅産業論—サービス業としての住宅リノベーション/他



自然共生建築を求めて

宿谷昌則著

A5判 192頁 定価(本体2,300円+税)

厳しい自然から人間を護るための建築が、生活の依拠するその自然に逆に負荷を与えてしまっている現在、エコロジカルな建築を技術的解決に還元するのではなく、生活様式との関係から理念としての在り様を説き起こす。

[主要目次] 1. エネルギー問題を再考する 2. 当たり前の不思議 3. 拡散性と資源性の概念 4. システムとエネルギー・物質 5. システムの持続的活動 6. 植物システムに学ぶ 7. 動物システムに学ぶ 8. エコシステムに学ぶ 9. 照らす 10. 温める 11. 冷やす 12. 分ける・混ざる 13. 地球環境システム 14. つながりを求めて

都市デザインとシミュレーション
その技法とツール

伊藤 滋監修 環境シミュレーションラボ研究会編著

B5判 144頁 定価(本体4,300円+税)

都市デザインの多様化はマスタープラン策定やまちづくり学習の実践に不可欠で、様々な視点から検討・評価が重要となる。本書は住民参加による情報の共有化に役立つ、デザイン技法と各種ツールを具体的な事例で解説。

[主要目次] 1. 都市デザインと住民参加 2. 都市デザインの系譜 3. 都市デザインと環境シミュレーション 4. 都市デザインにおけるデザインコラボレーション—サンフランシスコ市における公聴会システムと住民参加/わが国における情報共有化のツールを用いたまちづくりの実践



不気味な建築

A. ヴィドラー著 大島哲蔵・道家 洋共訳

四六判 312頁 定価(本体3,400円+税)

ポーやメルヴィルによって描き出された「不気味なもの」とは、モダニズムによって抑圧されていたが、一方で「崇高なもの」と結びつき、現代建築に大きな影響を与えていた。ヴィドラーによって著わされた問題の書。

[主要目次] 1. 住居—居心地の悪い家/生き埋め/ホームシック/ノスタルジア 2. 身体—寸断された建築/顔の喪失/トリック:トラック/地の変換/サイボーグのための家 3. 空間—ポストアーバンイズム/サイコメトロポリス/夢幻性/放浪の建築/透明性 訳者あとがき

今必見の建築テクノロジー

近畿建築士会協議会編

四六判 220頁 定価(本体2,200円+税)

前著「今話題の建築技術を見る」の続刊。阪神淡路大震災被災後の教訓から学び、身近な基礎技術から先端技術に至る最新技術の要領を、イラスト多数の実例で解説。学生から実務者まで興味ある内容豊富な新刊書。

[主要目次] 1. 原理に学ぶ基礎技術—ピラミッドはなぜ倒れたり崩れたりしないか/他 2. 新技術・新素材を活用して—建物と風/木製防火戸の出現/他 3. 地震についての基礎知識—昔の地震の規模はなぜわかるか/他 4. 耐震・防災技術として—すわ地震! あなたならどうする?/他 5. ハイテクの応用 6. 快適な暮らしに向けて 7. 環境共生の時代

SD選書 234

さあ横になって食べよう
忘れられた生活様式

B. ルドフスキー著 多田道太郎監修 奥野卓司訳

四六判 224頁 定価(本体1,800円+税)

人間の生活様式である、食べる・眠る・座る・洗う・清める・入浴する…の五つの基本行動と、それに関連する家具や道具の珍しい実例をあげ、「私達に必要なのは、新しい技術ではなく、新しい生活様式である」ことを説く。

[主要目次] 最後の晩餐のテーブルマナー みにくい座り方 評判の悪い衛生法 にぎやかな風呂場 時代遅れの寝室

アントニン・レーモンドの建築

三沢 浩著

A5判 244頁 定価(本体3,500円+税)

汎世界的な「国際建築」ではなく、地域の気候と風土に根ざし、人々に愛され使われ続けるもの—それがレーモンドの考える「近代建築」であった。近代建築の失墜を、日本近代建築の巨匠を再考することで克服。

[主要目次] 1. 「日本の」建築家 2. 流浪の時代 3. 戦前の活躍—スタイルの試行錯誤 4. 黒い木造横板張りの近代住宅 5. 運命の星 6. 離日とアメリカ時代 7. 再来日—近代建築展開への布石 8. リーダイ論争 9. 戦後近代建築の展開 10. レーモンドの設計プロセス 11. 群馬音楽センター 12. 脱近代の方向へ 13. レーモンドの現代的な位置づけ

次世代街区への提案
安全で環境にやさしい街づくり

三宅理一・林 明夫編

A5判 204頁 定価(本体3,000円+税)

本書はわが国の都市問題の第一線で活躍する専門家たちが、既存の都市モデルを検証し、近未来の防災都市計画の提案を行うもの。鉄を素材とした長寿命の集合住宅システムの具体的な提案がなされているのが特色。

[主要目次] 1. 日本の都市の脆弱性 2. 密集市街地の住民意識 3. 街区を利用した密集市街地の改善 4. 次世代街区のためのSI集合住宅 5. 市街地再生のためのプログラム 6. 次世代街区の導入効果 7. 実現に向けた利用権分譲方式

新刊案内



これからの家—健康で快適な住まい

快適住居研究会編著
四六判 208頁 定価(本体1,800円+税)

住宅における健康及び快適とは何か、利用者に応えた設計仕様、省エネ型住宅、高機能住宅のあり方をテーマに、建設省建築研究所及び住宅メーカーの専門スタッフが執筆構成。現実の商品開発プロセスで得た内容で詳述。

[主要目次] 1. 健康で快適な住まいとは—健康住宅の意味／住宅の空気と熱の環境／他 2. 空気環境と熱環境に配慮すると住まいはこうなる—冷暖房から空気の調和へ／他 3. 低くなる冷暖房エネルギーと変わる空気・熱環境—冷暖房エネルギーとランニングコスト／他 4. 空気環境と熱環境に配慮した快適な住まいのために必要なこと—断熱化と気密化の事例／他 5. 環境とこれからの住宅

庭の楽しみ
西洋の庭園二千年

A.S. ジェイムズ+O. ランカスター著
横山 正訳

古代ローマから中世、近代、現代に至る庭園の様々な様相を楽しいイラストとエッセイで紹介。文中に盛り込まれたエピソードからヨーロッパにおける庭づくりと人々のかかわりが伝わってくる。

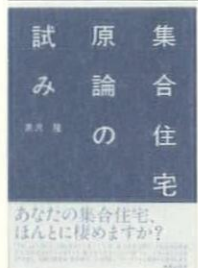
[主要目次] 1. ローマ領ブリタニアの庭 2. 修道院の庭 3. 世俗の庭 4. チューダーとジャコビアン 5. 旅行家と目利き 6. 壮大なフランス様式 7. オランダ風の庭 8. 風景式庭園 9. ガーデネスク 10. ハイ・ヴィクトリアン 11. 牧師館の庭 12. いなか家の庭 13. ロンドンのスクエア 14. 道すじの庭 15. サリー派 16. 日本風の庭 17. 郊外の庭 18. パティオ

集合住宅原論の試み

黒沢 隆著
B5判 168頁 定価(本体3,800円+税)

本書は、永年、研究者であり建築家として実践してきた著者が、集合住宅論を建築の社会的側面と計画原論との関連を軸に総合的に捉え直した、団地計画や住戸設計のための具体的かつ実践的な教科書であり、実務書。

[主要目次] 1. 都市を生きる—集まって住まうこと 2. 郊外を生きる 3. 集合住宅を分類する 4. ファミリー住戸 5. ワンルーム住戸 6. 住戸から住棟へ 7. 集合の契機 8. 棟配置の課題 9. 都市の中の集合住宅 10. 大きすぎるソフトの課題 11. 公共住宅から社会住宅へ 12. 地価とは何か 13. メガロポリスに住んで



同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介著
B5判 260頁 定価(本体3,300円+税)

日本の近代集合住宅の嚆矢を築いた同潤会は、主に東京に豊かな敷地空間をもったアパートメントを建設した。本書は、同潤会の誕生した時代背景、そして代官山アパートを中心にその建築や居住者の生活を記述する。

[主要目次] 1. 同潤会アパートメントとその時代—同潤会への前史／1920年代という時代／同潤会の住宅建設事業 2. 同潤会アパートメント・実践の軌跡 3. 代官山アパートの計画とデザイナー—代官山アパートメントの計画プロセスと全体構成の成立 4. 検証・住戸計画 5. 代官山アパート住生活誌 6. 代官山アパートの居住ストックの変容 7. 新たなまちづくりに向けて



民家のこころ

道塚元嘉著
四六判 144頁 定価(本体1,600円+税)

ふる里の暮らしと生活状況を住まいの原点として捉え、民家の空間要素を詩情豊かに綿密な取材で述べる。悠久の時間をこえ土地の風土や習俗にあった民家、誰もがここに刻む思いの情景を、写真・イラスト入りで解説。

[主要目次] 1. 入口部—お稲荷さんのおすまい／せとぐち／他 2. 土間部—おとしどま／カマドと母の生まれた家／けむだし／他 3. 小屋裏部—かやぶき屋根／屋根裏の見えた家／他 4. 炉端部—いろり／むそうまど／だいこくばしら／他 5. 各室部—てあか／なんど／ゆどの／他 6. 縁・軒・庇・壁、屋根部—かみしょうじ／あまど／えんがわ／他 7. その他部—しもばら／民家と向井潤吉画伯／他

建築とリアル

松畑 強著
四六判 240頁 定価(本体2,700円+税)

若手建築家松畑強の初の評論集。建築や都市デザインを単体として考察するのではなく、広く経済や時々の政治情勢、国策や社会思潮の反映・接点として捉える。リアリティは建築においてどこに現れるのか。

[主要目次] 作品分析—批評と修辭／テイスト／サイトウイツの幾何学／セカンドハウスの視線／透明なラビリス／電子メディア時代の景気のいい話／他 作家論—「魔城」・磯崎新論へ／Calisthenics・葉祥栄論へ／保守主義、近代主義、戦争 論考—機械美と古典主義・板垣鷹穂／アメリカ現代建築への仮説的背景／シンプリシター／ランドスケープの認識論—近代風景の起源をめぐって

SD選書 233

ふれあい空間のデザイン

清水忠男著
四六判 216頁 定価(本体1,800円+税)

現代人は都市化の発展や情報化の発達によって、利便性と快適性を獲得した反面、孤独感や連帯感の喪失に悩まされている。筆者は望ましいふれあい環境のデザインについて幅広い調査と事例を駆使して新しい視点を紹介する。

[主要目次] 1. なぜ多様なふれあい空間が必要なのか—家族と共に居る場所と自分の部屋の居心地／他 2. 住まいにおけるふれあいの場—開放的空間と閉鎖的空間／他 3. 近隣地域におけるふれあいの場—映画「裏窓」の近隣感／他 4. 都市空間におけるふれあいの場 5. 施設空間におけるふれあいの場

安らぎと緑の公園づくり

ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ

三宅祥介・浅野房世共著
A5判 228頁 定価(本体3,200円+税)

生活に身近な緑空間が「いやし」の場となる意味合い、さらに公的介護者や高齢者にとって歩いて行ける公園とは何か。初めてのヒーリング・ランドスケープを、究極の癒し、具体例、ガイドライン、ホスピタリティで解説。

[主要目次] 1. 安らぎと緑とオープンスペース 2. 緑からヒーリングを得る 3. 究極の癒し、死への癒し 4. 緑とオープンスペースからの癒し 5. ヒーリング・ランドスケープの要素 6. 具体的事例 7. ヒーリング・ランドスケープ設計のためのガイドライン 8. ホスピタリティ／他



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kajima, etc. ¥2,200



9810 Office Environments for the Near Future
Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc.
Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration
¥2,000



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hiaso Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



9811 135 Outstanding Works of Modern Design
Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass. Kasimir Malevich, Gertrud Vasegaard, Trude Ptri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc. Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc.
Desktop Community
¥2,000



9812 SD Review 1998
The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features:** Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure
¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design: Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists: Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.
House for Frida Kahlo and Diego Rivera:
Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern
¥2,000



9901 Sustainable and Ecological Design Today
Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects. Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc.
¥2,700



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9902 The Dutch Model: Architecture, Urban Design and Landscape
Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words. OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaanse, Wiel Arets, Bentham Crouwel, etc.
¥2,000



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



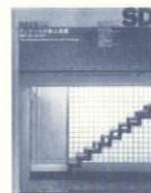
9903 Spaces of Wood: The Elements of Comfortable Architecture
Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards. Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc. ¥2,000



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9904 Josep Maria Jujol i Gibert's Vision:
Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings.
Donald Judd: Consistency of Space and Cognition
¥2,000



9809 The Landscape of Detail: Its Art and Techniques
Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida. ¥2,300



9905 Alluring Materiality: Evolution of Materials and Their Potential for Design
Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥2,500



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

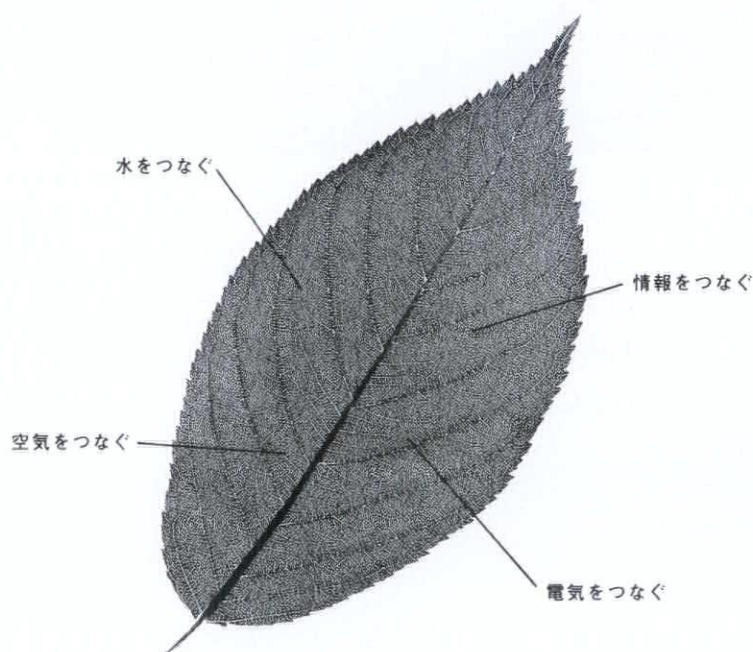
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

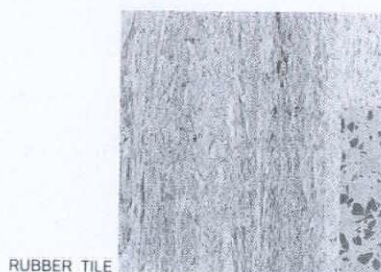
東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

NICHIMAN

ニチマンラバータイル

環境負荷低減の優等生 「天然ゴム床材」

ニチマンの天然ゴムタイルは、耐久性はもちろん柔らかな歩行感と静粛性、防滑性を併せ持ち、さらに環境汚染物質を含まない人と地球にやさしい床材です。



RUBBER TILE

ゴムタイルマーブル(30色)

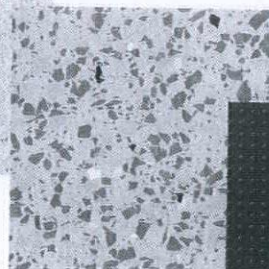
■あらゆる施設で半世紀に及び実績を有する、天然素材フロアーの原点。

ペラビスタDX(10色)

■広大なターミナルビルフロアーから階段にいたるまで幅広い部位の床を彩り、柔らかな色調で、こまやかな対応性を持つ高級ゴムタイルです。

アストロフェース(各パターン30色)

■ハイテクなイメージを天然ゴムの柔らかな特性を損なわず表現する最新のラバータイル。テクノ・ギア・ウェーブの3パターンとプレーンがあります。



BELLAVISTA® DX

ダンセルⅡ(30色)

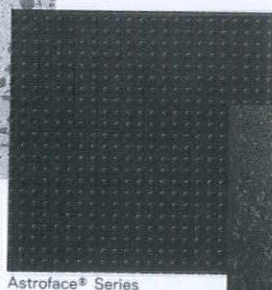
■エコロジカルなアースカラーとスパイクにも十分たえる復元力に優れた素材。ゴルフ場・スポーツ施設のほか弱歩行者・貴賓施設などにも最適です。

ノーマンラバー&ハイステップタイル(各パターン19色)

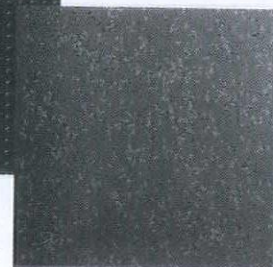
■6Typeのエンボス形状と色調とのコーディネートにより空間設計も思いのままです。

階段シリーズ

■安全性を基本に、階段という特殊な空間をデザインする専用ゴムタイル。●ステップラバー●ソフトステップラバー●ワイドステップ●ハイノンスの他に屋外用もあります。



Astroface® Series



DANCELL II series

株式会社 **ニチマン**

〒726-8603 広島県府中市府中町74-1
Phone 0847-41-5602 Fax 0847-41-8021

東京ニチマン商事株式会社

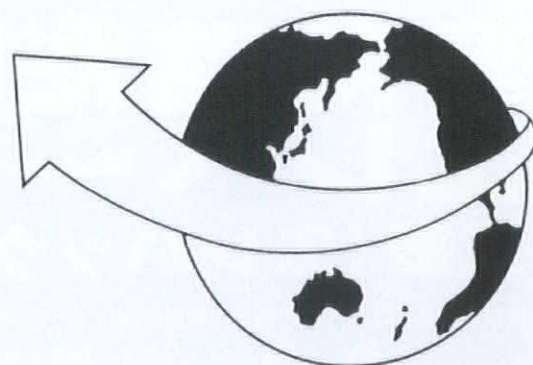
〒111-0033 東京都台東区花川戸1-15-1 フェスタ花川戸3F
Phone 03-3845-7601 Fax 03-3845-7606

大阪ニチマン商事株式会社

〒536-0008 大阪府城東区関目1丁目21-11
Phone 06-6939-3521 Fax 06-6939-3592

未来に向けて...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

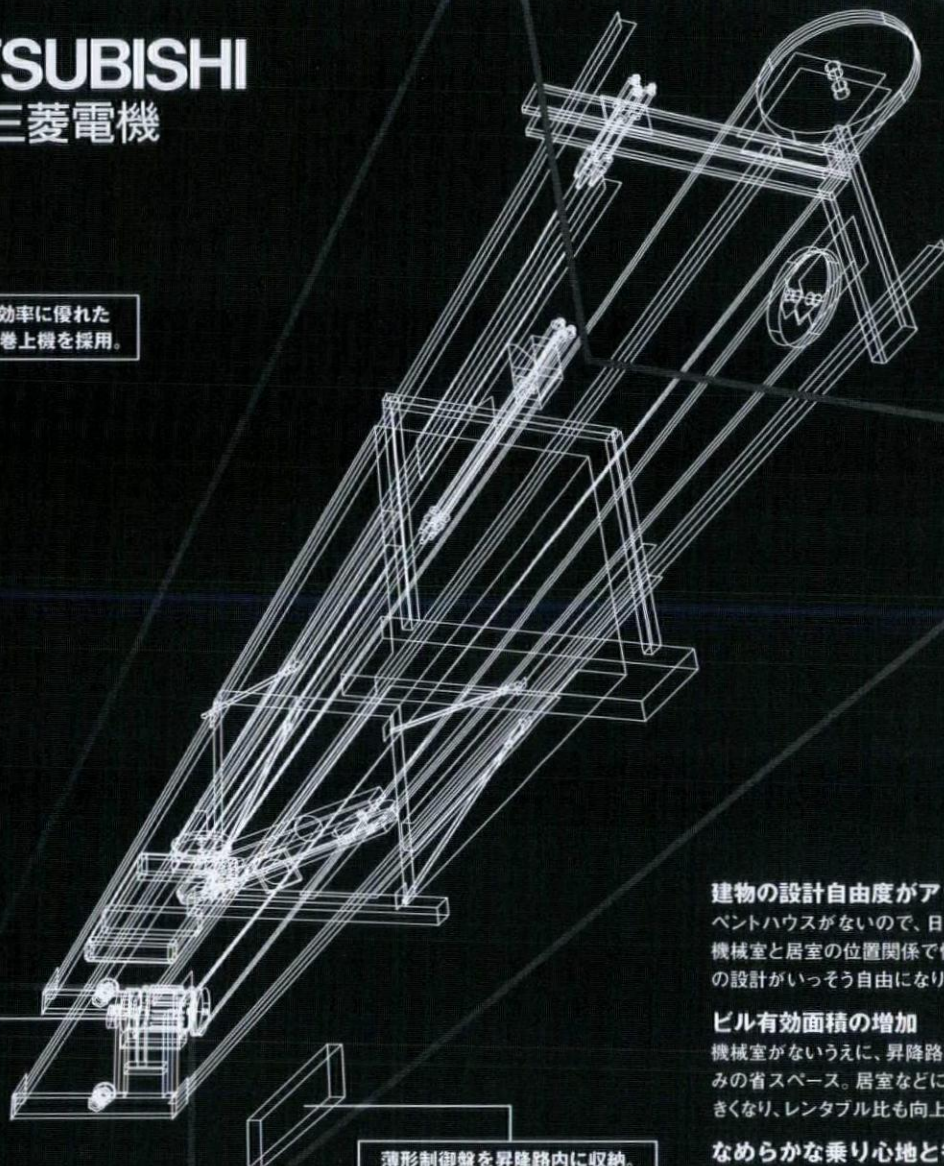


株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711
大阪支社 〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(6302)2273
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

MITSUBISHI 三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。



薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制

新登場
エレパック
ELEPAQ

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むことなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20 (赤坂パークビルディング)

本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

東京——東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル (3572) 3381
FAX (3572) 3590
大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06 (6362) 6515
FAX06 (6362) 6052

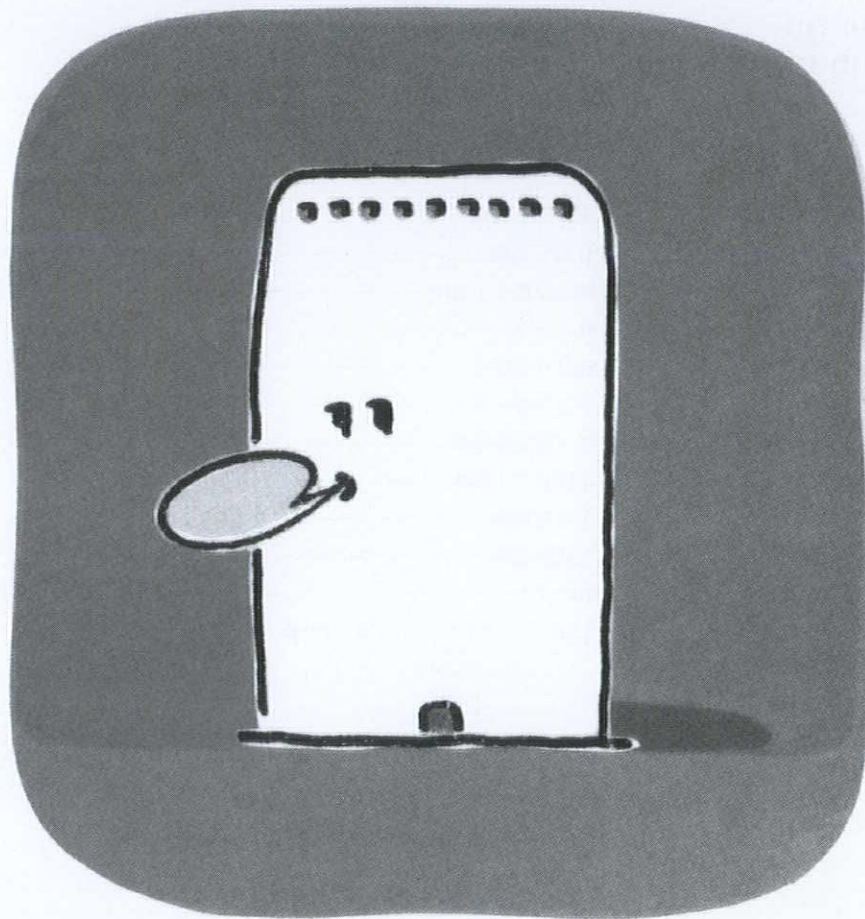
東京——東京都文京区湯島2-30-8
(3818) 1961
FAX (3818) 1968
大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル 06 (6231) 4548
FAX06 (6227) 0268

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル (3552) 8247(代)
FAX (3552) 8249

大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06 (6379) 1791
東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル (3255) 8411
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	(株)朝日工業社	A11
カ	(株)関電工	A1
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気(株)	A7
ク	栗原工業(株)	A7
コ	五洋建設(株)	115
サ	三機工業(株)	119
シ	昭和アステック(株)	113
	昭和銅機(株)	124
ス	住友電設(株)	A9
セ	セントラル硝子(株)	112
タ	高砂熱学工業(株)	表3
	大興物産(株)	A3
	(株)タカダ	112
ト	東洋熱工業(株)	A14
ニ	日新工業(株)	A8
	(株)西原衛生工業所	A10
	(株)ニチマン	A11
ヒ	(株)日立製作所	表4
フ	プラス(株)	104
マ	松下電器産業(株)	A2
	前田建設工業(株)	117
ミ	三菱電機(株)	A12
ヤ	矢崎総業(株)	表2
	(株)ヤナセ	120
ワ	YKKアーキテクチュラルプロダクツ(株)	101

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たちが意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)
A14 広告についてのお問合せの際は「SDを見て」と御明記願います